リープの「お願いです、教えてください！」（投稿編）

リープ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
リープの「お願いです、教えてください！」（投稿編）

【Ｎコード】
Ｎ４８３４Ｖ

【作者名】
リープ

【あらすじ】
一人の作者が自分のあまりにもひどい筆不精っぷりに、苦肉の策として始めた連載。
書いたそのままを途中でも載せていく日常。
執筆ドキュメンタリーです！

※注意
ここでは作者の執筆を苦しむさまを日々更新するものです。
作品自体は楽しめませんのでご注意を。

8／3　22：26

前書き（という名の言い訳）
だが、前置きには書かない。

さて。
リープの「お願いです、教えてください！」投稿編へようこそ！
コトダマ編を読んでいただいた方、またよろしくお願いします。
始める前に企画趣旨の口上を。

残念ながら、ここではまともなリープ作品は読めません。
この連載は「リープが締め切りまでの第一稿を書ききるまで」自体が作品となっています。
楽しみ方は人それぞれですが、作者としては、各更新話ごとに減ったり増えたりする文章量、よそ見、不貞寝、愚痴、誤字脱字を楽しんでもらえれば幸いです。

ちなみに。
この題名は金八先生の名言にして最近の今田耕司のギャグ、
「教師が生徒を信じなかったら、教師はいったい何のために存在してるんですか。お願いです、教えてください！」
から来ています。

ここでは、「作者が完成を信じなかったら、作品はいったい何のために存在してるんですか。お願いです、教えてください！」の略です。

なので、リープが本当に何か教えて欲しいわけではございません。

リープがあまりにも執筆しないので、ここで後悔……公開します。
これが腐れアマチュア作家の生き様じゃい！
（人によって生き様は違います）

はい。
ということで、今日から投稿編を始めます。
コトダマ編との違いを説明します。
コトダマ編は７／２９（金）の夜から８／１（月）の早朝までに短編を書き上げるという企画でした。
一時間ごとに更新して、その間の感想と書いた本文を載せました。
結果、色々な事がありましたが、短編は何とか完成しました。
二日半しか時間がない事もあり、すごく自分の中でスリリングでした。
いわば「祭り」でした。

ですが。
今回の投稿編は違います。
秋のライトノベル系の新人賞に投稿するために作製されます。
期間がやや長いです。

コトダマ編では最終日なんかは一日十二時間以上、途中逃げたり、風呂入ったりしましたが、続けました。
しかし、投稿編は一時間ごとの更新はそのままですが、一日二・三回の更新になるでしょう。
いわば「日常」です。

妙な盛り上がりはないかもしれませんが、「日々」ですので、更新

している間は起きて執筆したり、現実逃避したりしてるはずです。
（不貞寝あり）
でも確実に生活してます。
なので楽しみ方としては、
「おっ、リープ今日は結構更新してるじゃん」
とか
「今日は全然更新されてないな、逃げたか？　クソ虫が」
とか
「今日は俺の方が書いたぜ。やる気ねえな」
とか
各更新時のコメントを読んで、あざ笑うなり、あざ笑うなり、してください。

今回はキリのいいところで話をまとめて「なろう」連載しようと思ってます。
（連載が終わった時に削除します）

以上。
長々と書きましたが、投稿編、次回更新からスタートです。

次回更新は一時間後？
そのまえにお風呂いきまーす。（要らない情報）

8／3　23：40

今回のコメント

・お風呂上りに扇風機で「あーあー」やってると、テレビで「シティーハンター」が放送してた。
やはり……大好きだなぁこれ。「Ｇｅｔ Ｗｉｌｄ」最高っ！
……って、なにまったり余裕ぶっこいてんだよ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

本文はまだ書きません。

さて、どうしよう。

決めること
・何を書くか（決めておけよ）
・どんなふうに書くか（決めておけよ）
・誰に向けて書くか（決めおｒｙ）
・どこに投稿するか（決ｒｙ）
・締め切りはいつか（きｒｙ）
・毎日どれぐらい書くか（ｋｒｙ）

くだらない。
こんなのどうでもいい。
最初以外どうでもいい。

昔の自分ならこれ考えるのにずっと悩んで書かないところ。
ここが筆不精たるゆえん。
だから今回は「たいして考えない」ことにした。
もちろん第一稿に関してね。
一通り書いて、その後に考える。
禁を破ることにした。

だからまず大事なのは「何を書きたいか」です。
んで。
何を書くかですが、候補があります。

以下、すべて仮題です。

「トロフィー」
ド直球ラブコメ。
先輩後輩、そしてＳＦ（少し不思議）もの。
日記部という部活モノ？

「カッコつけるな！」
ＳＦ（少し不思議）もの。
主人公が能力持ってる。
弁論部が舞台。

「妹使（いもつか）」
妹モノ。まんま妹が魔法使いで世界を巻き込んじゃう話。

「シュレーディンガーの恋人」

属性モノ。多世界解釈
属性＋シュレーディンガーの猫・多世界解釈な話。

ずっと前から長編の案一覧から今すぐ書いても良いやってモノを書きました。
うーん、どれか悩む。（他の人にはどうでもいい）

どうしよっ！

次回の更新は一時間後？（多分）

8／4　0：46

今回のコメント

・執筆の時は音楽聞く派です。
理由は聞かないでやると、自分に集中しちゃうから。（意味がわからん）
自分と向き合いすぎるためにネガティブモードが発動しやすい。
だから僕は基本、ながらでやります。

もちろん邦楽です。
理由は洋楽や歌なしだと、自分に集中しちゃうから。（書いたの二回目）
僕の周りの調査では邦楽派は少ないです。
歌詞に考えを持っていかれるからだそうです。
なるほどねぇ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

どれを書くべきか……

とか言っちゃって～
ホントはもう書きたいもの決まってるし。

多分、今書かないと無理な気がするから、それにします。

さて、投稿編にも関わらず、前回全否定した、決めること。

・どこに投稿するか

ですが、とりあえず、ライトノベル系で一番近い締め切り、９／３０を目標とします。
さらっと書きましたが、当然ライトノベル系です。（キリッ
レーベルによって傾向は違いますが、９／３０締め切りのところは、萌え＆エロ傾向が強いです。
……が、空気読みません。
今回は書くことが目的なのでね。
じゃあ送るなよと言う意見がありますが……そんなの知りません。
レーベルとの傾向とあってなければ落とされるか知れませんし、面白ければ上手くいくかも知りません。
でも、きっとそこまでのレベルではないので気にしてもしょうがないでしょう。
今回は思いのまま書く。
じゃないと１７０ＫＢも書けない。（多分）
この辺りは手直しの考えます。

まずは最後まで完成させること。（超初心者）

そうそう文章量ですが、応募要項を考えると、１７０ＫＢ以上書かないと無理っぽいので、ちょっと考えます。
９／３０締め切り
二週間は手直しを考えたいところ。
つーことで。
９／１５第一稿完成予定。

と、言うことは、最低ライン１７０ＫＢを満たすためには……

いまが8／3だから……一日４ＫＢ強ですか。
うん厳しい。（あっさり）

しかし、前回は３０ｋＢの短編書こうと思ってたら、６６ＫＢ（原稿用紙約１０７枚分）になっていたでござるの巻……だった。

おそらく１７０ＫＢ以上見積もった方が良い。ということで２００ＫＢぐらい書くことにする。
そして再計算……一日５ＫＢ。

前回の短編「幸せの直前で」が９ＫＢ。
なるほど。二日に一つ掌編を書くイメージか……
できるかっ！
そして、できるかっ！（大事なので二回言いました）

……というようなことを考えてはいけません。
書けなくなります。
先が長すぎて、一日のノルマが達成できなかった時のダメージは相当です。
みんな、リープの真似はしちゃだめだＺＯ！

だがしかし、こういうの考えるのも結構楽しいので意外と時間が過ぎていく……

そして更新は一時間後！
もしくは眠くなったら！（いい加減）

8／4　1：45

今回のコメント

・くそう、ホンマでっか！？TV面白いなぁ！
自分の出身大学の教授が出ているのでちょっと恥ずかしい……

・すごいよ！　資料読んでたら時間が経った！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

まだ本文書いていない罠。

今日は書きませんよ？
ということで。

僕の書き方について。

僕がこだわって書こうと思っているのが。
「思いを伝えること」と「わかりやすいこと」です。
この二つを達成するんだったら、いかなる犠牲も払います。
別に読者の裾野を広げたいとかそんな気持はありません。

僕はお話を必要な人にできるだけ届けたいだけなんです。
昔、師匠と勝手に思ってた人が、

「自分の書いた文章・お話が努力せずに人に伝わるなんて思うな。できることは手を尽くせ」と僕に言ってくれました。

言ってくれたから守ってるわけじゃなくて、僕はまったくその通りだと思うからです。

「わかりやすい」は時として「陳腐」と表現されます。
とりわけ文章というのは、言い回し、語彙、比喩等を使って表現を尽くすものだと思います。
でも僕は「言葉の技術やアイデア」を伝えたいんじゃなくて「お話や気持ち」を伝えたいんです。
正直、素人考えです。
だけど、僕はこれを選びました。
全部はできないと思ったっていうのもあります。

（文学・文芸の）高いところ目指している人からは、確実に下に見られます。
覚悟してます。（上を目指してる人はプライドも高いので）
ですが、人間ですから時々気にすることはあります。

それでもやっぱり考えた末の答えは
「思いを伝えること」と「わかりやすいこと」が答えなんです。
プライドを持って言います。

まずは読んで欲しい。
そして「リープの作品だったら読みやすいし、一定のレベルがあるから信頼できるし確実」という作家になりたい。
芸術性の高い人には憧れますけど、なりたいとは思わない。

志低いですかね？
ただ、天才じゃなくて職人になりたいだけなんですけど（偉そう。
職人馬鹿にしてる）

繰り返しになっちゃいますが。
僕には難しい文芸論は語れない。
でも、表現したいという気持ちは持っています。
なにを表現したいか。
それはやはり「キャラクターの気持ち、行動、信条（心情じゃないです）」です。

作者としてはキャラクターを通して、
「自分にはこういう風に世界が見えてるんだよ」
っていうことが伝わればいいです。

この投稿編でもそういうお話を書きます。
これからもきっとそうです。

しまった。
真面目に書きすぎた。
言い訳がましい？
しょうがない、性分だ。

今日はもう寝ますね。

※注意

この話には誤魔化しがあります。
一番いいのは、文章を追求し、お話が読者に伝わって、何かの発明があって、心にグサリと残る、そんな話ですよ。
できるか！
そして、できるかっ！

8／4　23：58

今回のコメント

・土曜日出勤……だと？

・今日は短縮更新

・お風呂はもう入ったよ！（いらない情報）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

さて、書く話も決まったし、以前書いた資料を読み直しますか。

とにかく「一発で上手くやろう病」が発症する前に書き出したほうがよい。

しかし、また以前書いたプロットを読むんだろうなぁ。

今回は、プロットはあまり組まないとおもっているので。（第一稿に関してね）
以前はイベントごとに区切ったり、書かなきゃいけないエピソードを表にして管理をしていたけど、（人に見せた事もある）第一稿にそんなものはいらない。

コトダマ編でやり損ねた

?とにかく勢いで書く（第一稿）
?第一稿完成後、あらすじを作成、ログライン作成。

?あらすじをいじって、第二稿にとりかかる。

をやりたいなと思う。

さて、読んでみますかな。

更新は一時間後？

8／5　22：58　いやはや……

今日のコメント

・夕飯
焼き魚
冷麦
炒め物
なにこの変なバランス！

＊＊

待たせたな～（リーダー。古いギャグ）

・
・
・

誰も待ってないよ。
よしっ。俺、よしっ！

・
・
・
・

ごめんなさい！
寝てもうた！
二日目にして寝てもうた！

寝オチだよ！
起きたら遅刻寸前だよ！

しかもパソコンの画面が
「資ちょうさがすだけで一時間すｇｌｇっぐｊｇｌ；ｋ；」
ってなってたよ！
色々と疲れたんだよ。

だけど心配しないで！
もう元気だから！
心配しないで！
心配し――
心ぱ――
し――

解説すると「心配しないで」って言うのは、
ナイナイの岡村がラジオで風邪気味のときに
やたら強調する言葉だよ！

心配しないで！

今日は寝オチしないから！
たぶんね……ふふふ

更新は一時間後！
風呂に入ってから！（入るんかい！）

ホントごめんなさい！

8／6　0：40

今回のコメント

・うっひょ〜っ、ザコシショウ面白えええええ！

・ZZが面白い、ファーが、ファーさんが！

・テレビ見てたら時間経つの速いね。（言い訳）

・はっ。時間経つのは早いね！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

まだまだまだまだ本文は書かないわよっ！

変わらない怠け癖、いつだって手抜きしまくりだわ！
他所事させたらNo．1
その点は手は抜かないわよ！！

だって私、”クソッタレ”リープだもん！

ぎいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい
いいいいいぃぃぃぃぃぃ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜っ！！
！！！！

はい。
さて、すっきりしたところで。

資料を読みます。
やはりというかやっぱりここが穴だったなという点があります。
次の更新ではそれをじっくりと。

更新は四十分後ぐらい？（なにその微妙な時間）

8／6　2：22

今回のコメント

・誰だ！　ZZ↓るろうに剣心↓DBZという番組構成考えたの！　見ちゃうだろ！

とか言いつつ、DBZの裏番組の桜欄高校ホスト部のほうを見てますが。

・っていうか見るなよ！

・はっ。だから更新時間がバラバラなのか！（今頃気づく）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

くそ暇人に告ぐ。

俺の方がもっと暇人じゃい！　暇神じゃい！　クソ暇紙じゃい！

ようするに、リープなんてものは、クソ紙様じゃい！

なんせ自分の設定読んで真剣に検討してるんだからなっ！

つーことで。

僕の基準。

連載を書くタイミングについて。

※注意事項

これは長編を書くに当たっての自分への確認事項です。
執筆方法をレクチャーしているわけではありません。
個人によってその考えは違います。

はい、注意事項終わり。
では正々堂々確認させてもらいますか。

僕はギミックを考えるのが結構好きなんです。
この場合は仕掛けとか特殊な設定とかですね。

「ｓｕｉｃｉｄｅ　ｍａｇｉｃ」（リープの処女作です）における
「ＣＤ－Ｒ」（ＣＤ－Ｒって時代を感じる……）みたいなやつです。
マクガフィンみたいなものにもなります。

ということで、
「トロフィー」
「カッコつけるな！」
「妹使（いもつか）」
「シュレーディンガーの恋人」
どの作品にも一応目を引きそうな設定・仕掛けはあるんです。
（自分的に）面白そうなキャラクターとか。

でも、これではただの器ですよね。
心の籠もっていない器。
ネタの目新しさだけのお笑いみたいな。

僕が大切にしている、
「思いを伝えること」と「わかりやすいこと」で言えば、
「わかりやすいこと」しかない。

僕が書けない理由はオチが浮かばないとか間が繋がらないという訳ではないです。
（いや、多少は悩みますが）
ひとえに「心が見つからない」という理由です。

具体的に書けば、「主人公の葛藤」です。
「ヒロインや脇役の葛藤」とは少し違います。
（もちろんヒロインの葛藤が話を引っ張ることもあります）

「ｓｕｉｃｉｄｅ　ｍａｇｉｃ」はＣＤ－Ｒや魔法の代償の設定を考えて、
主人公の葛藤が出来たときに初めてお話のギアが噛みあいました。

「当たり前じゃん」と言える人はたぶん調子よくかけてる人だと思いますよ。
もしくはプロに向いてる。

設定しただけ「主人公の葛藤」では僕は書けないからです。
自分の想いが乗らないと、僕はもう書きたくない。

昔はプロット渡され、スラスラ書いてました。
でも段々できなくなりました。
それはインプットの不足だとか色々原因はあると思いますが、やはり借り物の葛藤では気持やモチベーションがもてなかったんだと思います。

その点、最近書いた短編「幸せの直前で」はまず、「主人公の思い」

が先にあったので、割と上手く書けました。
直近の「鈴鹿オクトパス」はちょっと変則的で真の思いが湧いて出た時に先が見えました。

ここで例外の提示。
実は「主人公の葛藤」は別にたいして無くてもかけます。
探偵モノ（特徴や設定はあっても思いや根幹に関わる葛藤が無い）や８０年代のラブコメ（なんの取り得の無い主人公がやたらモテる）とか、できるはずです。
でもこれは、優先順位が「事件を解決する（事件の背景を描く）」「好きな子と結ばれるまでのドキドキを描く」というものが先に来るからです。

割り切れたら僕も書けるでしょうね。
あとは短編とか。
長丁場は苦しい。

僕は傍目からよく「理屈っぽい」「頭だけで考えてる」とよく言われます。
でも実際は書き始める一番の動機は「感情」という「理屈・理性」とは正反対の動機なのです。
子供です。アマチュアです。考え方が。

僕はこういう自分の性格を知っているので、なるべく理屈で考えられるようにしてます。
理屈と感覚が合致したときが書き時だと思ってるからです。

そして今回、前にも書きましたが「今しか書けない思い」が設定と

リンクしました。
始めようと思います。

こんな当たり前のことを確認しておかないと、僕はすぐ設定に没頭し、お話をまとめたいがために「心」を切り捨てることがあるからです。（昔の癖というか……）

できれば、このまま突っ走りたい。
そんな気持です。

8／6　3：51

今日のコメント

・はしゃぎ過ぎた……
・表だけじゃなくて裏でもはしゃいでしまった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

以前の簡単なプロットは四の倍数で作成された箱書きだった。
プロットに当てはめて窮屈にするのは今回書ききってからにする。
これはとりあえず破棄する。

今回の話は基本コメディタッチの話。
会話分が中心になっていくだろう。
もちろん自分の得意分野なので大丈夫。
雰囲気によって地の文、会話分の配分は意識する。
油断すると会話文だけになる。

短編「幸せの直前で」は極めてまれなケース。ほとんど台詞がない。
ただ、掛け合い的な会話は外さない。好きだから。

なので、配分を意識するのも、第一稿が完成してから。
「一発で上手くやろう症候群」は追っ払わなくてはいけない。

これも確認事項の一つ。

なんとなくメールをチェックしてたら、同人誌の表紙のこと忘れてた！
やばい、やばいよ。明日が締め切りだって！
……これは明日は番外編ですか？
四日目なのに番外編？

もう寝ますね。
それではまた明日。
（結局本文かいてない）

8／7　14：18

今日のコメント

・マジで熱中症になるかと思った……
・昼食
うな重。（町内の人たちと。気を遣いすぎて味がまったくわからず）
ラーメン（家帰って食べた。サッポロ一番塩ラーメンは至高の味いぃぃ！）

・ラーメン食べながら「アメトーク」の録画を見る。
面白いね！　僕も芸人ドラフトやりたい！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

昨日からずっと続いた気疲れアワーが一段落して、やっと更新！
同人誌の表紙作りもなんとか終わり、ホット一息。（夜明け前に作製）
Ｙｅｓ，Ｙｅｓ，Ｙｅｓ！！（言ってみたかっただけ）

はい、つーことで。
寝オチします、確実に。
頑張るけど。

寝　オ　チ　宣　言　！

（だったら更新しないで寝ろよ）

今は眠くないんだもん。

え？　じゃあ、早く書けよ？

まぁまぁ、慌てなさんな。

眠くなろうと、

横槍が入ろうと

やつらから俺の創作心は奪えないぜ！

（前向きなこと言って誤魔化してる）

ってなわけで。

とりあえず、今日はこんな感じでスタ～～～ト！

更新は一時間後……だと祈ってます。

8／7　15：37

今日のコメント

・まぁね、実際そうなんですよ。
うんうん、そうなんですよ。

掃除がね。急にね。したくなってね。

本の置き場が……くそ、端に寄せておくか。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

プロットだとかその辺はルーズリーフに書きます。
んで、その後必要であればエクセルに入力します。

今回は複雑なプロットは第一稿後に作製するので、無視です。

後、台詞が思いついたらルーズリーフに書きます。
その後テキストエディタで入力です。
大抵一会話単位です。フリオチがセットで思い浮かぶことが多いです。

今、ボチボチ、ルーズリーフに書いてます。

更新が一時間後であれって欲しい今日この頃です。

8／7　23：27　『いつになったら書くんだ問題』会見場

今日のコメント

・やっぱり寝オチした！

・起きたら、仕事の資料を作らなきゃいけないことに気づいた！
アカン警察を見ながらこなす。

・自由にやってます！

・今日の夕飯
ご飯
鳥の香草焼き
シュウマイ

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

【青リープ】「えー、皆様、お待たせしました。ただいまから『いつになったら書くんだ』についての会見を開きたいと思います。では、リーダである赤リープから現状の説明を行ないます」

【赤リープ】「はい。ただいま紹介にあずかりました赤リープです。現状についてご説明させていただきます」

【赤リープ】「現状ですね。最善を尽くしている最中で……」

【赤リープ】「え？　具体的にどういうことかですか？」

【赤リープ】「とりあえず以下のような工程でですね、締め切りまでに行なおうとしているわけです」

1、ブレスト
2、ログライン作成
3、おおまかプロット作成
4、文章作成
　会話分
　地の文
5、第一稿を元にプロット作成、調整
　中プロット作成
　小プロット作成
6、第二稿作成
7、調整

【赤リープ】「今どの段階か？　ですか？　……企業秘密です」

【赤リープ】「え？　いつ書くんだって？」

【赤リープ】「決まってるでしょ……ごにょごにょ……」

【赤リープ】「え？　逃げの答弁だ？　いやいや、逃げてませんよ。むしろ向かってますよ」

【赤リープ】「どこへですか？って？」

【赤リープ】「ここではないどこかですよ」

【赤リープ】「グレイですか？　宇宙人ですかね？　僕個人はいるとおもいますよ宇宙人」

【赤リープ】「え？　誤魔化すな？　ゴマ、カスな？」

【赤リープ】「ゴマの悪口はいうなっ！　ゴマ塩の親分に謝れ！」

【赤リープ】「えー、ゴマさんへの謝罪と賠償を要求します」

【赤リープ】「いやいや、誤魔化して無いって！」

【赤リープ】「でもね。実際書き始めると面白くなくなりますよ。コメントとか」

【赤リープ】「え？　面白さを求めてない？　それは執筆性の違いですな。バンドなら解散ですよ」

【赤リープ】「え？　もういい？　喋るな？」

【赤リープ】「そ――」

【赤リープ】「だか――」

【赤リープ】「ちょっと！　待って！」

【赤リープ】「まだリープが夕飯食べてるでしょうがっ！」（北の国から）

【赤リープ】「以上会見で終わります」

一方的に会見を中止する赤リープ。
去り際に一言

【赤リープ】「あのね。これオフレコだから。いいですか？　皆さん。絶対書いたらその社は終わりだから」

次の更新は一時間後だよ。（やさしく）

８／８　１：１５

今日のコメント

・文章書いてないときの一時間はとてつもなく早い気がする。

・さぁ～て、お風呂に行くか！（いらない情報）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

さて、順調なら明日から書き始めようと思ってます。

考えてみれば、どの話を書くかを説明していなかった気がします。

「トロフィー」

「カッコつけるな！」

「妹使（いもつか）」

「シュレーディンガーの恋人」

の中で今回書くのは「トロフィー」です。

もう一度簡単に書きます。

「トロフィー」とは、

ド直球ラブコメ。

先輩後輩、そしてＳＦ（少し不思議）もの。

日記部という部活モノ？

になります。

舞台は高校です。
「トロフィー」とは一体なんなのか？
日記部とは？　（これはあんまり意味ないですが）

時間もあまり無いので、自分の得意分野で勝負です。
ラブコメは「テリプリ」以来ですから半年振りぐらい？
ただ、テイストは「スーマジ」に近いかなって思います。

読んでもらえれば「今しか書けない」と言った意味がわかるかも知れません。

次の更新は一時間後だよ。（やさしく）

8／8　2：12

今回のコメント

・風呂上りの麦茶は美味いっ！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊：

さて、そろそろ浮ついた心を落ち着かせようかな。
執筆モードに入るためにね。

ちょっと仕事で凹んでた反動もあるけどね。
騒いでないとやってられない、みたいな。

以前書いたかもしれないけど、気合いれて書くときには必ず読むメールがある。
シナリオライター時代、初めて先輩ライターさんから貰ったメールです。

そこには今の僕にも通じる、僕にとっての金言格言があります。

僕個人宛には
「描写があっさりすぎる」や「地の文は今の倍書きなさい」とか
「全体的に主人公の独白が言葉足らずです。紋切り型の一行独白に注意してください」

と、今でも癖でででちゃう弱点を指摘されています。

他にも
「企画が提案してくる「キャラクター&プロット」は、その時点では単なる記号です。この記号を文字にするには、ライターはよく考えなければなりません」
とか
「キャラクターのあらゆる動作は、キャラクターの個性の表現です。主人公の独白は、思いつく言葉だけでなく、主人公の意識を切り出したものです。
情景描写は、キャラが位置する世界を言語化したものです」
とか
「伝わらない綺麗な言葉より、伝わる確実な言葉を選んでください。私感ですが、ユーザーには基本的に何も伝わらないと思って取り組んでください。わかってくれるだろうで書くと痛い目にあったりします」
とか。

今読んでも胸にぐさりと来ます。
同時に緊張してきて戦闘態勢になるのです。
ここまで具体的に言われた内容を書いたのは初めてかな?
普段僕が言ってることそのままじゃないですか?

本当に影響を受けてるし、尊敬してます、今でも。
自分の仕事もあるのに僕の文章見て、大量の文章で助言してくれたからです。

さっきも読んで真顔になってましたよ?
たまには自分に役に立ちそうなことを書いてみた。
(しかも他人の言葉)

ってな訳で、もう寝ますね。

8／9　0：32　※リープからのお願い。

今日のコメント

・夕飯
そうめん
フライドチキン（惣菜コーナーで買う）
いり卵（最近作るのがマイブーム）
キャベツ

少なっ！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

※ちょっとしたお知らせ

ちょっと配慮が足りなかったね。
どうせ感想なんて入らないだろうって思ってたの。
いや、多分片手に余るぐらいの人しか読んでないでしょ、どうせ。
（自虐的）

でも、起きてしまったことには何か対処をしないと。
とりあえず、活動報告に「リープの「お願いします！　教えてください！」『自習室』」略して「リープの自習室」（肝心の題名がなくなってる）という活動報告を作成しました。

基本、更新している間は更新ごとにお返事をします。
別に返信は負担でもないですし、何回でもどうぞ。

『自習室』では、短い感想やコメントは大歓迎です。
雑談でもいいです。執筆の愚痴を書き込んでやりましょう。
短い感想やお話はコチラでお願いします。
僕は勝手に書き込むと思いますよ。
執筆中の愚痴を書き込むのも活動報告でしょ？
苦手な人は『自習室』回避でお願いします。

『自習室』は苦手。
でも、リープになにか言ってやりたいという人は感想欄にお願いします。
きっと丁寧に返事します。（時間がかかるかもしれません）

なんだかんだ書きましたが、リープがはじけられる場所が欲しかっただけですよ？

ワガママな提案ですが、ご協力お願いします。
もし、書き込んでやろうという奇特な人がいればですが。
これ絶対リープのフリーダム領域になると思うけどね。
ここと何が違うんでしょ？（さあね）
これ絶対いらないよ。だって本当に誰も読んでないはずだもの。
いたとしてもそれはリープが生み出した幻想だもの。

次の更新は一時間後？
風呂に入るけど（やっぱり要らない情報）

８／９　２１：３５　恒例の寝オチ言い訳

今回のコメント

・今日の夕飯
ごはん
納豆
焼きそば
ほうれん草のおひたし

炭水化物取りすぎだろ！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

信じられない話だが聞いてくれ。
昨日二回目の更新のために新規小説を作って、次話更新したはずだった。

んでＨＰの日記更新して寝たと思ってた。

そして起きたらビックリ。
ＨＰの日記は更新されているのに、この連載の更新はされてなかった。

嘘じゃない。
いや。嘘じゃないんだ！

え？　言い訳はいいから早く書け？
しょうがないなぁもうっ！

頼まれなくったって書いてやる！
もう、行動で示すしかないんだよ。
今現状では言葉を重ねても言い訳にしか過ぎない。

とか言いつつ。
何となく今日から始まりま～す。

ということで今日は早めのスタ～ト！

次の更新は一時間後が目標。（信憑性ゼロ）

8／9　23：12

今回のコメント
・風呂のお湯を出しっぱなしだった！
うおおおおっ！！
・レーザープリンターのトナーを注文しないと！
同人誌が印刷できない。
・というか、紙も買わないとなぁ。
・とか考えてた。
(嘘、十分だけ考えてたの)
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
ルーズリーフに色々書いてたらこんな時間！
言い訳じゃないよ。本当だよ！
断片的に会話を書いてみる。
こんな雰囲気の小説になりそう。

「俺、先輩に憧れているんですよ。早く追いつきたいって」
「ずるいね」
「え？」
「だって、いつまでたっても貴方は後輩で私は先輩だもの」
言っている意味がわからない。

「貴方の先に見えるのは本当に私なの？」
「どういう……ことですか？」
「一度先輩になってみる？」
「ええっ！？」
「あはは、嘘、嘘」

全然伝わりませんか。
そうですか。
自分でもわかりません！（逃げ）

次こそ本文を載せられますように。
風呂に入るけどね！

更新を一時間後に設定！（努力目標）

8／10　0：23

今回のコメント

・風呂上りでぼんやりしてるが、寝はせん！　寝はせんぞ！

・スクワットで太股パンパンパン！（本当にどうでもいい情報）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

次の更新には必ず本文載せるから！

ネタを整理してるから！
今、検索してるから！
「海　遭難　怪物」っと……
（検索結果見て）あうっ！　……怖い話はいらん。

じゃあ何を探してるんだよ！
内緒っ！（じれったい）

更新を一時間後に設定！（努力目標）

8／10　1：42

今回のコメント
・今日はコーヒーを飲んだせいかもう少しゃれそうな気がする。
・緊張して何度もトイレに行ったよ！（要らない情報）
・出だしはもう少し考えた方がいいかな。最初の文章は好きだけど。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊：

『トロフィー』

▲もうすこし出だしを再考。感覚表現を重視。

気泡と希望はなんとなく語呂が似ている。
僕の口から吐き出された気泡はいくつかの塊を作って浮かんでいく。
ゆらゆらと歪な円形を保ちながら自分と離れていく希望……じゃなくて気泡。
手を伸ばして掴もうとすると指をすり抜けていく。
そんなところまで希望と似ないでいいじゃないか……

母なる海、羊水たる海水、深くて黒い海底へ沈む自分。
冷静なようだけど、実際は違っていた。
手足を無意味に回している。水圧で上手くコントロールできない。
喉元から顎の辺りの筋肉が硬直して、必死に呼吸を我慢してる。

口を開けてしまえば、楽になれる。空気は入ってこないけど、海水が僕の体内を満たすだろう。血液中の酸素がなくなり、やがて気を失うように窒息するだろう。気を失う寸前は気持いいと聞くが、本当だろうか。

いよいよ真っ赤になっているであろう顔。目にも力が入り飛び出しそうなほどだ。

不意に僕の目の前を何かが通り過ぎる。

僕の倍近くあろうかという影。魚の形状をしていて尾びれが特徴的。おまけにノコギリのような歯をこちらへ向けている。皆さんおなじみのサメ。

周りには数十匹というサメが、グルグルと取り巻いていた。まるで僕の死を確認した後にじっくりと肉を引き裂き、ご相伴にあずかろうと狙っているようだ。

というか、絶対狙ってるだろこれ。

なぜこんなことになったのだろうか？

僕は素晴らしい思い出を作るためにここに来たと言うのに。

更新は一時間後？（あくまでも個人の感想です）

8／10　3：07

今回のコメント
・実はこの段階で登場人物の名前を決めていない。
どうしよう……

・まぁ、最初なんでこんなものでしょ。

・どうでも良い情報。
お茶をがぶがぶ飲むときは執筆の調子が悪い時だよ！
集中するとまったく飲まなくなるから。
ちなみに今日は……がぶ飲みだよ！（駄目じゃん）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊：

顎が徐々に上がり、口元の筋肉も限界に達してきた。最後の灯のように顔中の筋肉を一気に硬直させると僕はもがくことを止め、息を止めることに専念した。だが、長くは続かない。もう駄目だ。頬の力が抜けていく、自然に口が開き、海水が入り込む。「あぁ……」と頭の中で絶望感に打ちひしがれた瞬間、僕の腕を掴んで引っ張る感覚がした。

半開きになった目から見えた光景は　僕を包み込むようにゆらゆらと広がっている黒い長髪。何かを叫んでいるような肉厚な唇。なにより力強いややつり気味の瞳の女性が僕を引っ張っている情景だった。

希望が浮き上がっていった海面へ、連れて行ってくるのかな？　貴方が僕を引き上げてくれるのかな？　ジンワリと胸の奥が暖かく

なる。助けてもらった安心感で僕は完全に気を失った。

▲主人公回想。

まだ頭がぼんやりしている。目は
「本当にコイツなのか？」
「わからない」
「しかし、事実は事実だからな」
「うん……」

今日はここまで！
また明日～（正確にはもう明日）

8／10　22：17

今回のコメント

・今日の夕食
カレーライス
炒り卵（マイブーム続く）
サラダ

今日はカレー曜日っ！　カレー祭り！
シチューガッカリじゃなくてカレーライスッ！
ニンニクが隠し味さ！

フゥ――ッ！
テンションマックス！
後は下がるだけ……

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

昨日も書いたけど、名前決めてないんだよね。
別にキャラに愛着がないわけじゃなくて、愛情ありすぎて簡単に名前付けたくない気持ちが働いてるんです！
本当なんです！

さて、名前決めて始めますか。
ということでぇ……スタ～～～ト！

更新はいつもどおり一時間後（最近できたためしがない）

8／11　22；52

今回のコメント

恒例のどうでもいい情報
・夕飯
カレー少々（昨日の残り）
スペアリブ（煮るヤツです）
ほうれんそうのおひたし
ごはん

スペアリブ美味っ！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊

そろそろ襲名しようか。
寝オチ作家リープの名前を！

だって眠くなるんだもんしょうがないじゃないか！
カレー三杯食べたんだよ！
二杯目辺りで「あっ、この辺で止めないとヤバイなぁ」と思ったんだもん。

でも、お腹すいてたんだもん！
んで、お腹一杯で動けなくて、ゴロゴロしてたら……ぐぅ。
……と可愛い子ぶるのは止めまして。
いよいよ、嫌々病が発症してきました。（早すぎるだろ）

さぁ、あざ笑う時がきました。
とっても逃げ腰です。

でも～
でも、でも、でも、でも
そんなの関係ねえっ！（古すぎる）

空気読まんと決めたのだ！
なにがあっても
サボって、サボって、たまに書いてを貫くぞ！
おーっ！

更新は一時間後だったら幸せです。（もう幻想レベル）

８／１２　７：５１

今回のコメント

・お盆休み？　なにそれおいしいの？

・だけど道が空いてるから、結構好き。

・前話の日付間違ってた。願望だねきっと願望、時間よ止まれって。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

会社から帰ったら、再びチャレンジする。

トライ＆エラーが執筆の基本だから。

結局、駄目でも大丈夫だ。
大丈夫。
ここはみっともないリープをも見せる場所でさぁ。

書くの嫌だ。
じゃあ止めたら？
それも嫌だ。
勝手にしろ。
うん、そうする。

更新は家に帰ってきてから。

8／13　4：32

今回のコメント

・いつもの今日の夕食
ひやむぎ
イカと里芋を煮たもの
炒り卵（くそっ、止められないっ！）

サボったと思ったろ。（誰に言ってる）

昔のCDを漁ってたらこの時間さ。
中村一義とか初期のくるり、初期のHYとか10－feetとかマキシマムザホルモンとかレッチリとか（キリがない）他色々聴いてた。
「金字塔」「ERA」「図鑑」は、いつ聴いてもいいなぁ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

▲主人公回想。
桜が舞い散る学校の校庭。見覚えがある。確か僕が通ってた中学校だ。風が吹くと少し肌寒い。さっきまで夏だったはずなのに。……そうか。これは思い出なのかな？
外にはすでに多くの生徒が卒業証書を持ってたむろしていた。よくある卒業式の光景だ。僕の手にも卒業証書が握られているということは、自分達の卒業式だということか。

ハンカチを瞳に当てながら泣きじゃくる女生徒。目を真っ赤にしながら笑顔で語り合う生徒と先生。校舎の隅では後輩らしき女生に告られてる、同級生。悲しくも晴れがましい場所で僕は所作なさげに立ち尽くしていた。『悲しくも晴れがましい』気持ってなんだろう。表情にだせない。困惑だけが僕を心細くさせた。泣いたら良いのか。もしくは笑ったらいいのかな。気持が凪いだ海のように動きがない。

「こら薄情人間」

真っ先に反応してしまうのが悲しいが、僕は声のする方へ向いてしまった。

「なんだ。沙和か。挨拶は済ませのか？」

「はぁ。こんな時ぐらい言うことないの？」

僕よりやや目線の低い、ショートカットの女の子、それが守屋沙和（さわ）だ。僕とは幼馴染で、お隣さんだ。漫画に出てくるシチュエーションだが、恋愛感情はまったくない。兄弟みたいな感覚で今日に至るので、告白の予定もない。

「じゃあな、沙和。先帰る」

「馬鹿じゃないの！　いや、馬鹿でしょ？　今日は卒業式だよ。もう皆に会えないかもしれないんだよ」

ちなみに沙和は中学時代、陸上部だった。僕と話している最中も、ひっきりなしに陸上部の後輩が沙和に話しかける。先輩である沙和が泣きじゃくる後輩を慰めたりしている。こいつ、意外と慕われているんだな。

「挨拶したい奴にはもう済ませたし、僕は帰るよ。それに沙和とは同じ高校じゃないか」

僕の言葉に肩が揺れるぐらいに盛大にため息をつく沙和。彼女は少しだけ口を歪ませて呟くように言葉を繋ぐ。

「涙の一つもでないわけだ……」

「泣かないと駄目なの？」

「駄目じゃないけど自然に出ない？」

　よく見ると沙和の瞳は赤くなっていた。手にはハンカチも持っている。僕は沙和の非難めいた視線に耐えられなくなって、誤魔化すように頭をかいた。
「うーん。涙はでないな。なんでだろ？」
「……それはね」
　沙和の瞳に力がこもる。
「それはアンタに大した思い出がないからじゃないの？」
　図星だった。中学時代、家と学校の往復だけだった僕に対した思いでもない。しかも、「思い出がない」と指摘されても、ちっとも感情が動かなかった。
　このまま僕は感情が動くことのないまま死んでしまうのだろうか。胸がそわそわした。胸騒ぎが止まらない。ずっと、ずっとこのま——

「うっ、うえええええっ……」
　胸からこみ上げてきた異物感に耐えられなくなって、僕は口から液体を吐き出した。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　もう寝るっ！

８／１４　１５：３４　特別企画　コトダマ製作編

今回のコメント

今日の昼食（なんだか食事発表コーナーになってる）
ピザ、２切れ（昨日残り）
パエリア　少々（昨日残り）
鳥のから揚げ（昨日の残り）
デザートのケーキ（昨日の残り）

つまり。
昨日の残り、以上。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

今週は随時特別編が入ります。
文芸誌「コトダマ」製作編です。

改めて文芸誌「コトダマ」を説明します。

「コトダマ」とは、私、リープが参加している文芸サークル「文机」（主宰者は想詩拓さん）の文芸誌の名前であります。
同人イベント等でサークル参加して販売してます。
四月に創刊号を発刊し、今回が第二号になります。

そしてどうして製作編という名前なのか？
それは今のところ製本を担当するのがリープだからです。
理由はレーザープリンター持ってるのが僕だから。（シンプル）

印刷所とかにお任せする、というのもアリですが、文机としては今のところ手作りで対応するということになっています。
お金もかかるし、小数部印刷には向いてないから、ですね。

つーことで、長編を書く実況だけでなく、
文芸誌を製作する愚痴まで載せてしまおう、という横着な企画です。

もちろん、投稿編は続いていますよ。
サボろうって気はないです。
ないですよ。
いや、本当だって！

文芸誌製作の気晴らしに書きます。（本末転倒）

んじゃ、次の更新は一時間後。

8／14　17：25　コトダマ製作編2

今回のコメント

・名古屋グランパスが調子いい！
それなのに中日ドラゴンズが……

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ただ今、7部印刷済み。目標は15～20部です。
今の段階では、印刷をするのみ。

本のサイズはB5になります。
しかし、ここで問題が！

ウチのレーザープリンターは基本自動給紙の両面印刷可なんです。
ですが、B5が対応していない！
どうするリープ！

というか創刊号製作の時に想さんが、手差しでの両面印刷の方法を教えてくれて事無きをえました。

しかし、手差し片面ずつの印刷なので、両面印刷ができるかドキドキです。

ジッと推移を見守ります。
でも、途中で間違いに気づいても後の祭り。
手で紙を入れた後は自動で印刷なので、「あ～、あ～」ってなる。
（ようするに止まらない）

さっきなんで途中で紙切れになったのに気づかなくて、
途中からＡ４に印刷を始めてしまった。
そんなところだけ、気を利かさなくていいよ！

とか、ドタバタしながら印刷をしています。

更新は１～２時間後。（幅を持たせすぎ）

８／１４　１９：３９　コトダマ製作編３

今回のコメント

・トナー代をコンビニへ払いに行かないと！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

８部目を印刷中、誤植を発見してしまう。
まだ序盤だし、１ページなので、やり直しが利く範囲。
早速、想さんにメール。

想さんが早くメールに気づきますように！
（こっちの連載で知れるのが先かな？）

そして両面印刷が二回ほどずれる。
給紙する時の音がやけに大きくなったことから、今は小休止中。

今日だけで５００枚ほどを一気に印刷してるんだから当たり前か。
どこの事業所だよ。
さすが文芸誌、ページ数も伊達じゃないぜ！
全部で１０４ページあります。
そして四分の一をリープで占める傍若無人ぶり。

プリンターにも無理をさせているので、
とりあえず、休ませることにしました。

更新は１～２時間後。（定着させようとしている）

8／14　22：05　コトダマ製作編4

今回のコメント

・ふむふむ……中日負けてる！
実は夕食食べてない！（すでに夜食の時間になりつつある）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

早速修正されたファイルが届いたので、（想さん、仕事速い！）差し替えを行なう。

しかし！
とうとう１０部印刷中にトナー切れ！
ごめんなさい！
トナー切れ起こしたのは黒でした。
今回カラーが多く、買った当時から交換していなかったので、
そろそろなくなるのかなと思ったら、
一回トナー交換した黒。

でも、頑張れば一日で１０部いけることがわかったので、
大丈夫ですよ！　ホント大丈夫ですよ！
表紙が届く頃には……大丈夫なはず。（誰に言っている？）

ということでしばらくは通常モードで連載します。

更新は１～２時間後。（このペースは変わらず）

8／15　1：36

今回のコメント

・まさか、いつもの寝オチ？
なんちゃって。

・ルーズリーフにメモったら時間が経ってた！

・基本的な設定が全然できてないから文章が進まないのはわかっているので、少しずつエンジンをかけようかなと思ってます。
という言い訳。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

早　沙和の瞳に力がこもる。
「それはアンタに大した思い出がないからじゃないの？」
図星だった。中学時代、家と学校の往復だけだった僕に対した思いでもない。しかも、「思い出がない」と指摘されても、ちっとも感情が動かなかった。
昔からそうだった。人が騒いでいる時ほど冷めた気持になっていく。冷静になってしまう。このまま僕は感情が動くことのないまま死んでしまうのだろうか。胸がそわそわした。胸騒ぎが止まらない。ずっと、ずっとこのま――

「うっ、うえええええっ……」
胸からこみ上げてきた異物感に耐えられなくなって、僕は口から

液体を吐き出した。何度も咳をして、僕は意識を取り戻す。気づけば船の甲板で寝転んでいた。目を開けようとしたが、空の眩しさに再び視界を狭めた。

「よかった。大成功だ」

「うん。だけど……」

「確定だな」

女の子の声が聞こえる二人分。

もう寝ます（早っ）

8／17　23：11　コトダマ製作編5

今回のコメント

・恒例の今日の夕飯

お粥（まだ、普通のご飯は食べる気がしない）

焼き豚の炒めたの（ご飯食べる気しないのにこってり）

キャベツの千切り

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

二日間のお待っとさんでした！（古い言い回し。分からない人は「キンキン」「なるほどザワールド」で調べよう！）

え～っと、夏風邪引いてました！

ガッツリと。

でも、心配しないで！　もう大丈夫だかから！

心配しないで！

心配し――

心――

し――（前にも同じネタをしたよねこれ）

……ということで二日も休んだせいで、印刷作業が滞ってるうぅぅ

ぅっ！

今回もコトダマ製作編となります。

インクトナーは昨日、全種類とどいたので、もうインク切れには困りません！

そして表紙になる用紙も今日届き、「アレがないからできなようぅ」という言い訳ができなくなりました。

現在のところ１０部印刷が完了しております。

目標は１５～２０部なのでもう半分超えておりますので、今日明日頑張れば印刷は終わるでしょう。

だから、大丈夫ですよ！　大丈夫！（約一名にだけに言っている）

後は製本の作業になりますが、それはまた後日。

とりあえず今日はレーザープリンター先生に主役を譲ります。

そして僕は今日買って来た「ＮＡＲＵＴＯ」と「ＨＵＮＴＥＲ×ＨＵＮＴＥＲ」の最新刊コミックスを読みます！

（小説書けよ）

頑張ってます！（プリンターがね！）

更新は１～２時間後。（プリターが頑張っているなら更新できるだろ）

8／18　1：14　コトダマ製作編6

今回のコメント

・ね、寝るわけないんだからねっ！

でも色々と疲れましたよ。ホント……
（詳しくはｗｅｂで。ここもｗｅｂです）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

とりあえず15部印刷を終えました。
これで最低目標数は達成しました。
残りは明日印刷と言うことで。
よかったねぇ～（一人で納得）

コミックスも読み終えたし、面白かったし。
よっかたねぇ～（またも一人で納得）

よ～し、病み上がりついでにオッチャン小説の続きを少し書いちゃうぞ～。

その前のお風呂入ろう。（またも要らぬ情報）

更新は1～2時間後。（寝オチしませんように）

８／１８　２：３２

今回のコメント

・あれ？　気づけばこんな時間？

・もう休ませてあげて！　リープのライフは０よ！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

寝　オ　チ　し　ま　す　。

探さないでください。

リープ

以下、文字数稼ぎ

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

あれ？
結構しつこいね。
ってＰＣなら一覧できるのか……
携帯なら誤魔化せたと思ったのにぃぃ！

とかいいいつつもう寝ます。
おやすみなさ～い
これ今までの更新の中で一番酷い。
反省して明日は気合入れます。多分。マジで。
おやすみなさい。

8／19　0：04　コトダマ製作編7

今回のコメント

説明不要の今日の夕飯

・焼きそば
・ゴーヤチャンプルー
・もやしとウインナー（暑中見舞いで届いたちょっといい感じのウインナー↑なにこれ？）の炒め物
（急に食べたくなった）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

なんで開始が遅れたかというとね……
用紙が無くなかったから！

昨日
『「アレがないからできなようぅ」という言い訳ができなくなりました』
って書いたのはどこのどなたでしたっけ？
あーっ、ここのコイツだー！（リープ自分を指す）
つーことで買いに行ってました。
こんな灯台下暗しみたいなことあるんですね。

眼鏡探してたらおでこに眼鏡みたいな。（例えがおかしい）

んじゃ、残りの五部をちゃちゃっと印刷しちゃいますか！

ということで行ってみよ～

更新は1時間後……という言葉に騙されるなっ！

8／19　2：28　コトダマ製作編8

今回のコメント

・寝てはいないけど、おなか空いてきた。

＜選択肢＞
何か食べる
食べないで寝る

うううぅぅぅぅ……寝るっ。
寝てすべてを忘れれるっ！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

本文の印刷は三十分前ぐらいに終わったのですが……

表紙の印刷でトラブル発生！
あまりに上質紙でプリンターの性能限界のため、ちゃんと用紙に印刷できない！
うおおおっ、さすがに個人レベルではこれが限界なのか……

とりあえず、さっき想さんには連絡した。
こっちで代わりの用紙は用意しないといけない。
明日中に解決しないと製本が間に合わないかもしれないし。
想さんはいつ気づくのか！
リープは表紙を用意することができるのか！？

風雲急を告げるコトダマ製作編。
明日へ続く！

今日はもう寝るよ。いや、本当に

別に「トロフィー」のこと忘れてないから。
いい感じのＳＦ（少し不思議）を思いついたから。

８／２０　１：１２　コトダマ製作編９

今回のコメント

いつも通りの夕飯公開

・もやしとウインナーの炒め物（これたしか昨日も……）
・炒り卵（ふわふわな卵）
・ごはん
・インスタントの味噌汁（しじみ味）
・キムチ

なんだか朝ごはんみたいな間に合わせ……
でも美味しかったよ！　炒り卵が。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊

とりあえず、表紙問題は一応の解決を見ようとしています。

急遽買ってきた写真用紙を表紙に使います。
ただ、Ｂ５が種類に無いので、裁断機で紙を切ります。
ホントに周りの電気屋さんのことごとくＢ５サイズの特殊な用紙がないことないこと。
メーカーさん、ねらい目ですよ！
自作同人サークルが探しています！

……って、売れないから作らないんですよね。わかります。

時間があれば表紙を変えた見本誌を作成して吟味するところなのだが、時間が無い。

第三号までお預けだ！

さて、次は実際の製本方法でも書きますか！

次回の更新は1～2時間後に更新……だよ。

８／２０　３：１９　コトダマ製作編１０

今回のコメント

気づけばこんな時間！

・今回の方法で製本作業をするのは、初めて。
・本番の前に数冊ダミーを作成したにもかかわらず……
・びろ～～ん。

＊＊＊

四冊作って二冊失敗……
ｏｒｚ
（→久しぶりにこれ使った）

くそっ、これが僕の実力だというのか！
「はい、そうです」
はっ、神の声が聞こえる！
自分の中で一方的に作った神の声が！
アナタは神様ですか～？
「はい、そうです。彼はサムです」
そうですか。サムさんもいるんですね～
……妄想が止まらなくなってきた。
作業に戻ります……

ちなみに。
こんなことやってます。

?印刷した紙を整える。

?本の背にあたる部分に「ホットメルトシート」と呼ばれる、固形の接着剤を貼り付ける。（このとき捨て紙でコーティング）

?製本機の中にいれ、接着剤を溶かす。時間が来ると音が鳴る。同人誌を取り出し、コーティングした捨て紙を上手いことカット。

?本の背を製本テープで包むように貼付。

完成。

んで、どこで失敗するか。

?と?です。

一回目の失敗は、製本テープをアホみたいに斜めに貼ってしまった。貼る位置を書いておかなかったのが失敗。（創刊号でも同じ失敗をした）

二回目の失敗は接着剤を貼り付ける背表紙の方向を間違えた。できたーと思った瞬間、反対に開いた本を見たときポカーンってなった。
（創刊号でも同じ失敗をした）

つまり、進歩がないということだよ。

あはははは！
わはははははっ！
なんか、ナチュラルハイになってきたけど、我慢我慢。

更新は気づいた時に1～2時間後。

８／２０　４：４３　コトダマ製作編１１

今回のコメント

またもや気づけばこんな時間！

・紙が！
切れ端が！
剥がしたシールの台紙が！
部屋に散乱している！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

一時間半で四冊のペースで進行中。
約２３分に一冊。
遅い。

これがホッチキスとめるだけなら……
はっ。いかんいかん。
つい、キリギリス的発想になりそうだった。
でもなぁ～、ホッキスもあるし～

……駄目だ。もう寝る。

楽しようとばかり考える。

幸いあれから失敗はしていないけど。
（自分的合格ばかり）
製本機の使い方にも慣れてきたし。

でもさすがに残りは明日にするか。
売るだけなら十冊あれば十分なんだけどね。

つーことで寝ます。
おやすみなさ～い

８／２０　１５：２８　コトダマ製作編１２

今回のコメント

毎度毎度の昼食は～

・スーパーのの惣菜。（コロッケとか天ぷらとか）
・ごはん

以上です！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

寝過ごした～っ！

あと、４，５時間あれば全て終わる予定なので、この時間でも大丈夫なのだ。
多分。

だったら、昨日早く寝て、今日朝からやったほうが良いんじゃないの？

……いやいやいやいやいや！

昨日、失敗を繰り返してきたから、今日があるんじゃないか！
と言い訳している間に手を動かせ！

ごもっとも！

更新は1～2時間後。

８／２０　１８：０５　コトダマ製作編１３

今回のコメント

アメトーーークを見ながら製本。
Pリーグ面白そうだなぁ。

ボーリングか……
大学生の頃よくやったなぁ。

友達二人でビデオ回してフォームチェックしたり、
平日１５時まで１０００円投げ放題で、開店から乗り込み３６ゲームやったのは良い思い出。
（別にプロを目指してたわけじゃなく、単なる遊び）

それだけやったのに２０９点ぐらいが最高点。
そしてストレート派。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊

とりあえず、この間、６冊完成！

残りはあと６冊。

間に合うっ！
一休みして良い？（ゴール直前で眠るうさぎのよう）

前回より楽な展開だ。
発行部数が少ないからかな？

更新は1～2時間後。

８／２０　１９：５６　コトダマ製作編１４

今回のコメント

・こういう作業はラジオの方が進むなぁ。
ポッドキャストを聞いています。
ＴＢＳラジオっ子

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

印刷分、全て製本終了～！

とりあえず１８冊が無事完成。
１５～２０冊の間で作る予定だったので、もういいでしょう。

よ～し、これで後は明日のイベントに参加するだけだ！

なんか一気に作ったら疲れちゃった。
ちょっと休みま～す。（起きたばっかりなのに）

更新は気力が戻ってから。

8／22　1：56　コトダマ製作編　完結

今日のコメント

・イベント～打ち上げ～家に到着は23時過ぎ！

・今日の夕飯
風月の「風月モダン焼き」
やはり、美味しい。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ということで、今回でコトダマ第二号製作編は完結です。
身内以外では片手ぐらいしか売れませんでした。
が、売れた数はあまり関係ないです。

小説が読まれる人数に関して言えば、ネットの方が多いですしね。
イベントに参加するって、作品作るだけじゃなくて、製本したり、表紙で問題発生して焦ったり、黙々と印刷したリ、完成した本を見てニヤニヤしたり、イベント会場で設営したり、前通り過ぎるお客さんにドキドキしたり、自分達が作った本を「これください」と直に言われて天にも昇る気持ちになったり、他の小説かいてるサークルさんの話を聞いたり、次回の文芸誌について話をしたり、色々なんですよね。
それが全て目の前で起こっているし、自分でやっている。

これからコトダマ第二号は他のイベントにも文芸サークル「文机」の新刊として売られます。
１１月３日に行なわれる文学フリマまでは活躍してくれるでしょう。
今日のイベントもそれなりに楽しかったし、無関心なフリして人一倍ドキドキしてました。
またこのドキドキを味わいにイベントへ参加します。

同人誌活動自体は今年からはじめたものですが、やっぱり止められないですね。
もし次があるならコトダマ第三号製作編で会いましょう。
それではさようなら～～～～！

って、これで終わるわけないだろ！
明日から通常の投稿編に戻りますよ！

8／22　23：55

今日のコメント

もういい加減にいいでしょ。
今日の夕食
・肉と野菜の炒め物。
・おかゆ（なんか急に食べたくなった）
以上。（少なっ！）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

今日から投稿編再開です。

とりあえず、三幕構成で考えています。
基本的に何も考えずに書いていきますが、頭の片隅に入れること覚書。

第一幕で意識すること。

＜一般的に言われること＞

・主人公の欲しいものの定義。
「とりあえず欲しいもの」と「本当に欲しいもの」

・セントラルクエスチョンを提示する。

・終わりにはターニングポイントを入れる。

・ピクサー的な第一幕
？最初の価値観の堅守。

こんなもんでいいかな。
あんまり考えると無駄に悩みそうだし。

次回の更新は1～2時間後。
まずは風呂に入りますがね！

8／23　1：51

今日のコメント

・今回はいままでのおさらい。
少し冒頭が変わっています。
最後の会話を少し迷っている……

え？　全然進んでない？

な、なんのことやら……（下手な口笛で誤魔化す）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

『トロフィー』

▲もうすこし出だしを再考。感覚表現を重視。

気泡と希望はなんとなく語呂が似ている。
僕の口から吐き出された気泡はいくつかの塊を作って浮かんでいく。
ゆらゆらと歪な円形を保ちながら自分と離れていく希望……じゃなくて気泡。
手を伸ばして掴もうとすると指をすり抜けていく。
そんなところまで希望と似ないでいいじゃないか……
母なる海、羊水たる海水、深くて黒い海底へ沈む自分。冷静なようだけど、実際は違っていた。手足を無意味に回している。水圧で

上手くコントロールできない。

いやいやいや、違う。まったく持って違う。だってここは学校のプールのはずだ！　僕は手足をジタバタさせながら必死に水面へ近づく。膨らませた頬に溜まった空気を一気に吐き出し、僕は水面へと顔を出した。辺りを見渡すと、皆が楽しそうに泳いでいる。プールにはおよそ五人。中央にいるのは僕だけで、後はプールサイドで遊んでいる。

だよな。今は夏休みで、ここは輪転高校のプール。僕は休みを有意義に過ごそうとプールに遊びに来ただけ。……よし、落ち着いた。ふうと小さくため息をついて、プールのそこへ足を伸ばす……が、届かない。水深は最深部で一メートル五十センチ。ちなみに僕の身長は百七十五センチのはずだ。

またプールじゃなくなってる。どうなっているんだ。疑問符が取れない僕の背後で生き物の気配がして振り返る。すると三角の形をしたヒレのようなものが水面を滑走している。うわー、フカヒレだ。ご馳走だ……こいつ等にとって僕がなっ！

周りには数十匹というサメが、グルグルと取り巻いていた。まるで僕の死を確認した後にじっくりと肉を引き裂き、ご相伴にあずかろうと狙っているようだ。

というか、絶対狙ってるだろこれ。なぜこんなことになったのだろうか？

もう一度確認する。ここはプールのはずだ。足が付かないのは気のせいだ。皆もいるし。僕は助けを求めることを脳内一致で決めた。

「お……」

声を上げようとした瞬間、僕は足首を誰かに捕まれる感覚と共に水の中へとひきづりこまれた。振り払おうとする足、だけど掴んだ手のようなものは力強く僕を離さない。闇雲にまわす腕。まるで役

に立たない。急なことだったので、口の中から一気に気泡が漏れ出て行った。喉元から顎の辺りの筋肉が硬直して、必死に呼吸を我慢してる。すぐに首の筋肉が硬直して、酸素不足を訴えていた。やばい。本当に死ぬ。

口を開けてしまえば、楽になれる。空気は入ってこないけど、海水が僕の体内を満たすだろう。血液中の酸素がなくなり、やがて気を失うように窒息するだろう。気を失う寸前は気持いいと聞くが、本当だろうか。

いよいよ真っ赤になっているであろう顔。目にも力が入り飛び出しそうなほどだ。

不意に僕の目の前を何かが通り過ぎる。

僕の倍近くあろうかという影。魚の形状をしていて尾びれが特徴的。おまけにノコギリのような歯をこちらへ向けている。皆さんおなじみのサメ。

家でダラダラするだけの夏休み。僕は素晴らしい思い出を作るためにここに来たと言うのに。

顎が徐々に上がり、口元の筋肉も限界に達してきた。最後の灯のように顔中の筋肉を一気に硬直させると僕はもがくことを止め、息を止めることに専念した。だが、長くは続かない。もう駄目だ。頬の力が抜けていく、自然に口が開き、海水が入り込む。

「あぁ……」と頭の中で絶望感に打ちひしがれた瞬間、僕の腕を掴んで引っ張る感覚がした。

半開きになった目から見えた光景は　僕を包み込むようにゆらゆらと広がっている黒い長髪。何かを叫んでいるような肉厚な唇。なにより力強いややつり目気味の瞳が印象的な女性が僕を引っ張っている情景だった。

希望が浮き上がっていった海面へ、連れて行ってくるのかな？

貴方が僕を引き上げてくれるのかな？　ジンワリと胸の奥が暖かく

なる。助けてもらった安心感で僕は完全に気を失った。

▲主人公回想。

桜が舞い散る学校の校庭。見覚えがある。確か僕が通ってた中学校だ。風が吹くと少し肌寒い。さっきまで夏だったはずなのに。……そうか。これは思い出なのかな？

外にはすでに多くの生徒が卒業証書を持ってたむろしていた。よくある卒業式の光景だ。僕の手にも卒業証書が握られているということは、自分達の卒業式だということか。

ハンカチを瞳に当てながら泣きじゃくる女生徒。目を真っ赤にしながら笑顔で語り合う生徒と先生。校舎の隅では後輩らしき女生に告られてる、同級生。悲しくも晴れがましい場所で僕は所作なさげに立ち尽くしていた。『悲しくも晴れがましい』気持ってなんだろう。表情にだせない。困惑だけが僕を心細くさせた。泣いたら良いのか。もしくは笑ったらいいのかな。気持が凪いだ海のように動きがない。

「こら薄情人間」

真っ先に反応してしまうのが悲しいが、僕は声のする方へ向いてしまった。

「なんだ。沙和か。挨拶は済ませのか？」

「はぁ。こんな時ぐらい言うことないの？」

僕よりやや目線の低い、ショートカットの女の子、それが守屋沙和（もりやさわ）だ。僕とは幼馴染で、お隣さんだ。漫画に出てくるシチュエーションだが、恋愛感情はまったくない。兄弟みたいな感覚で今日に至るので、告白の予定もない。

「じゃあな、沙和。先帰る」

「馬鹿じゃないの！　いや、馬鹿でしょ？　今日は卒業式だよ。もう皆に会えないかもしれないんだよ」

ちなみに沙和は中学時代、陸上部だった。僕と話している最中も、

ひっきりなしに陸上部の後輩が沙和に話しかける。先輩である沙和が泣きじゃくる後輩を慰めたりしている。こいつ、意外と慕われているんだな。

「挨拶したい奴にはもう済ませたし、僕は帰るよ。それに沙和とは同じ高校じゃないか」

僕の言葉に肩が揺れるぐらいに盛大にため息をつく沙和。彼女は少しだけ口を歪ませて呟くように言葉を繋ぐ。

「涙の一つもでないわけだ……」

「泣かないと駄目なの？」

「駄目じゃないけど自然に出ない？」

よく見ると沙和の瞳は赤くなっていた。手にはハンカチも持っている。僕は沙和の非難めいた視線に耐えられなくなって、誤魔化すように頭をかいた。

「うーん。涙はでないな。なんでだろ？」

「……それはね」

沙和の瞳に力がこもる。

「それはアンタに大した思い出がないからじゃないの？」

図星だった。中学時代、家と学校の往復だけだった僕に対した思いでもない。しかも、「思い出がない」と指摘されても、ちっとも感情が動かなかった。

昔からそうだった。人が騒いでいる時ほど冷めた気持になっていく。冷静になってしまう。このまま僕は感情が動くことのないまま死んでしまうのだろうか。胸がそわそわした。胸騒ぎが止まらない。ずっと、ずっとこのまま――

「うっ、うえええええっ……」

胸からこみ上げてきた異物感に耐えられなくなって、僕は口から液体を吐き出した。何度も咳をして、僕は意識を取り戻す。背中には生暖かい感覚。気づけばプールサイドで寝転んでいた。目を開け

ようとしたが、空の眩しさに再び視界を狭めた。
「よかった。大成功だ」
「うん。だけど……」
「確定だな」
女の子の声が聞こえる二人分。

それではまた次回。

８／２４　２０：５６　「連載を休んだよ問題」釈明会見場

今回のコメント

毎度の報告
今日の夕飯。
・フカヒレ
・フォアグラ
・あわび
・キャビア
の夢を見ながら、
鳥のもも肉を煮たもの。
冷麦
キムチ
以上。

＊＊＊

「この度は私の個人的な事情により、連載をお休みした事についてご報告申し上げます。」
（マイクを持って立ち上がるリープ）
「どうしても私自身、許せないことがあり、気絶してしまいました。私の不徳の致すところでございます。この度は誠に申し訳ございませんでした」
（リープが頭を下げると共にカメラマンのフラッシュ）

「ご質問等あるとは思いますが、個人的事情により控えさせていただきます。これにて会見を終わらせていただきます」

（一方的にマイクを置き、立ち去ろうとするリープ。すかさずリープを取り囲む取材陣、質問攻め）

「え？　おでこに書いてある二つの『×』印ですか？　これは二回目の謝罪会見という意味です。はい。某大物お笑い芸人の離婚会見のマネです」

「個人的事情とはなにか、ですか？　ノーコメントで」

（リープ、人差し指でバッテンをつくり、ノーノーと呟く）

「個人的な事情って何か、ですか？　実は……家に帰ってる最中に野犬に囲まれてしまい。三時間動けなくなってしまって……（リープ涙ぐむ）」

「『お前は車通勤だろうが』ですと？　車が囲まれたんですよ、野犬に。『わんわおー』って吼えられて怖かったです。だから僕も被害者なんです！」

（怒り出す取材陣）

「はい？　『本当は寝てただけじゃねえか』ですって？　ふざけんじゃないよ！」

（リープ、急に怒り出す）

「僕が、この僕がですよ。今まで連載で寝てしまったことがありますか？」

（取材陣、一斉に「ありますよ」と答える）

「……あるけど。いや、寝たことは、あ　る　け　ど！　でも、なんか頑張ってんじゃん。なんかさ」

「具体的に答えろ？　いや、具体的にとかそんなんじゃないじゃん。気持ちですよ、気持ち」

「はい？　『どうしても私自身、許せないことがあり、気絶してしまいました』とは、『自分の欲望に負けてしまい、寝てしまいました』っていう意味だろだって？　」

（リープ俯いて震えだす）

「はいはい。寝ましたよ。いつもの寝オチですよ……」

「え？　開きなりだ？　僕だって被害者なんですよ」

（取材陣「それ二回目じゃん」という空気をかもし出す）

「欲望と言う波に飲まれた被害者なんですよ！　大都会に飲み込まれた男のブルースですよ！」

「お前の住んでるところは田舎だろうって……田舎を馬鹿にするなっ！　もう帰る！」

（取材陣を振り切るように走り去るリープ。呆れ顔で見送る取材陣「また逃げた……」）

す、すいません……

……さて、更新は1~2時間後。

その前に洗い物でもしますか。

8／24　22：15

今回のコメント

洗い物をすると、良い頭のアイドリングになるね。
それとも体を動かすのがいいのかな。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「うっ、うえええええっ……」

胸からこみ上げてきた異物感に耐えられなくなって、僕は口から液体を吐き出した。何度も咳をして、僕は意識を取り戻す。背中には生暖かい感覚。気づけばプールサイドで寝転んでいた。目を開けようとしたが、空の眩しさに再び視界を狭めた。さっきまでの生命の危機が嘘のようだ。耳にはセミの鳴く声と遠くからプールの水しぶきが聞こえる。あぁ。このままじっとしていよう。僕は完全に目を瞑った。まぶたを閉じても日光は明るく照らした。
「亜也に助けられるとは、情けない男だな」

女の子の声と共にまぶた越しの光が遮られた。誰かが覗き込んでいるようだ。
「しょうがないよ。初めてだったし」
「それにしてもさすがは五十九期生……天野つばさの……だな」

耳にも水が入ったのか、声が途切れて聞こえる。しかし、話しているのは女の子二人だっていうのはわかる。
「問題は試験結果だな。確認するか？」
「今日が終らないと確認できないって」
「まったく不便だな。……ってヤツは」

話の筋が見えない。

「小テストは終ったんだ。私は行くぞ」
「私は試験勉強する」
「まったく勉強熱心だな……それとも」
「夕実」

更新は1~2時間後

8／24　23：44

今回のコメント

・まだ寝てないいんだかねっ！（誰も気にしていないだろう）

・ああっ、コーヒーがなくなった！

ウーロン茶でがまんするか……（贅沢）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「うっ、うえええええっ……」

胸からこみ上げてきた異物感に耐えられなくなって、僕は口から液体を吐き出した。何度も咳をして、僕は意識を取り戻す。背中には生暖かい感覚。気づけばプールサイドで寝転んでいた。目を開けようとしたが、空の眩しさに再び視界を狭めた。さっきまでの生命の危機が嘘のようだ。耳にはセミの鳴く声と遠くからプールの水しぶきが聞こえる。あぁ。このまま じっとしていよう。僕は完全に目を瞑った。まぶたを閉じても日光は明るく照らした。

「亜也に助けられるとは、情けない男だな」

甲高いの声と共にまぶた越しの光が遮られた。誰かが覗き込んでいるようだ。

「しょうがないよ。初めてだったし」

「それにしてもさすがは五十九期生……天野つばさの……だな」

耳にも水が入ったのか、声がぼやけて聞こえる。しかし、話しているのは女の子二人だっていうのはわかる。

「問題は試験結果だな。確認するか？」
「今日が終らないと確認できないって」
「まったく不便だな。……ってヤツは」
話の筋が見えない。
「小テストは終ったんだ。私は少し泳いでくる」
「わかった。私は……」
僕の隣に誰かが座る気配がした。
「試験勉強か。まったく勉強熱心だな……それとも」
「夕実、お願い」
「わかった。じゃあ、私は行くぞ」
「うん」と腰かけた女の子が返事をした後、もう一人は遠ざかっていった。
また、夏の風景が戻ってきた。せみの鳴き声とプールの水しぶき。僕は気絶していて、隣には女の子が座っている。とてつもなく夏である。緊張の夏である。なぜか今、一瞬静かになった気がする。
どれぐらい時間が経ったのだろうか。完全に起き上がるタイミングを見失って僕は寝転んだままだ。寝ているせいで体全体が日に焼けて火照っている。今日お風呂に入る時はきっと体全体が痛いのだろうなと考える。すると時折ページをめくる音が聞こえる。本当に試験勉強をしているのか。それにしても幼馴染以外でここまで近くに女の子がいるなんてシチュエーションはそうそうない。僕は少し緊張して体を固くした。緊張したのは一部ではなくて、体全体だからな。その辺りはハッキリしておく。
「いったい――」
不意に隣から声が聞こえた。次の瞬間、僕の鼻がつままれた。
「いつまで気絶しているつもりかな？　君は」
「ふごっ！」
つままれた鼻は吊り上げられ、僕は盛大に豚鼻を鳴らしてしまった。ひぎぃ、恥ずかしい。つーか、バレてた！

更新は1~2時間後（定着してきたねこれ）

８／２５　２：１０

今回のコメント

・もう少しこの辺は話を厚くしたい気もするけど、後のことを考えるとこれぐらいかなぁ
・大人っぽい魅力が高月先輩から出てたらそれでＯＫ

・あと「君は二番目」発言は大好き。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「いったい――」
不意に隣から声が聞こえた。次の瞬間、僕の鼻がつままれた。
「いつまで気絶しているつもりかな？　君は」
「ふごっ！」
つままれた鼻は吊り上げられ、僕は盛大に豚鼻を鳴らしてしまった。ひぎぃ、恥ずかしい。つーか、気絶しているフリがバレてた！
僕は鼻に釣られる様に上半身を起こした。僕は鼻をさすりながら、横目で女の子へ視線を向ける。瞬間、感情が爆発しそうになった。胸のソワソワと背中のゾクゾクが一度に襲ってきて、身震いした。
飛び込んで来たのは大きく開かれた瞳。光彩を放ち、僕は視線を外せない。吸い込まれるという表現はこれなのだと気づく。少し釣り目気味なのが、どこか責められているようで、胸の鼓動を早くさせた。
「男の子の一本釣りのできあがりだね」
少し厚めの唇が得意げな表情のせいでアヒル口になっている。や

や少しぬれて、しっとりと体にまとわりつく黒髪。乾きつつあるけど、湿っている水着。どれも健全なる高校生には刺激的過ぎた。

「高月先輩……」

「私の事知ってたんだね」

「まぁ……有名人ですから」

彼女はあまりにもこの高校では有名人物だった。名前は高月亜也（たかつきあや）と言う。もちろん美貌もさることながら、別の意味でも知られていた。「日記姫」と。

高月先輩は僕を見つめて体育座りのまま、少し首をかしげた。

「おはよう。草弥甲斐斗（くさやかいと）君」

「僕の事を知ってるんですか？」

「君の事は知ってる……よく知ってるよ」

二回目の『知ってる』と同時に高月先輩は少し視線をそらした。というより、僕の向こう側を覗いているようだった。僕は相変らず高月先輩の瞳から自分の視線を逸らせずにいた。すると先輩も気づいたらしく、僕を見つめ返すと、嬉しそうに弓なりな形をした唇を開いた。

「ねぇ。外してあげようか？」

「な、なにをですか？」

「君の視線」

高月先輩は言い終わると同じぐらいに僕へ顔を近づけてくる。僕の目の中を覗き込むような大きな瞳が近づいてくる。まままま、まさか。これってやっぱりあれだよな。口は尖がらせるのか？　自然にするべきか？　鼻はぶつからないか？　歯を磨いたか？　宿題やったか？　なにこの幸運。僕は自然に目を瞑った。

「ていっ！」

今、僕は確実に口を半開きにして引きつらせているに違いない。じんじんとおでこが痛い。僕は高月先輩にデコピンをくらわされていた。僕はおでこをさすりながら、俯いた。

「ほらね。視線はずれたでしょ？」

「外れましたけど……」
高月先輩は「あはは」と声を上げて笑うと、いつまでもおでこをおさえている僕に向かって小さくため息をつき、少し強い口調で僕を諭すように答えた。
「情けない声上げない。九死に一生を得たんだから」
そういえば。僕は状況を思い出した。プールで泳いでたつもりが、いつの間にか周りが海になっていて、サメに囲まれた後、海底に引きこまれたんだ。
「大変だったよ。プールから引き上げるの」
「そうですか……先輩が助けてくれたんですね。ありがとうございます」
「引き上げたものの少しの間息をしてなかったから、ビックリしちゃった。水をたくさん飲んでたようだし」
「すいません、ご迷惑をお掛けしました……って『少しの間息をしてなかった』って言いませんでしたか？」
僕の言葉に高月先輩はくすりと笑った。さらに一瞬だけ視線を僕へ向けた。含みのある仕草。
「『息してなかった』って言ったよ。でもすぐ処置したし、大丈夫」
「あぁ、そうですか……って処置！？」
「うん。君への適切な処置」
溺れてる、助ける、息してない、といえば、皆さんおなじみのアレですよね。ま、まさか人工呼吸まで！？
「まさか、かかかっ」
僕は言葉に詰まったが、無意識に指を唇へあてていた。すると高月先輩の閉じた口が少し開いて笑ったように見えた。
「責任取ってくれる？」言いながら先輩は少し舌で自分の唇を舐めた。
僕は高月先輩の大人っぽい仕草に不覚にも立ち上がれなくなり、体育座りに座りなおした。本当ごめん。でも、男ならだ誰だってそうなるよ！

「でも、君は二番目だけどね。残念だけど」
なんだろう、このガッカリ感は。体育座りは崩さないけどな！
高月先輩は人差し指を唇に当てて、僕へ視線を合わせる。
「だけど、キスしたことには変わりないでしょ」
再び僕は視線を外せなくなった。あの唇が僕の唇に。さらに息まで吹き込まれるなんて。もう婿に行けないっ！　……というくだらない冗談さえ浮かぶぐらいに僕は舞い上がっていた。
「はい。ありがとうございます……なにか御礼をしないと」
高月先輩の瞳と唇に目を奪われたせいかもしれない。僕は御礼なんて言葉がでていた。先輩は指を口許にあて瞳を細めた。
「そうだね……」
気のせいか、先輩の瞳が鈍く光った気がする。きゅぴーんっていう音が聞こえた気もする。
「お礼はその体で返してもらおうかな？」
完全にはめられた。僕は高月先輩の言葉を聞いてようやく理解できた。高校一年の夏、これは忘れられない出会いになるのだろうか。
今の僕にはわからない。

更新はとりあえずこれまで。
（全然進んでない……）

8／25　21：43

今回のコメント

恒例の報告～

オムライス
魚の煮たもの
この組み合わせは一体……

そして悲劇が。
ケチャップがない！
泣きながらコンビニへ。
ケチャップ買って戻ってみると半分食べられてた！

ム　カ　つ　く　！

腹が立ったので、雑炊を作りました。（なんの関係もない）
おかゆと雑炊ってどう違うんだろう……
（どうでもいい疑問）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

前回の変更点。

高月亜也の別名を「日記姫」から「殲滅の日記姫」へ変更。

さぁ、今日もいってみよ～～～うっ！

更新は1~2時間後。（このリズムで行こう）

8／25　22：58

今回のコメント

・さっき投稿編の前にやっていたコトダマ編の「今回のコメント」を読んでた。（現実逃避）

ちゃんと書いている小説のことを書いてた。

耳寄りリープ生活情報コーナーじゃなかった！

いつの間に変わってしまったのだろうか……

戻すつもりはあまりないけど。（ないのかよ）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

暦が変わっただけで、急に状況が変わるわけではない。自分の席で座っているだけで、じんわりと汗をかいてしまう。二学期が始まって三日目。今日から通常授業になるわけだ。また学生としての日常が始まる。周りでは始業前に日焼け自慢や「宿題やった？」とか「夏休みどうしてたか」という会話が未だに続いていた。

そうさ、僕は日焼けしたさ。宿題は暇だったからやったさ。夏休みの思い出は……ある。ゲームと昼寝にいそしんでた夏休み。あの日、死にかけた僕を助けてくれた高月先輩と会話したひと時。僕はある決心を固めていた。今日の授業が終ったら行動を開始しよう。

「ちょっと、甲斐斗。今さっき岡留から聞いたんだけど」

幼馴染の守屋沙和がいつの間にか僕の目の前に立っていた。ショートカットの活発な彼女は陸上部ということもあって、真っ黒に日焼けしている。夏休み充実組みである。

「アンタ、日記部に入ろうとしてるんだって」

沙和の口から『日記部』という言葉が出てきた途端、教室中が静かになった。一斉に僕へ向けた視線を感じた。

ちなみに日記部とは高月亜也が部長をつとめる文科系の部活名である。活動内容は『日記に残せるような素晴らしい高校生活を送るためにあらゆることを行う』という曖昧なもの。簡単に言えば、『高校生活を季節ごとのイベントで盛り上がろう』という一見すると軽薄な部活に見られてしまいがちである。

「高月先輩の別名を知らないわけじゃないでしょうね」

「殲滅の日記姫」

「し、知ってて挑むの？」

「でも、日記部のプールイベントに行こうって言ったのは沙和じゃないか」

「それは滝川先輩に誘われたから」

ここでいう滝川とは日記部の副部長である滝川夕実のことだ。

「それに甲斐斗はどうせロクな夏休みの思い出なんてないと思ったから、岡留と三人で一緒に過ごそうと」

『それに俺は中学の卒業式に言ったお前の言葉を根に持っている』とは言えず、飲み込んだ。

更新は1～2時間後。（うーむ。少し時間の経過が早い気がする）

8／26　0：29

今回のコメント

・昔の癖で高校って入力しようとすると学園って入力してしまう。(ちなみに理由については考えてはいけない。高校って表記してはいけなかったんだよ、言わせんな恥ずかしい！↑自分で言ってるじゃん)

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

暦が変わっただけで、急に状況が変わるわけではない。自分の席で座っているだけで、じんわりと汗をかいてしまう。二学期が始まって三日目。今日から通常授業になるわけだ。また学生としての日常が始まる。周りでは始業前に日焼け自慢や「宿題やった？」とか「夏休みどうしてたか」という会話が未だに続いていた。

そうさ、僕は日焼けしたさ。宿題は暇だったからやったさ。夏休みの思い出は……ある。ゲームと昼寝にいそしんでた夏休み。あの日、死にかけた僕を助けてくれた高月先輩と会話したひと時。僕はある決心を固めていた。今日の授業が終ったら行動を開始しよう。

「ちょっと、甲斐斗。今さっき岡留から聞いたんだけど」

幼馴染の守屋沙和がいつの間にか僕の目の前に立っていた。ショートカットの活発な彼女は陸上部ということもあって、真っ黒に日焼けしている。夏休み充実組みである。ちなみに岡留とは僕の数少ない友人である。

「アンタ、日記部に入ろうとしてるんだって」

沙和の口から『日記部』という言葉が出てきた途端、教室中が静

かになった。一斉に僕へ向けた視線を感じた。中には「あわわわ」とか言って教室をでていく男もいた。

さすがは日記部。その悪名は輪転高校内に知れ渡っているようだ。ちなみに日記部とは高月亜也が部長をつとめる文科系の部活名である。部員は高月先輩を入れて現在二名。活動内容は『日記に残せるような素晴らしい高校生活を送るためにあらゆることを行う』という曖昧なもの。簡単に言えば、『高校生活をイベント開いて盛り上がろう』という一見すると軽薄な活動に見られてしまう部活である。

沙和は僕を見つめたまま動かない。正確には睨まれている。まるで僕が重罪を犯したみたいに。

「高月先輩の別名を知らないわけじゃないでしょうね」

「殲滅の日記姫だろ？」

「し、知ってて挑むの？」

瞳を大きく開いて沙和は天井を見上げた。呆れている様子である。

「なるほど。甲斐斗も伝説のひとかけらになるわけだ」

「ならないよ」

日記部には、いや、高月先輩には伝説がある。今年の四月、日記部には高月先輩の美貌に惹かれ、彼女と楽しい時間を過ごしたい、あわよくば彼女にしたいという男子新入生が五十人入部したという。それだけでもすごいのだが、五十人全員が一日で退部するという事態に発展した。退部した理由を誰一人として語らず、ただ震えるのみだったらしい。さっき出て行った男もきっと退部した一人だったのだろう。五十人を一日で殲滅させたとして高月先輩は「殲滅の日記姫」というありがたくない二つ名を手に入れた。それ以来、日記部には誰も入部せず、今では部員は二人という話だ。

「なんで？　わかんないよ。無気力大魔王の甲斐斗が部活なんて」

たしかに自分でも信じられない。だけど、ちゃんと理由がある。

「夏休み誘われたんだ。日記部に入らないかって」

「誰に？　まさか高月先輩？」
「いや、滝川先輩。そもそも日記部のプールイベントに行こうって言ったのは沙和じゃないか」
「それは滝川先輩に誘われたから……」
ここでいう滝川先輩とは日記部の副部長である滝川夕実のことである。滝川先輩と沙和は中学生の時の部活の先輩後輩の間柄だ。「夏休みに日記部のイベントで、学校のプールを一日か仕切って遊ぼうって企画がある。どうせ殲滅姫のお陰で人も集まらないし、来ない？」と滝川先輩から聞かされた沙和は、僕と岡留を誘ってイベントに参加したのだ。
僕に反論されて沙和は口を尖らせた。
「甲斐斗はどうせロクな夏休みの思い出なんてないと思ったから、一緒に過ごそうと……」
「は？」
「なんでもないっ！」
日記部イベントの日。高月先輩に「体でお礼をしてもらう」と言われた直後、待ってましたとばかりに滝川先輩が現れて「日記部に入部することが恩返しというものだ」と僕を指差して宣告したのだ。すかさず高月先輩が「僕の自由意志に任せる」と、とりなしてくれたお陰で結論は先送りになった。
そして自由意志の結果、僕は日記部に入ることに決めたのだ。
「どうせ一日で退部すると思うけど……」
沙和は僕を心配そうに見つめてくれた。彼女はなんだかんだ言って、僕を心配してくれる。そのままゲームに現れそうな幼馴染の鏡である。でも、かえって気を使われることが僕にとって重荷になることがあるのだ。
なんせ日記部に入る動機が『中学の卒業式に言ったお前の言葉が頭に残ってるから』だから。僕は喉まででかかった言葉を飲み込んだ。
もう空っぽの高校生活からおさらばだ。考えてみれば「思い出を

作る部活」なんて僕にピッタリの部活じゃないか。今までなぜ気づかなかったのだろうと思う。

「はい。じゃあ、この話は終わり。さっそく今日入部届けをだしに行くから」

「一緒に行こうか？」

「お前は部活だろ」

「そうだけど……」

沙和は僕に目線を合わせて少し近づいた。僕は思わず仰け反りそうになった。

「気をつけてね」

「お、おう……」

こうして放課後を迎えることになった。

とりあえず今日はこの辺にしておきます。（現実逃避してきます）

8／26　22：53

今日のコメント

さぁ～て、今日の夕飯は？

ついにキター！
カレー曜日っ！（つい最近もあった気がする）
そしてなぜか餃子。
もやしの炒め物。（急に食べたくなった）

半分普通に食べて、半分ソースかけて食べる。
なぜかとんかつ用のどろっとしたソースですよ。
この地方じゃぁソースは普通です。本当です。信じてください！（
よし、文字稼ぎができた）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

頭のアイドリングの時間～
ちょっと話を整理するので、本文は次の更新から。

いつもどおり更新は1～2時間後！

8／27　21：48

今日のコメント

今日の報告。

ごはん
鳥のから揚げ
ゴーヤチャンプル
豚肉と里芋を煮たもの

なんだかゴーヤチャンプルが定期的に入っている。
南国でもないのに。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

約一日のお待っとさんでした！（誰も待っていない）

今日のリープ

寝オチ
←
寝坊
←
出勤
←
帰宅
←
夕飯

←
ＰＣの前↑今ココ

わははははっ、わははははっ、いつものぐうたらコンボ炸裂っ！
（開き直っている）

さぁ、今日はサタデーナイトだ！
フィーバー！
フィーバー！
（必死に盛り上げてる）

8／27　23：39

今日のコメント

ネットで調べモノしてたらこんな時間。
怖いですね、ネットって。

誰がまとめサイトなんて作ったんでしょうね。
アレは悪魔のサイトです。時間を吸い取る悪魔です！
あれ読んでたら気づけば朝なんてざらですし。
お～怖っ！
（読むお前が悪い）

まだ寝ないんだからねっ！（誰に言っている？）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

授業も上の空で過ごし、あっという間に放課後になった。ついていくと聞かない沙和を説得し、僕は教室を出た。入部届けはもったことを確認して部室へと目指す。輪転高校の四階建て校舎は大きく分けて二つに分かれる。「エの字型」になっており、授業をする最近建て替えた校舎部分と渡り廊下を経て向かう、旧校舎の特別教室、部室部分に分かれる。昔は両方普通の教室として使っていたらしいが、昨今の生徒の減少で今の形になった。日記部の部室は旧校舎の四階の奥にあたる。場所柄誰も通ることがないし、日記部員以外誰も近づかない、秘境と呼ばれる場所である。かくいう僕も始めて向かう。新校舎から渡り廊下で旧校舎へ映ると途端に白い壁が茶色が

かっている。年季が入っていると言えば聞こえがいいが、単に古臭いだけである。友人の岡留が言うには「昭和の臭いがする」らしい。「昭和の臭いってなんだよ」と突っ込むと「知らん」と突っぱねる平成生まれである。

二階三階部分は文科系部活で活発だ。人通りもあるし、音楽室なんかの特別教室からは楽器の音まで聞こえてくる。入学から九月までまったく部活動をしてこなかった僕には新鮮な光景だった。帰宅部で帰ろうとする僕を沙和なんかが、部室に向かって走り去るのを見て、なんとなく羨ましかったし、「帰る場所」がある強みが感じられた。一方的な思い込みだとしても、部活動している彼、彼女らからすれば拠り所の一つであるのは確かなのだ。僕からすれば部室は「思い出という宝石の原石が眠る場所」と言ったところだ。そして今日から僕にも拠り所ができてしまう。なんだか気恥ずかしい。

四階に上がると急に静かになる。階下から微かに楽器の音が聞こえてくるが、もはや遠い場所での出来事だ。人の気配がしないだけでなんとなく薄暗い印象を持ってしまうのは僕だけだろうか？　漠然とした不安を抱きながら、僕は四階の右側奥へ向かった。

文字が詰まっている……

更新は1～2時間後ぐらい。

8／28　0：52

今日のコメント

机と自分の間に枕を挟んでます。
なんだかピッタリ密着してないと落ち着かなくてね。

はぁ～落ち着くなぁ。
このまま寝――（自主規制）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「なんで、この扉なの？」
思わず口に出してしまった。教室の扉が引き戸ではなく、木造の両扉になっているのだ。妙に物々しい感じがして気後れした。一歩後ろへ下がる。このまま引き返しても誰も文句言わないよな、と言い訳が頭の中で響く。
しかし、立て付けが悪いのか、はたまた僕を招き入れるつもりなのか、偶然と言うのは恐ろしい。扉から軋む音がしたと思うと、僅かに開いた。ほんの数センチだ。さらに開こうとしたので僕はドアノブを掴んで抑えた。ノブに手を触れてしまった以上、なんだか後に引けなくなってしまう。それでも僕は勇気が出ず、少しずつ扉を開いた。薄暗い廊下に明かりが差し込む。部室の中がハッキリして来る。でも、最初に視界へ飛び込んで来たのは内装ではなかった。扉の延長線上にある椅子に座っている高月先輩だった。
慣れない光景にノブを掴む手が僅かに震える。今日は卒業式でも

ないよな。記念日でもないと思う。信じられない。なんでもない普通の日に女の子が泣いている光景なんて、僕の人生には存在しなかった。

開いた瞳は潤んで鈍く光っている。口許に手をあて嗚咽を堪えると、大きな瞳は閉じられて大粒の涙が一筋流れた。膝の上には本が置かれている。本を読んで感動しているのか？　……いや違う。感動ならもっと表情が晴れやかなはずだ。明らかに何かを堪えている。口許に当てている手が唇を押さえつけるように震えていた。空いているもう一つの手は自分を抱くように片方の腕を掴んでいる。もちろん力一杯に。

慰めなきゃ、という気持が一瞬過ぎる。しかし、体は一向に動かない。泣いている女の子を励ます勇気がない。なんと声をかけていいのかわからない。空っぽな自分に何ができるというのか。僕は俯くと頭の中で自分には資格がないと言い聞かせるので精一杯だった。このまま帰ろう。高月先輩が泣いている状況じゃあ、どのみち入部届けを出すなんて雰囲気じゃないし。逃げ道を見つけた僕は少し気が軽くなり、ドアノブを掴む手の力を抜いた。

「また泣いているのか……」

背後で声が聞こえて僕は体を震わせ驚いた。いたずらが見つかった子供のように僕は肩をすくめた。ゆっくり後ろを振り返る。

「いつまでもこだわってどうする。もう戻ってはこないのに」

独り言をいうように呟いたのは滝川先輩だった。ポニーテールで長身の彼女は僕と視線が変わらない。だけど、視線は明らかに僕の先にある高月先輩に向けられていた。二人に挟まれ、僕は逃げることも進むこともできなくなってしまった。でも、今なら間に合うかもしれない。「ごめんなさい」とか言って走り去れば……と、僕は体を斜め後ろへ下げようとした途端、滝川先輩が扉と僕を挟むように前に進む。か、体が密着する。

「いくぞ、賑やかし」

滝川先輩はまたしても独り言のように呟くと、扉を勢いよく叩い

た。瞬間的に音は廊下中に響き、扉が閉まった。
「わははははっ！！　やっぱり来たか！　来ると思ったよ！　このエロガキが！」
僕の肩を何度も小突き、扉へぶつける。訳が分からず、僕はされるがままだった。すると、滝川先輩は僕へ顔を近づける。
「泣いている女の子を目の前にして逃げるわけないよな。少しは男を見せろよ。空元気ぐらいあるだろ、一年坊主」
歯軋りをしながら滝川先輩は僕へと小声で話す。僕は先輩の勢いに負けて、扉に張り付いた。「ちっ」という一言と同時に先輩は僕の下腹部へ手を持っていく。
「男だろ覚悟を決めろ！　ついてんだろ！」
下腹部に向かった手は僕の禁断の花園、もとい、おもしろ玉が二つ入った袋を思いっきり掴む。僕は一気に膝が崩れ落ちると同時に搾り出すように声をあげてしまった。
「ぎいいいいいっ！」
「ははははっ！　亜也に体でお礼するんだろ？　これぐらいで弱音を吐くな！」
弱音とかそんな問題じゃないから！　女子高校生にナニをアレされて、じゃなくて、女子高校生じゃなくてもアレされたら、弱音吐くって！　やっぱりもうお婿に行けない！
「行くぞ、副部長自ら日記部へ案内してやるよ！」
滝川先輩は僕の肩へ手を回して、がっちり体を固定する。「ぎゃはは！」とか言って扉を豪快に蹴り開く。観音開きの扉はけたたましい音を立てて部室内へ広がった。

やはり、文字が詰まっている……
掛け合いが書きたい！

ちょっとドライブ行ってきま～す。（早くも現実逃避）

更新は2時間後ぐらい？

8／28　2：58

今日のコメント

ドライブ行って日常見てたらこんな時間。
余裕綽々なわけないでしょ！

でも、考えてみたら、もしさっきまでの時間、小説だけ書いてたら毒がまわっていたかもしれない。
ポジティブシンキング！

……ふぅ。
「アゞ――――――――――ッ！！」（宇宙まで届く後悔の「アゞ――！」）

よし書こう。

っていうか何故ＥＤがあの曲なんだ？
最終回かと思ったぞ！　そしてちょっとしみじみしたし。
くそっ！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ということで進んでいませんが、頭の中では展開しています。（言い訳）

しかし、現在２０ＫＢ。予想している２００ＫＢだから、１０分の

1まで来てしまった。
話自体は10分の1に満たないのに。
これは鈴鹿オクトパスの二の舞か？

多分大丈夫……だよね。

更新は2時間後ぐらい？

8／28　3：59

今日のコメント

・なぜ深夜のスーパーにはそこそこの人がいるのだろう。
この暇人！　そしてスーパーにいる僕も暇人！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ぎゃはははっ！　亜也、だから言ったろ、こいつは来るって！」
ヘッドロックをかまされたまま僕は日記部部室へと飛び込んだ。滝川先輩に引き釣られるように高月先輩の前に連れて行かれる。な、情けない……
「ほら、さっさと挨拶しろ」
滝川先輩の腕から解放された僕は高月先輩の前に立たされた。高月先輩はさっきと同じように椅子に座ったまま動いていない。さすがに涙はふき取ったようだ。でも、瞳の中の充血まではれるはずがない。僕は思わず目をそらしてしまった。視線を反らした先にはさっきの本が目についた。膝に置いていた本は近くにあった机に置いてある。
「あらためて自己紹介しろ、一年」
「ええっと……一年二組の草弥甲斐斗です。夏休みのイベントではお世話になりました」
直視できない状態を滝川先輩に無理やり顔を固定され、僕は自己紹介した。高月先輩は僕をじっと睨みつけるように見つめる。僕は視線をそらそうと左右に顔を振るが固定されて動けない。しばらく高月先輩の視線が僕に張りつく。なぜか非難されているようで、申

し訳ない気持になった。泣いている先輩を放っていこうとしたのだから。もしかしたら、僕が泣いているところを見たのがバレているのかもしれない。

「そう。今日からよろしく」

意外にそっけない高月先輩の返答。僕は拍子抜けな気持のまま「こちらこそお願いします」と返した。同時に滝川先輩からも解放された。

あらためて部室を見渡した。扉を開けると大きめの長方形の机がある。周りを座れば八人ぐらいは余裕で座れる机だ。今も高月先輩と滝川先輩が談笑している。壁際にはホワイトボードらしきものもあって、この辺りは打ち合わせや会議をするスペースだろう。問題は部室奥になる。五段ぐらいの本棚が二台並んで、ところ狭しと本が並んでいる。高月先輩が持っていた本と同じ装丁のモノが本棚の上を占めている。下段はノートらしきものが並んでいた。僕は本棚へ近づいた。

更新は1〜2時間後ぐらい？

8／28　5：10

今日のコメント

そらが白々としてきた。

まずい！　ちょっと寝ないとイベント間に合わない！（良いのかそれで）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

近づくとより正体が見える。本棚の上部を占める本は、いわゆる上製本、ハードカバーと呼ばれるもののできていた。表紙、裏表紙は茶系統の皮製のようだ。同じ装丁なので百科事典か作家の全集かと思っていたが、背表紙を見ると、どれも「日記」を記載されいる。背表紙下には第〇期生と書いてあり、西暦も載っていた。第〇期生というのはおそらく輪転高校の卒業生を表すのだろう。僕の年代で八十八期生のはず。輪転高校はそれなりに歴史のある高校だった。総合すると、ここは日記部、目の前に並んでいるのは日記、各本には期生が書いてある……つまり、これは今までの日記部の卒業生が書いてきた日記だと言うことになる。と考えるとこれは壮観である。学校の歴史がここに残っていると言っても過言ではない。立派な輪転高校の財産だ。

「ここにはね、日記部創部以来歴代の部員達の日記が保管されているの」

高月先輩が話しながら近づいてくる。腰まで伸びた黒髪がふわりと追いついてきた。甘い香りがほんのり香る。僕はちょっと深呼吸をしてしまった。すると高月先輩が横目で僕を見ていて、視線がぶ

つかる。僕は思わず息を止めてしまい、たちまち顔が赤くなる。高月先輩はジト目で僕を見るめると、「ふう」と小さくため息をついた。呆れられてる！

「日記って言うのは、個人が感じた当事者が生きた時代の生活が凝縮されている物だと思うの。大きな歴史の流れとは違う、小川のような細くて頼りない流れだけど、親しみを感じる愛すべき流れだよね」

高月先輩は本棚のハードカバーを愛おしそうに白くて細い指でなぞる。その姿を見ていると部室に来るまでさんざん言われていた日記部の、高月先輩の話が嘘に思える。「殲滅の日記姫」なんて誰が付けたんだ。馬鹿馬鹿しい。僕が眉間にしわを寄せて考え込んでいると、高月先輩の口許が僅かに弛んだ。

「そんなに難しく考えないで。偉そうに言ってるけど、私は読んでいるだけで、その人と知り合いになったような感覚になってね。日記の筆者の友達まで旧知の知り合いみたいになるんだ。……変だよね」

「全然変じゃないです！　携帯で有名人のブログとか読んでると似たような気持ちになりますよ！」

とはいえ、僕は携帯でブログとか読まないけど。沙和がよく有名人のブログを読んで僕に話をするので「お前は有名人の友達か」とツッコミを入れたことがあったから、言えたわけで。沙和との無駄だと思っていた会話がこんなとこで役に立つとは思わなかったけど。なんだか少し高月先輩と打ち解けたような気がした。少し心のハードルが下がったところで、僕はさらに話を広げるべく、質問をした。

「でも、なんで本棚上部と下部でこれほど装丁が違うんです？」

本棚上部と下部では明らかに違う。ハードカバーと普通のノート。時代が違うのだろうか？　いや、ハードカバーにも最近の年代の日記がある。だからきっと理由があるはず。僕は話の種ぐらいにしか思っていないままに質問したのだ。

しかし、僕の質問を聞いて高月先輩の表情が変わった。つり目気

味の瞳に力がこもり、睨まれているような印象に。口を一文字にして黙ったことが相乗効果を生んだ。これは地雷を踏んだのか？　僕の顔は絶対に引きつっているに違いない。

とりあえず今日はここまで！

8／28　11：58

突然ですが、ＣｏｍｉＣｏｎ京都の店番がヒマなので、実況をします。
ってか、携帯は時間がかかり過ぎて上手く伝えられない。

とりあえず、文机の両脇はアクセサリー屋さんとカーナビ擬人化漫画を売ってる同人の人。
それにはさまれる文芸サークル。
なにこの配置！
つーか、いただいた漫画が面白いし、アクセサリー屋さんには女の子のお客さんが多いし！
もう、本の世界に引きこもるしかない！

これだけかくのに２０分。
指がつりそう。（だったら書くなよ）

8／28　13：20

全然売れないＹＯ！
うーん、文芸誌は何が書いてあるか分かりにくいからなぁ。
ＳＦと美少女とか、本格ミステリー！とか男子チーム萌え！とか、
キャッチコピー考えたほうがいいのかなあ。

それにしてもロックマンのコスプレしてる人がいて和む～

青のエクソシストのコスプレ多し。
隣のアクセサリー屋さんが店番しながら、商品作ってる。上手っ！
眠くなってきた……
お休み、パトラッシュ…

ぐ～、ぐ～、むにゃむにゃ
ぐ～、ぐ～、むにゃむにゃ
ぐ～、ぐ～、むにゃむにゃ
ぐ～、ぐ～、むにゃむにゃ
ぐ～、ぐ～、むにゃむにゃ
文字稼ぎ。

8／29　3：17

今日のコメント。

頼まれもしないのに書く夕食。

・茄子とミンチを煮たもの
・豚肉と竹の子を炒めたもの
・キムチ（大根・キュウリ）
・ご飯

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

寝たと思ってるだろ！

寝てたよ！

思いっきり寝てたよ！

でも、目が覚めたんだよ！

お陰で夜中なのに元気だよ！

み　な　ぎ　っ　て　き　た　〜　！

でも、何にも書いてないよ。

ちょっとでも前進と言うことで、書きますよ。

だけど伏線をいれないと……でも、どこで入れたらいいの？
あのキャラクターをどこでいれたらいいの？
あの展開、必要ないんじゃあ……
いいのかな？　いいのかな？　いいのかな？

え――――い、うるさい！
今書いているのが第一稿だから、後で直せば良い。
いや。
第一稿でなくとも直せば良い！
これに関してはいくらでもやり直しが利く。
とにかく一度最後まで書いてみることだ。
そしたら何か見えてくるはず。

つーことで、更新は1～2時間後

8／29　4：15

今日のコメント。

・やばい、録画していた番組が溜まりすぎてる。
ハードディスクの残り容量が３０％を切った！
これは１ＴＢに手を出すしかないのか。
禁断のＴＢの世界へ……

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

しかし、僕の質問を聞いて高月先輩の表情が変わった。つり目気味の瞳に力がこもり、睨まれているような印象に。口を一文字にして黙ったことが相乗効果を生んだ。これは地雷を踏んだのか？　僕の顔は絶対に引きつっているに違いない。
「そんなの『部長』と『それ以外』に決まってるだろ」
「夕実っ！」
いつの間にか僕の背後に滝川先輩が立っていた。この人忍者の末裔じゃないだろうか。僕の背後に立ちすぎだろ。僕が殺し屋だったら殺されてるよ？　殺し屋じゃないけど。
「亜也も黙っている必要はないだろ。このまま順当に行けば、草弥だって部長になれるんだから」
「ええっ！？　僕が？」
なんだかニヤつきが止まらない。入部して一時間もしないうちに部長候補ですか？　とんだ大物ルーキーだなぁ。と思いつつ平静を保つために指で頬をかいて誤魔化した。

「だって、一年生の部員はお前一人だろ」
「あっ。ああぁ……」
「なんだそのガッカリした返事は」
一瞬でも「選ばれ者」と勘違いした僕が恥ずかしくなった。単なる消去法だった。
「だが、その前に私が部長になるだろうけど。なんのトラブルがなければな」
「へ？　なんで滝川先輩が？　高月先輩と同い年じゃあ……」
「違う。私は二年生だ」
「で、でも、高月先輩とタメ口を」
「亜也が許可してくれたから」
「ええっ！？　そうなんですか？」
急に話を振られた高月先輩は瞳を大きく開けて驚く。二人の視線を浴びて「あ、あの……」とか小声で言いながら、口許に手を当てて考える仕草をする。
「今まで二人だったし。夕実はこんな感じだし」
「『こんな感じ』を具体的に教えて欲しいな」
「傍若無人、弱肉強食」
さすがの滝川先輩も二の句が次げなかったらしい。「っ……」と言ったまま黙ってしまった。高月先輩、意外と辛辣だな。滝川先輩は固まっていたが、しばらくして、立ち直ったらしく、咳払いをした。
「コホン。なんにしてもだ。今日からお前も日記を書いてもらうぞ」
「なぜですか？」
「ここは日記部だ！」
忘れるところだった。でも、いきなりで書くことがない気がする。あるとすれば、沙和に日記部を止められた、滝川先輩にナニをアレされた、高月先輩が泣いてた。ぐらいしかない。最後の泣き顔を思い出して胸がチクリと痛む。どれも書けないよ。
「日記を書いたら、部長に提出。次の日にノートにコメントしてく

れるから」
　なおさら無理。高月先輩に読まれることを前提に書くなんて絶対無理！
「一応部活動だからな。大手を振って亜也と日記のやり取りできるんだ、良かったな。だが日記で告白なんかするなよ」
「しません！　それに、いきなりなので書くことがありませんよ」
「心配要らない。嫌でもできる」
　滝川先輩は腕組みして、口を歪ませる。とても含みのある言い方だ。心配になって高月先輩を見ると厳しい目つきで僕を見つめていた。目が合った瞬間、プイッと横を向いた。余計不安になる。
　すると三人が黙った一瞬の隙をついて扉からノックする音が聞こえてきた。
「来たか」
　滝川先輩の呟きと共に高月先輩が扉を正面に僕の前に立った。

お風呂入ろ～う。（ホント、どうでも良い情報）
んで少し書いたら今日は終わりつーことで。

更新は1～2時間後。（こう書いておけば大丈夫）

８／２９　５：３５

今日のコメント。

どうでもいいこと～
・今日、アマゾンで頼んだＣＤとＢＤが届く～
そしてあの本も届く！　楽しみ～

「るろうに剣心　追憶編」の切なさはガチ。
「ゲームシナリオのためのＳＦ事典」のお手軽さは手抜きっ！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「来たか」
滝川先輩の呟きと共に高月先輩が扉を正面に僕の前に立った。にわかに辺りの緊張感が増した。同時に木造の扉は大きな音を立てて開いた。
「はろーっ！　我愛しの生徒どもよ！　元気にしてた～？」
入り口に立っている人物は野球のキャッチャーが使うようなマスクにプロテクターを着けて仁王立ちだ。高月先輩と滝川先輩は微動だにしない。明らかにおかしいだろ。
「んもうっ、折角盛り上げようとわかりやすい格好してきたのにぃ」
妙に色っぽい声を上げながら、キャッチャー姿の人物はプロテクターを外していく。すると現れたのは着物姿の大人の女性だった。
ソバージュのかかった少し茶髪気味の髪、リムが細めの眼鏡をかけて、口はだらしなく開いているけど、眼光は鋭い。間違いなく、僕はこの女性を知っていた。

生物の平光はかり先生だ。輪転高校は自由な校風だが、着物を着て登校する教師はこの人ぐらいだ。校長が注意しても意に介さない、肝が据わっているのか、空気読まないのかよくわからない人物である。しかし、生徒の人気はあるようで、よく廊下で生徒と談笑している姿を見てギョッとすることがある。

「あらあら。今日から草弥君がいるんだ。これは頼もしいわね、高月ちゃん」

「……さあ。どうですかね。今日でお別れかもしれないし」

「もうっ、高月ちゃんは悲観的だなぁ。この前のプールイベントでは良い結果がでたんでしょ？」

「お陰さまで。焼け石に水程度にはなりましたよ」

高月先輩は表情はこちらから窺えない。だけど肩に力が入っていることだけは確かだった。とは言え、僕は状況がまったく読めない。

「草弥君がポカーンとしてるわねぇ。私これでも日記部の顧問してるのね～。だから入部届けは私に出して欲しかったなぁ～」

「えっ。そうなんですか。すいません」

「素直ねぇ。そこのお二人さんも見習ったら？」

平光先生の言葉に滝川先輩と高月先輩は矢継ぎ早に答える。

「ちっ、言ってろ」

「見習ったところで勝てるわけではないですから」

「もう、すぐに勝ち負けにこだわるぅ～。勝ち負けなんてどうでもいいの。楽しい思い出ができればそれでいいでしょ？」

先輩二人は答えない。自然に沈黙ができる。平光先生は俯いて少し下にずれた眼鏡を指で元に戻す。口許はあいからずだらしなく開いている……と思った瞬間、口が大きく歪んだ。

「ぱんぱかぱ～ん！　早速ですが新人歓迎、小テストの時間で～すっ！」

はい？　小テストですと？　入部テストなんてあるの？　今度は僕が状況を読めず、だらしなく口を開く番だった。反対に先輩二人はなにか身構えるような体勢を取った。

つーことで、今回はここまで。

8／30　6：18

今回のコメント

昨日の献立～
・ごはん
・ヒラメを煮たもの
・もやしと肉を炒めたもの
・味噌汁（ワカメ・玉ねぎ！）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

早く寝たなら、早く起きればいいじゃな～い！
ということで、更新、更新っ！

「ぱんぱかぱ～ん！　早速ですが新人歓迎、小テストの時間で～すっ！」

はい？　小テストですと？　入部テストなんてあるの？
今度は僕が状況を読めず、だらしなく口を開く番だった。
反対に先輩二人はなにか身構えるような体勢を取った。

「カモ～ン！　ダイアリーッ！」

平光先生の言葉と共に僕の背後にあった本棚が音を立てて揺れだ

した。

僕が振り返ると、一冊のハードカバーが何もしていないのに本棚から出ようとしている。まるで群れの中から生を求め抜けようとする生き物のように。

小刻みに震えながら、本棚から脱出したハードカバーはものすごいスピードで平光先生の手元まで飛び出した。僕は思わずしゃがみ込んでしまった。

「早く立て、平光は待ってくれないぞ！」

滝川先輩に両脇を抱えられなんとか立ち上がった。

平光先輩は中に浮いている日記を手に取るとパラパラとめくり始める。何が起こっているのかサッパリわからない。

まず、本が自分で棚を飛び出し、飛んでいくなんて……何の冗談だ？　きっと手品だ。新人歓迎の手品なんだ、きっと。

「コイツに、決・め・た♪」

日記をパタンと閉じると、平光先生は高月先輩を見定める。

「第二十三期生、佐々木籐五郎くん。八月十五日の出来事で～す！」

「よりによって籐五郎かよっ！」

滝川先輩が叫ぶ。僕はまったくついて行けない。少し茶番にも思えてしまう。滝川先輩と平光先生だからなおさらだ。

だけど「四月以来の籐五郎ね」なんて高月先輩が呟くものだから、僕は混乱してしまう。

「んじゃあ、小テスト開始～！」

平光先生が宣言すると、ハードカバーの日記は光を放つ。僕は目を瞑り、腕で光を遮った。

8／30　7：31

今回のコメント

や、やばい。時間が無い！
もう少し早く起きるべきだった！（今頃遅い）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「んじゃあ、小テスト開始〜！」

平光先生が宣言すると、ハードカバーの日記は光を放つ。
僕は目を瞑り、腕で光を遮った。目を閉じても伝わってくる光は数秒続き、やがて輝きは収まっていった。
目をゆっくりと開けて辺りをうかがう。目の前には高月先輩、隣には滝川先輩。よし、何も変わっていないな……周りの風景以外は。

セミが鳴いている。まだ九月の初旬だから不思議じゃない。でも、さっきまで部室だった場所が山の中に変わっているのは変だろう。色んな針葉樹林が映えてますよ。うわ〜幹の部部には殆ど葉がないや。みんな太陽を求めて先のほうに生えてるんだね。勉強になるね……なるかいっ！
とにかくだ。今は状況確認をするべきだ。意味がわからないし、驚いてばっかりの人生なんてゴメンだ。

「滝川先輩これは一体どういうことですか？」
「部活動だよ」

「でも、平光先生は小テストって」
「あれは気にするな。亜也だけに言ってるだけだから」
滝川先輩が眉間にしわを寄せて、口許をひきつらせている。僕からでも余裕が無いのがうかがえた。
高月先輩は僕と滝川先輩に構わず、辺りを探索している。現状に戸惑うことなく慣れた行動のようだ。僕は再び滝川先輩に質問する。
「ここ部室ですよね？」
「さっきまでは。でも今は昭和二十八年の山中だがな」
「……本気言ってます？」
僕の言葉に滝川先輩が無言で頷く。つられて僕も無言で首を振った。
あるはずがない。さっきまで部室だった場所が山中に変わるなんて、そんなこと……。
あった。思い出したくもない記憶が蘇る。
夏休み、日記部のイベントでのプール。プールだった場所が海に変わり、プールだった場所にサメがたむろし、プールだった場所が底なしになった。あの時と同じだ！
僕は過去の体験と合致した事実に驚くと共に絶望的な気持になった。これは現実だ。
「夕実、ちょっと来て」
高月先輩が滝川先輩を手招きする。二人は一本の樹木の幹に注目しているようだ。
「何かで削った跡がある」
「やっぱりこれは縄張りと考えて間違いなさそうだな」

「やっぱり八月二十五日の日記だから……」

二人から少し離れて、僕はなす術もなく立っていた。まるでアルバイト初日で次やることがわからずオロオロする新人の気分だ。

実際、入部して一時間も経っていないのだけれど。とにかく、ここは僕なりに状況を理解するしかない。まずは周りを見渡して状況把握だ。樹木に集まってる二人から視線を外し、僕は後ろを振り向いた。

――おお、神様。

と心の中で呟いてしまうほど、最悪な状況が僕に訪れようとしていた。

数メートル先に毛むくじゃらの動物がいた。それは人形だと、とても可愛く表現され、子供にも人気がある。だけど実際には人より大きいし、人を襲うこともある肉食動物だ。

やはりみなさんご存知のクマだ。四つんばいで歩いている姿だけで、僕より大きいだろう。背中に虫が這うように悪寒が走りぬけ、足が震えてきた。僕の喉は一気にカラカラになる。上手く声がでない。

「せせせせせ、先輩」

声は届かず、二人は無視した。クマはつぶらな瞳でこちらを観察している。僕は震える足を無理やり動かし、ゆっくりと後退した。僕に合わせてクマは前進を始める。これは完全にロックオンされてるっ！　心臓の鼓動は早くなり、口元の震えを止められない。やがて数歩下がると、滝川先輩にぶつかった。先輩は面倒くさそうに応えた。

「なんだよ。ぶつかって来る――」

「クマ――――ッ！」

僕は力の限りの声を上げる。すると今までになかった声が加減を忘れ、音量最大で辺りに響き渡った。

「ええっ!?」
「どうした?」

僕の声に反応したのは先輩二人だけではなかった。一定の距離を保っていたクマが驚いたのか、低くお腹に響くような咆哮を上げ、立ち上がった。僕はただ見上げて、ゆっくりと先輩二人へと振り向く。

瞳を大きく開けて驚く滝川先輩と口を一文字にして睨みつける高月先輩の姿が目に入った。瞬間的に僕は叫んでいた。

「クマ――――ッ!」
「見たらわかる!」
「だって、クマ――――ッ!」
「うるさいっ! とにかく逃げろ!」

走りだす滝川先輩。まったく反応できない僕。壊れた人形みたいに「クマ――ッ!」としか言えなくなってしまう。立ち上がったクマはゆっくりもとの体勢に戻ると、僕達を見定めて歩みだした。こ、殺されるっ! 僕は腰が抜けそうになった。

「行くよ」

短く耳に残るやや低めの声。次に僕の腕を誰かが掴む。この感覚は、イベントの日のプール以来。つかまれた腕は導くように引っ張られた。僕は瞬間的に走り出していた。細くて白い指が僕の腕を掴んでいた。長く黒い髪の毛がふわりと舞う。

「大丈夫だから」

魔法の言葉が僕を正気に戻らせる。僕を導いてくれた人、それは高月先輩だった。

今回はここまで。
それでは会社に行ってきま～す！

8／31　6：36

今回のコメント

昨日の夕飯。
・豚肉・キャベツ・ピーマンを煮たもの。（しょうゆ・みりん・料理酒）
・ごはん
・炒り卵（再び復活）
以上。

二日連続で朝おきての更新！
朝弱いはずなのに珍しい～（自分で言ってみる）

自分のやるべき事をもう一度確認。

結構残っている、まだ四分の一も終わっていないので。
今週中で○○を終わらせたいなぁ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「だって、クマ――――ッ！」
「うるさいっ！　とにかく逃げろ！」
走りだす滝川先輩。置いていかれた！　まったく反応できない僕。
壊れた人形みたいに「クマ――――ッ！」としか言えなくなってしま

う。

立ち上がったクマはゆっくりもとの体勢に戻ると、僕達を見定めて歩みだした。こ、殺されるっ！　僕は腰が抜けそうになった。

「行くよ」

短く耳に残るやや低めの声。次に僕の腕を誰かが掴む。この感覚は、イベントの日のプール以来。つかまれた腕は導くように引っ張られた。

僕は瞬間的に走り出していた。細くて白い指が僕の腕を掴んでいた。長く黒い髪の毛がふわりと舞う。

「大丈夫だから」

魔法の言葉が僕を正気に戻らせる。僕を導いてくれた人、それは高月先輩だった。先輩は僕の腕を力強く引っ張ると走り出した。僕もつられて走り出す。震えていたはずの足はちゃんと動いている。まったく信じられない。高月先輩は魔法使いだろうか。

とは言え、クマをまいたわけではない。木々が邪魔してなかなか追いつかれないだけで、生命の危機は依然そのままだ。

「こっちだ！」と叫ぶ滝川先輩の声が聞こえたが、辺りには誰も居ない。僕がキョロキョロしていると、高月先輩が腕を強く引っ張る。

「飛ぶよ」

短く僕に言うと。高月先輩は前方へ飛び出した。僕も懸命についていく。が、足に着地感がない。まさかと思い、下を向くと……崖になってる！

空回りした足が急な斜面につくと、ものすごい勢いで駆け下り始めた。数メートル下に滝川先輩の姿を見つけた。やがて足が徐々に浮いていく感覚がして、体勢も前のめりになっていく。このままだと飛び降りる形になりそうだ。

高月先輩は僕の腕を放さず同様に駆け下りている。先輩の体が浮いてくると、徐々にスカートがふわりと捲くり上がってきた。

「いやっ！」

高月先輩は僕から腕を離すと、スカートを押さえつけた。僕は腕を放された反動で完全にバランスを失い、宙に浮いてしまう。そのまま真っ逆さま。

結局、肩口から地面に叩きつけられてしまった。高月先輩はスカートを押さえつけたまま正座するように着地した。

8／31　7：25

今回のコメント

台風が二つ近づいている！

輸入商品を扱っている仕事なので、船が遅れると、遅れると対応に追われる！　残業しないといけなくなる！

いや～！　早く帰りたい！

でも、今から会社。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

高月先輩は僕から腕を離すと、スカートを押さえつけた。僕は腕を放された反動で完全にバランスを失い、宙に浮いてしまう。そのまま真っ逆さま。

結局、肩口から地面に叩きつけられてしまった。高月先輩はスカートを押さえつけたまま正座するように着地した。

「少しは時間が稼げると思う」

滝川先輩は腕組みしながら、肩をさする僕と正座したまま動かない高月先輩に向けて話し出す。先に逃げたと思ってたけど、逃げ場所を探していたのかな。

滝川先輩の計算だったとしたら高月先輩と役割分担ができている

のか……ってことは、もう何度も体験してるってことだよな。

「夕実……」

高月先輩がよろよろと立ち上がる。脛を何度か払うと擦り傷を負っているのがうかがい知れた。

「なんだよ」

「アンタ、勝手に逃げたでしょ！」

「あ、バレた？」

計算じゃなかったーっ！　高月先輩は滝川先輩に歩み寄り、指差してなにか言おうとする。しかし、滝川先輩は僕を指差して言葉を制す。

「後輩が見てますけど、セ・ン・パ・イ」

「え？」

高月先輩は僕へ振り向き、視線がぶつかった。途端に先輩は眉間にシワを寄せてぷいと横を向いた。なんでこっちに怒ってるの！？

「という茶番は置いておいて」

滝川先輩が誤魔化した。高月先輩はそれ以上何も言わなかった。どこまでが本気なのだろうかこの二人。

「いつもなら逃げ惑い、試験終了まで待つところだが、今回は違う」

すると高月先輩が頷いた。僕が首を捻ると、二人がこちらを向く。高月先輩は少しだけ瞳を細め、小さくため息をついた。

「輪転の誓いが使える……一年ぶりかな」

りんてんのちかい？　なんのことか分からず、さらに首を捻ると、高月先輩は僕に近づいてくる。滝川先輩が高月先輩の後ろから声をかける。

「やり方はわかっているのか？」
「見よう見まねだけどね」
「で？　誰の日記を使う？」
「そうね……第六十三期生の御木本孝美（みきもとたかみ）を使う」
「あぁ、あのバブル王子か」

相変らず会話の意味が分からないまま、高月先輩が僕へ小指だけを立てて、を伸ばしてくる。

「私と指切りして」
「は？　何言っているん――」
「早くっ！」

急かされると何だか少しカチンと来てしまった。散々わけの分からない会話を繰り返し、挙句の果てに指切りしろだなんて納得がいかない。まずは説明してもらわないと。

「ちゃんと事情を教えてくださいよ」
「事情？　何の？」
「今の状況とこれから行なおうとしていることですよ」
「後でね」
「誤魔化さないでくださいよ！　僕は巻き込まれているんですよ！」

僕にだって大声で文句言う権利があるはずだ。しかし、高月先輩はまったく動じる様子がない。それどころか、さらに僕に近づいてくる。顔が近づいて数十センチまで迫った。大きな瞳が僕を捉え、動けなくなった。

すると、厚い唇が動き、やや低い声で言葉を投げかけた。

「偉そうな言葉は、自分で逃げられるようになってからにしなさい。最下級生」

夏休みのプールサイドでのあの対応とはまるで違う、突き放された気持になった。あの時優しくされた事が嘘のようだ。僕は体温が一気に下がるような感覚に襲われた。

ということで、今回はここまで。

会社に行って来ま～す！

9／1　20：12　※作者休載だったお知らせ。

小説家になろうで『リープの「お願いです、教えてください！」（投稿編）』を連載中のリープ先生ですが、作者急病のため”昨日は”休載しました。

何とか通常どおり掲載しようと、担当編集者、校閲、デザイナーが、ぎりぎりまで待機して粘ってくれたのですが、やっぱり間に合いませんでした。

「誰目線の文章なんだこれは」と、ご批判もあるかと思いますが、無視して進みます。

一昨日作者宅に届いた「るろうに剣心　追憶編」がＰＳ３に入りっぱなしのところから、観賞した後、切なくなりすぎて寝てしまったものと思われます。

実際に急病理由を本人に尋ねたのですが、「体力の限界」と千代の富士ばりに呟いたあと、布団に寝転んだので、蹴りを入れたところ「きゅう……」と言って気絶のフリを始めました。

こちらサイドとしても全力で布団から起き上がらせますので、なにとぞ暖かい目で、見守りください。

お願いです、本当にお願いです。

この文章を書いている間に続きかけるだろお前、とか思わないでください。

もう作者は寝言のフリして一人ボケツッコミを始めています。

「むにゃむにゃ、もうお腹一杯、たかじんの胸いっぱい」

「なんでやねん」

「そんなわけあるかい」

更新は2~3時間後（多分）
ご飯食べてきます……

9／2　0：09

今回のコメント

・ごはん
・手羽元を煮たもの。
・シュウマイ

以上。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊

いや～、ね。
まだ書き始めていませんけど。

家の用事を済ませて、持ち帰った仕事をこなしてたらこんな時間。
なんだよ！　寝てないだけましだろ！（完全なる開き直り）

あらためて書くことじゃないんだろうけど。
これからは本文以外のコメントがつまんなくなるよ！
（今もつまらんという意見は聞かぬフリ）

余裕なくなるからね！
そんだけ！

んじゃあ、更新は1～2時間後。

9／2　1：34

今回のコメント

・う～む。調べることができると、手がとまりがちになる。
でも今は話を進めることを優先しよう。
調べて詳しく書くのは第二稿以降だ。
だけど……気になってしまう。

ええいっ、余計なことは振り払いたまえっ！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「偉そうな言葉は、自分で逃げられるようになってからにしなさい。最下級生」

　夏休みのプールサイドでのあの対応とはまるで違う、突き放された気持になった。あの時優しくされた事が嘘のようだ。僕は体温が一気に下がるような感覚に襲われた。

「草弥、気持はわかるが、ここは亜也の言うとおりにしてくれ」

　滝川先輩が背中越しに言葉をかける。一瞬背後に目線をそらした後、再び高月先輩と向き合う。元々つり目なので怖そうに見えるのだが、眉間にシワを寄せた表情は余計に怖く思える。

滝川先輩が言うんだから、きっと高月先輩には策があるのだろう。納得行かないけど……僕はしぶしぶ小指を出した。

すると高月先輩が僕の小指に自分の小指を絡めた。本当に指切りをしたかったらしい。小指が触れ合ってる状況に少しだけ、頬が熱くなってきて緊張きた。こんな状況で何考えてんだ、僕は！　という僕を無視するように高月先輩は俯いて呟きだした。

「輪転の誓いにより我の願いに応えよ」

呪文？　な、なにこの厨二的展開は？　高月先輩は恥ずかしげもなく、真剣な表情のまま唱え続ける。

「回顧せよ、想起せよ、顕現せよ！　第六十三期生、御木本孝美っ！」

高月先輩が指切りを離し、手を前に差し出すと光の矢がどこからともなく飛んできた。光の矢は高月先輩の手の平で止まると、その形を現した。日記帳だった。平光先生が行なった事に酷似している。日記帳を開くとページを次々とめくっていく。真ん中辺りで手を止めると、差し出した手とは反対の手で日記帳の上をかざす。

「八月二十五日、僕はお父さんとクレー射撃に出かけた！」

高月先輩が日記本文と思しき文章を読み上げると、日記帳から何かが伸びてきた。日記帳に対して長い鉄の棒のようなものが二本くっついてどんどん姿を現す。鉄の棒に四角い木製の物体がくっついている。やがて僕にもハッキリと理解できた。日記から（なぜだかわからないけど）飛び出してきたのは、銃だった。銃口が二つくっついている、水平二連続銃だった。オリンピックの競技でよく観る

銃だ。

▲銃の詳しい描写（後で調べる）

「さすが、バブル時代のブルジョワ。夏休みに海外でクレー射撃とは！」

滝川先輩が高月先輩に向けて感心している。いや、日記帳に向けてが正しい。日記帳から完全に飛び出した水平二連続銃を手に取ると、高月先輩は崖の上を見つめた。

一緒に僕も崖の上を見ると、クマが僕達を見下ろしている。僕は身構えたが、滝川先輩は僕の肩を掴んだ。

「まぁ、みてろ。亜也が追い払う」

「あの銃でですか？　高月先輩は十八歳以下なのに銃が扱えるんですか？」

「初めてじゃね？」

「無理じゃないですか！」

「でも、御木本孝美ならできるだろう」

滝川先輩は僕に微笑みかけると高月先輩に話しかける。

「使い方は分かるよな？」

▲銃を構える詳細描写。

すると高月先輩は銃口を崖の上に向けて、構える。僕はもちろん素人だけど、銃を構える姿がなんとなく様になっていた。

「日記は読んだから。彼、自慢癖があって色々記述があったから」

高月先輩の指が動くと、轟音が鳴り響く。僕と滝川先輩は慌てて耳をふさいだ。目を瞑って時間をやり過ごすし、再び目を開けて崖の上を見るとクマの姿はなくなっていた。滝川先輩が高月先輩へ近寄っていく。

「あたったのか？」

「少しは。でも、この銃じゃあクマは殺せない。追い払っただけ」

「じゃあ……」

「危機は去ったと考えてもいいと思う」

「はぁ～、よかった」

滝川先輩は高月先輩をねぎらうように何度も肩をたたいた。僕は安堵で腰が抜けて、腰砕けにその場に座った。

んじゃあ、更新は1～2時間後。

9／2　19：44

今回のコメント

・これで50KB。目標の四分の一を過ぎてしまった。（予定は200KB）
　話的には五分の一程度。うむ……MFの規定を超えてしまうかも。SDでも対応できるからまあいいか。（よくない）

・さぁ、台風が近づいてまいりました！
現実逃避しにくい！　ドライブができない！
そうだ！　寝ればいいのか！（違う）

・少しだけ書くのに集中して更新するのを忘れてた……とか言いたい。（願望かよ）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　そのまま僕達は休憩するように座り込んだ。ちなみに僕は最初から座っている。高月先輩は銃を片手に立ったまま辺りを警戒している。滝川先輩は体育座りして俯いていた。
　二人を見ていると最初に抱いていたイメージと全然違うことに気づいた。部室前から覗き見ていた高月先輩は泣いてて、滝川先輩は元気一杯だった。しかし、今はどうだろう。気を張っているのは高月先輩で、元気がないのは滝川先輩だ。
　僕はもちろん滝川先輩側の人間だ。だからと言うわけじゃないが、

僕はゆっくりと滝川先輩に近づいた。俯き加減だった滝川先輩は僕が近づいたことに気づくと、顔をあげてこっちを見た。

「どうした？　もう大丈夫だぞ。後は平光が現れて試験終了の合図をするまで待つだけだ」

声に抑揚があまりなく全体的に低い。本当に疲れているようだった。とは言え、この機を逃すわけにはいかなかった。

ちゃんと説明して欲しい。高月先輩は後で説明すると言ってくれたが、正直近寄りがたい。滝川先輩の方が表面上乱暴だが、ちゃんと答えてくれそうな気がしたのだ。

「折角なのでちゃんと教えてくれますか？　日記部って一体なんなんですか？」

「今ので分からなかったのか？」

「余計分からなくなりました」

すると滝川先輩は僕から視線を外し、遠くを見た。まるで僕に隠し事をするように。

「だから日記に書けるような思い出を作る部だよ」

「何のために？」

「充実した高校生生活を送るためだ」

それだけのためにクマと戦うのかよ。僕は空いた口がふさがらなかった。

崖から落ちたときの肩が痛む。事が落ち着いたからなおさらだ。明日にはもっと痛くなるだろう。僕はなんだか怒りがこみ上げてきて。

「命の危険を冒してまでですか？」
「矢継ぎ早に聞くなぁ……今回だって大丈夫だったろ」

何を暢気な事言っているんだ。自分だって死にかけたのに。僕は真相を徹底追及する記者のような心境になっていた。

「じゃあ、今の現象を説明してください」
「知らん。平光が引き起こしているのは分かるが、私が知っているのはそれぐらいだ。それは亜也も同じだと思うぞ」

誤魔化しているのか、本当に知らないのかよく分からない。でも、滝川先輩の表情は歯を食いしばり、苛立っているようにみえた。

「じゅあ、聞きますけど、平光先生は一体何者なんですか？」
「知らん。でも大昔から高校にいるらしいぞ。年齢不詳だ。平光の力についてもよく分からん」

言い切った後、数秒沈黙した後、僕へと視線を戻した。気持悪いほどの笑顔だった。

「……だが、楽しいだろ？」
「楽しい分けないでしょ！」
「あくまで部活動だ。楽しめよ」

滝川先輩はため息をつきながら、吐き出すように呟いた。まるで自分に言い聞かせるように。苦々しい表情をなんとか整えると滝川先輩は話を続けた。

「本来の目的は過去の先輩達の日記の出来事を追体験することで、充実した高校生活を送ることが目的の部活動だ。大昔は自分達で昔

の料理や遊びなんかを再現するだけだったらしい。平光が現れてから、不思議な体験をする部に変わったようだ。あくまでも日記を読む限りな。だが、クマと戦うなんて滅多にないよ。ここまで死ぬかと思ったのは、四月の新人歓迎テスト以来だ」

「五十人が一度に辞めたっていう事件ですか？」

「まぁな。平光のせいなのに亜也が全部罪を被っちまった」

殲滅日記姫の由来にこんな裏が隠されていたなんて。だけど、確かに逃げたくもなる。これからずっと命の危険をかけながら部活動しなくちゃいけないんだから。僕は自然に俯いていた。

「草弥、お前は……」

僕が顔を上げると、滝川先輩は瞳を細め、心配そうに僕を見ていた。

「明日も来るよな」

「え……」

僕は思わず言葉につまってしまった。滝川先輩へ視線を向けてすぐに、横を向く。

「これからの質問の答え次第です」

僕は下手くそにも話をはぐらかす。滝川先輩はそれ以上、追求することはなかった。自分でも正直わからない。続けるとも言えないし、辞めるとも言い切れないのだ。なんなんだこの気持は。とにかく今はちゃんと事実確認するんだ。そして部をどうするかを決めよう。僕は質問を続けた。

「高月先輩が使った『輪転の誓い』とは一体なんなんですか？」
「それは……」
滝川先輩は言葉につまっていると、僕へ近づく人影。散弾銃を持つ高月先輩だった。
「私が代わりに答えます」
瞳を細めて僕を上から見下ろす。滝川先輩の瞳の細め方とは対照的に冷たい印象を持った。心配していると言うより、節操なく何でも聞いてくる人間を軽蔑しているような、突き放すイメージ。
「平光先生の力同様、日記を具現化する能力です。先生ほどの力はありませんが、一部を現実のものとすることができます。発動条件は異性と指切りをして誓いを立てることです」
「それじゃあ……」
「ええ。アナタが必要だと言ったのは、異性だからです。何を期待したの？」
僕はそれ以上何も言えなくなった。確かに『選ばれた人間』という気持が心の隅になかったわけでもない。他の人間に対する優越感を見透かされたようで、僕は恥ずかしくなったのだ。
「亜也、お前はまだそんなことを……」
滝川先輩は立ち上がり、高月先輩に迫る。だが、高月先輩は表情を変えなかった。
「夕実、これは本音だよ。別に嫌ならそれでいい。私は独りでもやってこれた。これからだって……」

「もう、限界だったろ」
「限界じゃない。私の禊はまだ終わってない」

滝川先輩は高月先輩を見つめたまま、言葉をかけない……かけられないが正確なところか。少しだけ肩を落とし、うな垂れた滝川先輩は、何かに気づいたように僕へと振り返った。

「違うんだ、草弥。ちゃんと理由があるから。今の発言は気にするな」

滝川先輩には申し訳ないけど、気にするだろう。ここまでハッキリ言われて、気にしませんと笑顔で言える奴はきっとただの不感症だ。握った拳に力が入る。

「お前の話は私が沙和から、卒業式でもなかない淡白な男と聞いていてな。それなら日記部の秘密を聞かせても動じないんじゃないかって、亜也も賛成したんだ」

僕が高月先輩を見ると先輩は顔を背けて横を向いてしまった。

「滝川先輩、それは勘違いですよ。僕はそんな豪胆な男ではありません」
「でもお前はまだここにいるじゃないか。春なんか全員が亜也を放っておいて逃げ出したんだぞ」
「それは……」と言いかけて言葉を止めた。言いたかった続きは「高月先輩が腕を引っ張ってくれたから」だったのだが、言ってしまえば、僕も四月の五十人と同じになってしまうからだ。つまらないプライドのために僕は黙ってしまった。

「春は逃げ出す男どもを無視して、亜也は黒ヒョウと戦おうとした

のだからな」
「はぁ、そうなんですか……」
「夕実、余計なことは言わなくていい！」

高月先輩は急に強い口調で滝川先輩に抗議した。
そして、ふとある思いに至る。四月は男どもを無視して立ち向かった。でも、輪転の誓いの力を使うためには誰かを適当に捕まえて、指切りすればいいじゃないか。だけど、それをせずに立ち向かった。

でも、今回は僕の腕を掴んで逃げた。そして輪転の誓いの力を使った。この違いはなんだろう。僕は自然に高月先輩へ視線が向かっていた。

「――っ！？」

高月先輩は僕と目が合った瞬間、また横を向いた。だけどさっきとは違う。明らかに頬が赤くなっていたのだ。さらに意味なく前髪をいじりだした。これって……

「は～い、小テスト終了～っ！」

頭上から平光先生の声が響き渡る。まばゆい光が辺りを包んだので僕は目を瞑り、腕ででも光を遮った。しばらくして眼開くと、辺りは日記部の部室に戻っていた。
目の前に立っていた平光先生が、着物姿の袖を振りながら、笑顔で僕達へ話しかける。
「どう？　楽しい青春の一ページは過ごせたかしら～？」

僕と滝川先輩が絶句する中、高月先輩は平光先生に対抗するように笑顔で応える。すでに手には散弾銃はなかった。

「ええ。お陰さまで、楽しかったです」
「そうね、美国君の力を使えた喜びでたまらないってところかしら～？」
「なんのことですか？」
高月先輩の口の端が僅かにゆがむ。さらに眉間にシワを寄せ平光先生を睨んだ。美国？　誰だろう。学校の人だろうか。僕の疑問を吹き飛ばす一言を平光先生は続けた。
「あらあら。好きな人の名前を、もう忘れちゃったの？」
頭を何かで打ち抜かれたような、衝撃が僕を襲う。思わず足がよろめいて倒れそうになった。『高月先輩の好きな人』あぁ……やっぱりいたんだ。そうだよな。夏のプールサイドでも『アナタは二番目』って言ってたし。わかってはいたものの、他人からその事実を聞かされると絶望的な気持になる。決定的な事実を突きつけられて、ちょっと涙目。
一方、高月先輩と平光先生のやりとりは続いていた。
「アナタには関係ないし、テストも合格してみせる」
「そう。でも、合格かどうかを決めるのはアナタ自身だからねぇ」
平光先生は僕を見て笑いかけた。着物姿の先生はしゃなりしゃなりと着なれた様子で僕へ近づいてくる。数十センチまで近づき、僕の頬を両手で挟んで、平光先生の顔と向かい合わせる。ち、近い。挟んだ手は妙に冷たく、残暑厳しい室内にはうってつけだった。
「ようこそ。日記部へ。ここは高校生活をバラ色の思い出で包み込

む楽園よ」
「は、はい……」

平光先生の黒い瞳の奥には何も映っていない。まるで底なし沼の中に引き釣りこまれるような感覚に陥った。挟んだ手が先生へと引っ張られて、僕はそのまま近づいてしまう。あぁ、このままキ――

「はい、そこまで。生徒を誘惑しないでくれますか？」

僕の目の前に手の平が伸びてくる。平光先生の瞳を遮るように入ったので、僕は我に返った。手の平を差し出したのは高月先輩だった。

「ふふふ。久しぶりの男子だったからついサービスしちゃった♪
今日の部活動はここまで。んじゃあね～」

くるくると袖を広げながら二回転ほどして後退すると、平光先生は扉を開けて出て行った。着物姿であの動きが簡単にできてしまうなんて、一体何者なんだろう。それ以前に一杯疑問があるけど。

「じゃあ、私達も帰りますか」

滝川先輩の声が後ろから聞こえる。部室の窓から外をみると、外はすっかり飴色に染まっていた。時間が経つのは早い。

「私はもう少し復習するから」

高月先輩は机においてあるハードカバーの日記帳を手に取ると、椅子に座って読み始めた。滝川先輩はため息をつくと机を挟んで反対側の椅子に座って、天井を見上げた。どうやら一緒に付き合うら

しい。さて。僕はどうしよう。

今日は色々ありすぎた。とにかく家に帰ってベッドで眠りたい気分だった。僕は壁際に置いた鞄を取りに歩きだした。

「おい、草弥。明日も来るよな？」

滝川先輩の声に僕は立ち止まる。少し震えるような、心配した声。即答できなかった。自然に僕の視線は高月先輩を見ていた。高月先輩は日記に視線を落としたまま、こちらを見ない。まるで「もうお前には用がない」と言わんばかりだ。

『行くよ』

四月とは違い、手を引っ張って僕を助けてくれた先輩。

『アナタが必要だと言ったのは、異性だからです。何を期待したの？』

冷たく突き放そうとする先輩。しかも、好きな人がいるらしい。なんだか頭が混乱する。だけど気になることは確かだった。

「滝川先輩」

「お。おう。なんだ」

「明日も放課後に部室へ来ればいいですかね？」

なんとなく勢いで承諾してしまった。高月先輩に必要だと言わせたいし、馬鹿にされたまま終わりたくない。反面、今日みたいなことが続くのもゴメンだ。

だから出した結論。とりあえず続けてみる。いかにも先送り民族、日本人らしい結論。ある意味美徳。反面、決定力不足。いいんだ、

とりあえずはそれで。一日で判断つけるなんてもったいない。

「おっ……おう！　頼んだぞ！」

滝川先輩の力の入った楽しそうな声が聞こえる。僕は再び歩き出すと自分の鞄を手に持ち、扉へ向かう。これでいいのだ、と自分に言い聞かせながら。

僕は部室を出て閉めようとした。ドアの隙間から覗く高月先輩。相変らず日記に目を通している。でも、気のせいか口許が「お疲れさま」と動いたような気がした。

扉はゆっくり閉められる。こうして僕の日記部一日目が終わろうとしていた。

更新は2～3時間後。
ご飯食べてきます！

9／3　0：10

今回のコメント

・今日の夕飯
焼きそば。（目玉焼き付き）
もやしの炒め物。

以上。（少なっ）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊

新校舎から渡り廊下を渡ると旧校舎へ繋がる。旧校舎の二階三階は文化系クラブが活発に活動を行なう、思い出製造場となっている。僕はさらに昇って四階へたどり着く。

僅かに階下の音が聞こえるけど、静かなことの場所はさしずめ時が止まった場所である。僕は小さくため息をつくと四階の奥にある日記部の部室へたどり着く。木製の両扉のドアノブを掴むと、少し気合を入れて僕は扉を開いた。

夕焼けに照らされて高月先輩はいつもの椅子に座っている。今日も日記帳を開き、試験勉強と称して読みふけっていた。扉が開いたときに一瞬だけこちらをうかがうが、すぐに日記帳へ視線をおろす。僕は机に近づき、鞄を置いた。少し離れた席を引いて僕は座る。滝川先輩が来るのを所作なさげに待つ。ここ一ヶ月はこのパターンがほとんどだ。

クマに殺されかけて一ヶ月が経つ。あの時保留した結論は今だに保留のままだ。ゆえに今日もここへ通っている。

それにしても高月先輩と二人きりは緊張する。まず会話がない。これは高月先輩が日記帳を読んでいるせいなのだが、先輩は読書をしているので気にしていない様子だけど、僕は静かな間が気になって仕方がない。

横目で高月先輩をうかがう。少し屈んで読んでいるために肩にかかっていた髪の毛がさらりと下りる。黒く長い艶のある髪の毛が日記帳の前に落ちると、自然な動きで髪の毛をかきあげた。僕はこの仕草がすごく好きだ。髪の毛を束ねれば、書き上げる姿は拝めないのだけど、高月先輩はそれをしない。

厚い唇を一文字に閉じて真剣な面持ちで日記帳を読む姿と髪をかきあげる色っぽさが、僕を魅了した。今日に限っては見すぎたようである。髪をかきあげた高月先輩の瞳が僅かに動き、僕と視線がぶつかった。

「なに？」

「いえ、なんでもないです！」

僕は全力で首を左右に振った。全力で振りすぎて首が変な音を立てた。僕は思わず首を押さえて机に肘をついて痛みに耐えた。高月先輩はその姿をしばらく見つめていたが、やがて我慢できなくなったのか、肩を震わせて笑い出した。

「あはは」

「笑わないでくださいよ」

「だって、そんなに首を振らなくても。あはは、ホント、君って変だよね」

何も言えず「えへへ」と誤魔化すしかなかった。しかし、これはチャンスだ。今までの沈黙の分を取り戻そう。僕は勇気を出して話を続けることにした。

「今日も試験勉強ですか？」

すると高月先輩は目を丸くして、下を向いて日記帳を閉じて、僕に本を見せる。

「これのこと？」

僕が頷くと高月先輩は瞳を優しく細めた。オレンジ色に染まった秋の空の光が、高月先輩の黒い髪の毛を茶色に染める。

「そうだね。今読んでるのは第五十九期生の天野つばさの日記だよ。この人は別名冒険王って言われてね。三年間で陸海空色々な場所でさまざまな経験をした人だよ」

「天野つばさって……夏のイベントのサメに囲まれて絶体絶命の人ですよね」

「あはは。よく覚えてるね」

「いや、死にかけましたから」

後で聞かされたのだが夏のイベントでの出来事も平光先生の力で、仕掛けられたものだった。僕は知らずに巻き込まれ、高月先輩に救われたのだ。

「あの時は本当にごめんね」

「えっ……」

高月先輩は片手で拝むように僕に謝る。なんだか今日は雰囲気が軽い。

更新は1～2時間後。

9／3　17：36

今回のコメント
・前回の部分にちょっと追加。
・前半のクライマックスに向けて前進前進！
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「今日も試験勉強ですか？」

　すると高月先輩は目を丸くして、下を向いて日記帳を閉じて、僕に本を見せる。

「これのこと？」

　僕が頷くと高月先輩は瞳を優しく細めた。オレンジ色に染まった秋の空の光が、高月先輩の黒い髪の毛を茶色に染める。

「そうだね。今読んでるのは第五十九期生の天野つばさの日記だよ。この人は別名冒険王って言われてたね。三年間で陸海空色々な場所でさまざまな経験をした人だよ」

　日記帳を掲げて僕に説明を加える。高月先輩の瞳はキラキラしていた。試験勉強ってだけじゃなくて本当に日記を読むことが好きなようだ。

「この人は感情表現だけじゃなくて、情景描写が上手いし、感覚表現も的確。読んでいると臨場感があるの。日記と言うよりはすでに出版物の領域ってぐらいにね」
「なるほど。僕も見習いたいですね」

僕はごく普通の返事をしたつもりだった。だけど、高月先輩はさっきまでの上機嫌とはうって変わって口を歪ませた。

「あなたのは……小学生の日記だね」
「小学生……」
「『〇〇でした。嬉しかったです。〇〇でした。大変だったです』って文章ばっかり続くんだから」

一応日記部の部活動として、表向きは部員は毎日日記を書くことになっている。書いた日記は最後に部長へ提出するのだが、返ってきた日記には部長のコメントとして『もう少し文章を勉強しよう』と書かれてあった。僕は笑って誤魔化すしかなかった。

「まぁ、素朴で悪くはないんだけどね」

明らかにフォローのつもりの慰めに僕はいたたまれない気持になり、話題を変えようとした。

「それにしても天野つばさって……夏のイベントのサメに囲まれて絶体絶命にさせられた人の日記ですよね」
「あはは。よく覚えてるね」
「いや、死にかけましたから」

後で聞かされたのだが夏のイベントでの出来事も平光先生の力で、仕掛けられたものだった。僕は知らずに巻き込まれ、高月先輩に救

われたのだ。

「あの時は本当にごめんね」

「えっ……」

高月先輩は片手で拝むように僕に謝る。なんだか今日は雰囲気が軽い。僕がどうしていいか分からないでいると、高月先輩は困ったように前髪をいじりだした。

「あの、一度謝っておきたかっただけだから」

「そうなんですか」

僕は上手な返事の仕方が分からず、ぶっきらぼうな返答しかできない自分が情けなかった。普段、突き放したり冷たい目つきで見られたりするので、急に親しい態度を見せられると調子が狂うのだ。

何とか話題を変えようと僕は辺りを見渡した。すると手に持っている日記帳とは別にもう一冊の日記帳が机に置かれていた。

「手に持っているのは天野つばさの日記と言うのは分かりました。もう一冊置かれている日記は誰なんですか?」

僕の言葉に高月先輩は一瞬肩を震わせた。さらに動きを止め、視線が落ちていく。

「これは……」と言ったまま言葉を詰まらせた。僕は言ってしまったことを後悔する。

「高月先輩。言いたくなかったら別に」

「そんなんじゃないよ。私の前の部長だから」

「高月先輩の先代ですか」

「うん。美国歩（みくにすすむ）っていうの」

その名前には聞き覚えがあった。初日、小テストが終わった後で、平光先生が言った名前だ。高月先輩が好きだった人の名前。どうやら僕は完全に地雷を踏んだらしい。

次の更新は1～2時間後（これ書く意味あるのだろうか……）

9／3　19：16

今回のコメント

・どうでもいいこと。
「置くと」と入力して変換すると「奥戸」になった。
オクトパスの影響恐るべし。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「うん。美国歩（みくにすすむ）っていうの」

その名前には聞き覚えがあった。初日、小テストが終わった後で、平光先生が言った名前だ。高月先輩が好きだった人の名前。どうやら僕は完全に地雷を踏んだらしい。
高月先輩は天野つばさの日記帳を机に置くと、美国進の日記帳を手に取った。

「この人の日記は……そうだね」

手に取った日記帳を胸の前で抱きしめるように包み込んだ。愛おしそうに日記帳を見つめるように俯くと長い睫毛（まつげ）で瞳が隠れた。

「私にとても影響を与えてくれている。大切な日記帳だよ」

大切な日記帳といいながら、その実、美国進を大切だと言ってい

るに等しい。僕は居心地の悪さを感じた。これは嫉妬なのか、他にも感情があるのかよくわからない。でも心の中がざわつくのを感じた。もう話を切り上げようと思っているのに口から出た言葉は……

「どんな内容なんですか？」などと言っている。すると高月先輩は僕を見ることなく答えた。僕を見て話さないなんて、今までと変わらないのだけれど、妙に鼻につく。

「内容は君に似ているかな」

「え？」それって僕にも可能性が……

「単純で文章も稚拙で……でも、気持は伝わってくるの」

「そうですか……」

まったくもって納得行かない。僕に対する評価は「素朴で悪くない」なのに美国進に関しては「気持が伝わってくる」らしい。そんなの単なる主観じゃないか。

と、ここまで考えて僕は愕然とする。僕は一体、高月先輩の何気取りなんだろう。

この一ヶ月、高月先輩と滝川先輩でさまざまな体験をした。毎回高月先輩と指切りをしてピンチを脱出するパターンを繰り返しているので、自分の中で高月先輩に対する独占欲が芽生えているのかもしれない。好きだからだろうか。少し違う気がする。

僕と高月先輩の会話が途切れた瞬間、扉が蹴破られる音がした。

「おい～す！」

現れたのはもちろん滝川先輩だった。僕は救世主が現れたことを心から喜んだ。

「滝川先輩～！」

嬉しくなって駆け寄ると滝川先輩は僕に背を向けた。「！？」僕が戸惑った瞬間、回った方向から何かが飛び出してくる。見えないっ！　そのままわき腹に突き刺さったのは滝川先輩の踵だった。僕は息ができなくなり、うずくまりながら、技の名を呟く。

「後ろ……回し蹴り」

「お前は飼い主に嬉ションしながら近づく犬か」

「ぐふっ」とか悪者の名文句を言いながら僕は倒れた。倒れながら高月先輩が視界に入る。口許を引きつらせて僕を見ていた。情けないながらも日記から目を離したぜ……カッコ悪。すぐに滝川先輩が近づいて僕の耳元へ話しかけた。

「もうちょっと女の子との会話を楽しもうって気はないのか」

「へ？　もしかして高月先輩とのやりとりを……」

すると滝川先輩は僕の頭にチョップを振り落とした。

「当たり前だ馬鹿。初日のことを忘れたか。折角チャンスをあげてやったのに」

そういえば、入室することを嫌がった僕を無理やり……あの時も確か中の様子をうかがっていたっけ。

「すいません」

僕はなぜか謝っていた。滝川先輩は「よし」と言って、定位置である高月先輩と机を挟んで反対側の席に座った。僕も立ち上がると、

高月先輩と二つ離れた定位置に座った。

「さて、今日はどの日記から出題されるかな」

滝川先輩は本棚から適当に日記帳を取り出してパラパラとめくりだした。僕は嫌なことを思い出してため息をついた。

「はぁー。もう嫌ですよ。昨日のアレは」

「アレ？」

「漫才ですよ」

「阪田利行（さかたとしゆき）の日記か」

昨日、飛ばされた日記の世界は第六十九期生阪田利行のものだった。別名爆笑王とよばれた生徒で大阪の某劇場にも素人大会か何かで出場した経歴がある。つまり、昨日の小テストはお笑いの劇場に三人が立たされて、トリオ漫才をさせられたのだ。

大阪の某劇場で出番待ちから出演まで緊張の連続だった。「輪転の誓い」によって呼び出されたのは、第四十四期生の元祖爆笑王、横山欽一（よこやまきんいち）のハリセンだった。横山欽一は学園祭等で活躍した生徒らしい。使用するのはハリセンでトリオ漫才を得意とした。

とにかく高月先輩が僕にハリセンを食らわせるという、ビックリするぐらいの昔ながらのコントだった。中高生が見たなら決して笑わないところだが、そこは大阪の某劇場。客の殆どがおばちゃんということもあり、大爆笑だった。

滝川先輩の前フリ。

「お前、草弥っていうんだろ？　『くさや』だって、干物かお前は」

「あぁ、もうそれさんざん中学生時代からかわれましたから」

「どうりで君、臭いと思ったわ」
「干物を馬鹿にするなっ！」とボケる僕。
「自分をフォローしないさい！」とツッコむ高月先輩。

ツッコミが合図となり高月先輩が舞台端へ向かい、僕は滝川先輩に連れられて反対の舞台端へ。「せ～の」の掛け声と共に滝川先輩に押された僕はハリセンを持った高月先輩へまっしぐら。派手な音を立てて僕は首筋に強烈な一撃を食らわされて、派手に倒れるのだった。そしておばちゃん大爆笑。えっと……なにが面白いんですか？

ちなみに輪転の誓いを発動した時の高月先輩の言葉「私は分かりやすいお笑いを届けるのである。たとえそれが馬鹿にされ、廃れていったとしても！」だった。女子高校生が真剣に叫ぶ言葉ではない。

「あれは久しぶりに面白かったな」
「僕はとんだ笑いものですよ」
「いいじゃないか。昨日は役にたったんだから」

僕は言葉に詰まってしまった。

次の更新は1～2時間後（これ書く意味あるのだろうか……）

9／3　21：25

今回のコメント

・それにしても今回の台風は長いなぁ。
丸い一日は強風で終わってしまった。
休みが台無しだよ。（特に外出する予定がない男より）
床屋は昨日行ったし、新しい鞄も買ったし。もう出かけなくていいや。

たけどドライブには行きたい。
もうそろそろ限か……

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「あれは久しぶりに面白かったな」
「僕はとんだ笑いものですよ」
「いいじゃないか。昨日は役にたったんだから」

僕は言葉に詰まってしまった。確かに昨日はたまたま役にたった例だった。
基本的には初日のように僕は逃げ回り、高月先輩に捕まり、指切りさせられて事件解決というパターンが常だった。
校内暴力を止めた第五十七期生仲裁女王、大沢（おおさわ）ユミの時。
野犬に囲まれて絶体絶命の第五十九期生冒険王、天野つばさの時。

暴走族と自転車で対決した第五十二期生競輪トンキホーテ、中野幸次郎の時。

地味なところでは父親の決めた進路に反対する家族会議の女装王子、多野松雄なんてのもあった。

最後は「輪転の誓い」で別の卒業生の思い出を利用して解決に導いた。僕はただ指切りをしただけで、何もしていない。

▲この辺りのエピソードをちゃんと入れるかどうかは完成後の尺と相談。

僕はこの一ヶ月を思い出すと自然に俯いてしまう。滝川先輩はけらけら笑って、高月先輩は日記に没頭している。こんなので楽しい思い出が作れるのだろうか。情けない思い出ばかり増えているような気がする。

「じゃんじゃじゃ〜ん！　お待たせ！　楽しい部活動の時間よん」

僕らが一斉に着物姿の平光先生を見た瞬間には、すでに彼女の前には日記があり、ページが開かれていた。僕らは何も準備をすることなく光に包まれた。何とか目を瞑り腕で光を遮る。

しばらくして光がなくなってくると、なにやら野太い大声が聞こえてきた。

「おいっ、早く金を積みやがれ！」

ここは銀行の構内のようだ。そして数メートル先にいるのは目だし帽にサングラスをかけて手に持っているのは大きな鞄と……拳銃？　これって――

次の瞬間、服の袖を強く引っ張られ僕は強制的にしゃがみ込まされた。隣を見ると高月先輩が腕をつかみ、ぐいぐいと引っ張っていく。僕はわけの分からないままついていく。数メートル進んだところで、目だし帽の男の死角に当たるソファーの裏側で止まった。

「ついに来たわね」
「いつか来ると思ってたぞ」

高月先輩と滝川先輩が顔を見合わせて頷く。一応滝川先輩に確認を取ってみる。

「これも誰かの日記なんですか？」
「見れば分かるだろう。しかも最大級の奴だ」

滝川先輩は親指を口許に当てて、正面を睨んでいる。かなりイラついているようだ。今度は高月先輩が滝川先輩に「落ち着いて」と話しかける。

「この日記のエピソードは序の口のはずだよ」
「だが……」
「何のことかサッパリ」

すると、声を押し殺しながら、滝川先輩は僕にデコピンをかます。い、痛いっ！

「ちゃんと日記ぐらいよめ。第七十六期生、不幸の大魔王　野須虎男（のすとらお）だ」
「野須虎男？　そんなに不幸なんですか？」

僕はおでこをさすりながら涙目で答えた。すると滝川先輩がソファー越しに目だし帽の男をうかがう。

「三年間のあいだで小さな不幸なら数知れず、命の危険に晒されること数十回、犯罪に巻き込まれること十二回だ」

「いいっ？！　じゃあ、これも……」

「ああ。十二月二十六日の日記。『僕の銀行強盗立てこもり事件簿』だ」

なに二時間ドラマみたいな名前つけてんだ。それともお遊びにしないとやってられないって感じなのか。

あらためて辺りを見渡す。カウンターの前には四十代ぐらいの男が銃を持って銀行員に何か指示している。お客さんもそのままで、犯人の指示なのか出入り口はシャッターが閉められている。しかし、ブラインドの隙間から赤色灯の光が漏れているところを見ると、捕まるのも時間の問題なのかもしれない。

だけどそれまでに僕達に危害を加えられたら。僕の足は自然に震えていた。クマやサメならまだまだしだ。今度は人間が相手。脅しだけでは通じないかもしれない。先手必勝しかない。僕は高月先輩に小指を差し出した。

「『輪転の誓い』でさっさと片付けましょう」

高月先輩は差し出された僕の小指を見つめ、目を閉じた。

「まだダメ。いい日記が思い浮かばないから」

「そんなのバブル王御木本孝雄の散弾銃でやればいいじゃないですか」

すると高月先輩は瞳を開けて、僕を見つめたまま動かなくなった。頬に僅かなシワが入る。歯を食いしばっているのだろうか。さっきから僕を見つめると言うより睨まれているに近い気がする。怯むわけには行かない。たまには僕だって提案して役にたちたいんだ。

「早くしないと、やられちゃいますよ」

「君ね……」

高月先輩は手櫛で自分の頭を何度も頭をなでた。俯いた顔からは、歯を食いしばっている口しかうかがえない。もしかして本当に苛立っているのか？

深く息を吐き出すと、高月先輩は顔を上げ、僕の襟首を掴んだ。

「争うしかアナタは考えがないの？」

「えっ？」

高月先輩の顔が近づく。でも、いつものようにドキドキしない。先輩は眉を逆八の字にして、瞳は潤み、口は一文字になっていた。一文字に下唇は微妙に震えている。僕は呼吸ができなくなって、顔を引いてしまった。

僕が顔を引いた瞬間、襟首を掴んだ高月先輩の力もなくなり、解放された。

「もういい。小指を出して」

「じゃあ、やっぱり」

「散弾銃は出さない。別の策を思いついたの」

差し出した小指に高月先輩の小指が絡みつく。やはり僕は興奮することはなかった。

「輪転の誓いにより、我願いに答えよ」

相変らずの厨二表現。誰を呼び出すつもりなんだと状況を見つめる。

「回顧せよ、想起せよ、顕現せよ！　第五十七期生、大沢ユミ」

高月先輩が選択したのは仲裁女王と呼ばれる第五十七期生大沢ユミの日記だった。どこからともなく飛んできた日記帳が開かれ、やがてヒモのような小さな円形の物体が日記上から現れる。これは以前見覚えがあった。黒に小さい鈴がついたチョーカーだった。

次の更新は1～2時間後（これ書く意味あるのだろうか……）

9／3　23：11

今回のコメント

・六時間連続で書くなんて楽勝！　とか言う人ならいいけど、僕は違うので、限界です。
逃げたい！　逃げたい！　逃げたい！（だったら書くなよ）
でも、続きも書きたい！　だけど集中力が続かない！
ドライブに行くしかない！

・どうでもいいこと
「先輩」って打ち込もうとすると「線パイン」って変換される。
なんだよ「線パイン」って！
笑って、続きが書けないじゃん！

****

チョーカーを手に取ると高月先輩は自らの首につけ始めた。僕は空いた口がふさがらなかった。

「まさか、犯人を説得するつもりですか？」

高月先輩は僕を見ずに俯いて、金具を止めている。つけなれてないせいか苦戦しているようだ。すると滝川先輩が代わって高月先輩にチョーカーを装着する。

「草弥君。ご心配なく」

高月先輩が僕を見つめて笑いかけた。どこからくるんだその自信は。滝川先輩が背中をぽんと叩くと、高月先輩は立ち上がり、歩き出していた。

ソファー裏で僕は俯いていた。もやもやした気持が晴れない。自分の方が正しいと言う気持ちと、先輩があんなにも笑顔で歩いていったことが腑に落ちないのだ。滝川先輩は僕の隣へ座りなおすと、僕を見ず、吐き捨てるように言った。

「馬鹿が。アイツ、手が震えてチョーカーが付けれれなかったんだ」

「っ！？」僕が慌てて立ち上がろうとすると、滝川先輩が肩を抑えた。

「今はとにかく見守るしかない」

「でもっ」

「大沢ユミは校内暴力が流行った時代で輪転高校の勢力争いをコントロールしたっていう仲裁女王だ。ネゴシエーターとしても有能なはずだ。お前みたいな単純真っ直ぐ君よりましだ」

肩を掴む滝川先輩の手の力が段々強くなってくる。痛みが走るほどだ。私だって行きたいところを堪えてるんだという気持が伝わってきた。僕は観念して座りこんだ。そして力なく滝川先輩に言葉をかけた。

「高月先輩、本当は怖いはずなのに僕に笑いかけたんですよ」

「ちっ、美国の真似かよ」

再び滝川先輩は親指を口許に当てて、俯いた。

「アイツも昔、美国進が無茶する時に笑いかけられたんだよ。美国

が言うには『先輩の意地』らしいぜ」

美国進……また出てきた。僕の胸が締め付けられる。自然に拳を固く握ってしまう。気がつけば歯を食いしばっていた。頭がキュッと力が入り緊張する。

「なんだテメエは！」

構内に響く男の声。僕と滝川先輩は銀行強盗がよく見える場所へ移動した。カウンターで高月先輩は銀行強盗と対峙していた。犯人と対照的に落ち着いた口調で話す高月先輩。声が小さくて聞こえない。

初めのうちは声を荒げて受け応えし、時折銃口を向けるが、やがて犯人と高月先輩は普通に言葉を交わすようになっていた。

「さすがは大沢ユミ。揉め事ならなんでもござれだな」

滝川先輩が感心している横で僕は不満を募らせていた。自分の選択肢だって間違っていないはずだ。上手く行けばもっと早く解決できるじゃないか。

それから三十分以上経った。相変らず犯人と高月先輩は会話を続けている。犯人はカウンターに肘かけたりして、すっかりリラックスしている。誰かが背後から回って押さえつければ、犯人を逮捕できるんじゃないか、そんな気にさせた。

▲ネゴシエーターの実例を後で調べる。

さらに二十分ほど経過した時、動きを見せた。犯人が再び拳銃を握りなおし、高月先輩に向けたのだ。先輩は両手を上げ、入り口へ

と歩きだした。

「滝川先輩、やばいんじゃないですか？」
「うーん、分からん」
「そんな無責任な」
「助けに行ったところで、犯人を逆上させるだけじゃないか」

意外に冷静な滝川先輩に僕は腹が立ってきた。立ち上がり、走ってぶつかれば、高月先輩が助けられると思った瞬間、滝川先輩が頭を抑えた。

「まぁ、見てろ。美国先輩もアレぐらいの危機は体験済みだ。きっと亜也もやってくれる」
「そんなので信じられるんですか！？」
「信じられるね。お前は信じられないのか？」
「うぐっ……」滝川先輩の言葉に答えることができない。きっと僕は信じてないのかもしれない。

出入り口のシャッターが開けられると、犯人と高月先輩は外へ出て行った。警察が周りを固める中、犯人はゆっくりと地面に拳銃を置いた。数人の警官が犯人を囲み、高月先輩は解放された。立てこもった銀行強盗の最後としては穏やかなものだった。

「一人で出て行ったら射殺されていたかもな」

滝川先輩は警官達が無駄な動きで犯人を取り押さえる姿を眺めながら呟いた。僕は高月先輩のネゴシエーションが成功したのだと確信した。と、同時に嫉妬に似た気持ちが沸きだす。自分を完全否定された気持になったのだ。誰かに認めて欲しい。

「滝川先輩、僕は間違っていたんでしょうか？」

僕は滝川先輩に助けを求めた。隣にいる先輩は小さく首を捻る。

「さぁな。私は正解の一つだと思うぞ。ただ、拳銃を持つ相手に散弾銃を見せたらどうなるか、わかるだろ」

「……はい」きっと戦闘状態になるだろう。それでも勝算はあった。日本において拳銃の扱いに慣れている人間なんて一握りだ。それに対してこっちは銃の扱いに慣れてる。

滝川先輩は首を振って、僕の言うことを聞いてはくれなかった。

「犯人の興奮状態がさらに悪化して錯乱状態になってしまうかもしれない。そうなれば、周りの人の命にも関わる」

「そんな……だって、これは日記の再現でしょ？」

すると滝川先輩は手を伸ばして、僕の頬をつねる。いたたたた、痛いっ！

「ここで間違った選択をすれば現実にも影響するんだ。よく覚えておけ」

「ほんなのひいてないれふ（そんなの聞いてないですよ）」

「ちゃんと説明しておくべきだったな。だから慎重に行くんだ」

言うの忘れた、すまんすまん、といって滝川先輩は手を放してくれた。僕は頬を何度もさすった。今日はおでこや頬をさすってばかりだ。

「それに草弥」

「はい？」

「お前さっき、間違っていたんでしょうかって聞いたよな」

「はい」
「もし亜也に正解不正解を求めているとすれば、それは間違いだ」
滝川先輩は真剣な表情で僕を見つめていた。だけど意味は分からなかった。行動するのは高月先輩で事件を解決するのも先輩じゃないか。
「それにもう少しお前も他の先輩の日記を読め。インプットもないのに簡単に良いアイデアが浮かぶわけないだろ。先人の体験を馬鹿にするなよ。美国進は少なくとも全員分の日記を読破してたぞ」
また、美国進だ。見たこともない人物と比べられる気持は「掴みどころがない」の一点だった。反論することもできないし、彼女達の思い出と比べられたら、僕に分がないに決まっている。美化された過去と現実を比べるなよ。あまり物事にこだわらない性質(たち)だけど、しつこいと気になってしまう。
会話が一段落したところで、光が僕達を包んだ。どうやら今日の小テストが終わったらしい。光が晴れるといつもの部室になっていた。
疲れ顔の僕達に対して平光先生は嬉しそうに着物の袖を掴んで腕を上下させている。
「今日もお疲れさまでした〜。最後に発表で〜す。に来週中間テストがありま〜す」
「中間テストですか？」
「そうか、草っちは初めてだったね」
いつの間にかあだ名がついている。平光先生は僕の表情の変化にまったく気づかない様子で話を進めている。

「小テストと対して変わらないよ。君達にとってはね」

笑いながら高月先輩へと視線を向ける平光先生。目が合った瞬間、高月先輩は横を向いた。

果たしてこんな気持を抱えたまま、僕は中間テストとやらを迎えるのだろうか。少し不安になった。

平光先生が帰った後、各々が日記を書いて部活が終了した。僕は隠れていただけなのでたいして書くことはない。相変らずの小学生風の日記だ。だけど、僕は溜まらず、日記帳の最後に書いてしまった。

「僕の案は間違いですか?」と。

次の更新は2〜3時間後（やる気でろ〜）

９／４　３：２０

今回のコメント

・ドライブ行って、スーパーよって、日常見てたらこの時間。
どうもリープです。
こんな日でもスーパーにはそこそこ人がいる。この暇人がっ！（お前もだろ）
今日はまだ寝てません。でも寝たいな～って思ってます。（寝オチ前フリ）

さて、今回はネタつぶしとして、「小説形態素解析」というページで「トロフィー」の解析をしてみました。
これは最大２５０００文字程度の文章をサイト上に貼り付け、貼り付けた文章の解析をしてもらうっていうものです。
それこそ地の分と会話文の比率だとか、平均的な文章の長さ、品詞べつの比率なんかも分かっちゃいます。
まぁ、お暇なかたは遊び程度でやってみてください。
以下は解析結果なのですが、最後のコメントだけ載せることにします。
なかなかいい分析だと思いますよ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

やや地の文が多めの文体となっています。

やや漢字の比率が高めのようです。
短めの文章が続く、テンポの良い文体のようです。
文体やテンポにもよりますが、平均と比べやや副詞が少ないようです。
指示語の多用は見られません。
接続詞が多すぎず少なすぎず、うまく挿入されています。
ところどころに体言止めが使われています。
連用中止法の使用頻度は平均の範囲内です。
若干説明寄り・要約寄りな文章展開のようです。具体的には、自立語における名詞の比率がやや高いようです。
物事を形容する言葉より、動きの描写が多いようです。

以上です。
うん、まあまああってる。
会話分はしぼってあるし、テンポ良くは狙い通り。
副詞が少ないと言われてそれのどこが悪いのかよく分かりませんｗｗ
確かに物事を形容する文章は少ない。
動きの描写が多いのは第一稿で、話の進み具合を優先させているからなんですがね。
まぁ、いいや。

つーことで。
暇つぶし終わり。

次の更新は2～3時間後（やる気でろ～、やる気でろ～）

9／4　18：59

今回のコメント
・やる気がでなかったから、寝てしまいました。（開き直り）
・でも今は戻ってますよ～
今日はどれぐらい進むかなぁ。
目標はあるんだけど、微妙なところ。
話の進み具体としては前半部の中ごろぐらい。（全然進んでいない）
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

銀行強盗の小テストが終わった次の日。僕はいつものように授業をこなす。

「ここまではテスト範囲に入るから覚えておくように」

先生の声に皆が反応してノートにメモしていく。現実世界でも中間テストの季節になっていた。僕もテスト範囲をノートの端にメモる。勉強はあまり得意ではない。得意な奴の方が少ないと思うが。学生の多くが、退屈な授業で学生生活の殆どを過ごす。だから、この時間を充実できれば、とても有意義だと思うのだが、解決方法は今だ見つからない。

授業が全て終わり、僕がいつものように変える準備をしていると、

沙和が駆け寄ってくる。沙和がここへ来た理由も分かっている。二学期に入って毎日のことだから。

「甲斐斗、今日も部活に行くの？」

「行くけど」

これは日記部に入部してから毎日続く会話だ。

入部した次の日。

僕の周りには大勢の男どもが集まってきた。まるで悲しみを分かち合おうと言わんばかりに。しかし、僕が日記部に正式入部したことを知ると、「死ぬなよ」と言って去っていった男半数。「ま、マゾ」と言葉を残していくもの四割、無言で拝んでいった奴一割だった。

ただ、彼等は実際自分達がどんな境遇にあったか、覚えていないらしい。滝川先輩が言うには、平光先生の力で「怖かった」という印象だけが残っている状態だという。

すぐに男どもは去っていったのだが、沙和だけは違った。僕の席の前で仁王立ちだ。

「どうして？　今まで部活なんて嫌だって言ってたじゃない」

「そうだっけ？　先輩もいい人だし、やってもいいかな？　って思ったんだよ」

すると沙和は少しかがんで、僕に視線を合わせる。睨むように僕を見る。

「高月先輩が目当てなの？」

「はぁ？　ななな、何言ってんだよ」
「だって、高月先輩は私でもついつい見とれちゃうときがあるし……」

沙和、滝川先輩も仲間に入れてあげてね。ただ、僕としては高月先輩だけを日記部を続ける理由にして欲しくなかった。

「それだけじゃねえよ」
「『それだけ』？　じゃあ、高月先輩も理由にあるんだ」

なぜ高月先輩に食いつくんだよ。面倒くさいなぁ。こうなったら開き直ってやる。

「わかった。わかった。高月先輩は綺麗だしな。そりゃ通いたくもなるよ」
「ふうん。そうなんだ……」

沙和は僕から視線を外し、俯いた。だから、なんで落ち込む。お前の言うとおりにしてやったのに。ホント、よく分からないなぁ。

「だから、それが全てじゃないって言ってるだろ」
「だよね！　本当は別の理由があるんだよね！　あるはずだ！」
「急にテンション上げられても。だから他にも理由があるって言っただろ」
「それはなに？」
「言えない」
「はぁ？　やっぱり高月先輩なんじゃない？」
「違うって言ってるだろ！」

すると、教室の隅から「痴話喧嘩なら外でやってくれよ」という

声が聞こえた。瞬間的に僕と沙和は黙って下を向いてしまった。数秒黙っていたけど沙和が口を開く。

「もしかして気にしているの？」

「何を？」

「卒業式、私が言ったこと」

ええっ！？　コイツ、知ってたのか！　僕が顔を上げると、目の前に沙和の瞳とぶつかりそうになった。僕は思わず仰け反る。

「知ってたのか？」

すると沙和は瞳を伏せて頷く。

「だって、あれ言った時、甲斐斗の眉が少し上がったもの」

「は？　それだけで？」

「えっ……？」

顔を上げた沙和は、顔を真っ赤にしていた。しばらく口をぱくぱくさせた後、手をぎこちなくばたばたさせた。

「あれだよ！　卒業式終わって家に帰って、三日後に思っただけだから！　そんな瞬時にはわからないって！」

「いや、三日後にそんな小さなこと思い出すんだ？」

「は？　はぁ――？　そんなわけないし！　三日後になんて思ってないし！」

「いや、さっき言ったろ」

さらに顔を赤くした沙和。耳まで真っ赤になっている。黙って横を向いてしまった。

「甲斐斗が決めたことなら、やればいい。でも、嫌だと思ったら、辞めて良いと思うよ」
「ありがとうな、沙和」
「え……うん！」

すると沙和は屈託のない笑顔を見せた。弓なりの形の瞳に大きく開けられた口。なんだか久しぶりに、こういうやりとりした気がする。僕はちょっと楽な気持になった。

というのが入部の次の日の出来事だ。
それ以来、部活動での出来事や心配事がないか聞いてくるのが沙和の日課になっていた。

次の更新は1～2時間後（その調子だ、やればできるっ！　……はず）

9／4　19：56

今回のコメント

・おまけ

現在登場した各年代の日記部部長一覧

期生　名前　別名

８６　高月亜也　殲滅の日記姫

８５　美国進

７６　野須虎男　不幸の大魔王

６９　阪田利行　爆笑王

６６　滝川美琴

６３　御木本孝美　バブル王子

５９　天野つばさ　冒険王

５７　大沢ユミ　仲裁女王

５２　中野幸次郎　競輪ドンキホーテ

４８　多野松雄　女装王子

４４　横山欽一　元祖爆笑王

３０　佐々木籐五郎　クマ殺し

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　というのが入部の次の日の出来事だ。

　それ以来、部活動での出来事や心配事がないか聞いてくるのが沙和の日課になっていた。沙和がいつものように僕の机の前に仁王立ちする。

「一ヶ月以上続くなんて、本当に日記部が楽しいんだね」

「なんか引っ掛かる言い方だなぁ」

「別に～」

　すると沙和は人差し指を自分の顎に当てて、斜め上を見て考え事の仕草をする。

「……私も日記部に入ろうかな」

「お前は陸上部だろ」

「文化部の掛け持ち大丈夫なんだよ」

「止めておけ！」

　僕は自分でも驚くぐらいの強い口調だった。沙和は目を丸くしていた。

「なんで？」

「いや……それは」

「あーっ、やっぱり高月先輩が――」

「そんなんじゃねえって言ってるだろ！」

僕の声に教室中が一気に静かになった。沙和も肩を震わせて驚いている。どこからか舌打ちも聞こえた。僕は我に返る。ゆっくりと沙和に視線をあわせた。彼女は少し怯えた表情をしていた。

「……甲斐斗？」

「ごめん。ちょっと言い過ぎた」

僕は座りながらではあったけど、頭を下げた。完全にいつもの調子ではなかった。原因も分かっていた。美国進。奴が元凶だと言うことを。

「甲斐斗……」

名前を呼ぶと同時に僕の頭の上に沙和の手がぽんと乗せられる。

「嫌なことがあったらちゃんと言うんだよ」

頭を下げた姿勢のまま僕はちょっと泣きそうになってしまった。女の子に慰められるなんて情けない。だけど、同時にありがたいとも思った。

「大丈夫だよ。嫌なことなんてあるわけねえだろ」

「そ。じゃあいいけど」

沙和はにっこり笑って後ろを向いて自分の席へ戻っていく。気づかぬうちに僕はその背中に声をかけていた。

「あのさ」

「ん？」
「僕、もしかしたら日記部を……」
言いかけた口を急いで塞ぐ。言葉にしてしまうと取り返しがつかない気がしたのだ。沙和は小さく首を傾けたが、やっぱり笑顔に戻って言葉をかけてくれる。
「甲斐斗、いつだって私はアンタの味方だからね」
「沙和……ありがとう。お前もなんかあったら僕に言うんだぞ」
「へ？　あははは、そうだね。その時は相談に乗ってもらおうかな」
最近は日記部のことで頭が一杯だったから、沙和との会話が息抜きに思えた。友達のありがたみが分かった気がする。滝川先輩や高月先輩はやっぱり先輩であって友達ではないからな。
次の更新は1～2時間後で（ぼちぼちと）

9／4　21：18

今回のコメント

・やはり緊張した場面を書いていると逃げたくなる。
頑張れ自分っ！

・そして文章量から考えるとある悩みが発生している。
このまま話が進めば必ず指摘されるだろうことがある。
今のとこと開き直って断行するつもりだけど……毎日迷ってます。
(今のところ何も言えない)

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

静かな旧校舎の四階。僕の足取りは重かった。昨日の失敗をまだ少し引きずっている。

高月先輩は銀行強盗との小テスト後、僕と一言も言葉を交わさなかった。高月先輩と言葉を交わさないなんてよくある事だけど、なんだかすごく遠くに存在を感じてしまう。

木造の扉を目の前にして僕は深呼吸する。考えても仕方ない、とにかく滝川先輩もいれば問題なしだ。ノックをするとゆっくり扉を開けた。

扉を開けた先にはいつものように椅子に座って日記を読んでいる高月先輩の姿があった。こんな時でさえも夕日の暖かい光と先輩のコラボレーションには目を奪われた。辺りをうかがうとまだ滝川先

輩の姿はなかった。僕は心の中で舌打ちする。

「失礼します」

平静を装い、いつもの席に座ろうとする。だけど珍しく高月先輩が日記から目を離し、僕を一瞥したので、いつもより離れた席に座ってしまい、机の端と端に座る形になってしまった。完全に僕は先輩を恐れている。くそっ、僕のヘタレっ！　と心の中で罵った。高月先輩はすぐに視線を日記帳に戻し、いつもの沈黙が訪れた。

公開している文章は少ないですが、まだ投稿できない会話分なら量産中です。
伏線たてないといけないからね。

次の更新は1～2時間後（やればできる……のか？）

9／4　22：25

今回のコメント

・最近セリフが溢れてきます。

地の文が多いですが、僕は基本的にセリフでお話を作っていくタイプなのです。（誰も聞いていないので勝手に答える）

いい傾向なのですが、使いどころがありません。

つーか、どんどん予定からながくなる。

いいのか？　これで。

まぁ、とりあえず、勢いで最後まで書くか。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

聞くべきだろうか。昨日の日記の感想を。僕は緊張で身を固くしていた。

「今日は遠いね」

隣から確かに声が聞こえる。ゆっくり横を向くと、高月先輩が髪をかきあげながら日記から目を離し、僕を見つめていた。

「いや、その……読書の邪魔しちゃあ、悪いかな？　なんて思いまして」

「……そう」

高月先輩は一言呟くと机に置いてあったノートを手に取り、僕へ差し出した。少し距離があったので、僕は身を乗り出してノートを受け取ると元の席に座る。受け取ったのは僕の日記帳だった。ここには昨日書いた僕の日記に対する高月先輩の答えが書いてある。

ノートを開く手がいつの間にか震えていた。まるで好きだと告白した後に返事を貰うような緊張感が漂う。僕の思いは届いたのか。なんとかノートを掴んでゆっくりと開いた。

『もう少し文章を勉強しよう』いつもと同じ言葉だった。

無視された。僕の疑問は考える余地もないと言いたいのか。噛み締めた奥歯ががちがちと震えた。我慢するんだ。考え方を変えろ。高月先輩は無用な争いを避けるためにあえて触れなかったんだ。『無用な争い』？　先輩はやっぱり僕の考えに反対だったのだ。僕はノートから視線を上げて、先輩に向ける。先輩は何事もなかったかのようにまた日記を読んでいた。僕はもう我慢できなくなっていた。

「高月先輩」

すると先輩は日記から目を離し、僕を見た。先輩の表情はいつもと変わらない無表情。なぜ呼ばれたかも分かっていないようだ。

「どうして僕の質問に答えてくれないんですか？」

すると一瞬にして先輩の眉間にシワが入る。口が一文字に結ばれた。答える気がないのか。僕はさらに質問を続けた。

「僕は昨日の選択が納得いきません。結果的には良かったけど、先輩は撃ち殺されたかもしれないんですよ」

先輩は僕を睨んだまま動かない。僕も睨み返すように先輩と視線を合わせた。しばらくこう着状態が続く。ここまで緊張した状態が続くのは初めてだった。いや、僕自身他人とここまで真剣にぶつかったは初めてかもしれない。

そして止まっていた時間が動き出す。高月先輩の瞳から一筋の涙が零れたのだ。先輩は涙を拭わず、僕を見つめている。震える声で僕へ言葉をぶつけた。

「君、私に人殺しをさせたかったの？」

「――っ！？」

予想していなかった答えに僕は困惑した。もっと僕の考えや言葉の弱点をついてくると思ったのだ。気がつくと、自分の口許が震えているのが分かった。

「こちらも銃を持っているからって、人を殺す権利を得たとでも思っているの？」

「ち、違……」

瞬間、僕の頭はフラッシュバックした。「争うしかアナタは考えがないの？」と言って僕の襟首を掴んだ高月先輩の一文字の口はわずかに震えていた。あれは怒りではなかった。「人殺しをするかもしれない」という震えだったのだ。高月先輩だって十八の女の子だった。どんなにクールに振舞っても、先輩面しても。

僕は功を焦り、高月先輩に人殺しを勧めていたのだ。取り返しのつかない後悔が僕を襲った。お腹の奥が寒くなるような感覚がした。蹲りたい。もう僕を見ないで欲しい。

「僕はただ事件の収束を……」

弁解する僕の声は明らかに震えていた。完全なる敗北だった。高月先輩の顔をこれ以上見られなくなり、僕は俯いた。膝に拳を置いて、羞恥に耐えた。

これでは美国進にかなうはずがない。彼は高月先輩に笑いかけ、自ら闘いに臨んでいき、僕は高月先輩に殺人を勧めていたのだから。

さらにタイミングがさらに悪かった。僕が美国進との差に愕然とした時に、高月先輩の口が開く。

「やっぱり、君は先輩と違――」と言いかけて高月先輩は言葉を止めた。

「それ、どういう意味ですか？」僕の言葉に高月先輩は振り返る。

「意味？」高月先輩の口がわずかに歪む。

「美国先輩なら……こんな馬鹿なことを言わない、と言いたいんですか？」

高月先輩はしばらく僕を見つめたまま黙った。そして最終判断が下った。

「ええ。そうかもね」

その瞬間を僕は見逃さなかった。高月先輩は手に持った美国進の日記帳を力を込めて握ったのだ。馬鹿馬鹿しい。そんな気持が僕を一気に襲う。黒くて突き放すような、冷めているが、人を嫉妬する力だけは失っていない燃えている感覚。

「そんなに美国進が好きなら……今度の中間テストでも助けてもらえばいいでしょう」

何の強がりだろう。明らかに子供の口喧嘩だ。分かっていた。だけど美国進の名前は出して欲しくなかった！

どうせ高月先輩は僕の気持なんて分かってくれないだろうけど。

「……わかった」この一言が僕をどれだけ失望させただろう。

気づけば駆け出していた。扉を開けると目の前にいた滝川先輩が立っていた。滝川先輩の回し蹴りを掻い潜り、一気に走り去る。

その日から一週間。僕は日記部を訪れることはなかった。

次の更新は1～2時間後（やればできる……のか？）

9／4　23：58

今回のコメント

・実はすでに「鈴鹿オクトパス」と「テリトリープリンセス」の文章量は超えてしまっています。
こんなに長いの書いたの久しぶりだなぁ。
とはいえ、全体の半分も行ってないのだけど……

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

授業が終わると皆それぞれの場所へ向かう。学生の場合大抵は部室か自宅だ。僕はもちろん自宅派だ。少し前までは向かう部室があったのだが、一週間前から元に戻ったのだ。行かないと決めてからは、気持が楽になれた。家に帰ると溜まっていた積みゲーをこなす。久しぶりにゲームをすると楽しい。本当に楽しい。楽しくて死にそうだ。そう言い聞かせる。

「草弥君」

クラスの女の子に呼び止められる。僕が振り向くと彼女は教室の扉を指差した。クラス中の「今日もか」という雰囲気を感じた。出入り口に立っているのは滝川先輩だった。僕は大袈裟にため息をつくと先輩へと向かう。

「今日もご苦労様です」
「今日は来るんだよな？」

「いえ。昨日も言いましたが、日記部を辞めます」
「すまないが、ちょっと付き合ってくれ」

滝川先輩は頭を何度かかくと僕を連れて人目のつかない裏庭へと連れて行く。僕も渋々ついて行った。別についていく義理はない気がしたが、迎えに来てくれる優越感と高月先輩の動向が気になっているというのが、僕の頭を占めている。

裏庭にたどりつくと滝川先輩は僕に頭を下げた。

「頼む、草弥甲斐斗。お前の力が必要なんだ。今日もアイツは一人で小テストに望んでいるんだ！」
「大丈夫ですよ。滝川先輩と二人いれば」

僕は半笑いで滝川先輩に答える。滝川先輩が一生懸命になればなるほど、冷めた気持ちが覆う。さんざん美国進と比べたくせに何言っているんだ。僕の気持を知ってか知らずか滝川先輩は僕の肩をつかんで揺さぶる。

「違うんだ！　すでにお前がいなくなってから亜也は十回以上も小テストを受けている」

「だからなんなんです。頑張ってください」

僕は滝川先輩の手を払って、背を向けた。ここまではいつもの会話だ。正直、聞き飽きた。

「待ってくれ！　詳しくは言えないが……手遅れになってしまう」
「手遅れ？　何がです？」
「言えない。私の口からはこれ以上いえないのだ。だけど信じてくれ。もう、お前じゃないと亜也は救えないんだ！」

ここ一週間まったく話す内容が変わっていない。
「高月先輩が一人で小テストに望んでいる」
「手遅れになる」
「僕じゃないと高月先輩を救えない」
理由を聞くと、言えない、ときたもんだ。

小テストを勝手に受けているのは高月先輩じゃないか。手遅れになるって、どうぜ輪転の誓いを使えないから身の危険があるってことだろ。僕じゃないと救えないっていうのは皆が殲滅の日記姫を怖がっているからだろう。

結論、もう高月先輩には関わらない。だいたい高月先輩が臨んでいるのは僕じゃないだろう。高月先輩がここに来ないのが何よりの証拠だ。

そう思うと、嫌味の一つでも言いたくなった。いつもならここで話が終わるのだけれど、僕は話を続けた。

「そんなに高月先輩がピンチなら美国先輩でも呼び戻したらどうです？　今は大学生か社会人なんでしょ？」

はい、これで解決だ。滝川先輩だって分かってるはずだ。しかし、滝川先輩の表情はすぐれない。俯いてしばらく黙っていたが、やがてぽつりと呟いた。

「美国先輩はもうこの世にはいない」

ちくりと僕の胸に棘が突き刺さった。嫌味で言ったつもりだったのだが、滝川先輩の言い方だともう死んでいるのだろう。僕も思い

のもって行き場所がわからず、滝川先輩に頭を下げた。

「……そうですか。軽率な事言ってすいませんでした」

「だから、お前が――」

滝川先輩が僕に言いながら近づいてきたので、僕は手で制した。

「僕は美国先輩の身代わりですか？」

「それは……」

「滝川先輩も結局僕を代わりとしてしか見てなかったんですよ。じゃあ答えは簡単だ。早く代わりを探してください」

この世にいないのならなおさらだ。誰が選ばれたとしても美国進の代わりとしてしか機能しないじゃないか。僕は美国進の代わりじゃない。

滝川先輩はそのまま立ちつくしている。反論できないのが、答えだろう。僕は背を向けて教室へ戻った。

完全に集中力が、がた落ち！

風呂入ってくる！（要らぬ情報）

次の更新は1～2時間後（やればできる……のか？）

9／5　3：40

今回のコメント

・理想って言うのは果てしなく遠くにある。
少しはこっちを向けよ！　って言っても向いてくれない。
なのにふとした瞬間に凄く近くにあるように思えるときがある。

もしかして理想の瞬間に近づいたのか？
って思った時には、また遥か遠くにあったりする。

小説かいてても、仕事してても、生活をしてても、
「あっ、今すげー幸せかもしれない」という瞬間があるよね。
なんつーか、胸が熱くなる瞬間っていうか。

何が言いたいんだろう。
だけど夜中に書いてるとそういう瞬間がたまにある。
こんな夜中に熱中して書いてる僕、幸せかもって。

同時に明日の心配もするけど。
う～ん、何が書きたかったのだろう。
わかんないけど、まっ、いいか。（いいのか？）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊

教室に戻った僕は帰りの仕度を始めた。すると沙和が足取り軽く

鞄を持って近づいてきた。僕は少しイラついた気持で沙和を一瞥する。

「もう帰るの？」

「ああ。家ぐらいしか行くところがないんでね」

すると沙和は僕の顔を覗き込むようにして屈んだ。

「なんだか目つき悪いなぁ」

「生まれつきだろ」

「そうだね。イケメンでもないし」

「あっそ。どいてくれよ。帰るから」

いちいち沙和の言葉が引っ掛かる。きっと沙和には陸上部がある、それに対して僕は日記部を出て行った人間だから、きっと僕が一方的に拗ねてるだけだ。そうだよな。どうせ僕が悪いんでしょ。なんだか暴自棄な気持ちになってきた。

僕は居たたまれなくなって、沙和を避けるように歩きだそうとした。

しかし。沙和は僕の進路を邪魔する。どういうつもりだコイツ。僕は睨みつけるように沙和をみた。すると彼女は瞳を潤ませて、口を一文字に閉じて僕を見つめている。

「な、なんだよ」

さらにずいっと顔を寄せる沙和。僕は一歩下がってしまった。

「甲斐斗、一緒に帰ろう」

「お前は部活だろ」

「今日は部活休むよ」
「何言ってるんだ。お前は――」
『向かう場所があるだろ』と言いかけたが、沙和が自分の手で僕の口を塞いだせいで、モゴモゴとなってしまう。代わりに沙和が小さく舌を出した後、僕に囁いた。
「今日はサボり。たまにはいいでしょ？」
耳にかかった沙和の息で、僕は脱力してしまう。結局、一緒に帰ることを承諾してしまった。帰り道を二人で歩く。沙和とは中学時代も一緒に帰る機会は全然なかった気がする。
「こうやって帰るの久しぶりだね」
「そうだな」
「ふふ～ん♪」
隣をうかがうと、沙和が体を少し弾ませて歩いている。今にもスキップしそうな勢いだ。そんなに部活サボるのが楽しいなら、辞めればいいのに。満面の笑みを急にこちらに向けて沙和が声をも弾ませる。
「ねえ、寄り道しようよ♪」
「小学生か、その言い方」
「いいでしょ、別に。モンブランが絶品のカフェがあるの」
「えー。甘いのはちょっとなぁ」
すると口を尖らせて沙和が上目遣いで僕を見つめる。
「もう、甲斐斗は。女子高校生と付き合うのに甘いものは避けて通

れないよ」
「めんどくせ」
「すぐ男子って『めんどくせ』って言うよね。ケーキ食べるのは面倒じゃないよ」
「いや。そういう意味じゃないから。挨拶みたいなもんだから」
「『めんどくせ』が挨拶？　よく分からないよ……」

説明するのも面倒くさいので、僕はついていくことにした。

ついたカフェは僕には入店しにくい雰囲気が満載だった。まず、カーテンがヒラヒラがついている。クマのぬいぐるみが置いてある。何これ？　今時ありなのか？　と思わせて満席に近い盛況ぶりだった。これは相当モンブランが美味くなきゃ割が合わない。

僕たちは席に座るとそれぞれに注文すると、ケーキと飲み物が届くまで、少しの間を過ごすことになった。

高月先輩ならこういう間ができると恐怖さえ感じるだが、相手が沙和となるとまったく緊張しない。それだけではなく、沙和から話しかけてくれるので本当に楽だ。

話の大半は中間テストの内容や陸上部の愚痴とか教師の噂話等、どうでもいい内容だが、今の僕には十分だった。本当に弛緩した世界が広がっていたが、緊張した世界よりましだ。

モンブランとコーヒーが届くと、話も一段落した。一口モンブランを口にすると、とんでもない美味しさが広がった。これはどのクリームも完全に栗を使っている。さすがは秋だ。栗を贅沢に使ってやがる！　などと感心していたら、沙和が頬杖ついて僕をじっと見つめているのに気づいた。

す、少しはしゃぎすぎたかな。僕は咳払いして、コーヒーをすする。

沙和はそんな僕を見てにこりと笑った。

「うん。やっぱり甲斐斗はこうでなくっちゃね」
「どういう意味だ」
「子供っぽいところ」
「お前が言うな。さっきまでディスプレイのクマのぬいぐるみで遊んでたくせに」
「あれは可愛さアピールだよ」
「ばらしてどうする。それに俺にアピールしても意味ないぞ」
「甲斐斗はこんなの嫌い？」

どうだろう。もし高月先輩が同じことしたら……可愛くていいかもしれない。

じゃねえ！　なんですぐに高月先輩を例に出す！　僕は意味なく首を振った。それを見て沙和は首を傾けた。

よし、寝よう。
寝ないと明日がやばい。
明日が怒ってる。もう寝ろって。（妄想？）

9／6　22：10

今日のコメント

久しぶりの今日の夕食～

・ごはん
・ハンバーグ（チーズが上に乗ってる。残念ながらレトルト）
・マーボーナス（こっちがメイン）
・炒り卵（ブーム復活）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

一日ぶりのお待っとさんでした！

計画的寝オチで休みました。（もはや開き直りの領域）
だってこれから前半戦のクライマックスなんだもん。

昨日のノリでは書けんわ。（ノリで書こうとするアマチュア）
本当は毎日ちょっとずつ書くアリタイプになりたい、キリギリス。
それがリープ。

毎日書ける人を尊敬します。
僕は書けません！（断言）
でも、作品は完成させます！

そして、もう二百文字超えた？

（文字数稼ぎだったのかよ）

9／6　23：28

今回のコメント
・やべえｗｗサッカーが気になってしょうがないｗｗ
・って、点数入れられたしっ！
（テレビの電源を切りなさい）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「うん。やっぱり甲斐斗はこうでなくっちゃね」
「どういう意味だ」
「子供っぽいところ」
「お前が言うな。さっきまでディスプレイのクマのぬいぐるみで遊んでたくせに」
「あれは可愛さアピールだよ」
「ばらしてどうする。それに俺にアピールしても意味ないぞ」
「甲斐斗はこんなの嫌い？」
どうだろう。もし高月先輩が同じことしたら……可愛くていいかもしれない。じゃねえ！　なんですぐに高月先輩を例に出す！
僕は意味なく首を振った。それを見て沙和は首を傾けた。
沙和に悟られないように咳払いをしてコーヒーをすする。あれ？　これさっきもしなかったっけ？　すると沙和が不意に話し始めた。
「甲斐斗、日記部辞めたの？」

僕は思わずコーヒーを噴出しそうになった。なぜ急に核心に触れるような話をする！　女子は皆こんな感じなの？　僕はむせるフリして時間を稼いだ。

「ど、どうしたんだよ急に」

「だって、ここ一週間ぐらい、部室へいかないでしょ。滝川先輩も教室に来ているみたいだし」

僕はここで妙な勘繰りをしてしまう。まさかコイツ滝川先輩の差し金か？

「なんだ、お前も日記部へ行けって言いたいのか？」

すると沙和は首を振った。

「その逆。辞めて正解だと思うよ」

沙和は自分の注文したレモンティーを口に含むと、僕を真っ直ぐ見つめる。

「やっぱり甲斐斗は家で寝転びながらゲームしているのが一番だよ」

「お前の僕に対する印象がわかったよ」

「もう、意地悪しないでよ。真面目に話してるのに」

真面目だったのか！　ぜんぜん分からなかった。「家でゲームしろ」が？

「家でゲームしてるのが一番っていうのは言いすぎでした。ごめんなさい」

「いいよ。言いたいことはわかるよ。もっとのんびりしろってことだろ」
「まぁ、その……日記部で急がしそうで、話す機会がぜんぜんなかったって言うのは確かにあったけど」
急に自分の指同士を絡ませて、もじもじしだした。こいつの行動はたまに理解不能なところがある。沙和は俯きながら、僕への話を続ける。
「日記部って楽しい思い出をつくる部なんでしょ？」
「え〝っ〝？」
「違うの？」
「違わないけど……」
そっぽを向いて誤魔化した僕を沙和は顔を上げてじっと見つめた。きっと僕は冷や汗をかいていたに違いない。しばらく僕を見ていた沙和はふうとため息をついた。
「甲斐斗。部活で無理やり思い出つくるものいいけど、日常のこうしたことが本当の思い出になると思うの」
「沙和？」
「卒業式での言葉、ゴメンね。私少し無神経だった」
沙和は膝に手を置くと、頭をテーブルにつかんばかりに頭を下げた。周りの視線を一身に浴びて僕は焦り、頭を上げさせた。顔を見せた沙和は少し涙目だった。
「だからさ、私とこうして高校生活を送れば、楽しい思い出作れるよ。卒業式で一緒に泣けると思うんだ」
「お前……」

「思い出を作るって、一人じゃなかなか難しいでしょ？　だから付き合ってあげる……私でよければ」

沙和は顔を真っ赤にさせて、僕に微笑んだ。なんだか心がじんわりと暖かくなっていくような感覚になった。人の好意がこんなにも暖かいとは思わなかった。僕は感謝の言葉を自然にもれでた。

「ありがとう。本当にありがとう」

「えへへ」

お互いに顔を赤くしたまま下を向いてしまった。恥ずかしかったが、なんとも清清しい気持ちになった。

……でも。ふと思う。高月先輩はこんな寄り道をしたことがあるのだろうか。いつも部室で日記帳を読んでいて、暗くなるまで帰らない。毎日小テストを受けている。思い出を作るのは人じゃ難しい。

頭を過ぎるのは扉を開けるといつも一人で日記を読んでいる先輩の姿。日記姫と言われる所以でもある。だけどそれは一人の世界だ。いくら他人の日記、思い出を共有できたとしても、永遠には続かない。

「どうしたの？　甲斐斗？」

「ん。なんでもない」

更新は1~2時間後　（だったらいいなぁ……）

9／7　3：16

今回のコメント

・サッカー見て風呂入って出てきて、書いたらこの時間。
まだ寝てませ～ん。
寝オチ阻止！
だけどテレビ見てたら一緒っ！（もっとタチ悪い）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

家に帰ると、ゲーム機の電源を入れ、ぽちぽちと始めてみる。ゲーム画面は僕の目には映っているが、頭にはまるで入ってこなかった。

『日記部って楽しい思い出をつくる部なんでしょ？』

沙和の何気ない一言が引っ掛かっている。そもそも僕はどうして日記部に入ろうと思ったのだろうか。美国進と張り合うため？　高月先輩や滝川先輩に認めてもらうため？　いや違う。

ゲーム音楽が室内になっていた。僕は静かに目を閉じた。今でも浮かんでくる光景。泣いている人達。その中で泣けない僕。なんだか置いていかれた気がしたんだ。

僕だけ卒業していないような、錯覚を覚えたんだ。

……だから。

卒業式に泣けるような思い出が、次に進めるような区切りが欲しかったんだ。

『思い出を作るって、一人じゃなかなか難しいでしょ？』

沙和の言うとおりだ。だから僕は日記部に入った。高月先輩と滝川先輩と思い出を作りたかったんだ。

だけど特殊な環境の中で、何もわからないままに先輩についていき、足手まといになって、何とか挽回しようとして……僕は我を失った。

「くそっ、また沙和に教えられるなんてな」

まだ間に合うだろうか。明日、滝川先輩に言って一緒に謝ってもらおう。でも、きっと「甘えるな」とか言われて殴られる気がする。それなのに僕は少し笑っていた。

次の日、僕から滝川先輩へ話をしようと思っていた。しかし、朝のホームルーム前に先輩は僕らのクラスにあらわれた。これ幸いと僕は先輩と裏庭に向かう。滝川先輩は目的地に着いた途端、僕へと振り返り、目の前から姿を消した。

「中間テストは今日なんだ。だから、頼む！　今日だけでいいから帰ってきてくれ！」

滝川先輩の姿は僕の視界の下にあった。まぎれもない土下座だった。

「頭を上げてください！　もう、いいんですよ！」

「よくない！　頼む！　お前の力が必要なんだ！」
「それなんですけど――」

僕が言いかけた瞬間、背後から聞き覚えのある、よく通る声が聞こえた。

「夕実。もういいよ」

僕は動けなくなる。確実に後ろには高月先輩がいるはずだ。足音が段々近づいてくる。
「私は大丈夫って言ったでしょ。今までだって一人でやってきた。これからだって一人で頑張れる。最高の思い出を日記に書いていくんだから」

情けないことに足が震えてきた。必死に押さえつけているから表面上は分からないはずだけど。声がドンドンはっきりしてきて、次の言葉が一番はっきり聞こえた。

「もう辞める人のことは考えても無駄だよ」

そのまま高月先輩は僕を通り過ぎた。黒髪が先輩の後を追って、僕を通過していく。体の力が一気に抜けていくような感覚に陥る。口が一文字どころか、への字に変わっていく。少し俯いてぐっとお腹に力を入れ、なんと姿勢を保つのに精一杯だった。

「さぁ。夕実、立って。先輩のアナタが下級生に土下座なんてしちゃ駄目だよ」
「亜也……」

滝川先輩の腕をとって引き上げる。立ち上がった滝川先輩の膝の

汚れを高月先輩が手で払う。滝川先輩はバツが悪そうに目をそらしていた。僕はそれを見つめるしかできない。

「そうそう。忘れてた」

高月先輩は後ろを向いたまま、僕に話しかけていた。一瞬反応できないでいたけど、自分に話しているのだと分かると、僕の背筋は伸びた。

「途中退部する人の日記は、本人に返却することになってるの」

言いながら高月先輩は脇に抱えていた、ノートを手に取り、僕へと振り返った。

「必要ないなら、自分で処分してちょうだい」

細くて鋭く僕を射抜く冷たい瞳。感情の起伏を感じない乾いた表情。完全に拒絶されている。つけ入る隙のない態度。差し出されたノートでさえも冷たく凍っているように思えた。もう機能することのない日記ノートは死んだも同然だ。

僕に出されたノートを震える手で受け取った。受け取る瞬間、高月先輩の手放すタイミングが早かったのか、ノートが地面に落ちてしまう。それだけで悲しさが一気に押し寄せた。僕はしゃがんでノートを拾う。しゃがんだ時に高月先輩達は僕の横を通り過ぎた。決定的な何かが終わったような気がした。

もう寝ますよ。マジで。いや、ホントに。

9／8　23：06

今回のコメント

・恒例のやつ

今日はくりーむしちゅ～っ！
カレー気分じゃなかったから、ガッカリじゃないよ！

あと、ゴーやチャンプル、キムチ風味。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

僕はしゃがんだまま、しばらく動けなかった。地面に落ちた日記を何を思うでもなく見つめる。なぜこんな事になってしまったのだろう。単なる誤解だと思うのだけど。

今から追いかければなんとかなる、そう思うけど身体が動かなかった。それだけショックなのだったと分かる。手を見つめると小刻みに震えていた。ノートに雨粒が落ちる。最悪だ。

「あ～あ、折角の日記帳を落としちゃって～」

ノートに僕とは別の手が伸びる。正面からの声に一瞬期待して顔を上げた。

「あっははは。草っち、泣いてやんの」

日記を拾ってくれたのは、平光先生だった。

僕の視界はぼやけているけど、平光先生だとわかったのは、赤を基調にした着物だったからだ。いつの間にか僕は泣いていたのだ。情けない。先輩に冷たくされただけで泣いてしまうとは。すぐに手で目を拭った。平光先生は拾った僕の日記をぱらぱらと捲りながら、僕に話しかける。

「ひどい子達だね。草っちが仲直りしようと思ったのにぃ～、誤解したまま去っていくなんてぇ～」

「先生、なぜ知って……」

平光先生は少し俯きながら眼鏡の隙間から、僕を覗く。

「だって、土下座してたユーミンに何度も『もういい』って言いかけてたでしょ？」

見てたのか。なんだか僕は恥ずかしくなって、視線を外してしまう。ちなみにユーミンとは滝川先輩のことである。

「亜也っぺはね～、アレで純粋真っ直ぐちゃんだからね～。すぐ誤解しちゃう」

「先生……だったらなんで止めてくれなかったんですか！」

「え～。だって面倒くさいんだもん」

「教師の発言ですか！」

僕はさっきまでの悲しさがどこかへ飛んでいってしまった。「その意気、その意気」と言って日記を読みながら、平光先生はからからと笑う。

「それに」

一言。言い終わると先生は、にやりと口を僅かに開いた。

「試験中に答えを教える先生なんていないっしょ」

言い表せない気味の悪さが僕を貫いた。眼鏡越しの平光先生の視線が、獲物を狩る動物のようだったのだ。思わず一歩下がってしまったが、平光先生はすぐににっこりとした笑顔に戻った。さらに口を尖らせて文句を言う。

「それにしても、草っち。男の子が簡単に泣いちゃだめだよ～」

「うっ……」

「皆様ご執心の美国進はそんなことでは……」

すると日記から目を離し、先生は一瞬上を向く。僕もつられて上を向いたけど、空には雲がいくつかあるだけで他は何もない秋晴れの天気だ。僕が視線を戻すと、先生はけらけらと笑っていた。

「あぁ、泣いてた泣いてた。アイツ、すぐ泣くんだよ～。ホント、草っちに似て……あっ。これは言っちゃいけないのか」

何十年も前から学園にいるという先生。見た目は二十代後半にしか見えないのだけれど、高校の歴史を知っている生き証人だった。高月先輩や滝川先輩から教えてもらえないのなら、先生に聞くしかない。

「そんなに似てたんですか？　以前、高月先輩にも日記の書き方が似てると言われましたが……」

「ふうん。亜也っぺがね。」

先生は口元に手をあてて、考える仕草をする。眼鏡越しの細めた瞳が僕を射抜く。

「で、ぶっちゃけ美国進に嫉妬してるの？」

「え？」僕は返事ができないまま言葉に詰まってしまった。顔を傾けながら、先生は僕に近づいた。

「図星リアンハスキーかね？」

シベリアンが図星リアンって無理あるだろ。と思いつつも言い返すことができなかった。先生は僕の顔をずっと見つめてくる。しかし、だんだん先生の頬が膨らみ、耐え切れなくなったのか、また大笑いを始める。袖を振ってじたばたする先生に僕は次第に腹が立ってきた。

「笑いすぎでしょ、先生」

「だって、よく考えたら変だもん！　あははは、草っちが美国進に～って！　それなんの天に唾？」

はいはい。どうせ美国進に嫉妬して自滅しましたよ。僕は歯を食いしばって横を向いた。平光先輩は笑うのを止めて、声のトーンを落として僕に告げる。

「草っちが日記部にいてもいなくても今日は中間テストだからね」

俯いていたせいでさがった眼鏡を人差し指で上げると、僕に日記を差し出した。

「はい。草っちの日記面白かったよ。ホント小学生の日記だね～」

僕は何も言えずに日記を受け取る。今日が中間テスト。急に現実に戻された気がした。

「じゃ～ね～」と背を向ける先生。僕は焦りを感じて、平光先生に話しかける。

「教えてくださいよ。日記部の部活動って一体……高月先輩と滝川先輩はな――」

「教えられませ～ん。言ったでしょ？　試験中に答えを教える教師はいないって」

平光先生は僕の言葉を遮るように、話をかぶせる。先生は振り返らずに話を継いだ。

「それに草っちはまだ部外者だからね。厳密にはユーミンも部外者だけど。でも、草っちがあるいは……ううん。まだ先の話だね。まずは亜也っぺの番だから」

手を振りながら「ばいば～い」と去っていく先生を僕は見送った。

そして僕は一人になった。

9／9　0：47

今回のコメント

・平光先生と書こうとして平光先輩と書いてしまう罠。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　教室に戻るとホームルームはとっくに終わっていた。なんとか一時限目には間に合ったけど、授業なんて上の空だった。この授業が終わって休憩時間に滝川先輩へ誤解を解こうと思っていた。本当に思っていた……

　だけど気づいたら四時限目が終わろうとしている。どうして休み時間に行かなかったんだ。お昼休みになったら行こう。時間が長い方がじっくり話もできるだろう……

「甲斐斗～、今日は部活行くから。また今度あのカフェに行こ」

「あ、ああ……」

　放課後になっていた。でも、大丈夫だ。滝川先輩がいつものように来るはずだ……

「草弥。俺、日直でそろそろ教室閉めたいんだけど」

「え？　ああ、ゴメン……」

結局、滝川先輩は来なかった。僕は完全に見捨てられたらしい。だったらいいじゃないか。自分から部室に行けば。二人は部室にいるだろうし……

鞄を床に置くと、僕はゲーム機の電源を入れていた。なにやってんだ僕は。こんな日に限ってサクサクとゲームは進んでいく。次第に頭が真っ白になる。ゲーム画面に対する反射神経だけが研ぎ澄まされる。

もう寝ます。

9／10　0：52

今回のコメント

・今日は牛丼！
レトルトじゃないよ！
牛小間買ってきて、玉ねぎ切って、糸こんにゃく入れて（これは牛丼なのだろうか……）
しょうゆ、みりん、料理酒、砂糖で調整。

もちろん玉入りで、いただきました！

ちなみに吉牛へ行ったら、紅しょうがをたくさん入れるタイプの人間です。（本当に要らない情報）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

鞄を床に置くと、僕はゲーム機の電源を入れていた。なにやってんだ僕は。真っ直ぐ自宅に帰ってくるなんて……。こんな日に限ってサクサクとゲームは進んでいく。次第に頭が真っ白になる。ゲーム画面に対する反射神経だけが研ぎ澄まされる。僕はゲームと一体になった。

ゲームのロード中、床に置かれた鞄が視界に入る。なんだかロード時間が長い。余計な考えが入り込んできそうだ。

――日記。どうして今思い出す。なんで目に入るんだ。そしてなぜ手を伸ばしているんだ。掴んだ鞄を手前に引き寄せ、中を開いていた。

思い出したくなんかないのに……いや、違うな。思い出してなんかいない。ずっと考えていたんだから。

ごくありふれたノートに書かれた「日記帳」の文字。僕はぱらぱらとめくっていた。

『もっと文章を工夫しましょう』
『小指を素直に出してください』
『今日はお疲れ様でした』
『ハリセンは叩きどころを間違わなければ痛くないです』

いつも高月先輩のコメントは短くて、正直人のことを「小学生みたい」とよく言えたものだなと思う。なんだか苦笑しつつも僕は最後の日記をめくる。

『もう少し文章を勉強しよう』の文字が僕の目に映った。

今思えばつまらないことで喧嘩をした気がする。って喧嘩というほどでもないのだけど。僕が一方的に……ん？　思い出に浸っている僕は気づいてしまった。最後のページだと思っていたのだが、うっすらと文字が透けている。もしや……と思い、ページをめくろうとするが、指がもつれて上手くめくれない。くそっ、早くしろよ。なんとかしてページをめくる。するとそこにはコメントの続きがあった。

『言い過ぎました。ごめんなさい』

たったこれだけの言葉だった。

しかし、よく見ると何度も文字が消された跡がある。きっと何回も書き直したのだろう。悩んだ末に出した答えがたった二言の言葉だった。なんだか非常に高月先輩らしさを感じる。僕は少し胸が熱くなった。

その瞬間「もしかして」という予感が走って、ページを戻す。僕の考えは当たった。よく見れば、どのページにも何度も書き直した後があったのだ。僕は短いコメントだと、気にもしていなかった。

いい加減だったのは僕だった。軽い気持で小学生のような日記を書いた僕。そして軽い気持を知ってか知らずか、何度も書き直して、結局大したことが書けなかった高月先輩。思いの深さは明らかだった。

日記を持つ手が震えている。歯を食いしばっている。情けなさだけが今の僕を構成していた。そして家にいる自分をなじり、もう戻れない時間を後悔した。申し訳なさ過ぎて戻れない。顔向けができない。僕はうな垂れ、日記は床へ落ちていく。音を立てて日記帳が床に落ちる。

――コトリ。部屋中に音が響いた。

すると、床にページを広げる形で落ちている日記帳の背表紙の辺りから、あきらかに色の違う紙が顔を出した。

僕は不審に思いながら日記帳を開くと、日記帳の最後のページに紙が挟まれていた。半紙のようだが、厚い紙だ。紙の繊維が分かるような荒い作り。和紙のようにも思えた。僕が書いていたときは、こんな紙なかったのに。紙をとりだし、手に取ってみる。すると文字が書かれていることに気づいた。

『大丈夫。終わりの時間まで待てばなんとかなる』

何だこの言葉は。意味が分からない。僕が首をかしげると、書かれている文字が揺れだした。僕はまた泣いているのかと目元をぬぐうが、涙は出ていない。あらためて目を凝らすと、紙の上で、本当に文字が揺れているのだった。まるで生き物のように。僕は驚いて思わず紙を離してしまった。落ちた紙の文字はやがて形を変えていった。

『夕実が怖がってる。私が慌てるわけには行かない』
『とにかくこの状況をなんとかしないと』
『それにしても熱い』
『夕実を立たせて逃げないと』
『今日は中間テストだからって時間が長すぎる』
『もしかして、このまま……』
『悲観的に考えては駄目』

紙にはどんどん文字が浮き出てくる。
もし、こんなことが人生で初めて起こったことなら迷うことなく僕は君の悪い紙を捨てただろう。だけどたっぷりと日記部で不思議な体験をしている。自然とだんだん落ち着いている自分がいた。

紙自体に害がないことを確かめると拾い上げる。紙に浮かび上がっている文字を読んだ。夕実、中間テスト、時間が長すぎる、逃げないと。この文字から推測できるのは、紙に書かれている言葉が高月先輩のものらしいこと。中間テストという文字から、現在ないしは今に近い時間の言葉だと言うことだ。

朝以来、高月先輩にはあっていないし、こんな文字を書く暇も無

いだろう。それに文字が自然に浮かび上がるなんて不思議な力を持っているはずがない。だったら誰が日記帳に細工を……。

数秒後、僕はある人物を思い出した。平光先生だ。

あの人は確か僕の日記を拾ってめくっていた。そうだ。あの時か！　だとしたら、これは高月先輩の言葉に間違いない。言葉の内容はまるで心の呟きのようだ。もしかしてこの紙は、高月先輩の心の声をキャッチする受信機のような力があるのではないか。平光先生なら、できそうだ。

僕が思考をめぐらせている間に紙全体を文字が覆うぐらいに増殖していく。文字同士がぶつかり、重なり合う。もう何が書いてあるか判別できない。紙から溢れそうな勢いは、まるで不安な気持の膨らみを表現しているみたいに。高月先輩達が危険にさらされている。あの無口な高月先輩が心で叫んでいる。もう紙に隙間がない。高月先輩はもう限界だ！　紙が言葉で真っ黒になった。

瞬間、紙から文字がなくなる。たった一言を残して。

『助けて』

僕は日記帳を持って家を走り出していた。

次の更新は1~2時間後。

まぁ。あれだ。

大丈夫だから。

寝るときは、寝る。

9／10　2：46

今回のコメント

・いや〜、いいお風呂でした。（ホントに本当に要らない情報）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　僕は日記帳を持って家を走り出していた。外はすでに飴色を過ぎ、街頭さえぼちぼち点灯する時間。信じられないぐらいの速さで走った。徒歩で通える高校で良かったと感謝した。

　何にこだわっていたんだ僕は。つまらないプライドや臆病風に吹かれて、辛いことから避けて。あの紙が本当なら僕は銀行強盗の件から何も変わっていなかった。『君、私に人殺しをさせたかったの？』自分の思いつきの我ままで、高月先輩の不安な気持を無視した。今だってあんなに不安で紙が溢れるぐらいに不安だったんじゃないか！　高月先輩だって女の子なんだ。

　そして、最後に残された言葉は助けを求める声だった。

美国進にできて僕にできないこと。それは今、高月先輩を助けることだ。

　構内に入ると部活帰りの生徒に逆行し、校舎へと飛び込む。新校舎を抜け、渡り廊下を走り、旧校舎の階段を駆け上がる。薄暗い四階をあの大仰な扉に向けて突き進む。

そういえばやったことないな。僕は滝川先輩のごとく、扉へとび蹴りを食らわせた。大きな音を立てて扉は開き、僕は部室へ転がり込んだ。

「もうっ、遅いんだから～」

片膝ついて起き上がろうとする僕の前には平光先生が立っていた。朝と同じ、赤系統の着物にメガネを光らせて、僕を見下ろす。すぐに起き上がり、平光先生の肩を掴んで引き寄せた。

「遅刻してすいません！　ちょっと野犬に囲まれていました！　参加させてください！」

顔を近づける僕に先生は一切怯むことなく、おでこをつき合わせてきた。

「回答時間は少ないよ。それでもいい？」
「構いません」
「もう、逃げられないよ。今が最後のチャンスだよ」
「何のチャンスですか？　高月先輩を助けるチャンスですか！」

すると平光先輩は口許を歪ませて、質問を続けようとした。

「美国――」
「んなことはどうでもいいんですよ！　僕しかもう高月先輩達を救うことはできないんだ！」

僕の声が教室中に響く。平光先生が「うるさ～い、耳がキンキンする」と言って顔を反らした。僕は平光先生から手を離すと、土下

座した。

「覚悟なんてとっくにできてます。あの文字を見た瞬間から。だからお願いします！」

頭上から平光先生のため息が聞こえた。

「ふう～。わかった、わかった。もう、若いとすぐ勢いで迫ってくるんだから」

僕がお礼を言おうと顔を上げた瞬間、周りが光りだした。思わず目を瞑り、顔を背けた。

光がなくなって、まず感じたのは焦げている臭い。それに熱さ。最後にガラスが割れる音とばちばちと何かがはじける音がする。ゆっくりと目を開けると、辺りは火の海だった。大きな柱が数メートル先に倒れていた。上を見れば煙がどんどん下へとおりてくる。僕は思わず屈んでしまう。どうやらここは火事の現場らしい。

「もしかして草弥か？」

背後から聞こえる声に振り返ると滝川先輩の姿があった。僕が駆け寄ると先輩は満面の笑みで腹パンをした。「ぐえっ」と声を出してしまう。カッコ悪い。助けに来たのに。

「来るのが遅いんだよ」

滝川先輩の頬や手はすすで汚れていた。それだけで事態の深刻さが伝わった。だが、滝川先輩は意外に元気そうなので安心した。僕

は辺りを見回して高月先輩の姿を探す。

「柱の向こうに亜也はいる。柱が倒れてきたからってアイツ、私を突き飛ばしたんだ」

滝川先輩は倒れている柱を指した。柱の向こう側は煙でよく見えない。灰色と赤で構成された眺めだった。

「最悪だ。よりにもよって七十六期生、不幸の大魔王こと野須虎男の日記から出題されるとは」

滝川先輩は独り言のように呟く。野須虎男の不幸エピソードの中でもA級の日記。校舎の火事に巻き込まれた話らしい。しかも、今の新校舎が建て替えられることになったきっかけ。それがこの輪転高校の火災だった。

「説明している暇はない、早く行ってやってくれ頼む！」

「言われなくても行きますよ。もう逃げません」

散々説明しておいて滝川先輩は僕を急かした。僕は助走をつけると一気に柱を超えて煙の中へ飛び込んだ。

煙が僕を包む。僕は腕を口許に当てて、屈んだまま小走りで進む。数メートル煙をぬけると、防煙壁のお陰か小さな煙が届いていないスペースができていた。僕が煙のない場所目がけて進むと、人影があらわれた。長い髪が特徴的な女性、高月先輩の姿だった。

次の更新は1～2時間後。

9／10　5：06

今回のコメント

・段々空が……でも。結構明るくなるの遅くなってね？
（寝てばかりなので気づかない人）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

僕は数メートル手前で止まってしまう。なにから話しかけていいかわからない。立ち止まったまま高月先輩を見る。先輩は正座から足を横にずらして座っており、俯いたままジッとしていた。まるで最後の時を待っているかのように。僕は高月先輩が消えてしまうんじゃないかと錯覚さえ起こしそうになり、一歩、また一歩と自然に進んでいた。

すると壁の破片を蹴ってしまい、高月先輩まで転がっていく。先輩は破片に気づき、転がってきた延長線上に視線を動かす。どんどんと遡っていき、僕の視線とぶつかった。瞬間、大きく開かれる先輩の瞳。僕はなんだか久しぶりに会ったような懐かしささえ覚えた。

感動の再会。それを期待して僕は高月先輩まで歩いていく。瞳は大きく開いたまま動かない。だけど口だけは動き始め、言葉が漏れる。

「何しに来たの」

助けに来たのにそのセリフですか。……いや、助けに来たなんて考えは止めよう。僕が最初からいたら、こんな事にならなかったのだから。ここは穏便に。だけど高月先輩は穏便にとはいかなかった。

「部外者は立ち入り禁止のはず」

――ムッ。ちょっとイラっときた。この期に及んでまだ言うか。

「帰って。一人でなんとかできるから」

「素直じゃないですね」

我慢できなくなって僕は先輩に言葉を切り返していた。高月先輩は開いた瞳を元に戻し、眉間にシワを寄せる。

「……どういうこと？」

「自分から助けを求めたくせに」

「私が？　あなたを？」

「僕か美国進だか知りませんけどね。でも、彼はいないんだから、僕しかいないでしょう」

僕はため息をつきながら、片目を瞑った。その仕草が気に入らなかったのか、高月先輩は少し口を尖らせた。

遠くでガラスの割れると音がする。熱で耐え切れなくなったのだろう。遠くでサイレンの音も聞こえだした。早く脱出しないと大変なことになる。

「それに日記のコメントについても一言いいたいことがあります。何度も書き直すぐらいなら、全部書いてくださいよ」

考えとは反対に僕は話を続けようとしていた。先輩の顔を見たら、いっぱい言いたいことが溢れてきたのだ。なんでだろう。

対する先輩も一文字に閉じられた口が僅かに歪んでいた。

「日記を見たの？」

「見なきゃあ、きませんよ」

「そう……」

一言呟いたきり、俯いた。気のせいか、先輩の口許が弛んでいる気がする。……っていうか火事なんだって、もう一人の僕が叫ぶ。だけど、僕は聞く耳を持たない。

「なんで何度も書き直して、一言なんですか」

すると高月先輩は顔を上げる。僕を一瞬見つめると横を向いた。

「あれを一言だと誰が決めたの？」

す、素直じゃねえ――――っ！　僕は頬を引きつらせながら答える。

「強情ですね」

「見てくれは一言でも、かける思いは抱えきれないぐらいなの」

僕には一言で終わらせる日記を小学生と罵り、自分は一言で書くことを美徳だとでも言いたいんですか？　あー、そうですか。僕は完全に挑発に乗ってしまう。

サイレンの音が本当に大きくなってきた。うるさいよ！

「残念ながら僕は超能力者じゃないので、書かなきゃわかりません。

テレパシーは使えませんよ」
「あら偶然。私も超能力者じゃないわよ。でも伝わるものだと思うけど。気持を通わせた同士ならね」
「先輩、今日は饒舌ですね」
すると高月先輩は横を向いていた顔を僕へ向けた。表情には力が入っていて、真剣そのものだった。そして当然と言わんばかりに一言言う。
「嬉しいのよ。いちいち説明させないで」
な、なに、今の言葉は。きっと僕は今間抜けな顔をしているに違いない。表情が弛んでくるのを必死に抑えているのだけれど、決壊寸前だからだ。耳まで赤くなってしまう。
そうか。僕が火事なのに言葉が溢れてきたのも嬉しかったからなのか。あっさり言ってのける高月先輩に脱帽した。この状況で信じられない。
しかし、先輩は自分の発言に自覚がなかったようで、数秒後、顔を真っ赤にして俯いた。僕もつられて俯いてしまう。お見合いか。火事場でお見合いか。
ミシミシと音を立ててまたどこかの柱が倒れたらしい。大きな音が響く。校舎外からは赤色灯の光が中に入ってきた。急がないと、面倒なことになる。
僕は頭を振り、高月先輩と向き合った。
「さあ、先輩。小指を出してください。僕と指切りをしましょう」
「そうね。さっさと終わらせましょう」

「ちょっと待ってください」

僕は自分から小指を差し出し、先輩と視線を合わせた。

「輪転の誓いではないですが、先に僕と約束してください」

「はい？」

高月先輩は小首をかしげて。不思議そうに僕を見る。この期に及んで僕は深呼吸をした。煙が入ってきてかなりむせた。少しして落ち着くと、真っ直ぐ高月先輩を見つめる。先輩の瞳に魅入られた。視線が動かせない。僕は思い切って口を開いた。

「これから一人じゃなくて皆と一緒に思い出を作るって指切りしてください」

「え？」高月先輩は口をぽかんと開けて、僕を見つめ返す。駄目だ。ぼやけた言い方では何も伝わらない。僕は明確に伝えることにした。

「いや。皆じゃなくて、僕と思い出を作ってください」

「あ……」

先輩は再び瞳を大きく開けた。「えっと……うぅ……」とか言って口許を震わせる。僕も小指を出しながら空いた手で頭をかいて誤魔化す。しかし、高月先輩は大きく開いた瞳を細めると、震えた口許も閉じられる。

そして先輩は無言で小指を差し出す。僕は細い小指に力強く絡ませた。

「約束しましたよ」

すると先輩は小さく頷いた。

「……うん」

その後はいつもの先輩だった。

「輪転の誓いにより、我願いに答えよ！」

相変らずの厨二表現。だけど今日はそれも可愛く見えた。

「回顧せよ、想起せよ、顕現せよ！　第七十二期生、雨宮まこと！」

先輩の目の前に日記帳が光の矢のように飛んでくる。日記帳を開き、該当のページで手を止める。光り輝いた日記帳からは長い棒状のモノが伸びてくる。散弾銃ではなく、もっと身近なものだった。全てが姿を現し、先輩が掴んで。ボタンを一つ押すと、それは広がっていった。まぎれもなく傘だった。

「室内に傘ですか？」

僕は思わず、素っ頓狂な声を上げてしまう。高月先輩は小さくため息をついた。

「勉強不足だね。雨宮まことは別名史上最強の雨女と呼ばれた人よ。大事な時になると必ず雨が降るっていう才能の持ち主よ」

高月先輩はピンクの傘をくるりと回すと、日記の内容を読み上げた。

「六月二十八日、今日は社会見学でしたが、局地的な豪雨に見舞われて、大変でした」

すると外の天気が急に曇り空になっていく。雨が一粒、二粒と振ってきたと思うと、一気にバケツを引っくり返したような雨が降り注ぐ。現代で言うところのゲリラ豪雨だ。

「はい、中間テスト終了〜〜〜っ！」

雨が降り出した途端、平光先輩の声がした。光に包まれて、元の明るさに戻ると、いつもの部室だった。

室内では僕と高月先輩が並んで立っている横で、へたりこんでいる滝川先輩の姿があった。高月先輩はすぐに滝川先輩の元にかけより、介抱していた。

僕はニコニコと状況を見守っている平光先生に歩み寄る。

「どうしたの？　草っち」

「あの紙は平光先生の仕業ですか」

今日こそ平光先生の力について、説明してもらうぞ。今回は証拠物件もあるんだからな。僕は鼻息も荒く、先生に詰め寄る。しかし、先生はニコニコした顔を崩さない。

「へ？　何のこと？」

「誤魔化さないでくださいよ。この紙が――」

僕が日記帳から、和紙を取り出した瞬間、紙が燃えて手品のようになくなった。

「熱っ！」
「草っち、まだ中間テストの妄想見てるの～？　そうやって夜な夜な、亜也っぺやユーミンを妄想で……」
「してるわけないでしょ！」

一瞬、背中に寒気を感じて、後ろをゆっくり向くと、高月先輩と滝川先輩がこっちを見ていた。しかもジト目で。誤解されてる！
「あはは」と笑うと平光先生は僕に耳打ちした。
「ちなみに私は答えを教えはしないけど、ヒントは教えるタイプの先生です」

僕が苦笑いをすると、平光先生は着物の袖を振って「じゃあね～」とか言って部室を出て行ってしまった。

一体、平光先生とは何者なんだろう。いずれは分かるのかもしれないけど、今日に限っては感謝しないといけない。僕は大切な物を失いそうになったのだから。

次の日。
僕はいつもの通り、薄暗い四階の廊下を歩いていた。さらにいつもの通り、木造の扉をノックしてドアノブをまわす。開いていく扉から、高月先輩の姿が覗く。

今日も高月先輩は日記を読んでいた。時折、髪を書き上げて耳にかける。夕日が先輩をオレンジ色に染めて、幻想的な雰囲気を持たせる。机の上には美国進の日記帳が置かれている。高月先輩は美国進の日記帳を手放さない。僕はやっぱり嫉妬してしまうけど、同時

に愛おしそうに日記帳を抱える高月先輩がとても魅力的に思えた。

僕は挨拶をしながら室内に入る。胸のドキドキを抑えながらゆっくり定位置の席まで歩く。そして、勇気を振り絞って僕は行動に出た。いつもより、先輩に近い席に座ったのだ。横目で高月先輩の反応をうかがったが、日記を読んでいる姿勢から変わらない。よし。第一関門突破だ。

しかし、問題は今からであり、最大の難問だった。僕は膝の上で拳を握り、目を瞑って勢いで声をかける。

「高月先輩」

高月先輩は日記から顔を上げた。勇気を出せ、甲斐斗。やればできる。やればできる。相手は高三の普通の女の子だ。一言言うだけだ。軽く、かる〜く言うだけだ。僕は生唾を飲んで、高月先輩に向かい合った。

「今日の部活が終わったら」
「ん？」
「僕と寄り道しませんか？」

たあああああっ！　もっとスマートな言い方あっただろ。俺の馬鹿馬鹿馬鹿！　これじゃあ高月先輩に冷たい目つきで見られてしまうっ！　ほらみろ、高月先輩が目を丸くしてるじゃないか。呆れてるんだよ、きっと呆れてるんだよ！

「いいよ」

「ですよね〜、駄目ですよね〜……え？　今何と？」

すると高月先輩は今までに見たことがないぐらい瞳を細めて微笑んだ。

「で？　どこに連れてってくれるの？　これでも私、寄り道には一家言あるよ」

嘘じゃないよな。この状況嘘じゃないよな。僕の脳内首脳陣はシャンパンファイトを始めだし、脳内ではカーニバルが始まった。僕は今にも飛び跳ねたい気持を何とか抑えつつ、声のテンションが一段階上がった状態で答えた。

寄り道の場所は決まってる！　沙和には悪いが利用させてもらうっ！　必殺の場所を。

「は……はい！　とっておきの場所があります！　この辺の女子垂涎のスイーツが！」

「私、甘いものは苦手だな」

「へ……」

僕の目が点になっていると、高月先輩は頬杖をしながら首を傾ける。

「お好み焼きとかどう？」

首を傾けるとさらりと髪が前に落ちる。艶のある長髪から甘いようないい匂いがする。

「いいですね！　甘いの嫌いなのは同感です！」

「私は嫌いなんていってないけど……」

高月先輩は苦笑いする。僕は照れ笑いをした。幸せの瞬間を噛み

締める。

「つーか、私はないがしろか」

扉が蹴り破られると滝川先輩がいつも通り豪快に部室へ入ってくる。僕は「忘れてた」という表情を出さないように、答えた。

「あっ、滝川先輩……も、どうですか？」

ぎこちなっ！　僕の喋り、ぎこちない！　案の定、滝川先輩の顔は引きつっていた。

「貴様。覚悟はできているんだろうな……おごりだ。全員の分おごりだ！」

「あっ、それいいんじゃない？　中間テストの迷惑料も込みで」

高月先輩もノリノリで答える。先輩、そんなキャラでしたっけ？

「ええっ！？　お、お金と相談させてください……」

するとさらに厄介なのが扉から入ってくる。

「あ～、みんなでずるい～、私もいく～！　イく時は～一緒だよ～」

「平光先生は自腹ですよっ！」

「けち。恩知らず」

口尖がらせているのが一名、朗らかな笑い二名に引きつった笑い一名。やっと僕は日記部の一員になれた気がした。こんな日がこれからも続くんだろうか。

先輩とたくさん思い出がつくれるのだろうか。きっと作れるな。

必ず。

きょうはこれぐらいで。
あんまりキリのいいところ終わると良くないとか言いますが、きにしない。
気分のいい時に終わってみる。

９／１１　４：３９

今回のコメント

今日の夕食

ガスト。

以上。（チーズインハンバーグにカレーです。）

・あ〜あ、よく寝た。

今まで寝てました……と言うのは、もちろん嘘。

でも９時間ぐらい寝ました。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

久しぶりにファミレスで今後の展開を一人ブレスト（ブレインストーミングの略）してきた。

（そして四時間ぐらい居座ったｗｗ　田舎なので、深夜のファミレスで創作している奴なんて皆無。団体かカップルしかいねえｗｗ）

結果的には色々いい会話や展開の確認や発見ができたのだけれど、やはり問題点が今後の展開について。

ちょいちょいコメントとかにも書いてるんだけど、大きく分けて二つ案があります。

ホント毎日結論が変わるぐらい迷ってます。

一つ目を選べば上手くまとまるし、時間的に間に合うと思う。
しかも皆が納得できると思う。
ただし、自分のやりたかったことを削らなくてはならない。

二つ目を選べば、思い通りかけるけど、文章量がとんでもなく多くなる。
しかも、少なからず読んでる人をガッカリさせるかもしれない。

むむむ……どうしよう。
これが納期ありで、お金もらう仕事だったら、迷わず一つ目。
別に今のは誰に頼まれたわけでもなく、自分で書いてる。
が、投稿編なので当然プロを多少意識しなくてはいけない。
とは言え、二つ目を選ばなかったら後悔する気がする。

ブレストした割には結論がでていない……
今週か来週にはこの結論は出てると思うのだけれど、果たしてどちらになることやら。

次の更新は……
起きたら本格的に書き始めます。（わっ、逃げた）

9／12　0：27

今回のコメント

今日の夕食

ごはん
秋刀魚の塩焼き。
サラダ。
焼豚。

いや、大丈夫だからね。
まぁ、見てなさいって。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

日記部の中間テストも無事終わり、学生生活における中間テストも無事終わった。とはいえ、結果は散々で追試を二科目受けてしまった。

高月先輩はその結果に冷めた目つきで「お勉強ができるのね、草弥君は」なんて嫌味をもらう始末。滝川先輩は「勝った！　私は一科目だけだぞ」なんて言って笑ってた。そんなわけで日記部の面々は今日も平和である。

「良いわけない！　甲斐斗、一学期はそんなんじゃなかったでしょ！」

僕が座る席の前で仁王立ちなのは沙和だった。僕を見下ろしながら、頬を膨らませて不満一杯な表情を表現している。高月先輩もこれぐらい素直だったら分かりやすいのに。

「日記部に入ってから、甲斐斗はドンドン変わっていくね。夏休みが終わって、髪染めてくる生徒より性質悪いよ」

「きっとその人達は大人の階段昇ったんだ」

僕は窓へと視線を移し、遠くを見つめる仕草をした。沙和は僕の視界に無理やり入ってきて口を尖らせる。

「甲斐斗は人としての階段を降りてる気がするんですけど！」

「どういう意味だ。家でゴロゴロする僕の方がましだったっていうのか？」

「少なくとも学業においてはね」

うっ……言い訳できねえ。僕が言葉に詰まっていると、沙和はしゃがんで僕の机に頬杖をつく。さっきまでの厳しい眼差しではなく、少し悲しそうな瞳だった。

「心配なんだよ。この前なんか、制服が焦げ臭かったでしょ。私、まさか部室で煙草とか吸ってるのかと思ったのよ」

「煙草の臭いは焦げ臭くないぞ。それにあれは偶然河川敷で見知らぬオッサンがやってた焚き火に当たりすぎたせいだって言っただろ」

すると沙和は眉間にシワを寄せて、僕に顔を近づける。

「滝川先輩からも同じ匂いがした」

「あの人はずぼらだから、消臭しなかっただけだろ。高月先輩なんかは……はっ！」

「誘導尋問に引っ掛かったね。やっぱり日記部が原因だったんだ」

何この妻のような積極的尋問は！　コイツの夫になる人間はきっと苦労する。断言する！

「す、少しはやるじゃないか、沙和……」

「ふん。甲斐斗が馬鹿なだけでしょ。追試人間」

「て、てめえ……」

僕が口を歪ませて震えていると、沙和はため息をつきながら独り言のように言った。

「私、高月先輩に直接文句言いたいよ……」

「馬鹿っ！　高月先輩は何も悪くない！」

「殲滅の日記姫なのに？　五十人の男を手玉に取ったような人だよ」

僕はようやく沙和が心配する気持を理解した。学内では未だそういう評価だったのか。日記部の中にいると、分からないものだ。

「それは誤解だぞ」

「甲斐斗、高月先輩にマインドコントロールされてるんだって噂だよ」

「お前は高月先輩がどんな悪人に見えるんだ」

「だって……目つき怖いし」

目つきは外見上の問題だろ。それに僕は少しキツい目つきの方が好きだ。沙和はタレ目だけどな……じゃねえよ、せめて高月先輩に対する評価の元凶を取り除かないと。

「五十人が一度に退部した事件だって、元はといえば平光先生のイ

タズラが原因なんだ」
「はかりちゃんが？　確か日記部の顧問だよね……」

平光先生は女生徒からは親しみを込めてはかりちゃんと呼ばれることが多い。しかし、今の僕からすれば「ちゃん」付けすることすら恐ろしい。

次の更新は……1～2時間後
起きていればね！

9／12　1：59

今回のコメント

『トロフィー』を書いている時に使っているもの

・本文を書いたテキストファイル
・登場人物のテキストファイル（随時つけたし）
・セリフ保管庫　（いつか使うかもしれない会話を書いたもの）のテキストファイル（思いついたときつけたし）
・伏線覚書のテキストファイル（随時つけたし）
・歴代部長の一覧　（エクセルファイル）
・呼称表　（エクセルファイル）
・連載に載せるためのフォームのファイル
・手書きメモ

他の連載だとログラインやプロットをかいたファイルがあったりする。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「はかりちゃんが？　確か日記部の顧問だよね……」

平光先生は女生徒からは親しみを込めてはかりちゃんと呼ばれることが多い。しかし、今の僕からすれば「ちゃん」付けすることすら恐ろしい。

真実を話すことは叶わないが、これぐらい言ってもいいよな。平光先生のせいなのは間違いないし。するとタイミングよくホームルームのために担任が教室に入ってきた。沙和はぶつぶつ独り言をいいながら自分の席に戻っていった。

噂話の速度は時として音速を超えるのかもしれない。いや、声は音だから音速は超えないんだけど、そんなイメージ。

昼休み。沙和が僕へと走り寄ってきた。僕の肩を掴んで俯き、肩で息を切らせる。

「あのね……はかりちゃんに……直接……きいたんだけど……」

「分かりにくいから、呼吸を整えてから言ってくれ」

僕に言われた沙和は大真面目に深呼吸を始めて呼吸を整えた。

「朝言われたこと、はかりちゃんに聞いたの。そしたらアレは、はかりちゃんなりの入団テストだったんだって！」

入団テストと言うところに一切引っ掛からない沙和は置いておいて、平光先生があっさりと認めてくれたことに感謝した。これで高月先輩の誤解が解けるってものだ。

「私、誤解してたよ。高月先輩は何も悪くないんだね」

「誤解が解けたらそれでいいんだよ」

「私、高月先輩に謝りに行く！」

背を向け走り出そうとする沙和の肩を僕は慌てて掴む。陸上部だからって訳じゃないと思うが、走り出すのが早すぎる。

「馬鹿、お前は全然面識ないだろ」
「そっか。夏休みのイベントでも挨拶程度だったしね」
「お前はどんだけ単純なんだよ」
「甲斐斗以上、滝川先輩以下の単純さだと思うよ」
「うわ～。その誤解も解きてぇ～」

と言った会話が繰り広げられたのだ。たったこれだけの会話だ。

今日の授業も終わり、教室を出た僕は渡り廊下を通り過ぎ、旧校舎へ入る。賑やかな二階三階を抜けて、四階にたどり着く。いつも静かな四階なのだが、部室にたどり着くまでに数人の生徒とすれ違った。不思議に思いながら、木製の扉を開く。

いつもなら扉を開ける隙間から高月先輩の日記を読む姿が拝めるのだが、今日は勝手が違った。高月先輩はいつも通り日記を読んでいたのだが、滝川先輩もすでに部室にいたのだ。

「あれ？　滝川先輩、今日は早いですね」
「あ〝あぁ？」

なぜか喧嘩腰の返事。高月先輩もこっちを見ようとしない。僕はまったく状況が読めないので、とりあえずそのままいつもの席に座る。すると滝川先輩が舌打ちをした。なにこの雰囲気。ここは回りくどく行くと、さらに傷口を広げる気がする。直接いくべし。

「な、なにかありましたか？」
「なにかだと？　お前なぁ……」

滝川先輩が立ち上がろうとしたところで、高月先輩が日記から顔

を上げる。表情はまったくの無表情。いや、すこし口がへの字になっている気がする。そして高月先輩は僕に言い放った。

「よく顔が見せれたものね。てっきり、羞恥心が原因で死んだかと思ったわ」

ええ――――っ！　バッサリと斬り捨てられた――っ！　な、なにか悪いことをしたのだろうか？　僕があわあわしていると、滝川先輩がため息混じりに説明する。

「はぁ～。お前、五十人退部の秘密を話しただろう」
「え？　あぁ、小テストのことは伏せましたよ」
「当たり前だ。せっかく人避けができていたのに」
「人避け？」

滝川先輩の話では、元々平光先生に高月先輩のせいにして欲しいと頼んだのは、他ならない高月先輩だったらしい。理由は輪転の誓いをこなせる男子生徒がいなかったからだ。それから男子生徒を無闇に集めるのは辞めたらしい。実はそれに関しては僕は疑問を持っていた。

「この前の中間テストといい『輪転の誓い』の力は重要なのだと思うんですが、どうしてすぐに探さなかったんですか？」

次の更新は……1～2時間後
起きていればね！

9／12　3：33

今回のコメント

・マウントレーニアのカフェラテ・エスプレッソばかり飲んでます。

・文章が結構単純になってる。

第一稿だから言いのだと思うけど、書いてて気になってしまう……

でも書き直し始めたらきりないし、後で後で。今は走りぬこう。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「この前の中間テストといい『輪転の誓い』の力は重要なのだと思うんですが、どうしてすぐに探さなかったんですか？」

滝川先輩はため息をついた。先輩は頭をかきながら面倒くさそうに答えた。

「前も説明しただろ。お前の話を聞いて目をつけていたって」

「春と夏じゃあ期間が開きすぎでしょ」

僕と滝川先輩はにらみ合ったまま、こう着状態になった。二人の状態を破ったのは高月先輩だった。

「今の問題を話し合いましょう。で、草弥君がお節介にも私の誤解を解いてしまったせいで、男子生徒の入部希望が望まないままに復

活してしまったの」

なんだかとても棘がある言い方なんですけど気のせいですかね。それにしても男子生徒の入部希望者が増えたことは、普通の部活動としては良いことなんじゃないだろうか。

僕の考えとは関係なく、高月先輩は話を続けていた。

「ホント、余計なことをしてくれたわね。頼んでもないのにこんなこと……」

高月先輩の言葉に僕はムッと来てしまう。なんだかこの展開がとってもデジャヴュなのは気のせいだろうか。

「いいじゃないですか。高月先輩の誤解は本当のことでしょ」
「私は別に今のままでよかったの」
「よくないでしょ。皆が高月先輩を恐怖の対象としてみてるんですよ」
「別に構わない。分かってもらえる人に分かってもらえれば」
「そんなの僕と滝川先輩しかいないじゃないですか」
「充分じゃない。君は不満なの？」

一瞬、言葉を見失い、黙ってしまう。独り占めしたい（滝川先輩もいるけど）気持がないわけじゃない。だけど、やっぱり身近な人が、周りに誤解されているのは我慢ならないんだ。僕は生唾を飲み込むと、ハッキリとした口調で答えた。

「不満です。大いに不満です」

すると高月先輩は「そう……」といって目を伏せた。長い睫毛がのぞく。少しだけ僕の胸が痛んだ。今ならさっきの発言は取り消し

ますって言えそう。だけど言っていいのだろうか？　僕の迷いに先じて高月先輩は俯きながら言葉を継いだ。

「君は……」
「はい？」
「男子生徒が増えても君は平気なの？」
「――え？」

どこからか笛付きヤカンが沸騰して鳴らす音が聞こえてきそうなぐらい、高月先輩の顔が真っ赤になっていくのが、僕からでも分かった。しばらく俯いて肩を震わせていたけど、顔を勢いよく上げ、声を上げた。

「違う、違う！　唯一君が活躍できる場面を他の生徒に取られても平気なのって言いたかっただけ！　君はプライドないの？　そんなに私とゆ……」
「『私とゆ……』ってなんですか？」

『ゆ……』と言ったまま、高月先輩は動きを止めた。僕もそれに合わせて動きを止める。なんだか動いちゃいけない気がした。数秒後、先輩はぷいっと横を向いた。

「馬鹿じゃないの！」
「はい？」
「馬鹿、アホ、変態！　……いやらしい」
「変態は違うでしょ！　いやらしいのは認めますが」

言った後で後悔した。いやらしいのも認めちゃ駄目！
僕が頭を抱えると同時に「は～あ」と滝川先輩の声が聞こえた。

「はいはい、もう仲良く喧嘩するのは止めてくれ」

「してません！」高月先輩と同時に答えてしまった。滝川先輩はジト目で僕と高月先輩をニヤニヤ見返す。僕まで顔が赤くなってしまった。

僕らの反応を充分堪能した滝川先輩は腕組みして、僕へ話しかける。

「とにかくだ。お前の気持はありがたいが、もうウチの部は部員が必要ないんだ。わかるだろ？　テストにこれ以上、誰も巻き込みたくないんだ」

「……わかりました」

僕の存在価値はさておき、二人が望んでいないことを無理に勧めるわけにはいかない。渋々了承した。

「コンコン♪　入りますよ～」

いつも通り、話の終わりを待っていたかのように、扉が開いた。もちろん、あらわれたのは平光先生。今日は青を貴重とした着物で登場した。

「はいはい～、熱々なお二人には悪いですが、小テストの時間です～」

「誰が熱々ですか！」また高月先輩と同時に答えてしまった。

「あれ～。私は別に亜也っぺと草っちなんて言ってないのに～。ユーミン置いてけぼり？」

僕と高月先輩が赤面して下を見た瞬間、まばゆい光が辺りを包んだ。こちらもいつも通りいきなり小テストが始まる。

光が晴れてくると、辺りがうかがえた。どうやら今回は野外らしい。しかも見覚えがあった。何の変哲もない、高校近くの公園だった。少し広めの公園で、池なんかもあったりする。家族連れやカップルが良くいる場所だ。

「ここって輪転公園ですよね」

「そうだな」

僕の質問に答えたのは滝川先輩だった。隣にいる高月先輩は、何か気が抜けたように目の前の池を見つめている。

「高月先輩？」

何度か先輩を呼んでみたが、反応がない。しかたないので、肩を叩いてみた。すると高月先輩は肩を震わせて驚いていた。ゆっくりと僕へ振り向くと、高月先輩はなんとも微妙な顔をしていた。喜怒哀楽がハッキリしない、だけど少し弛んだ表情。

「高月先輩。今回の小テストは……」

僕が質問すると、急に表情を固くした。だけど、先輩は僕から視線を反らしてしまう。

「大丈夫。ここでは何も起きないから」

「どうして分かるんです？」

「私、ちょっと飲み物買ってくる」

「え？　ええっ？　それってどういう……」

僕の話を聞かずに高月先輩は走り出していた。どうしていいかわ

からずに僕は滝川先輩を見てしまった。滝川先輩は、目を瞑りため息をついた。

「高月先輩、どうしたんですかね」
「あぁ、あれね。きっと照れてるんだよ」
「どうしてですか？」
「今回は……」

と言いかけて、滝川先輩は片目を開けて僕をちらりと見た。なにか意味あるのか？

「美国進の日記世界だからだ」

つーことで、今日はこれまで。
んじゃ～ね～。

9／13　7：26

今回のコメント
・昨日の夕食。
親子丼。
以上。（少なっ）

半歩でも前進、とにかく前進。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

高月先輩の姿が見えなくなって、僕はなんだか胸騒ぎがしていてもたっていられなくなった。一歩だけ前に足を進めた時に滝川先輩が僕の肩を掴んだ。

「まぁ、待てよ。放っておいても戻ってくるさ」
「でも……」
「美国進の世界だ。本人が出てくることはない。語り部は登場しないのがルールだ」

確かに今までの日記世界にも本人は登場したことはなかった。今回も同じであれば美国進はいないはずだ。
「だけど、気持の整理は必要だろう。待ってやるのも思いやりの一つだと思うがな」

「……わかりました」

僕は滝川先輩に勧められるまま、近くのベンチに腰かけた。しばらく、目の前にある池を何も考えずに見つめていた……というのは建前で。実際には高月先輩のことがぐるぐると頭を駆け巡っていた。何か別のことをしないと頭が変になってしまいそうだ。僕は半ば無理やり、滝川先輩に話題をふった。

「そういえば、滝川先輩も日記部だということは、毎回日記を書いているんですよね」
「そうだな。亜也に提出もしているぞ」
「読ませてください」

言うや否や、後頭部に強烈な衝撃があり、僕はあやうくベンチからこけそうになった。
「痛いじゃないですか！」
「当たり前だ！　お前、先輩でしかも女の子の日記を見せてくれって言ったんだぞ」
「――はっ！？」
「おい、それは『女の子にデリカシーのない事を言った』という後悔だよな？　『そういえば女の子だった』っていう気づきじゃないよな？」
「えへへ……」
「なに中途半端な笑いで誤魔化してるんだ！」

次の瞬間、僕はまた後頭部を叩かれた。滝川先輩はしばらく腕組みをして、黙ってしまう。また余計に空いた時間ができてしまい、僕も無言になってしまった。

仕方がないので辺りを見渡して、時間を潰すことにする。池、芝

生の生えた広場、みょうちくりんな運動器具、子供頃はよく来たこの公園だが、最近来ないうちに随分変わったなぁ。なんて感想を無理やり考えていた時にあることに気づいた。

「滝川先輩。変です」
「なんだ？」
「公園に誰もいません。動物もいません。これ、変ですよ！」

すると滝川先輩は瞑っていた目を開き、僕を見てため息をついた。

「美国進の日記だからだろ？」
「どういういみですか？」
「大した記述がないんだろ。あくまでも日記の具現化だぞ。日記にないものまで再現されないだろ」

滝川先輩は言い切った後、わざわざ「誰かさんも大した記述がない日記だったな」と僕の顔を覗き込んだ。僕は視線を反らして横を向いた。

そんな僕を鼻で笑い、滝川先輩は池に向かい直した。

「こんな機会も滅多にないから、ちょっと言わせてくれ」

よし、会社に行くべ。

9／14　7：35

今回のコメント

・昨日の夕食。
トンテキ（テレビ見てたら食べたくなった）
焼そば
浅漬け
以上。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

会話文がとっちらかって、文章の体を成しておりませんので、整理してから続きを載せたいと思います。

例えばこんなの。会話文例
（文字数稼ぎとも言う）

「もし、お前が亜也の立場だったらどうする？」
「え？」
「美国ではなく亜也がいなくなったらどうするってきいているんだ」
「いなくなるとは？」
「来年にはいなくなるぞ」
「……そんなのまた会えるじゃないですか」
「留学するって行ったら？」

「夏休みでも会いに行けばいいでしょう」
「会いにいけない場所に行ったとしたら？」
「……どういう意味ですか？」
「会えない理由が自分にあったとしたら？」
「滝川先輩？」

とか

「どうして先輩はそこまで知ってるんですか？」
「さっき頼んだことも全て、私の母からの伝言なんだよ」
「母？　滝川先輩の母親って……」

あとこんなの

「俺、先輩に憧れているんですよ。早く追いつきたいって」
「憧れか……ずるいね」
「え？」
「だって、いつまでたっても君は後輩で私は先輩だもの」
言っている意味がわからない。
「君の先に見えるのは本当に私だけなの？」
「どういう……ことですか？」
「一度先輩になってみる？」
「ええっ！？」
「あはは、嘘、嘘」
これどこかで書いた気がするね。

つーことで、会社に行ってきます。

９／１５　２３：４３　※ケジメとして。

今日で９月１５日を過ぎてしまいました。
もはや誰も忘れてしまっているのかもしれませんが、
連載を始める時に９月１５日目処で第一稿（２００ＫＢ程度）を終わらせると書いておりました。

しかし、実際は１３０ＫＢ程しか進んでおらず、お話も全て書ききっていない状況です。
すべて自分の不徳の致すところでございます。
ごめんなさい。

９月１５日締め切りの事につきましては、
たとえ、読者様の誰も覚えていなくとも、自分が覚えています。
読者様が「大したことではない」と考えていても、自分は「大したこと」だと考えています。
自分の怠けグセや実力不足が原因でございます。
本当にいい加減な人間です。

とは言え、いつまでも自己否定をしていても、なにも進みません。
行動でしか皆様に、自分に、応える方法はないと考えておりますので、過ぎた事を反省し、目標へむけ邁進いたします。

この度は誠に申し訳ございませんでした。

目標にしていた賞の締め切りは９月３０日ですが、中途半端に頑張りますとは言えないので、今の自分の執筆ペース、書きたい量等を考えたところ、１０月末～１１月中の賞への投稿を考えています。

執筆ドキュメンタリーとしての連載なので、あえて書かせていただきました。
駄目な自分も、反省して進む自分も、包み隠さず、執筆しているリープを書いていく、それはこの連載の意義でございます。

以上を読んでいただき、それでも構わない方は今後ともよろしくお願いいたします。

9／16　1：39

いつも通り、今回のコメント

・今日の夕食。

餃子、シュウマイ
困った時のゴーヤチャンプル
ごはん

以上。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

あらためて滝川先輩から、そういわれるとちょっと緊張する。僕は背筋を伸ばした。

「これからが正念場になってくると思う。だから亜也を頼むな」
「急に何言ってるんですか、滝川先輩だっているでしょ？」
「『輪転の誓い』はお前と亜也の間でしか使えないし。だから、私では救えない」

滝川先輩は腕組みしながら、目を瞑って俯いた。なにか奥歯にモノが挟まったような言い方に僕は釈然としない。「私では役に立たない」というセリフは何度か聞いた気がする。『輪転の誓い』は異性同士でしか使えないから、と言う理由は分かる。だけど、それだけじゃないでしょうに。できること、っていうのは他にもあるはずだ。

僕の考えとは関係なく滝川先輩は話を続ける。

「亜也は素直でいい奴なんだ。好きな男が『髪をかきあげながら日記読む姿が好き』と言ったら、その男がいなくなった後でも律儀に続けているような真面目で馬鹿なんだ。それまでは後ろで髪を留めてたくせにな」

またしても美国進か。どこまで高月先輩に影響を与えているんだ。あのお気に入りの姿までが美国印だったとは。その情報はいらなかったなぁ。

「真面目で馬鹿なだけに、思い込みも激しい。いらぬ罪悪感も抱く」

「罪悪感？」

「例えば……自分が今を楽しんでることさえ、美国に悪いと思っている……とか」

「そんな馬鹿な。なんでもかんでも美国進と絡めるなんて変ですよ」

滝川先輩は僕の言葉に「だろ？」と笑いかける。

「だからさ、教えてやってくれよ。過去にこだわるのも必要かもしれないが、本当に大切な物は何かって。お前がアイツを過去から救ってやってくれ」

「本当に大切なものですか……」

正直、僕にもわからない。分からないものを教えてやってくれとか言われても困る。よほど僕が難しい表情をしていたのか、滝川先輩は苦笑していた。

「お前は楽しい思い出が欲しくて日記部にはいったのだろ？　私や

亜也が目的ではなかったはずだ」

確かに。多少高月先輩の美貌に惹かれた部分もないわけではないが、基本的には卒業式いわれた言葉が発端だ。でも、それと本当に大切なモノが関係するのかな？

「それまでは何もない生活でしたから、日記部に入って感謝はしてますけど……」

少し俯いた僕をじっと見つめる滝川先輩の視線を感じる。先輩は真剣に僕を見つめている。膠着状態が少し続いたが、滝川先輩がため息混じりに話を続けたことで、解放された。

「考え方によっては、そのほうが幸せだったかもな。手にしたものが、不意になくなってしまった失望を感じなくてすむ」

今度は僕が滝川先輩を見つめる番だった。先輩は舌打ちをして視線をそらした。

「美国をなくす前の亜也も幸せそのものだった。でも……」

いなくなったことで、変わってしまった、と言いたいのだろうか。入部した日、あの涙をみてしまった以上、明確な否定はできなかった。僕が幸せにしますと言える立場でもないし。

視線を反らしたまま、滝川先輩は僕に質問する。口調が少しきつい。

「もし、お前が亜也の立場だったらどうする？」

「え？」

「美国ではなく、亜也がいなくなったら、どうするって訊いているんだ」

滝川先輩の真意が読めない。高月先輩の立場を理解して欲しいとでも言いたいのだろうか。それなら十分分かっているつもりだし、例え話としても酷い気がする。僕は少し意地悪して分からないフリをする。

「いなくなる？　なぜです？」
「来年にはいなくなるだろう」

高月先輩は三年生だから、留年でもしない限り卒業して高校からはいなくなるだろう。成績も優秀だと聞くし、確実だな。

「そんなの遠くへ行かない限り、また会えるじゃないですか」
「海外へ留学するって行ったら？」
「夏休みでも会いに行けばいいでしょう」

なんだか不毛なやりとりな気がする。将来の例え話としては、簡単な問題だった。第一、会いに行くなんて僕じゃなくても滝川先輩が真っ先にしそうなことだ。

滝川先輩も同じことを感じていたようで、だんだん口が尖っていくのがわかった。やがて気持に整理がついたのか、口を一瞬一文字にして、口元に力を入れた。

「じゃあ、亜也が会いに行けない場所にいったとしたら？」
「……どういう意味ですか？」
「そして会えない理由が自分にあったとしたら？」
「滝川先輩？」

「答えろよ」

僕の言うことを無視して、矢継ぎ早に質問を繰り返す。変にムキになっている気がした。僕だって同じ質問を滝川先輩の口から訊きたいよ。大切な人が目の前からいなくなったらどうしますか？　って。だって二人にとっても大切な人でしょ、高月先輩は。

滝川先輩は僕の顔まで数十センチのところまで近づいていた。距離が近いことをようやく気づいたようで、咳払いしながら距離を置いた。

「話すぎたな……」

ポツリと言った後、そっぽを向いてしまった。しかし、気まずい雰囲気はそのまま。滝川先輩も気まずさを感じていたようで、話を無理やりまとめようとした。

「とにかく平光の試験に合格するにはお前の力が必要なんだ」

話が最初に戻った。僕はここで気になっていたことを訊こうと決意した。それは日記部の部活動内容そのものについてであった。

「前から思っていましたが、試験ってなんなんですか？　小テストを毎回受けているけど、結果を教えてもらったこともないし、合格基準も知らないんですよ」

「心配するな。結果を知っているのは部長だけだ」

「高月先輩だけですか……」

滝川先輩は頷くと「私だって知りたいよ」と呟いた。きっと本当に知らないんだろう。とはいえ、ここまで僕に頼むなんて滝川先輩

が知っている事実はまだある気がした。

「どうして先輩はそこまで知ってるんですか？」

僕は考えるのを止めた。聞いてみるのが一番だ。上手くかわされるのがオチかもしれないけど。滝川先輩は僕の言葉に瞳を丸くして僕を見た。そして腕組みしながら「う～ん」と顔を捻り考えた末、こちらに向き合った。

「よし、お前が亜也を最後まで助けると約束してくれるなら教えよう」

「無論答えは『はい』です。言われるまでもないです」

すると滝川先輩はふうと一息吐くと、意を決したように瞳に力が入った。

「さっき頼んだことも含めて全て、私の母からの伝言なんだよ」

「母？　滝川先輩の母親って……」

滝川先輩の口元がわずかに歪む。開いた口からは食いしばっている歯が僅かに覗く。わずかに言いよどんでいるようだった。

「日記部の部長だった……第六十六期生、滝川美琴」

僕は口をぽかんと開けたまま動けなかった。そんな話、一度も聞いたことがなかった。だが、母親が部長なら色々知っていても無理はない。知らないと言ったのは、高月先輩に関わることだけで、概要はたいてい滝川先輩に教えてもらったのだから。

「へぇ～、じゃあ後で日記を探してみよう。本棚上段の豪華な本に

ありますよね」

瞬間的に滝川先輩は僕から視線を反らす。

「……すまんな。母の日記は下段の普通のノートにあるんだ」

「どうしてですか？」

滝川先輩はそれ以上この質問に答えることはなかった。しばらく、無言の状態が続いた。

それにしても高月先輩は遅い。僕はだんだん居心地の悪さを感じつつあった。妙に緊張するし、美国先輩の日記世界をもっと見てみたい気持も高まってきた。うーん、お腹辺りがムズムズする……よし。僕はベンチから立ち上がった。

「僕、高月先輩を探してきます」

滝川先輩は無言で頷いた。僕はそれを合図に歩きだした。歩いていたのは数歩だけ、後は小走りで辺りを探索した。

本当に誰もいない。詳細な記述がないから、生き物がいないのだという。だとすると僕の日記も同じ運命を辿る。もし、後輩が僕の日記世界を見たらさぞかしガッカリするだろう。

だけど、言い訳させてもらえば、単純な記述しかないと言うことは、本当に印象に残っているものしか書かないということだ。些細なことじゃなくて、思い出として残しておきたい事柄だけだ。

でも。これからはもう少し詳細に書こうと思う。反省する。

だが、今回の場合は良い方面に作用した。余計な人がいないので高月先輩が探しやすい。ほら、少し遠くで人影が見えた。長い黒髪。絶対に高月先輩だ。

僕は高月先輩を大声で呼んでみた。しかし、先輩はまったく反応しない。さらに近づく。少しつり目の少女が立っている。少し大声なら余裕で気づく距離だ。

「たーかーつーきー先輩っ！」

すると、先輩がこちらを向いた。目つきのせいで、睨まれたような気がして少し怯んでしまう。いい加減馴れろよ、と自分に言い聞かせて、足を進める。先輩はこちらを睨……じゃなくて見つめたまま、動かない。もう数メートルの距離だ。僕はさらに声をかけた。

「高月先輩、探しましたよ」

すると高月先輩は眉間にシワを寄せて僕に言い放った。

「はぁ？　アンタ誰？　気安く話しかけないでくれる？」

どうやら冗談ではなく、本当に睨まれていたようだ。僕は苦笑いするしかなかった。

今日はここまでと言うことで。

無理しない、無理しない。

9／17　1：01

今回のコメント

・今日のU－HAN！

ごはん
野菜炒め
炒り卵
豚バラと里芋の煮たもの。

以上。

さて今日も少しだけ進めますか！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　なぜ睨まれている？　よく分からないまま自分の過去の行動を考える。怒らせるような事はいっぱいした。だけど、どれも解決済みのはずだ。高月先輩の誤解を解いたことをまだ怒っているのかな。とりあえず軽いノリで様子を伺うことにした。

「嫌だなぁ、高月先輩。なに怒っているんですか？」
「はぁ？　なにアンタ。邪魔なんだけど、死んでくれる？」

　死んでくれる？　なんてヒドイ！

高月先輩の態度はまったく変化なし。むしろもっと怒っているように思えた。確かに先輩の性格から言って、怒っていることに対して軽いノリで行くと、火に油を注ぐようなものだと思う。

じゃあなぜ、おこなったのかと言えば、それしか思い浮かばなかったからだ。開き直り？　あぁ、開き直りだとも！　ただ、収穫はあった。注意すべきは、僕への呼称だ「君」ではない「アンタ」だ。これは完全に怒っている……の？

「もう、勘弁してくださいよぉ。怒っているのならハッキリ言ってください。僕は美国先輩とやらに比べて鈍感なんですから」

すると高月先輩は瞳を大きくして、僕に詰め寄る。

「アンタ、美国先輩のこと知ってるの？」
「知ってるも何も、教えてくれたじゃないですか」
「誰が？」
「高月先輩が」

僕の胸倉を掴んだ先輩は、ぐっと顔を引き寄せた。顔が近い。……が、そこで妙な違和感を覚えた。いつもの高月先輩と少し違う気がする。なんというか少し幼い。瞳にはいつもほどの力が入っていないのか迫力不足だ。髪も気のせいか短い気がする。とはいえ、だいたい高月先輩なのだ。〝だいたい高月先輩〟は首を傾げながら僕に問いかける。

「アンタ、誰？」
「……本気で言ってます？　一年三組の草弥甲斐斗です。はじめまして」
「あ、あぁ……はじめまして」

僕は冗談で言ったつもりなのだが、高月先輩は手を離して、ぺこりと頭を下げた。この人、本気だ。そして次の言葉に僕は衝撃を受けた。

「私は二年一組、高月亜也です」

二年？　三年じゃなくて？　僕の頭が混乱する。冗談だよな。先輩をまじまじと見つめる。すると顔を赤くした高月先輩は横を向いた。

「じ、ジロジロ見ないでくれる？　夕実と同じ一年のくせに」

「夕実？　滝川先輩のことですか？」

「いや、アンタ、同い年でしょ」

僕は言葉につまってしまい、高月先輩をさらに見つめてしまった。先輩は完全に口を尖らせ、怒っているように思える。さて、今の現象をどう頭で処理しようか。

結論。受け入れよう。早い、あぁ早いとも！　僕はずいぶん物分りが早くなった。それもこれも日記部での部活動が原因だ。こんな不思議な事ってありえる。そう。この程度、とってもありふれた不思議だ。

「なるほど、二年生の高月先輩ね。理解しました」

「意味わかんないんですけど。説明しなさい」

「不思議なことに説明は不要ですよ」

今度は高月先輩が僕を見つめる番だった。先輩は僕の頬を軽く叩いて反応をうかがったり、周りをぐるぐる回る。顎に手を当て、考える仕草をした高月先輩は、ぽんと手をうった。

「――あっ！　アンタ、もしかして日記部の後輩？　平光先生のテストね！」

考えれば簡単なことだ。ここは美国先輩の日記で、高月先輩は美国先輩を慕ってた。日記に過去の高月先輩が登場しても不思議じゃない。

人も動物も存在しない世界で、唯一存在する存在、それが高月先輩なのか……。美国進がいかに先輩のことを気にかけていたか伝わってくる。正直、愉快な思いはしないが、気持ちは分かった。僕の日記でも同じようなものだから。

次、更新するかしないか、それが問題だ。
気力があればね！（無責任）

更新するとすれば1～2時間後。

9／19　23：29

今回のコメント
・今日のGO－HAN！
ごはん
焼き魚（あじのみりん干し）
ゴーヤチャンプル（最後の逆襲）
以上。

グッスリ休憩を二日とってしまった。
いや～、なんかすぐ考えすぎて寝ちゃうんだよね。（言い訳）
んじゃあ、仕切りなおしていきましょう！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊

　今度は高月先輩が僕を見つめる番だった。先輩は僕の頬を軽く叩いて反応をうかがったり、周りをぐるぐる回る。顎に手を当て、考える仕草をした高月先輩は、ぽんと手をうった。
「――あっ！　アンタ、もしかして日記部の後輩？　平光先生のテストね！」
　考えれば簡単なことだ。ここは美国先輩の日記で、高月先輩は美国先輩を慕ってた。日記に過去の高月先輩が登場しても不思議じゃ

ない。

人も動物も存在しない世界で、唯一存在する存在、それが高月先輩だった。美国進がいかに先輩のことを気にかけていたか伝わってくる。正直、愉快な思いはしないが、気持ちは分かった。僕の日記でも同じようなものだから。

「へー、アンタ、私より何年下なの？」

「二つです」

僕の答えに高月先輩は頭を抱えて天を仰いだ。なんというかオーバージェスチャーだなぁ。

「なんだ～、すぐ下じゃん。もっと何百年先から来ましたとかロマンないの？」

「そんなＳＦみたいなことが簡単にあるわけないでしょ」

「つまんない」

高月先輩は本当に詰まらなさそうに口を尖らせて拗ねてみせる。感情表現が比較的ストレートだ。今まで見たことないような先輩の態度に僕は違和感が拭い去れない。二年生って言うことは、たった一年前だというのに。なんだか新鮮だ。

「はっ。こんな事してられない、美国先輩を探さないと。一刻でも早く御堂（みどうまり）真理の思い出を私で塗り替えるんだから」

「御堂真理？　誰ですか？」

すると高月先輩は僕に詰め寄り、「はぁ？　常識なんですけど」と言った。

「美国先輩の想い人。先輩が一年だったとき三年だった日記部部長。私とは入れ違いだったから直接はしらないけど。アンタ、日記部だったら歴代の部長ぐらい知っておきなさいよ」

……想い人って。言葉はさておき、美国進に好きな人がいたなんて初めて聞いたぞ。まてよ。この高月先輩は一年前の高月先輩であって……色々内緒にしている情報を知っているかも。と、僕が思ったのとほぼ同時に高月先輩が右手を高々と上げた。

「はいは～い、質問！」

「な、なんですか？」

ずいっと高月先輩は僕に近づいて、やや神妙な面持ちで質問をした。

今日は多分、更新すると思うよ。

更新するとすれば1～2時間後。

9／20　0：40

今回のコメント

・雨ばっかり降ってるね。

そんな日でもマウントレーニアのエスプレッソは欠かせないよ！

あと麦茶もね。

あと、音楽もね。

あと……（もういい）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ずいっと高月先輩は僕に近づいて、やや神妙な面持ちで質問をした。

「正直、一年後の私ってどんなの？」

「どんなのとは？」

僕の質問に高月先輩は一歩後退すると、後頭部に手を当て瞳を細めた。

「いや～、外見方面？　この美貌に磨きがかかってるっていうの？　大人の魅力？」

「は、はぁ……」

「周りの人達が放っておかないぐらいのフェロモンが溢れている？」

「確かに、周りの人が放っておけない感じにはなってます」

嘘はいってないぞ。殲滅の日記姫として周りの人が警戒してやまないってだけの話だ。

「本当に？　やっぱり、私、凄いわ。美国先輩に次期部長って言われるだけあるわ。っていうか、二年生は私一人だけどね。って全部言わせないでよ～！」

高月先輩は「おほほほ」と口に手を当て笑ながら、背中をばんばん叩いてくる。大して痛くないし、まんざらでもないので、僕は苦笑いをした。

本当にこれが高月先輩なのか？いや、考え直せ。これはあくまでも美国進からみた高月先輩なのだ。きっとそうだ。そうだと誰か言ってくれ。しばらくして「は～あ」と言って笑いつかれたのか、高月先輩は下を向いた。なんだろう。自分をほめ過ぎて疲れたのかな？

すると先輩は急に顔を上げ、「笑顔」と題された絵を貼り付けたような、笑みを浮かべ僕へと一歩近づいた。妙な違和感に一歩後退する。

「もう一つ聞いていい？」

うわー、作られた笑顔のまま質問だよ。ろくな質問じゃないな、絶対。しかし、避けるわけにも行かず、引きつった笑顔で答えた。

「なんですか？」

僕を真正面から貼り付けた笑顔のままじっと見つめた後、ゆっくりと言葉を告げた。

こつこつと行ければ良いなぁ。
更新するとすれば1～2時間後。

9／20　1：43

今回のコメント

・お風呂に入るべきか、朝シャワーにすべきか、それが問題だ。
ということでお風呂に行きまーす！（相変らず要らぬ情報）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　僕を真正面から貼り付けた笑顔のままじっと見つめた後、ゆっくりと言葉を告げた。

「……一年後の私は幸せ？」

　直球。ド直球きたよ。笑顔から一変、先輩は視線を斜め下に逸らして、口をきゅっと閉めてなにかを堪えているような表情。まるで運命の審判を待っているかのようだ。

　運命を委ねられた僕は、どう答えたら良いのか分からない。本当の事を言ってしまってよいのだろうか……しばらく考えた末、結局僕ははぐらかしてしまった。

「どういう意味ですか？　幸せの定義を教えてください」

　すると眉を八の字にさせ、高月先輩は口を歪ませた。わっ、怒っ

てる。

「あなた回りくどいわね。幸せって言ったら分かるでしょ」

誤魔化し失敗。高月先輩は口を尖らせて、頬を少し膨らませた。それにしても、これだけのやりとりで、先輩が喜怒哀楽を表現できることに僕は驚いていた。

無邪気と言っていいのだろう。加えて自分の幸せを疑っていない表情。目に力を感じないのは眉間に力が入っていない証拠。やや幼く見えるのは年齢のせいもあるだろう。『素直でいい奴』滝川先輩が言っていた事は嘘ではない。

だけど近い未来、彼女はとてもつらい体験をする。

この表情も消えて、基本無表情になる。無口なのに、口に出すと突き放すような言葉が出てくる。さらに、いつも自分だけでなんとかしようとする。一貫して変わらないのは美国進の影ばかり追っていることぐらいだ。

今僕と話している彼女に一年後の高月先輩の姿を話したらどうなるだろうか。失望？　納得？　僕は好奇心を抑えられそうにない。

「先輩、わざわざ僕に言わせるつもりですか？」

僕の言葉に高月先輩は頷きながら答えた。

あわてないあわてない、一休み一休み（休んでばっかりの人）

更新するとすれば1～2時間後。

９／２０　２：３８

今回のコメント

・ＳＦでよくあるよねこんな場面。

タイムスリップして……

若い頃の親に会うとか
小さい頃の好きな人に会うとか
タイムパラドックスとか絡んでね～、自分の存在、好きな人の存在が消えちゃう！なんてシチュエーション。

僕はそういうのが大好きなんです。

一度はやってみたかった設定でした。
今回書けて満足、満足。
(正確にはタイムスリップしてないし、パラドックスも起きないけど)

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊

僕の言葉に高月先輩は頷きながら答えた。

「言って欲しいの……」

僕はできうる限り、真剣な表情をした。高月先輩は負けじと真剣な表情で僕を見つめた。やはり迫力欠ける。やっぱり現在の高月先輩とは違う。美国進からみた先輩は表情豊かで真っ直ぐな一年年下の女の子だったのだ。

確かに迫力欠けるが、一生懸命で澄んだ瞳が僕を射抜く。「……やっぱり駄目だ」いつの間にか僕はため息混じりに答えていた。

「一年後の先輩は幸せすぎて腹立たしいぐらいですよ」

「本当？」

どの感情にも当てはまらない不安定な先輩の表情。僕は頷いて、肯定した。どうせ日記の中の出来事だ。この場だけでも幸せにしてあげよう、と僕は自分に言い聞かせた。

「本当です。毎日のように美国、美国って。僕も一応男――」

「よしっ！」

「うわわっ」

話している途中で、高月先輩は僕に抱きついてくる。体の右側面がとっても密着してる。さらに「良かった、良かった」と言いながら僕を揺さぶった。

今、世界の感覚は僕の右半分だけのものだった。まずい、色んな意味でまずい。揺さぶられると、先輩の香りがどんどん僕に流れてく……あぁ。

「良かった。本当に良かった……」

いつの間にか高月先輩は僕に抱きついたまま、泣いていた。僕はなんだか胸の辺りに刺が刺さったように傷んだ。先輩は僕から離れると何度も目をこすっていた。

ぬか喜びさせて良かったのだろうか。僕は先輩の喜びの様を見ているとだんだん居たたまれなくなってきた。

何度も小さくガッツポーズをしている高月先輩の言葉が漏れ聞こえる。

「やった……『輪転の呪い』は解けたんだ」

「『輪転の呪い』？　『輪転の誓い』じゃないんですか？」

細かく刻むねぇ。

と言うことで今日はここまで。

９／２０　２２：３５

今回のコメント

・今日の夕飯（今日は普通に）
ご飯。
マーボー茄子（なんかこれ多くない？）
イカの塩辛（急に食べたくなった）

以上。

台風だ。
なぜこっちに来る！

そして今日も始まるコツコツタイム！
＊＊＊

何度も小さくガッツポーズをしている高月先輩の言葉が漏れ聞こえる。

「やった……『輪転の呪い』は解けたんだ」
「『輪転の呪い』？　『輪転の誓い』じゃないんですか？」
「ああ、はかりちゃんは誓いって言うよね。でもあれは呪いそのものだし」
「どういうことですか？　詳しく教えてください！」

僕の言葉に高月先輩は喜びの表情が一気に解けた。眉を八の字にして困惑の表情をみせる。瞬間的に「まずい」と僕は心の中で口走った。

「なんで？　もう一年後は呪い解けたんだよね」
「え？　えっと……」
「あっ……そっか」

高月先輩は俯いて黙り込んでしまった。まずい、バレてしまったのか？　僕は恐る恐る先輩の顔を覗き込もうと近づく。

あと一歩で表情が伺えるという瞬間、勢い良く先輩の顔が上がってきた。僕はなんとか上体を逸らしてかわす。あぶないっ！

「なるほど～！　呪いが解けた後だから、私に教えてもらえなかったんだよね？」

瞳を細め、口からは白い歯が覗く。笑顔の見本のような表情を僕に見せた。どうやら、良い様に解釈してくれたようだ。

「あ……ええ、そうなんですよ。先輩達の口が堅くて～」
「アンタ、よっぽど信用されてないんだね」
「ぐっ。それを言われると……」
「もしくは本当に大切にしたい人なのかな？」
「……はい？　今なんと？」
「いいねぇ。その聞き逃し方、私は好きだよ」

いや、本当に落ち込んだから、聞こえなかったんですよ。何度か聞きなおしたけど、高月先輩はなんて言ったか教えてくれなかった。

手堅く送りバントのような野球が好きです。落合野球万歳。
更新は1～2時間後

９／２０　２３：５０

今回のコメント

・スーパーカップにチーズケーキ味があるらしい。
どんな味なんだろう。
妹に言われて買ってきたものの、一口も食べさせてもらえず終わる。
※妹は現実にいる妹です。一児の母。二次元でも妄想でもありません。

つーかこれ執筆になんの関係もないし！
あるだろう甘味は頭にやさしいのだよ。
その優しさ僕だけにください……（逃げ腰）
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

いや、本当に落ち込んだから、聞こえなかったんですよ。
何度か聞きなおしたけど、高月先輩はなんて言ったか教えてくれなかった。

「一年後の私が黙っているって事は何か理由があるんだと思うけど。少し教えてあげる」
「全部教えてくださいよ」
「駄目よ。一年後の私に悪いもの」

一年後の自分に義理立てなくても良いじゃないか。少しは教える

って言ってるんだし。

「とりあえず、部長が代々持つ日記帳を見せてもらいなさい」
「あのハードカバーの日記帳ですか」
「それは落第した部長達のものでしょ」
「落第？」

僕の質問には一切答えず、先輩は話を続けた。

「とにかく、部長が持つ日記帳は和紙でできています。和綴じの日記帳だよ」

和紙？　どこかで和紙を見かけたような気がする。あんまり思い出せないけど。

「もし、一年後の私が見せる日記帳が和紙でできた日記帳ならば、輪転の呪いは続いている」

確かに今時日記帳が和紙なんて高校生はいないはずだ。確かに目印となる。だけど気になるのは呪いってところだ。

「呪いが続いているとどうなるんですか？」
「卒業試験は続いてるって事」
「卒業試験？　それって一体なんですか！」
「……草弥君、痛いよ」
「えっ！？」

いつの間にか、先輩に迫らん勢いに近づいていた。気づけば両肩を掴んでいるじゃないか。僕は先輩から手を離して、視線を逸らした。

高月先輩は俯いて二の腕を摩りながら、呟くように言った。

「もう終わり。痛くしたから」

例え一打大量得点のチャンスでもスクイズで一点取ります。

更新は1~2時間後

9／21　0：56

今回のコメント

・前に書いた「トロフィー」のメモが見つかった！

読んでみたら、ぜんぜん違う場面のメモだった！

ぎゃふんっ！

暗い部屋での一人ぎゃふん。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

高月先輩は俯いて二の腕を摩りながら、呟くように言った。

「もう終わり。痛くしたから」

僕は再び先輩を見つめる。高月先輩はすでに僕を見ていた。眉間に力が入り、睨みつけるように。

「後は自分で見つけなさい。会話してわかった。一年後の私がアナタに話をしなかったわけが」

「話をしないわけですか？」

高月先輩は僕の言葉に反応して、小さくため息をついた。眉間に入った力が抜け、やや、困惑したような表情で、僕に答えた。

「だって、アナタ一生懸命だもの」

自分だってそうだろ、と言いかけて止めた。なぜだか分からないけど、いつの間にか一年後の高月先輩に話しかけるように僕は緊張していた。

「……一生懸命は悪いことですか？」

すると先輩は首を振った。口元が少し緩んで苦笑しているようにも見えた。

「悪くないよ。でもね……」

それ以上は何も言う気がない。ハッキリと言われたわけじゃないけど、先輩は黙り込んでしまった。

何もない周りの風景は時間が止まっているかのように感じる。だけど先輩が黙っている間は永遠に続く拷問のように感じた。近くにいて反応がないことがこんなにも辛いとは思わなかった。そして数秒か数分か、よくわからない時間が過ぎた。

不意に先輩は「よし」と言って、僕より先を見つめた。

「そろそろ私、美国先輩を探しに行かないと」

ようやく沈黙の拷問から開放された僕は思わず、安堵のため息をついてしまった。

本当は先発ピッチャーには完投して欲しいけど、七回からは黄金リレーでいきます。
手堅く小刻みに。
更新は1～2時間後

9／21　1：58

今回のコメント
・第一稿といいながら、そこそこ考えて書いている箇所がある。
例えば下の文章で「瞳がきらきら」の部分。
希望に燃えた「きらきら」なのか。
かなしくて涙で「きらきら」光っているからなのか。
とか、節々で入れているんだけど、ここは二回三回読んでくれた人が気づけばいいと思う。

他には「一生懸命は悪いことですか？」部分とか。

自分の好きなマンガや小説で時間が経って読み返したときに、「あれ？　あの時の解釈は間違っていたのかな？」とか思って、新鮮な気持になったあの感覚を呼び起こすキッカケになれば。
言われなくても分かってるよっていう人はリープを笑ってくださいな。

第一稿は風景、表情、服装等の描写関係は捨ててます。あとから付け加える。雰囲気や状況を伝える重要な描写なら書くけど。
先を暗示する描写とかは後から加えたほうが、伏線にもなるし。

うむ、素晴らしい言い訳じゃ！
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ようやく沈黙の拷問から開放された僕は思わず、安堵のため息をついてしまった。
先輩が僕をじっと見ていたので、ため息を途中で止めて、咳払いをした。

「コホン。すいません。お引止めしちゃって」
「いいよ。むしろ『ありがとう』って言いたい」
「良い情報ももらったし。私負けない。だって私の高校生活、美国先輩と共にあったんだもの。美国先輩を取ったら私は空っぽだよ」

高月先輩は柄にもなく「ははは」なんて空笑いをした。冗談なのか本気なのか僕には分からない。でも先輩の瞳はきらきら光っているように見えた。

「だから今から先輩を捕まえに行って来る。もう逃がさないって」

高月先輩は僕に微笑んだ。でもさっきまでと違ってどこか弱々しい笑みに思えた。小さく手を振って先輩は歩き出した。僕もつられて手を振る。やがて、先輩は僕に背を向けて歩いていった。

「あぁ、そうだ」

わざとらしく手をぽんと叩くと、先輩はこちらへ振り返った。

「君、名前なんて言ったっけ？」

くそっ、まだ名前を覚えてもらってなかったのか！　僕は少しふてくされながら答えた。

「……草弥甲斐斗です」

「草弥君。一年後の私に『頑張れ』って伝えておいて」
「会っていきますか？　多分その辺りにいますよ」
「いい。楽しみが減るから。私だって負けてられないし」
「わかりました」

僕の言葉を合図に高月先輩は走り出した。いつまでも後姿を見つめていたけど、やがて見えなくなってしまった。僕はいなくなった方向に一礼をした。

代打は右左ちゃんとそろえる主義です。あと守備のスペシャリストも。
手堅く小刻みにですたい。
今日はここまで！

9／23　1：56

今回のコメント

・一日ぶりの夕飯記載

ごはん
ハンバーグ（レトルト）
キャベツの千切り。
ブリ大根！

以上。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

僕の言葉を合図に高月先輩は走り出した。いつまでも後姿を見つめていたけど、やがて見えなくなってしまった。僕はいなくなった方向に一礼をした。

「意気地なし。嘘なんかついて」

背後から聞こえる声に僕は少し安心した。振り返ることなく僕は答えた。

「他人の話を盗み聞きしている人に言われたくないですよ」

「私が私に会うっていうのも面白かったかもしれないけどね」

僕が振り返ると、頭上には高月先輩の手の平があった。そのままチョップのように振り下ろされる。反射的に「痛っ」と口走る。大して痛くないのだけれど。

「ずるしたでしょ。昔の私から日記のことを聞きだして」

「情報収集と言ってくださいよ。っていうか、いつから聞いていたんですか？」

高月先輩は何も言わずに肩にかかった髪を手で払う。小さく髪がふわりと舞う。答えるつもりはないらしい。

「些細なことじゃないですか」

高月先輩の力のこもった瞳が僕を射抜く。それだけで、緊張してなにも言えなくなる。一年前の高月先輩を見ていたせいか、言葉での返答がない事がこれほどまでに重圧になるなんて、あらためて思い知った。

「見たい？」

先輩は一言言って、そっぽを向いてしまう。すぐにさっき話の出た、先輩の日記だと思い、僕は頷いた。

すると先輩は横を向いたまま小指を出した。僕はゆっくり小指を差し出し絡める。

「輪転の誓いにより我の願いに応えよ」

高月先輩は淡々と表情を変えずに唱え続けた。

「回顧せよ、想起せよ、顕現せよ。第八十六期生、高月亜也」

いつもの通りどこからか光の矢が飛び込んできて、先輩の手前に止まる。

ここでの亜也との会話は、大切にしたいので時間がかかっています。次の更新は一時間後ぐらい？

9／23　2：59

今回のコメント

・今書いている亜也との会話は。会話分だけで、今日の倍ぐらいの文章量ある。

でも、これをすべて使うと、字の文が会話文を繋ぐだけのもの、としての機能だけになってしまいがちになる。（僕の場合）

会話文が多すぎるというのも好不調で言えば、不に近いのかもしれない。

好調のときは地の文ドンドン浮かぶもん。会話文はもう調子に関係ないから。

ということは、今は……

考　え　て　は　い　け　な　い　。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「回顧せよ、想起せよ、顕現せよ。第八十六期生、高月亜也」

どこからか光の矢が飛び込んできて、先輩の手前に止まる。

いつもなら日記帳が開き、部長にまつわるアイテムが出現するところだ。しかし、今回は日記帳は開かず、高月先輩の手の上にゆっくり落ちていった。

「自分の日記も呼び出せるんですね」
「昔、美国先輩に見せてもらったことがあるから。現部長の日記帳からはなにもでないけどね」

先輩が手にした日記を観察した。背表紙がやや太い糸でまとめられている。外見から見た紙の質は明らかに普通紙とは違っていた。間違いなく一年前の高月先輩が言っていた、輪転の呪いは続いている証拠だった。

とは言え「輪転の呪い」がなんなのかサッパリ分からないけど。

「これで満足？」

先輩は肩をすくめて、ため息混じりに答えた。もちろん僕はこんなことでは満足するはずなかった。真相を確かめなければ。

「一年前の高月先輩は部長が和とじの日記帳を使っているということは『輪転の呪い』が続いているって言いました。『呪い』ってなんのことなんですか？」

日記帳を口元にあてて、先輩はふふと笑った。瞳を覗き込ませるように僕を見つめる。

「大袈裟ね。一年前の私だからしょうがないか。あれはね大したことじゃないの――」
「誤魔化さないでください」

僕は先輩の言葉を制した。もう誤魔化されるのは嫌だった。すると先輩も笑うを止め、日記帳を胸に抱くようにして、答えた。

「じゃあよく聞いてね。この日記帳は私の心とリンクしているの。

小テストが終わるごとに私の日記が自動書記されて記録される」

「そんな……」

信じられないと続けようとしたけど、中間テストを思い出して僕は気づく。僕の日記に挟まれていた和紙……じゃあ、あれは先輩の日記と同じものだったのか。僕は自然に頷いていた。

今日はこのぐらいで。

9／25　12：42　名古屋コミティアにて

ただいま店番中。
ということで、今日は名古屋コミティアです。
現在、名古屋国際会議場にいます。

一冊売れたので、一安心。今回はオリジナル作品のイベントなので、他の人の作品もちょっと楽しみ。
とりあえず、見本誌を立ち読みします。（買えよ）２００文字がなかなか埋まらない。
つーか、指がしんどい。

人はまばらな感じ。ただ、オリジナルイベントなので、こんなもんだと思うことにする。え～と、え～と、あと２０文字！２０文字！
今、「文字」って打とうしたら、文字予測で「申し訳ない」がでてきた。以前はどんなメール打ったのだろう。

今、急遽思い立って、想さんとテーマをだしあって２００文字小説を書くことに！
テーマは、「秋」「イベント」
名古屋コミティアが終わる１５時が〆切です！
よーい、スタート！

9／25　21：50　名古屋コミティア感想

一回しか更新しなかったのは、もちろん携帯での執筆ができないから！
指がしんど過ぎる！（この地方の言葉で言うと指がえらい）
パソコン最高！　スラスラ書ける！（時代遅れ？）

と言うことで名古屋コミティアから無事帰還しました。
そして一回寝ました。（これはいつも通り）

全体的な印象。
僕は開場二十分前ぐらいに到着したのですが、最寄の駅降りた時に誰も「それらしき人」が見当たらなかったので、心配になったぐらいです。

二次創作、コスプレありの関西のイベントでの大阪インテックスの込み具合を経験してたので、本当に行なわれるのか？　とう感じでした。

ただ、開場に行けば、それなりに開場前に待機してるイベント参加者がいてホッと一安心。
サークル参加の人たちもそれなりにいました。（この前参加した京都のイベントぐらい？）

途中、文机に色々話しかけてくれたサークルの方がいました。
その人はなんと大分県からの参加者でした。
驚いたのですが、もっと驚いたのは、純文学が好きだということ。
いや、純文学がどうのこうのじゃなくて、純文学の同人誌をわざわ

ざ名古屋で販売していることに驚きました。
しかも、わざわざ文芸を志すものとして「文机」をブログに載せていいですかとまで、言ってくれました。
想さんが書く作品は良いのですが、僕のような軟派なオッサンも一くくりにされていいのだろうかという申し訳なさを感じてしまいました。（自虐的）

イベントに参加するごとに、僕自体はそう動いていないのですが、想さんへ集まってくる人たちを見て、本当に新たな発見がありますね。

じっくり見本誌を立ち読みしたのですが。（諸事情で買う暇がなかった）
オリジナル作品だけなので、面白いですね。
二次だと話がわかってないと、伝わらないことが多いから。
セリフが殆どない漫画。これは少女漫画全開の作品でしたが、女の子の心情が絵で表現されてて面白かった。
ヘッドホン少女の漫画。これは僕の中で今日一番でした。萌えじゃないですけど、可愛いって思えるコメディタッチのお話でした。

プロの作品でも同じようなモノがあるでしょう。
きっとそれはもっとレベル高いかもしれません。
でも、そういうのじゃなくて、「今、自分達と同じ場所で何かを表現しようとしている人がいる」って思えることが重要だったりします。
上手い下手の問題じゃないんですね、こういう場所は。（分かったような口をきくリープ）

他にもプロの方が絵を描く工程の実演なんかあったりして、興味深

かったです。
ホント、プロは手が早い。（エロい意味じゃなくて）
相当な数をこなしているはずです。それ見ただけでも敵わないなぁ
と感服してしまいます。

それなりに僕は楽しめましたよ。
売れた冊数は別として。（気にしない）

後、想さんとの２００字小説は投稿しましたので、興味のある方は
お読みください。
二時間ほどで考えた即興作です。
特に想さんのがはちゃめちゃで良かったです。
読んだ瞬間「どうした、想詩拓！」と心で嬉しい悲鳴を上げました。
即興は即興で楽しいよね。

9／26　1：48

今回のコメント

寝　た　と　思　っ　た　だ　ろ　う　！

（誰に言っている）

だかがしかし、仮眠は恐ろしい。

起きたら目が覚めてしまうとは！

ということで今日の夕飯。

16時ごろ食べた大エビフライ定食。

以来食べてません。

だって、お腹一杯になったんだよ。

でかいエビ三尾はさすがに堪えた……

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊

「じゃあよく聞いてね。この日記帳は私の心とリンクしているの。小テストが終わるごとに私の日記が自動書記されて記録される」

「そんな……」

信じられないと続けようとしたけど、中間テストを思い出して僕は気づく。僕の日記に挟まれていた和紙……じゃあ、あれは先輩の

日記と同じものだったのか。僕は自然に頷いていた
頷きを合図に先輩は話を続けた。

「そして全ての試験が終わった時に平光先生が、部長の日記を採点するの」
「採点ですか？」
「うん。高校生生活を楽しく過ごせたかどうか」
「そんな曖昧な基準なんですか？　しかも平光先生の判断で？」

どうも話がぼやけた気がする。僕の質問に先輩は少し口を尖らせて答えた。

「だって、私の本心は日記に書かれているから。読めば明白じゃない」
「確かに……」

しかし、納得はできない。高月先輩は腕組みを始めたが、そんなの気にしていられない。

「でも試験って言うことは、合格・不合格があるんですか？」
「あるよ。合格すれば、日記をハードカバーにしてもらえるの」

嘘だ。さっき一年前の高月先輩から聞いた結果と反対じゃないか。だからといって、正面から反論すると、心を閉ざしてしまう場合がある。

「滝川先輩はハードカバーは部長だからだって言ってましたよ」
「あれは、部長だけが試験を受ける権利があるって言う意味よ」

高月先輩は腕組みしたまま、人差し指を何度も上下させている。

僕が次の言葉を告げようとすると、それを制するように言葉を被せた。

「それに今まで不合格になった部長なんていないから」

後一回ぐらい更新して今日は終わりと言うことで。

9／26　2：43

今回のコメント

美国日記編のは大体書き終わってますが、やはり会話文ばかり。
今から点を線でつなぐ作業が待ってます。

高月先輩は好きなんですが、描写が難しい。
甲斐斗は楽なんだけどなぁ……

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊

　高月先輩は腕組みしたまま、人差し指を何度も上下させている。僕が次の言葉を告げようとすると、それを制するように言葉を被せた。

「それに今まで不合格になった部長なんていないから」

　僕はいつもの突き放す冷たさではなく、イライラから来る冷たさに違和感を持った。あえてゆっくりとした口調で、先輩に尋ねた。

「本当ですか？」

「本当だよ」

　先輩は指の動き早める。僕はそれでも尋ねる。

「絶対に？」
「絶対」
「命賭ける？」

僕が言った瞬間に先輩は腕組みを解き、眉間にシワを寄せる。

「子供なの君は」
「いいから。命賭けるぐらい真剣なのかって聞いているんです」

すると高月先輩は瞳を大きく開いて僕を見つめた。そのままの動かない。ううっ、すごい重圧。だけど負けるわけには行かないっ！
僕は勇気をだして一歩踏み出す。

「どうなんですか」

高月先輩は瞳をとじて、頷いた。長い睫毛が僕の目映る。
再び顔を上げた高月先輩は僕を真っ直ぐに見つめた。

「……賭ける。私の命ぐらい安いものだわ」

正直、信じていいのだろうか？

美国日記の中の高月先輩。
今、目の前にいる高月先輩。

信じるのは……決まってるよ。僕は高月先輩を見つめ返した。

「わかりました信じます」
「ありがとう」

今日はここまで。
また明日（寝なかったらね）

9／27　1：24

今回のコメント

今日の夕食。
茄子とミンチを煮た物。
豚汁！
骨付きフライドチキン（スーパーで買ったもの）
ごはん

終わり！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「わかりました信じます」
「ありがとう」

　高月先輩は深々と頭を下げた。僕は大袈裟な態度に申し訳なさを覚えた。

「や、止めてくださいよ」
「止めない」

　頭を下げたまま先輩は、言葉を継いだ。

「だって疑ったでしょ」

僕は言葉を詰まらせてしまった。見抜かれている。やっぱり敵わないな。高月先輩の思いや考えをどれだけ理解したと思っても結局は、一枚上手を取られている。

やはり、高月先輩は『先輩』だ。

「でも信じるって言ってくれた。これはそのお礼」

「もういいですって」

高月先輩の肩を掴んで、上体を起こす。頭を上げると、距離が異常に近いことに気づく。視線を合わせたら外せなくなると、少し怖くなって僕は一歩さがって、頬を指で掻いて誤魔化す。この場を繋ぐために別の話題を探す。なんとか言葉の尻尾を掴んだ。

「にしても、日記帳をハードカバーにしてもらうために僕らはこんな大変な目にあってるんですか？」

「そうね……平光先生によるとおまけがあるらしいよ」

「なんですかそのおまけって」

すると、高月先輩は僕より高い空へ視線を向けた。

「平光先生曰く、おまけは『トロフィー』だって」

「ト、トロフィー？　優勝者に与えられるアレですか？」

平光先生がトロフィーをくれるのだろうか。「おめでと～♪」とか言って高月先輩に渡す姿は容易に想像できるけど、僕だったら拒否するだろう。トロフィーなんて邪魔くさくておき場所に困るもの要らないよ。

今日はもう一回は更新した～い！
やってみる！（寝なかったらね）

9／27　11：28

今回のコメント

いつも通りの寝オチ！
しかも新規小説を作成しておいて、寝オチ！
そして今日は仕事がお休み！
でも、他にやることてんこ盛り。
だからとりあえず、昨日更新するつもりだった、お話だけ更新！
（手抜き？）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「学校を卒業した人は皆トロフィーを持っているんだって」

高月先輩がトロフィーについて説明を始めた。僕は遠い目で空を眺める先輩を見つめる。艶のある長い髪が話すたびに小さく揺れる。そのたびに髪を取り巻く光の輪が踊っているように見えて、少し見とれてしまった。

「トロフィーは勉強を頑張った結果だったり、部活の成績だったり、友達や恋人と過ごした日々とか人によって違うんだって」

それにしても胡散臭い。僕が抱いたイメージだ。なぜなら僕が今

まで自信をもって手にしたことがないモノだからだ。

ある意味、平光先生のいうトロフィーを求めて僕は日記部に入ったと言えるが、実際、思い出としての目に見える「モノ」としてのトロフィーには懐疑的だ。

僕が眉をひそめていると、先輩は一歩近づき、手を伸ばして、僕の胸の前に持ってくる。そして人差し指を伸ばして、軽く心臓辺りをつついた。体中の感覚が心臓に集まった気がした。

「私しか、君しか、持つことができない、一人一人のトロフィー。あったらいいね」

高月先輩は小さく笑った。弱々しさだけしか伝わってこず、確信を持っての「あったらいいね」じゃない。「どうせないだろうけど」とも繋がるような言い方だった。僕は釣られたわけじゃないけど、質問をぶつけてしまう。

「トロフィーがない人はどうなるんですか？」

高月先輩は少し俯きながら口元に指をあてる。少し言い淀んでいると、僕をちらりと見て話し始めた。

「そうね……トロフィーのない人は形式上卒業しても、開放されないんだって。いつまでも満たされない過去を引きずっちゃう。繰り返ししゃうの」

そんな大袈裟な。とか言いつつ、高校生活になっても、中学卒業の思い出を引きずっている僕に言い返す資格はない。

「それは人生に区切りがついていないって言う意味ですか？」

夜になったら、更新しよう。
（寝なかったらね）

9／27　22：04

今回のコメント

・今日の夕飯

ごはん
イカと里芋を煮たもの
マカロニサラダ

以上！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「それは人生に区切りがついていないいって言う意味ですか？」
「さぁ？　私にはわからない」
　僕の問いかけに先輩は、はにかんだような笑みを浮かべた。
　確かに人生と言う言葉は大袈裟かもしれない。っていうか、さっきから話が大袈裟過ぎだ。
　だけど次に浮かんだ質問は大袈裟ではなかったけど、核心に触れすぎた。
「先輩のトロフィーってなんですか？」

はにかんだ笑みから、引きつった笑みに一瞬にして変わる。

「私のトロフィーか……なんだろうね」

「誤魔化さないでくださいよ」

すると黙ったまま、先輩はしばらく答えなかった。

沈黙が続いて間を埋めたくなる衝動に駆られたが、僕はなんとか踏みとどまる。その甲斐あってか先輩は、ぽつりと言った。

「もう、ここにトロフィーはないかも」

やっぱり美国進。自分から振っておいて、とても胸が痛んだ。全身が脱力しそうになる。

だけど、もっとショックを受けた人が隣にいた。僕の視界から消えたと思うと、高月先輩はしゃがみ込んでいた。

僕は先輩を見ただけで、動けない。先輩は膝を抱え、下を向いたまま話を続けた。

「好きな人と高校生活を、人生の一部を過ごす。それが私にとって全てだった」

先輩の声は震えていた。

「だけど……あんなことになって。今は空っぽだね」

なんてことをしてしまったんだ。僕は自分の失言を後悔した。

次の更新は1〜2時間後。（いつものペース）

９／２７　２３：２１

今回のコメント

・うおおおっ、ルマンドが食べたくなってきた！

あれ食べて、食べカスをぼろぼろこぼしたいよおぉぉっ！

・もしくはハッピーターンの残りの粉！

（お菓子のベクトルがまるで違う）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「だけど……あんなことになって。今は空っぽだね」

なんてことをしてしまったんだ。僕は自分失言を後悔した。

でも、なにか言わなきゃいけない。そんな気になっていた。頭を働かせろ、先輩に立ち直ってもらうような一言を言うんだ！

だけど意気込みに反して、なにもアイデアは出なかった。馬鹿みたいな陳腐な言葉だけしかでてこない。自分のふがいなさを感じる。

だけど。慰めにもならないけど、今は自分の気持を伝えるしかない。そんな気持になった。口から自然に言葉が零れる。

「そんなこと言わないでくださいよ」

「ん？」

高月先輩は僕を見上げた。瞳がゆらゆらとした光を放った。すこし充血していた。僕の心の中の足は震えていた。短い人生だけど、懸命に言葉を探す。

「俺、これでも先輩に憧れているんですよ」

高月先輩は瞳を大きくして本当に驚いているようだった。

「私が憧れ？　どこが？」

「え？　あらためて言われると照れますが……」

自然に言葉になったものの、具体的にと言われると困る。僕は頭を振り絞って記憶の森をさまよった。

「物静かなで落ち着きがあるところとか」

「一年前の私を見たでしょ。本当の私は落ち着きないよ」

「今が肝心でしょ。それにどんなピンチでも落ち着いている。僕も助けられてます」

「あんなの過去の先輩達の力を借りてるだけでしょ」

「ことごとく否定しますね」

「だって本当だから」

なんでこの人はこんなに自己否定的なんだ。人のことは言えないけど、腹が立つんだよ。少なくとも好意を持っている人にそんなこと言って欲しくない。

今はとにかく先輩の意見をはねのけたかった。

次の更新は1〜2時間後。（うんうん。いつものペース）

9／28　0：42

今回のコメント

・週刊誌の巻末コメントのようになってきた気がする……が、気にしない。

三年前メモした会話が今回の更新でようやく、載せることができて、ちょっと嬉しい。
なんだか成仏させたみたい。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

なんでこの人はこんなに自己否定的なんだ。人のことは言えないけど、腹が立つんだよ。少なくとも好意を持っている人にそんなこと言って欲しくない。今はとにかく先輩の意見をはねのけたかった。
「とにかく。どんな理由があったとしても、憧れています。早く追いつきたいって思ってます」
「『憧れ』『早く追いつきたい』か……なんだか、君。ずるいね」
「え？」
「だって、いつまでたっても君は後輩で私は先輩だもの」
言っている意味がわからない。
僕を見上げながら先輩は、眉をひそめ、困惑しているような表情を見せた。

「君の先に見えるのは本当に私だけなの？」
「どういう……ことですか？」

僕が今、話をのは高月先輩だけだ。他の誰に向けていない。僕の眉間に力が入る。それを見た先輩は少しだけ口元を緩ませた。

「君も先輩になったら分かるよ。そうだ。一度先輩になってみる？」
「ええっ！？」
「あはは、嘘、嘘」

空笑いに近かったけど、先輩は笑ってくれた。僕としては煙に巻かれたような気になったが、目的をある意味達成した僕は少しホッとした。

「ありがとう。慰めてくれたんだね。本当に駄目な先輩だ」
「そんなこと……」
「ちょっと感傷的になってた」

先輩は立ち上がり、自分の制服を二三回手で払う。肩を揺らして、深呼吸をして気合を入れ、なにかを意気込んだようだ。

「告白します」

僕へ振り向き、明るい口調で言った。

「この場所はね。美国先輩とお別れした場所なんだ」

僕の頭の中は一瞬空白になった。

次の更新は1～2時間後。（うんうんうん。いつものペース）

９／２８　１：５８

今回のコメント

・この回の話題の繋ぎ方はちょっと後で考え直そう。

・それにしてもスクライド面白いなぁ。

主人公の単純明快なところがいい！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「この場所はね。美国先輩とお別れした場所なんだ」

僕の頭の中は一瞬空白になった。

「結局、私はこの日記の最後まで先輩を捕まえておくことができなかった」

先輩が言い終わった後、ようやく思考が戻ってくる。じゃあさっき会った高月先輩は、もう美国先輩に会えないのか……

「この日で消えちゃったの」

「消えた？　なぜ？」

言ってすぐに、僕はまた軽率な質問をしてしまったことに気づく。情けない。本当に自分本位だ。

すると、先輩は瞳を細めた。力はなく弱々しい視線が僕に遠く。

「これ以上はごめん。話したくない……」
「分かりました……すいません」

もうきっと何度も思い出しているんだろう。この日記世界に来た瞬間から。ジュース買いにいったっていうのも口実なんだきっと。だとしたら、今日はこれぐらいにしたほうがいいのだろう。

と結論づけた瞬間、僕にはある疑問が駆け巡る。この状況で聞いていいのだろうか。どうしよう……だけど、今確かめないと、意味がないし。僕は割り切ることにして、恐る恐る訊いてみる。

「先輩、一個だけ質問いいですか？」

先輩は恨めしそうに僕を見たが、ハッキリしておきたいことだった。

「あの……消えた理由は問いません。だけど美国先輩が消えたのに、この出来事は日記になってるんですか？」

僕の一言に先輩の瞳は大きく開かれた。

「何が言いたいの？」

次の更新は1～2時間後。（うんうんうんうん。いつものペース）

9／28　2：56

今回のコメント

・実は今のところ本文が１６０ＫＢある。
文字数が八万字、原稿用紙に文字をキッチリ詰めて２００枚。
だが、まだ前半部分。
大　丈　夫　な　の　か　？

＊＊＊
＊＊＊＊

僕の一言に先輩の瞳は大きく開かれた。

「何が言いたいの？」

「美国先輩が消えたのは今日だとすれば、今日の日記を平光先生はどうやって手に入れたんですか？」

「それは……」

先輩は言葉に詰まり、唇がわずかに震えた。分かりやすくてありがたい。僕は追及した。

「高月先輩は知っているんですね？」

僕の問いかけに先輩は答えようとしない。じっとこちらを見つめたままだ。もう一押しする必要がある気がする、僕は話を続けた。

「本当にこの日記では何も起こらないんですか？」

高月先輩は一瞬斜め下へ視線を移し、軽く握った手を口元に寄せる。

「何も起こらないはず。何度も読んだ私が一番知っている」

急に不穏な空気が漂ってくる。平光先生が送り込んだ場所。美国進が（理由はしらないけど）消えた日の日記。高月先輩以外の生き物のいない日記世界。

僕は得体の知れない雰囲気に耐えられず、先輩に尋ねる。

「日記が終った後、この世界にいる僕等はどうなるんですか？」

高月先輩は僕を見て、僅かに口を歪ませた。確かなことは先輩は何かを隠しているってことだ。

それにしても……

日記の終わりなんて考えたことがなかった。これからどうなるのだろうか？

だって、歴代部長が持つ日記は心を表しているんだろ？　その人物がいなくなるんだぞ。

「……来る」

先輩が指差す方角へ目をやる。僕の思考は再び停止した。

今日はここまで。（うんうんうんうんうん。運も付きますように」）

９／２８　２２：１７

今回のコメント

・今日の朝食（珍しくこのパターン）

ウイダーインゼリー（マルチミネラル）

以上。（少なっ！）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　それにしても……

日記の終わりなんて考えたことがなかった。これからどうなるのだろうか？

　だって、歴代部長が持つ日記は心を表しているんだろ？　その人物がいなくなるんだぞ。

「……来る」

　先輩が指差す方角へ目をやる。僕の思考は再び停止した。

　空だと思っていた空間が、タイルを剥がしたかのように落下してくる。空が崩れた向こう側は、真っ黒だった。存在すら塗りつぶす黒。どんどん黒が迫ってくる。

体中が毛羽立つような感覚に襲われ、僕は一歩二歩と後退した。

「先輩、このままじゃあ、やばいですよ！」

叫んだ僕とは対照的に、高月先輩は一二歩と黒に向かって進んだ。

「そう。こうやって世界は終わっていくのね」

「なに厨二発言してるんですか！」

だが高月先輩は動こうとしなかった。ただじっと黒の向こう側を見つめている。

飲み込まれる。僕は恐怖心を拭い去ることができない。

美国進は日記上では一体どうなってしまったというんだ！　高月先輩はうなされたように何か呟きながら、空を見つめている。言葉は聞きとれない。

どうすれば良いんだ！　どうすれば……あああっ、もう！

「こうなったら自棄だ！　高月先輩、失礼します！」

僕は先輩をお姫様だっこして走り出した。

お、重い……先輩が聞いたら怒られるだろう。そもそも女子高校生をお姫様抱っこして走るなんて無理があるんだ。でも、今は逃げないと。

僕が歯を食いしばった瞬間、横から声がした。

「草弥っ！　てめぇー、亜也を襲うつもりか！」

鬼のような形相で滝川先輩が僕に駆け寄る。拳を振り上げ、僕の頭を見定めていた。

「滝川先輩、ちょっと待って！　後ろの状況見たら分かるでしょ」

僕の言葉に振り向くと、数秒立ち止まって黙り込んだ。だが、すぐに走り出し、僕に追いついて、舌打をした。

「ちっ、一時休戦か」

ついに滝川先輩も含めて、剥がれ落ちる世界から逃げることになった。

更新は1~2時間後。
完全に定着したこの時間帯。

９／２８　２３：４２

今回のコメント

最近、右手首の付け根が痛い。

本気でリストレストが欲しい。

今は枕で代用してます。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ちっ、一時休戦か」

ついに滝川先輩も含めて、剥がれ落ちる世界から逃げることになった。

逃げていることさえ、意味が分からない。とにかく少しでも状況を把握するために情報を聞き出さないといけない。僕は滝川先輩に話しかけた。

「滝川先輩、この光景に見覚えは？」

「ないっ、というか、どうしたって言うんだ。亜也は？」

お姫様抱っこをされている高月先輩は相変わらず、黒い部分を見つめたまま。

「分かりません。でも、美国先輩の日記の終わり方を見てみたかったようですよ」
「……そんなことしても、美国進は戻ってこないのに」
滝川先輩は心配そうに高月先輩を見つめた後、再び僕を見た。
「だが今は考えない。とにかくなにか解決方法はないのか？」
「輪転の誓いの力しかないでしょう。高月先輩！」
耳元で叫んでいるのに、高月先輩は僕を無視している。
「高月先輩！　先輩！　先輩！」
さらに大声で話すが、まったく効果なし。僕が小さくため息をついた時、うわごとのように
「美国先輩……」と呟いている先輩の声が聞こえた。。
だめだ、先輩が「先輩」と呼ぶ声に反応しない。こうなったら……勢いだ。
「こらっ、いつまでぼーっとしてるつもりだ！　高月亜也！」
すると先輩の肩が揺れ反応した。瞳の焦点が真っ直ぐに僕を見つめ、何度も瞬きする。
「私……」
「やっと気づきましたね。頼みますよ！」

更新は1～2時間後！
（寝なかったらね）

９／２９　０：４７

今回のコメント

・むむむ。今日のお供は、マウントレーニアのコーヒーではなく、バナナジュース。
時々、無性に飲みたくなるときがあります。
（というかますます巻末コメントみたいになってきた）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「こらっ、いつまでぼーっとしてるつもりだ！　高月亜也！」
すると先輩の肩が揺れ反応した。瞳の焦点が真っ直ぐに僕を見つめ、何度も瞬きする。

「私……」
「やっと気づきましたね。頼みますよ！」

「え……っと」

高月先輩は僕に抱っこされた窮屈な姿勢から、腕を振り上げて、僕の頬めがけて平手を打ちつける。

「痛っ！」

僕は顔をおさえたせいで、高月先輩を地面に落としてしまう。先輩は尻餅をつきながらもすぐに立上がった。

「こんなこと百年早い！」

「先輩がぼーとしているからですよ！　早く何とかしてください！」

先輩は僕の言葉を受け背後を見つめた。

そして黙って僕に小指を差し出す。飛びつくように指を力強く絡めた。

「輪転の誓いにより我の願いに応えよ」

今日はこの厨二表現が頼もしく思える。高月先輩は恥真剣な表情のまま唱え続ける。

「回顧せよ、想起せよ、顕現せよ！　第五十二期生、中野幸次郎！」

光の矢が飛んできて、日記帳が姿を現すと、高月先輩はいそいでページをめくる。目当てのページを見つけると、日記帳から何かが飛び出してくる。

本の大きさと全く釣り合わない自転車だった。大先輩中野幸次郎が暴走族にも競り勝ったという伝説のママチャリだった。

「自転車？　こんなもので逃げるんですか？」

僕の問いに高月先輩は眉をひそめた。

「なに言ってるの？　反対よ。暗闇に突っ込むの」
「で、でも！」

自転車の向きを暗闇へと直しながら、先輩は鼻を鳴らす。

「暗くても大丈夫。電灯つくから」
「そういう問題じゃないでしょ！」

僕が高月先輩へ踏み出そうとすると滝川先輩が僕の肩を掴んだ。

「好きにさせてやれ」
「なに言ってるんですか！　あれに飲み込まれたら、どうなるかわからないんですよ！

僕が滝川先輩へ向きなおした時、背後から高月先輩の声が聞こえた。

更新は1～2時間後！
（寝なかったらね）

9／29　1：59

今回のコメント
・この時間まで書くと、夜食が食べたくなる。
が、我慢っ！
ドライブに行きたくなる。
が、我慢！（繰り返し）
平日は我慢。
金土はフィーバー！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　僕が高月先輩へ踏み出そうとすると滝川先輩が僕の肩を掴んだ。
「好きにさせてやれ」
「なに言ってるんですか！　あれに飲み込まれたら、どうなるかわからないんですよ！」
　僕が滝川先輩へ向きなおした時、背後から高月先輩の声が聞こえた。
「だって悔しいじゃない。こんな闇に追われながら生きるなんて」

高月先輩へ視線が集まる。先輩のハンドルを握る手は震えていた。

「今頃、平光先生は、ほくそ笑んでるかもよ。私達ぐらい立ち向かったっていいじゃない」

高月先輩はサドルにまたがる。滝川先輩は自分の頭を軽く小突きながら自転車へ駆け寄り、後ろの荷台に横座りした。それが先輩達の答えか。

これが平光先生が出題した小テストなら、答えるべきだ。

断じて抗うと。

僕は貴方達の後輩だ。ついていきますよ！

「わかりました。僕も行きましょう！」

「じゃあ、走ってついてきてね」

「ええっ！　僕は乗せてくれないんですか？」

「草弥、残念だが定員オーバーだ」

高月先輩の自転車は進みだし、僕はふてくされながらも併走した。

暗闇に向けて。

崩れていく世界は僕たちにどんどん近づいてくる。

数百メートル、数十メートル、数メートル。

鼓動が頭の中で響く。足の動きが鈍くなる。今止まれば、引き返せば、逃げられる。だけど、隣を見れば、高月先輩は真っ直ぐに前だけを向いて進んでいた。ひたすら純粋に立ち向かう姿。僕は力強く足を踏み出した。この先輩について行きたい。この闇も先輩となら突破できる、そんな気になった。

「行くよ」

高月先輩の一声。滝川先輩は高月先輩にしがみ付く。僕はさらに足を進めた。

目の前がとうとう暗闇だけになる。飲み込まれるっ！

僕は叫びながら腕を振り上げた。

「は～い、小テスト終わり♪」

平光先生の声が聞こえた。次の瞬間。僕が叫んで突入した場所は、部室になった。僕は振り上げた拳の下しどころがわからず、中途半端に腕を曲げた。先輩達は本棚の目の前で急ブレーキして止まった。

更新は1～2時間後！

（寝なかったらね）

９／２９　２：５６

今回のコメント

・美国日記編はこれで終わりだけど、文章量が中間テスト編並みになってしまった……

本当はこれの半分ぐらいにしようと思ってた。

何でこうなったかの原因は大体分かってる。

主に構成。

その辺りを第二稿以降で直すことにする。

このままだと４００ＫＢコースだな。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

盛り上がった末の強制終了。終わってみれば、いつも通りの小テストだった。

高月先輩は自分の髪をいじりながら、そっぽを向いている。滝川先輩は咳払いをしながら、恥ずかしいのか下を向いている。僕は相変らず、腕の下ろしどころがわからない。

「どうだった？　私からのプレゼントは？」

平光先生は三人を見渡した。
あればプレゼント？　ふざけるなと言う気持が先走る。僕が平光先生に詰め寄ろうと、足を踏み出した瞬間、高月先輩が割り込んできて、手で僕の行方を制した。

「お気遣い感謝します。とっても勉強になりました」

僕の前に出された高月先輩の拳は強く握られていた。

「そう♪　良かった。サービスした甲斐があったってもんだ」
「よく言ったものだな。人の古傷をさんざんほじくりやがって」

文句をいったのは滝川先輩だった。言われた先生は、目を丸くしてキョトンとしている。

「古傷？　いい思い出じゃなくて？　だって憧れた先輩の日記だよ」
「ふざけんな、この――」

高月先輩を挟んで反対側から滝川先輩が飛び出そうとした。だけど、僕と同じく、高月先輩の腕が伸びて、行く手を制した。

平光先生は人差し指をあごに当てて、首をかしげた。どうやら本当にサービスのつもりらしい。

「とにかく、気持が引き締まりました。最近ちょっと油断してました」

高月先輩は平光先生に軽く頭を下げた。先生も釣られて「はあ……」とか言いながら頭を下げて部室を出て行った。

小テストなのに中身の濃い試験となったものだ。
平光先生がいなくなると、各々いつもの席に座った。滝川先輩はため息をつきながら、机にうつ伏せになった。高月先輩は美国先輩の日記を開いて読み始めた。僕は所作なさげに窓の外を眺める。日記部のいつも通りの風景なのにどこかギスギスしているように思えた。

本当はこのまま皆で寄り道して、憂さ晴らしをしたいところだけど、さすがにそいう雰囲気じゃないと思ったので、明日以降にしよう。確かにそう思った。

だけど、実現はしなかった。

次の日、高月先輩が僕の誘いを断ったからだ。「ごめんね」と一言言って、再び日記を読み出す。僕はなにも言えず、すごすごと帰宅した。滝川先輩もどこか元気がない。小テストの影響が少なからずある気がした。

本日はこれで終わり！

9／30　1：02　コトダマプロット編1

今回のコメント

・今日の夕飯
野菜炒め
炒り卵
チャーハン

以上。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊

忘れてた。

いやいや、正確には忘れてた。

じゃない。
忘れてるフリしてたら、この日になっていた。

ということで、文芸誌コトダマの第三号の原稿を書かなければいけない時期になりました。

前回が、7月の終わり。
今回が、9月の終わり（正確には10月の中ごろ）

三つの条件があります。
?:テーマは「記念日」
?:食事をするシーンを必ず入れること
?:一万文字制限

9月の終わりにプロットを提出しなければなりません。
で、今日は何日?
……やっちゃった。てへっ。

今回はプロットなんで別に時間はかからないかなぁと思います。
が、今日は少なくともコトダマプロット編です。

「トロフィー」は土曜日からの再開予定です。

さぁ、プロット考えるか。
キチキチのものは作りませんよ。
ゆるゆるの奴を作成します。

んで、今回はまた学園モノ?　コメディ?　少し不思議?

ノンノン。(何この返事は)

今回の主人公はオッサンの予定です。
オッサンが主人公って……

コメディではありません。

コメディタッチになるかもしれませんがね。
とか真面目に書いたのにコメディだとか言われるかもしれません。

……知らん。そんなの知らん。（自意識過剰）
ノリとしては自分の作品で言うと「キラキラ」に近いかな。

まぁ、ちょちょいと考えて、提出します。（適当か）

本日はこれで終わり！

１０／１　０：２６　コトダマプロット編２

今回のコメント

・今日の夕飯

ハヤシライス

サラダ

以上。

微妙にカレーとずれている。

カレー曜日じゃなくてよかったね。（誰に言っている？）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

さて、コトダマ掲載用の短編プロット完成しました。

二回に分けて掲載。

タイトル、ログライン、登場人物から。

タイトル：揺らぎ（仮題）

ログライン：

プライドの高い男が、愛する人を失う過程で、プライドを捨てて
行き、自信を持っていた価値観が揺らぎ、やがて全て失い、狂う話。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーー

■主な登場人物

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーー

●辛らつな料理評論家（主人公）
味、歯ごたえ、音、香り、見た目、雰囲気、五感全てを使い感じ
るのが料理である。
　カッコたるプライドがある。

料理番組のメイン評論家。
彼の発言はそれなりに影響がある。
彼の酷評でつぶれた店もある。
↓料理人に襲われる事件がある。（毅然と立ち向かう評論家）
↓後半で同じことが起こる。（今度は恐れおののく）

世間では厳しい人として通っている。
しかし、愛妻家。
結婚記念日には妻と特別なレストランへ食事に行く。
年に一度の夫婦の楽しみ。

※主人公の大切な物
　評論家としてのプライド
　妻への愛情

●主人公の妻

●「紙の食事」を作っている業者。

守銭奴。
料理を人が欲望を満たすためのツールだと考えている。

ビジネスの一つと考えている。
サプリメントやゼリーで栄養を取ればいいという考え方と同じ。

お客には紙を食べさせ、自分達は商品を開発するためといって普通の料理を食べる。
欲に忠実。
自分の商品を作品ではなく売り物としてみている。
腰は低いが、プライドは高い。ヘコヘコしているが人を見下している。

※業者の大切な物
名誉
金

――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――
■執筆の前の覚書
――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――

・主人公の欲しいもの
「まず欲しいもの」＝妻の愛情。
「最終的に欲しいもの」＝自尊心の延長線上を軸に全てがあるということ。自分を救わなければ他人も救えない。

・主人公を苦しめ欲しいものを阻害する人物や出来事
↓「紙の食事」の業者。
↓もてはやす世間。

・主人公を突き動かす人物や出来事
↓妻。
↓置手紙

●表現したいもの。

結婚記念日ごとに変わって行く主人公を記述。
嘘をつくごとに揺らいでいく主人公の信念。
やがて、狂気へと変わって行く。

紙と料理。

▲調べるもの

・有名料理。
（ゴチも参考に）
・評論家のポリシー

◆問題点

・尺（一万字以上かかりそう）

・書きたいことが二つある点。
主人公が狂っていく様。
紙と本当の料理の違い。どちらが本物？　当人とって本物であれば、紙であっても本物なのではないのか問題。

次はプロットを載せます。
更新は1～2時間後！

１０／１　１：４０　コトダマプロット編３

今回のコメント

・このプロット、二時間ちょいで作ったので、さすがに粗が目立つ。
だが、気にしない。

だって、めんどくさいんだもん。（最低発言）

・プロット完璧にしたところで、本文が面白くなければ意味がない。
本文で遊びができる余地残さないと、読んでる人も説明文臭いなと感じる。

結局書く段階で変更あると思うし。（言い訳）

タイトルや人名を考えてないのはデフォルト。
僕は人名なんかいつも最後になるから。

・僕の見立てでは、いつものリープの文体だと三万字は必要かなと思う。（駄目じゃん）
これをいかに省略したりするのかがポイントだね。

ターニングポイントとかミッドポイントとかは、単にこれで話が少し変わりますよ、っていう目安だからね。用語の意味はネットで各自しらべてチョ。
分かりやすくするためのものだから。エンタメ目指さない人には必要ないと思います。

・本文はもう少しアイデアを寝かせてから、書こう。締め切り間際

に。（もはや誰も突っ込めない）
　ちなみに。
　プロットも同人誌に載せる予定なので、プロットは後で削除します。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

んじゃ、プロット行きますか。
タイトル、ログラインも再掲。

タイトル：揺らぎ（仮題）

ログライン：
　プライドの高い男が、愛する人を失う過程で、プライドを捨てて行き、自信を持っていた価値観が揺らぎ、やがて全て失い、狂う話。

――

■プロット

――

１：起

テレビの料理番組で料理人をコケ下ろす主人公。
　威厳のある様子を描写。
　各メディアに影響力がある料理評論家であることを描写。

テレビ局をでると、とあるレストランに向かう主人公。
そこでは妻が待っていて、結婚記念日を祝う。
　愛妻家である姿を描写。
　テレビ局での態度と対照的に書く。
　毎年、このレストランで祝うことを記載。

ある日、主人公がテレビ局で出番を待っていると現れる男。
食品会社を自分で立ち上げたという男。
　胡散臭い様子を描写。
「紙の食事」を主人公に説明。試食と食品に対するコメントを依頼。
　※「紙の料理」とは特殊な印刷機で料理の写真を紙に印刷したもの。
　味や香りは印刷した料理そのもの。
激高する主人公。料理は五感で感じるもので、「紙」だけで表現できるものではないと主張。下衆と言われ追い出される男。
　主人公のこだわりを描写。

怒り心頭で家に帰る主人公。
すると、妻が家で倒れていた。
病院に連れて行かれる。検査の結果。妻が重病に冒されていれ、余命僅かと知らされる。

◆ターニングポイント1
　↓妻が倒れて、余命僅かと知らされる。
◆セントラルクエスチョン

→はたして評論家はプライドを保ったままいられるのだろうか。

―――

2：承

妻が病気に。（余命わずか）

料理が食べられなくなる。

うわ言の様に、記念日には料理が食べたいと言う妻。

迫る結婚記念日。悩む、主人公。

病室でも食べられる一流料理があれば……せめて味だけでも感じて欲しい。

「紙の料理」を思い出す主人公。

自分のプライドと妻の願いを比べ、妻の願いを取る主人公。

「紙の料理」の業者へ。

散々嫌味を言われるが、じっと耐える主人公。

紙を提供する代わりに、テレビ・新聞・ラジオ・インターネット等の媒体で宣伝するように依頼される。

悩むが、妻のために承諾する。

妻に紙を食べさせる。泣いて喜ぶ妻。

自分のした事は正しかったと胸をなでおろす、主人公。

◆ミッドポイント

→妻のためにプライドを捨てる。（きちっり描写）

評論家が宣伝することで爆発的に売れる紙。
「紙の料理」の宣伝マンとして、さらに名を馳せる評論家。

病人にも最高の味わいを与えることができる。
ダイエットにも効果アリ。
健康に良いものとしてもてはやされる。

反対する人もいる。（料理は五感派）
やがて、その中にも造反者が出てくる。（周りに流されて意見を変えていく）
普通の料理を極めたものだけが辿り着く逆。
逆に良いよね！　言い出したらきりが無い「逆に」地獄。

途中から評論家の手を離れてブームがコントロールできなくなる。

※価値基準が自分に無い人への批判精神。
本当にアナタは自分の頭で考え、良いと考えているのか？
世間で言う「良いもの」とは本当に自分にとって「良いもの」か。
本物とは何か。

「紙の料理」を推進する主人公。
しかし、「紙の料理」をほめるごとに体調を崩していく。
反対にお金はどんどん入ってくる。

テレビ上でとうとう、反「紙の料理」派と対決。
嘘に嘘を重ね、相手を正しいと思いつつも、批判して、勝利を収める。

その夜、妻の病室へ
一年後の結婚記念日の日。
主人公の愛情が伝わって一年持った妻。
病んでいる主人公には妻が足かせにしか思えない。
不意に妻の首を絞めるが、妻は抵抗せずに「ごめんね」と謝る。
怖くなって手を離す。

その後、すぐに妻が死ぬ。（病死）

◆ターニングポイント2
　↓妻の死
――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――

3：転

この頃から決定的に精神のバランスを崩していく。
相変わらずもてはやされる紙。

狂ったように宣伝する主人公。
妻が死んで好きなようにできたはずなのに、宣伝を続けている。
金にもの言わせて、豪遊。欲におぼれる。
一緒に馬鹿騒ぎの業者の男。
　男の夢は欲望を満たすことだと叫ぶ業者の男。

しかし、主人公は記念日だけは忘れなかった。
妻のいないレストランで結婚記念日。
ここで本心を吐露。

料理長が現れる。
「今日でこのレストランも閉店です。あなたのせいですよ」
（「紙の料理」ブームの煽りを受けて閉店）
と、刃物を持ち出し、さされる主人公。
病院送りに。

妻が入院していた病院へ入院。
看護師長から手紙を渡される。
妻が生前書いた手紙だった。
そこには「好きに生きてください」と書かれた手紙。

ようやく、真実に気づく主人公。
妻は自分のために自尊心を押して、無理していたことに気づいていた。
自分が足枷になっていることも知っていた。
「大切なモノ」のために「もう一つの大切なモノ」を押し殺していた。
それれが地続きであることも忘れて。
プライドをもって評論する主人公の姿が好きだった妻。
プライドを捨ててまで自分を守って欲しくなかった。妻自身もプライドを持って死にたかった。

◆ターニングポイント3
　↓妻の手紙

――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――――――――――

４：結

▲案1
自分のテレビ番組で全て暴露。
紙の料理を燃やして、大騒ぎに。
全てを失うが、やり直そうというオチ
もしくは全てを消し去ろうと狂う主人公の様で終わり。

▲案2
「紙の料理」に細工をして浮かれている人間を巻き込む。
※この方法をとる場合は「紙の料理」側の人間を醜く描く必要
がある。
　死人も辞さない。

▲案3
業者の男を殺し行く。
※この方法も業者の男を醜く描く必要がある。
　例）妻の急死に業者の男が関わっていた等

▲案4
　1～3以外で書いていくうちに浮かんだ案。

――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――――――――――

とりあえず今回はここまでかな。
んじゃね～

１０／１　２３：２３

今回のコメント

・今日のＹｏｕ　ｓｈｏｃｋ！（夕食と言いたいらしい）

焼そば
ハヤシライス残り
鶏肉のもも肉を煮たもの
サラダ

Ｆ・Ｕ・Ｔ・Ｕ～！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

続きを書く前にちょっと反省。

以下に書くことはネガティブな事かも知れませんが、自分なりの分析をして、次に備えるというものです。心根はすごくポジティブなのです。

美国日記編を書き終わるのに結構時間がかかってしまいました。９／１２～９／２９までですね。実に１７日間で５５ＫＢ、１日で約３．２ＫＢほどです。

中間テスト編が９／３～９／１０まで、８日間で６５ＫＢ、１日で約８．１ＫＢ。

これを考えても、いかに美国日記編が苦戦していたか分かります。

自分の考える原因は以下の三点です。

?伏線を張りすぎた。
?ゆえに説明台詞が増えため、ネタの取捨選択に時間がかかった。
?自分の調子。（バイオリズム的な）

まず、?について。

次のエピソード（以下ＥＰ）へ行くために、いくつか伏線を張る必要になりました。
書く前に、整理したら、ＥＰの規模に比べて、明らかに情報過多な気がしました。
しかし、これは過去の亜也と会うことで（これはＥＰ書く寸前に活動報告のコメントから思いついた）、ちょっと解消したつもりでした。

だけど、伏線が多すぎたため、どの順番で書くかを非常に迷いました。
カードの切り方がホント下手でスイマセンって感じです。
なので、途中で何度も整理する時間や、順番関係なく、伏線を出し切る作業をしなければなりませんでした。

更新しなかった日は殆どその作業を実際書いたり、頭の中で整理したりしてました。
皆、伏線の管理、カードの切り方には気をつけてね！（お前が言うな）

しかし、それでも多かったですね。
これは勢いで書いた代償と言うべきでしょうか。
（でも、間違いだとは思いません。どの書き方も何かしら問題は抱えているからです）

次に？について

？という根本的な原因があったため、どうしても登場人物に説明セリフを言わさなければならない事態になりました。

ただ、これは作者自身のスキルの問題によると考えられます。
もう少し、地の文や会話文のやり方があった気がします。
これは第二稿以降で修正したいと思います。

さらに、某スクリプトドクター曰く、「説明台詞ばかりになる脚本は構成に問題がある場合が多い」というお言葉があるとおり、もう少し計画だてて、構成を見直して伏線の管理を第二稿ではしたいと思ういます。（今は勢い重視）

実際、説明台詞が少なくなった、日記世界の崩壊からは、スラスラ書けましたからね。

最後に？について

？と？は修正項目がすぐ浮かんだのですが、これぱかりはしょうがないと考えています。
どれだけ気をつけていても、調子の悪い時は来る。

しかし、その調子の触れ幅を小さくする、または、やるべき事を整理して、ルーチン化できるものはしておく、（本当は綿密なプロットが書ければいいのですが、この方法も欠陥があって、書き出すまでに時間がかかるし、途中で挫折する可能性があります）最低限の結果は残す努力はすべきだとおもいます。

この努力は書き続ける上で重要だと思います。気分屋でいるうちはアマチュアの域をでないと僕は思うからです。

以上が簡単ですが、美国日記編の反省になります。
次のＥＰは前半戦の最後になりますので、超重要なＥＰとなります。
なるべく調子よく書けたらいいなと思います。
それでは次回更新からは本分が載せられればな……と思います。

書ければ、次回更新予定は1～2時間後！

１０／２　１：５４

今回のコメント

・本文を読み返してたらこんな時間に！

それにしても沙和は書きやすぃなぁ。
可愛ぃよ沙和、沙和可愛ぃよ。（自分のキャラを溺愛）
ただ、主役の器ではないな……（ひどい言い方）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

秋が深まり、季節は少しずつ冬仕度を始める、そんな時期。

僕は季節に関係なく、授業が終わって、いつものように部活へ向かうために教室を出ようとした。教室の扉を開けて、出て行こうとすると、背後から呼び止める声が聞こえた。
振り向くと、後ろには沙和が腰に手をあて立っていた。

「甲斐斗、やっと捕まえた」
「なんだよ、沙和。用事でもあるの？」

僕の言葉に沙和は明らかに眉をひそめ、不機嫌そうにした。

「用事がないと、話しちゃいけないの？」
「いや、そんなことないけど」
「だって、いつもすぐに部活へ行っちゃうじゃない」

沙和は僕の制服の袖を掴んで、少し引っ張った。こちらを見上げる、不安げな瞳は小動物のようである。

「お前だって、部活のある日はダッシュで出て行くだろ」

「そうだけど……」

袖を掴んだ沙和はくいくいと引っ張って教室へ引き戻そうとする。上目遣いのまま、僕へ一歩近づいた。少しへの字になった唇から言葉が漏れる。

「今日ぐらいはサボろうよ。あのカフェに行こうよ」

「はぁ？　なんで？」

さらに袖を引っ張る力が強くなった。眉間に力がこもる。「むーっ」とか言って、睨んでいるつもりなのだが、高月先輩で免疫のできている僕にはさほど効き目がない。

「とにかく今日は駄目だ」

「なんで！？　この前は私が部活をサボったでしょ」

確かにあの時は感謝している。気持が楽になった。

――まさか。いつもノー天気に見える沙和も悩みを抱えているのだろうか？

「どうした？　なにか困ったことでもあるのか？」

「今、困ってる。甲斐斗が部活をサボってくれないから」

僕はゆっくり沙和に近づき、顔を寄せる。

「わ、わわ、わ」とか言いながら、口元を震わせる沙和の表情が

見て取れた。僕はそのまま沙和のおでこに頭突きをした。

書ければ、次回更新予定は1～2時間後？

１０／２　２：５９

今回のコメント

・どうでもいい情報。

ウチの高校の制服は在学中、学ランでした。

それが今ではブレザーだそうな。

母校よ、世間に媚びたか！

くそう、最後まで少数派を貫いて欲しかったなぁ。（勝手な意見）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「どうした？　なにか困ったことでもあるのか？」

「今、困ってる。甲斐斗がサボってくれないから」

僕はゆっくり沙和に近づき、顔を寄せる。「わ、わわ、わ」とか言いながら、口元を震わせる沙和の表情が見て取れた。僕はそのまま沙和のおでこに頭突きをした。

「――いっ！！」と短い声を上げた沙和はしゃがみ込んでしまった。「ひーん」とか言いながらおでこをさすっている。

「心配して損した。っていうか土日じゃ駄目なのかよ」

するとおでこを手で隠しながら、真っ赤な顔をして沙和が顔を上げた。

「駄目！」

「なんで？」

すると沙和は横を向いて「そういう事訊く？」と小声で言った。聞こえてるけどね。

「土日だと私服でしょ。この制服で一緒に帰る秋はもう来ないんだよ」

輪転高校は来年から制服が変わる。なんでも先代の生徒会長が公約として決めたものを本当に実現させたらしい。

僕としては制服を買い換えなきゃならないので、面倒くさいことこの上ない。先代の生徒会長に文句言いたいぐらいである。

「それに私のために部活ぐらい……」

「しゃがんで、下向いて話されると聞こえないぞ」

「――っ！　なんでもないっ！」

しゃがんだまま下を向いたまま動かない沙和を見て、僕は腰に手をあて、小さくため息をついた。

「おい、沙和」

返事をしない沙和と同じ目線になるようにしゃがむ。突然、しゃがんだので、沙和が驚いてこちらを向いた。視線が合った沙和は瞳

を潤ませていた。そんなに頭突きが痛かったか。

「本当に悩みがあるんだった、付き合う。ハッキリ言え」

沙和は斜め下に視線を動かして、呟いた。

「別に……ない」

「悪いな。日記部には、困った人がいるんだ。まず、それを解決しないと」

するとしばらく黙っていたが数秒後、視線を外したまま、沙和は答えた。

「わかった。じゃあ、今週の土曜日、約束してくれる？」

「了解。お前の部活がちゃんと終わってからな」

「うん」

頷いたまま下を向き続ける沙和の頭をぽんと軽く叩き、僕は立ち上がり、部室へ向かった。

もう、ドライブへ行くっ！

だから更新は2~3時間後！

（果たして起きているのだろうか？）

10／2　5:36

今回のコメント

・ドライブから帰還。

やはり、深夜のスーパーに客がいる。

（お前もだろっていうツッコミは受けません）

これが日本GP（F1）の週になれば……もっと増えるはず。

それがこの街の宿命。

うーん、来週はドライブ中止し……ない！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

渡り廊下を抜け、旧校舎へ入るいつものコース。楽器の音や喧騒が響く二、三階を駆け上がり、四階にたどり着いた。ここまでくると、階下の音は小さくなり、静かな空間が広がる。人の気配がない薄暗い廊下を抜けると、日記部の部室はある。木造で両開きの大袈裟な扉が目印だ。僕はノックして扉を開ける。

扉が開く隙間から、いつもの位置に座った高月先輩が目に入る。いつもの通り、歴代部長の日記帳を開いて読んでいる。僕は一つ挟んだ隣の席に座る。

「こんにちは」

僕の挨拶に先輩は一瞬顔を上げるが、すぐに日記帳へと向かう。

高月先輩のやや伏目がちの瞳。長い睫毛がとても魅力的だ。時折、髪をかきあげる姿はついつい見とれてしまう。

日没がすっかり遅くなったので、オレンジだけでなく赤が混ざり、先輩を照らす。神秘的な雰囲気を僕は横目でうかがう事で精一杯だった。理由は神秘的と同時に人を寄せ付けないオーラが漂っているからだ。僕は先輩に見せないようにため息をついた。

美国進の日記から一ヶ月が経過していた。あの日以来、高月先輩の態度が硬化したままだ。まるで僕が入部した当時に戻ったようだった。いや、その時点よりたちが悪い気がする。

だけど、僕は怯まない。先輩にとことん付き合うと決めたからだ。今だって、部活終わってからの寄り道を提案しようとタイミングを計っているのだ。

全身に力が入る。僕は意を決して横を向いた。

「先輩」

すると先輩はページをめくる手を一瞬止めた。用件を言えという意味か。僕はすかさず、言葉をはさんだ。

起きていれば、

だから更新は1~2時間後。（いい加減）

10／2　6：51

今回のコメント
・空が、空が明るいよおぉぉぉっ！！
でも曇ってる。
僕も結構話しているとき「すいません」をつけるタイプです。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　すると先輩はページをめくる手を一瞬止めた。用件を言えという意味か。僕はすかさず、言葉をはさんだ。
「今日、部活終わっ――」
「ごめん。勉強していきたいから」
　もはや最後まで言わせてもらえない。僕がしつこく誘っているからという理由もあるだろう。だけど、断るようになった理由も言わずに、冷たくなったのはずるい気がする。本人なりの理由があるのだろうけど、せめて教えて欲しい。
　と、思った矢先、先輩が日記帳に視線を落としたまま、独り言のように言った。
「ごめん。誘ってくれるのは嬉しいけど、多分これからも一緒に帰ることはないと思う」
「……どうしてですか？」

「日記帳の勉強をしたいから……ごめん」
「だったら、僕も付き合いますよ」
「ごめん。一人で勉強したいの」

最近特にわざとかと思うぐらい先輩は言葉に「ごめん」をつける。でも、やたら付けるので、もはや謝罪としての機能はしておらず、話題を終わらせるための常套句になっていた。

当然今回も取り付く隙もなく、僕はただうな垂れるしかなかった。

下を向きながら、何度も僕は美国日記の世界で、高月先輩に失礼なことをしていないか反芻した。だけどちっとも心当たりがない。再びため息が出そうになったので、先輩と反対側、つまり扉側を向いた。そこで僕は背筋が凍るような感覚に襲われた。

扉が半開きなっていて、隙間から女性の目がこっちをジッと見つめていたからだ。一瞬、席からずり落ちそうになったが、咳払いをしながら体勢を整え、あらためて扉を見返した。するとそこには見覚えのある顔が覗きこんでいた。滝川先輩だった。

「あれ？　滝が――」

僕が話しかけようとすると、先輩は口元に人差し指をあて、静かにしろとジェスチャーをする。さらには手招きをして、部室に出てこいと指示をされた。嫌な予感はしたものの僕は言うとおりに部室を出ることにした。

幸い高月先輩は僕の動きに興味がないのか、日記帳を読んでいる姿勢のままだった。……気にされないのもちょっと寂しい。

もう、寝マッスル。（オヤジギャグ）

１０／２　１９：０８

今回のコメント

さぁ、今日も始まるザマスよ。
いくでがんす！
フンガー！

真面目にやりなさーい！
（ネタが古い）

ということで今日も更新スタート！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　意味もなく、こそこそと部室を出た僕は扉を閉めたと同時に滝川先輩に頭を小突かれた。

「痛いっ！」
「いつまでやってるつもりだ。さっさと仲直りしろ」
「仲直り？　僕達喧嘩なんかしてませんよう」

　『僕達』なんか言ったりして、付き合ってるみたい。滝川先輩は僕の言うことを鼻で笑った。

「ふん。喧嘩している同士は大抵『別に喧嘩なんかしてしてしてないっ

すよ』と言うものだ」
「えー、そうですか。えへへ」
「お前はなにを照れているんだ？」
「だって、そんな喧嘩するなんて、まるで……」
頭をかきながら、照れる僕を滝川先輩は無言で頭を叩いた。
「痛いっ！」
さらにもう一発叩かれた。
「なにするんですか！」
「よくわからんが、ムカついた。そして勘違いするアホ。あくまでも部長と部員の関係での仲の話だ」
頭をさすりながらも少し僕は浮かれていた。とは言え、高月先輩の機嫌が直っていないのは事実で、滝川先輩とニヤけた話をしてても、意味がない。
「わかりました。もう、勘違いしません……が、僕にも原因が分からないんです」
「亜也が不機嫌になった原因って、明白だろ。美国日記の世界で、私がお前達に再会した時は、亜也をお姫様だっこして、その後平手打ちされた場面だったが」
「うっ……」
「それでも何もなかったと？」
「あれだけ見ると確かにそうだけど、違うんですよ……ってちゃんと説明したじゃないですか！」

更新は1～2時間後。

１０／２　２０：２８

今回のコメント

・よし、今日もぼちぼち行きますよ！

とにかく、少しずつでもゴールへ向かうぞ！
半歩でも四分の一歩でもね。
諦めなければ、
どんなに遠回りしても必ずいつかはたどり着く。

そう。
ｉＰｈｏｎｅならね。（ｉＰｈｏｎｅギャグ）

ちなみにｉＰｈｏｎｅは持ってません。
ドコモユーザーなので。（なにそれ）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「亜也が不機嫌になった原因って、明白だろ。美国日記の世界で、私がお前達に再会した時は、亜也をお姫様だっこして、その後平手打ちされた場面だったが」
「うっ……」
「それでも何もなかったと？」
「あれだけ見ると確かにそうだけど、違うんですよ……ってちゃんと説明したじゃないですか！」

美国進の日記世界から戻ってきた後、滝川先輩から半ば強制的に問い詰められた。僕は包み隠さず話して納得して貰ったつもりだったが、事あるごとに責められて困る時がある。

滝川先輩は困った様子で顎に手をあて、考えるそぶりを見せた。

「どうせ、痴話げんかだろうと思って放っておいたが、もうすぐ期末テストだ。いい加減仲直りしてもらわないと困る」

確かに平光先生から、期末テストが近づいているという話は聞いていた。今回は数回にわけて行なうので、実際の期末テストよりやや早めに行なわれるという話らしい。

「でも、ちゃんと小テストは受けてますよ。輪転の誓いも使ってるし」

「お前は、まったくわかってないな」

「なにがですか？」

「輪転の誓いを使って、日記世界の危機を脱したとしても、亜也の気持が楽しくなければ意味がないんだ」

部長が使う日記帳は、手書きではなく、思ったことが文面にそのまま反映されるものだということ思い出した。物事を解決しても、部長のなかにわだかまりがあれば、それは辛い日記になる。平光先生の判定にまで影響しかねない。

「だから、分かるな。お前達が仲直りしないと。中間テストの後みたいに」

「わかりました」

返事をしておきながら、僕は方法がまったく思い浮かばなかった。

ご飯食べに行ってきます。
更新は1~2時間後。

１０／３　２２：３５

今回のコメント

・いやぁ、一日中食べてましたよ。
だから更新も一日後ですよ。（明らかな嘘）
んじゃあ、今日も相変わらずの更新行ってみますか！

ちなみに今日の夕飯は
牛丼でした。（普通に書いてみた）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「だから、分かるな。お前達が仲直りしないとな。中間テストの後みたいに」
「わかりました」

返事をしておきながら、僕は方法がまったく思い浮かばなかった。

ゆっくりとドアを開け、僕と滝川先輩が部室に入る。高月先輩はこちらを見ようとせず、日記帳を読んでいた。いつもの席に座り、下を向くと同時に高月先輩の呟くような声がした。

「仲のよろしいようで」
「違う、違う！」

滝川先輩と僕はほぼ同時に弁解した。高月先輩は日記帳から目を離さず、僕らの話も聞かないという態度をとった。滝川先輩と僕がオロオロしていると、部室の扉が開いた。

「じゃじゃ～ん、大発表で～す！」

今日は白を基調とした着物をきて、平光先生がくるくる回りながら部室へ入ってきた。正直、僕と滝川先輩はホッとした。僕はすかさず先生の相手をした。

「大発表ってなんですか？」
「ごめ～ん。実はね期末テストの日程が早まっちゃった」
「いつですか？」
「今日から」
「今日から！？」

僕は席から立ち上がり、滝川先輩も口を大きく開けて驚いている。高月先輩だけは日記帳から目を離していない。

「私も、大丈夫だと思ってたんだけど～」

先生は言いながら高月先輩へと視線を向けた。

「それも亜也ちゃんのせいなんだけどね～」

高月先輩に視線が集まる。先輩はなにも言わず、日記帳を読む姿勢のまま、肩にかかった髪の毛を払いのけた。
滝川先輩は高月先輩を睨みつけて、軽く机を叩いた。

「亜也、お前……」
「大丈夫。まだ、大丈夫だから」
高月先輩は滝川先輩へ顔を向けると、真剣な口調で答えた。滝川先輩は「くっ……」と言った後、何も言わずに席に座った。
更新は1~2時間後の予定ですよ。多分ね。

１０／４　０：０３

今回のコメント

・部屋の掃除が中途半端だと〜、執筆する気持ちも中途半端〜。

だから無性に掃除したくなるんですよ。

ほら、試験勉強しようとしたら、掃除したくなって、いつの間にか漫画や雑誌を読みふけるあれですよ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「亜也、お前……」

「大丈夫。まだ、大丈夫だから」

高月先輩は滝川先輩へ顔を向けると、真剣な口調で答えた。滝川先輩は「くっ……」と言った後、何も言わずに席に座った。

それをきっかけに平光先生が話を続けた。

「いつものテストなら、時間まで日記世界を過ごしてもらうけど〜、今回は少し趣向を変えま〜す」

テスト内容を口にしなかった平光先生が珍しく内容に言及する。

僕はいつもと違う雰囲気に緊張した。

「今日から数日間に分けて、日記世界を体験してもらいます」

確かに今までは一回だけの日記世界だったけど、今回は複数回滞在するというのか。

「さらに、今回は合格基準を設けます。合格基準は第一回目のテスト後に発表で～す」

合格基準？　確か、試験や小テストは日記の内容に影響するだけだったはず。僕は恐る恐る手を挙げた。すると平光先生のメガネが光り、僕を指差した。

「あの、合格になったらどうなるんですか？」

すると平光先生はテンプレートで用意されているかのような、笑顔で答えた。

「合格したら倍になるよ♪」

「何が？」

「気持が」

わけ分かんねえ！　僕が口を開けたまま、平光先生を見つめる。僕は呆れているのだが、先生は何を勘違いしたか、顔を真っ赤にした。

「だって、そうしないとゲームにならないんだも～ん」

先生は手を体の前で絡ませ、モジモジさせながら高月先輩を見つめる。高月先輩は黙って睨み返していた。

「別に私は倍じゃなくても構いませんけど」

「でも～、私は～、勝てる勝負は面白くないので～す」

凄みのある低い声で答える高月先輩と、あくまでも軽い口調で答える平光先生。はっきりとは分からないけど、敗者と勝者の違いが明確になっている気がした。

「それに～不合格でも気持ちが倍で～す」

「――っ！？」

高月先輩は言い返すことができなかった。不合格になってしまえば、残念な気持ちが倍になるって寸法か。

更新は1～2時間後の予定ですよ。多分ね。

10／4　1：36

今回のコメント

・ちょっと寒くなってきたので、暖かいお茶を飲んでます。

う～ん、まったり。

このまま寝てしまいそう……グーグー（べつにｇｏｏｄと言っているわけではない）

よい子の皆も急激な気温の変化に風邪引くなよ！

そしてリープは風を口実にして一日ぐらい休んでやろうと目論んでるぞ！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「それに～不合格でも気持ちが倍で～す」

「――っ！？」

高月先輩は言い返すことができなかった。不合格になってしまえば、残念な気持ちが倍になるって寸法か。

しばらく、（高月先輩の一方的な）睨み合いが続いたが、平光先生はニコニコしたまま口を開いた。

「じゃあ、倍々ゲームは成立で～す。だって、亜也っぺは倍は嫌だっていってないもんね～。どっちでもいいのなら、倍にしま～す」

「……勝手にどうぞ」

笑顔を絶やさなかった平光先生に軍配は上がったようである。これで話は決まった。複数回に分けて行なう期末試験。さらには合格基準があって合格すれば、気持が倍になる、らしい。

普通に考えれば、きっと合格して嬉しい気持ちが倍になれば、楽しい日記が書けてしまうと言うわけか。

逆に考えれば、それだけ高月先輩の日記の状況が良くないと言うことだろう。先輩は幸せじゃないのか……やっぱり、僕では実力不足なのかな……ちょっとへこむ。

「んじゃあ、さっそく日記世界に行ってもらいますよ～」

いつの間にか平光先生の元へ日記帳が飛来していた。僕は日記帳から目が離せない。

「今回は特別仕様だからね～」

確かにいつもとは二周りほど大きさの違う日記帳だった。ページが開くと、いつもよりも輝きをまして、僕達は光に包まれた。

光が晴れていき、僕たちが周りを見渡す。見慣れた渡り廊下。歩いている学生。僕達と同じ制服。場所は学校だとすぐにわかった。

「学校ですよね。今回は誰の日記だろう」

「まったく検討がつかん。亜也はどうだ？　なにか――」

滝川先輩が言いかけたが、高月先輩はすでに歩き出していて、渡

り廊下の柱を見つめていた。僕と滝川先輩は顔を見合わせて、高月先輩の後を追った。同じように渡り廊下の壁を見ると、紙が貼り付けてあり、こう書かれていた。

『新しい輪転高校を作ります。あなたの一票をお願いします！』

どうやら選挙ポスターのようだ。ＰＣで作成されたような文字を見ると、どうやら自分達の世界とそう離れた時代ではないようだ。ここで僕はとある事実に気づく。ポスターに書かれた立候補者名に驚いた。

『美国進』と書かれてあったのだ。僕はすぐに高月先輩の表情をうかがう。先輩はとても神妙な顔つきでポスターを見つめていた。隣にいる滝川先輩が、高月先輩に話しかける。

「これってもしかして、三年前の選挙か？」

高月先輩は黙って頷いた。

更新はできれば後１～２時間後に１回ぐらいしたいです！（願望）

10／4　2：49

今回のコメント

・ちなみに僕は小学生の頃ですが、選挙管理委員長を務めたことがありました。

候補者を一堂に集めて、選挙内容を説明したり、ポスターなんかを配りました。

あと、立会演説会の司会もやりました。（意外にそういうの好き）
ちなみに委員長になったのは、ジャンケンで負けたからです！
でも結構面白かったですね。

実はその時に好きな子が立候補していて……とか言う話は、また今度。
（と言いつつ、特にするつもりはない）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「これってもしかして、三年前の選挙か？」

高月先輩は黙って頷いた。
滝川先輩はため息をついて、頭を抱えた。僕だけ置いてけぼりだった。ここは恥を惜しんで事実を確認するしかない。
僕は最初に高月先輩へ尋ねようと思ったけど、ポスターを見つめ

る表情を見て止めた。いつのまにか瞳を細め、なんとも嬉しそうな表情だったのだ。結局、滝川先輩に訊くことにした。

「三年前の選挙ってなんですか？」

僕の質問に滝川先輩は眉を八の字にして呆れた表情を向ける。

「お前は何も知らないんだな」

「入学前のことなんて知らないですよ」

「美国先輩がなんて呼ばれてたか知ってるか？」

「え？　美国進にも別名があったんですか？」

ほとほと呆れたのか、小さくため息をついて滝川先輩は答えた。

「『政界王子』と呼ばれていた。なんせ一年生で生徒会長になった男だからな。それから二期連続で生徒会長を務めた」

輪転高校の生徒会選挙は文化祭が終わった十一月に行なわれ、三学期から任期開始となる。一年の終わりから三年の二学期まで、美国進は学校生活を生徒会長で過ごしたことになる。

「ちなみに制服を変更させたのも美国先輩だ」

あの面倒くさい制服の変更が美国進の策略だったとは。なにからなにまで、僕の邪魔ばかりするんだな、コイツは！

「五十年ほど変わっていなかった制服を生徒会の活動で変えたんだぞ。学校経営陣まで説得するのに二年かかったらしい」

なんだ、その完璧超人ぶりは。僕は溜まらなく、いちゃもんを付

けたくなった。

「そんなのでよく日記部の部長が務まりましたね」
「私が知る限り、部活は欠かしてなかった気がする」
「ぐぬぬ……」

丁度今の僕と美国進が生徒会長になった時期が同じだった。それだけに比べられると正直僕にはまったく分がない。確かにそんな人物なら高月先輩が好きになっても仕方ない。

「どうした草弥、俯いて」
「放っておいてください。世の中の不公平を呪っているんです」

すると僕の頭に滝川先輩の手が置かれる。

「大丈夫だよ。お前はお前だ。自信を持て」

余計に悲しくなるんですけど。言葉に実が伴っていないからだ。本当の慰めなんですね。

僕が余計に落ち込んだところで、背後から声が聞こえた。

「あ～、見つけた～！　三人さん、ご案内～」

振り向くと、そこには黒を基調とした着物を着ている平光先生の姿があった。

今日はこれまで。

１０／４　２２：５９

今回のコメント

・今日の夕食～

厚切りハムを焼いたの。
キャベツの千切り。
シュウマイ。
肉団子
雑炊（急に食べたくなった）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「あ～、見つけた～！　三人さん、ご案内～」

振り向くと、そこには黒を基調とした着物を着ている平光先生の姿があった。

「いや～、よく来てくれたね～。歓迎するよ！」

僕達は日記世界の平光先生に連れられて、校舎を歩いていた。それにしても……色々ツッコミどころがある。まず我慢できなくなったのは滝川先輩だった。

「はかり先生、私達が誰か、知ってるの？」

「知ってるよ～、数年後入学してくる日記部員でしょ？」
「なぜ、誰から、それを？」
「え？　私からだよ」

平光先生は日記の中の自分とも意思疎通できるのか？　謎だ。滝川先輩も口をぽかんと開けて、次の言葉が出てこないようだ。ここは僕が話を続けよう。

「平光先生、ここは誰の日記世界なんですか？」
「誰の日記世界？　誰って……私？」

誰に聞いているんだ。っていうか、平光先生の日記世界だって？

「私も暇つぶしに日記をつけているから～」
「話主なのに出てますよ」

法則無視ですか。

「私は特別なのです。私にとっては日記世界も現実世界も時間、次元も関係ないからね～」

うわ～なんてチートな存在。そりゃ、テストを実施している本人だし、しょうがないのかもしれないけどさ。先生の掌で踊らされている日記部員の気持ちにもなって欲しいよ。

しかも、こんな不思議なことが起こっているのに全く気にしていない自分がいる。

平光先生の後についていくと、既視感のある風景になっていく。渡り廊下から旧校舎へ入り、二階、三階を抜けて四階に辿り着き、木造の扉に向かっている。そして予想通り日記部の部室の扉を開け

て、室内に入っていった。僕たちも後に続いた。

緊張して一歩踏み出す。すると室内は三年後とは少し違っていた。まずカーテンが淡い紫色になっており、テーブルも同系色のテーブルクロスがかかっていた。本棚は変わっていなかったが、カーテンとテーブルクロスがあるだけで、結構印象が違うものだなと思う。

更新は毎度毎度の1～2時間後の予定ですよ。
っていうかやばいよ、ドラゴンズがやばいよ～

10／5　0：48

今回のコメント

・さっき窓の外から見たら雨が降っていた。
いつのまに。
今日の朝もかなり寒かったからなぁ。
どんどんこれから秋が深まっていくのかなぁ。

秋大好きだからいいけど。

（天気の話だけ書くとはそうとうネタがないのか？）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

緊張して一歩踏み出す。すると室内は三年後とは少し違っていた。まずカーテンが淡い紫色になっており、テーブルも同系色のテーブルクロスがかかっていた。本棚は変わっていなかったが、カーテンとテーブルクロスがあるだけで、結構印象が違うものだなと思う。

「さぁさぁ、ここに座って」

平光先生にすすめられ、滝川先輩、高月先輩、僕の順番で席に並んで座った。反対側には平光先生のみである。

「じゃあさ、ここにサインして」

僕たちに向けて書類を差し出す。高月先輩が紙を受け取り、内容を確認する。途端に先輩の眉が釣りあがった。紙越しに平光先生を睨みつけ、静に紙を机に置いた。滝川先輩と僕は紙に近づき内容を読んだ。用紙には「立候補者申込書」と書かれてあった。

僕と滝川先輩は顔を見合わせて、次に高月先輩へ同時に視線を移す。すると、高月先輩はは小さくため息をついて、低く怒気を篭らせた声で平光先生に尋ねた。

「どういうつもりですか？」

「『どういうつもり』って、そのまんまだよ。生徒会長選挙に立候補してもらいま～す。それが今回の試験内容」

「なに言ってんだ！　私達と美国進を戦わせようってことか！」

滝川先輩は机を叩いて立ち上がった。僕も同じ気持ちだったが、先を越されて一瞬腰を浮かせただけに留まった。

しかし、平光先生はまったく動じた様子もなく、ニコニコとした口調で答えた。

「うん。そして、この日記内で美国進に選挙で勝つことが、期末テストの合格基準になります」

「――なっ」

滝川先輩は二の句が継げずに、その場に固まってしまった。僕も反応できずにいる。

「試験内容は分かりました。これに立候補者の名前を書けばいいのね」

申し込み用紙を持って、高月先輩ははっきりとした口調で答えた。
滝川先輩と僕は一斉に高月先輩を見つめた。平光先生が小さく拍手をする。

「亜也っぺ、物分りが良い～」
「亜也……」

滝川先輩と僕の注目を跳ね除けるように、高月先輩は肩にかかった髪を大袈裟に払った。さらに鋭い視線が平光先生に向けられる。

「どの道避けて通れないし。覚悟はしてた」
「亜也がそういうんなら、仕方ない。草弥、名前を書け」
「わかりました……って、どこにです？」

滝川先輩は僕を睨みつけ、机を指差して答えた。

「立候補者の欄にお前の名前を書けって言ってるんだよ」
「はぁ～～～～？」

僕が口を開けたまま、固まっている隣で、高月先輩も同意するように頷いていた。

次の更新は1～2時間後！

１０／５　２：３４

今回のコメント

・どうでも良い情報。

ウチの弟（六歳歳下）は生徒会長になったことがある。

正直、こんなアホが会長で大丈夫なんだろうか？

とも思ったが、一応ポスター作りを手伝ってしまった。

意外と学校では人気者だったようである。

兄とは大違い……

（そして今は一児の父。親馬鹿である）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「立候補者の欄にお前の名前を書けって言ってるんだよ」

「はぁ～～～～？」

僕が口を開けたまま、固まっている隣で、高月先輩も同意するように頷いていた。

「なぜ僕なんですか！？　確かに高月先輩は三年生だから出れませんが、滝川先輩なら立候補可能でしょう！　むしろ神経の図太さなら滝川先――んぐっ！」

訴えている途中で、滝川先輩のゲンコツが僕の頭に直撃した。僕は溜まらずうずくまる。

「誰が神経図太いだ。私に対するお前のイメージが大体わかった。これから付き合い方を考えないといかんなぁ」

「今の関係で十分です」

「ふん。大体だな、お前は美国進との対決を逃げるのか？」

滝川先輩の言葉が僕の胸を打ち抜く。くそっ、必殺の一言だ。僕は頭をさすりながら立ち上がった。

「逃げるわけないでしょう。見事倒してやります」

「その息だ。さぁ、このペンを持って」

「了解です！」

僕は渡されたペンを走らせ用紙に名前を書いた。書き終わった頃、またノリで重大なことを決めてしまったことを後悔した。平光先生は嬉々として僕の名前が記載されたことを確認していた。

「んじゃあね～、後は推薦人の名前書いて。一人だけ」

平光先生の一言で、高月先輩と滝川先輩はお互いを見つめあった。これは醜い押し付け合いが始まるに違いない。僕は横目で好奇心一杯に状況を見守った。

「夕実、悪いけど……」

「ああ、どうぞ」

滝川先輩がペンを手に取った。勝負はあっさり決まったようだ。

やはり後輩がやらなく……と思った矢先、ペンは高月先輩に渡った。躊躇なく「高月亜也」と名前が書かれた。

「なんで高月先輩？」

僕の呟きに、高月先輩は用紙を見つめ、独り言のように答えた。

「私も負けたくない相手がいるから」

美国進に負けたくないのかな？　と考えていると、木造の扉がノックされた。馬鹿に丁寧だな。「失礼します」と扉の向こうから聞こえ、ドアノブが回って開き始める。

そうだ。後、日記部に入ってくる可能性のある人物といえば、在校生しかいない。僕は思わず息を呑んだ。

今日はこれまで！

10／5　22：42

今回のコメント

・いつも通りの夕食

ロールキャベツ、肉団子を煮たもの。

チャーハン。

以上。

今日も始まり始まり～

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

美国進に負けたくないのかな？　と考えていると、木造の扉がノックされた。馬鹿に丁寧だな。「失礼します」と扉の向こうから聞こえ、ドアノブが回って開き始める。

そうだ。後、日記部に入ってくる可能性のある人物といえば、在校生しかいない。僕は思わず息を呑んだ。

「ちわ～っす！」

元気のいい声で扉が開けられると、僕と同じぐらいの背丈の男子が部室に入ってきた。平光先生は男子に手を上げ、招き入れる。

「おお、みっくん、いらっしゃ～い」
「いらっしゃいって、ここ俺達の部室ですよ」

髪は短く清潔感があり、細身で眼鏡をかけている。みっくんということは、コイツが美国進……。確かにいい男だが、少し軽さを感じてしまうのは気のせいか。

そんなことより――僕は思わず高月先輩の反応が気になって、振り向く。すると高月先輩は俯いたまま、美国進を見ようとしなかった……いや、見れないのか？

「あれ？　はかり先生、お客様ですか？」
「うん。ちょっとね、今日からみっくんのライバルになる人たち」
「マジですか！？」

立ち止まって、両手を少し広げ、ややオーバーなジェスチャーをしながら、僕たちに近づいてくる。近づくな。僕は自然に祈っていた。

と同時に緊張のせいか、心臓の鼓動が早くなっていくのを感じた。頭まで響く妙な鼓動だった。

僕の祈りも虚しく、美国進は僕の前で止まった。

「どうも、初めまして、美国進といいます。一年一組です」

僕の前で軽く会釈した。僕も釣られて会釈する。いつの間にか鼓動が治まっていた。

「みっくん、その男の子が立候補するんだよ」

平光先生の紹介があったので、僕は席を立って挨拶した。

「一年二組の草弥甲斐斗です」

僕の挨拶を聞くと、美国通は瞳を輝かせて僕の手を取った。

「なんだ同じ一年かぁ。立候補するって言ってたから、てっきり年上だと思ってた」

「は、はぁ……」

なんだか不思議な気分だ。僕からすれば、先輩と話をしているのだけれど、相手からすれば同級生なんだよな。どんな態度とっていいか非常に困る。

困惑顔で対応していると急に美国通は僕の顔をまじまじと見つめてきた。

更新は1~2時間後

10／6　0：12

今回のコメント
・なんとなく、紙が散乱している。
電子辞書を探す。
←
資料の本を引っくり返す。
←
メモや印刷した紙をどける。
←
電子辞書がない。
←
諦めて椅子に座る。
←
目の前においてあった。

そ、掃除しよ！（いつかね）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

なんだか不思議な気分だ。僕からすれば、先輩と話をしているのだけれど、相手からすれば同級生なんだよな。どんな態度とっていいか非常に困る。

困惑顔で対応していると急に美国通は僕の顔をまじまじと見つめてきた。

「あれ？　でも、隣のクラスなのに見かけない顔だなぁ……」

「そ、それは……」

すかさず平光先生が美国通を呼び止める。

「みっくん、草っちは最近転向してきたんだよ」

「えっ！？　最近引っ越してきたのに立候補？　チャレンジャー！」

美国進は嬉しそうにして、僕の肩をバンバン叩いた。なんとなく思ってたイメージと違う。もっとクールでカッコいいイメージがあったのに、実際の美国はノリが良くて、爽やかな男だった。

「久しぶりだな美国先輩」

「えっと……どなた？」

美国通の前に立ちはだかったのは、滝川先輩だった。笑いかけながら、美国通へ頭を小さく下げた。

「在学中はよくお世話になりました」

「在学中ってアナタは卒業生？」

「いえ、二年生、お前の先輩だよ」

言ったと同時に美国通の背中を思いっきり叩いた。

「痛っ！」

「いいか。数年後、後輩にいきなりこんなことするなよ」

「じ、自分がしてるでしょ……」

うわ～、自分が一年生だったときの恨みを晴らしてる～。た、滝川無双……。どうやら滝川先輩は美国通にからかわれていたようだ。

二人の挨拶が終わり、自然に残りの高月先輩へと視線が移る。美国通は僕と滝川先輩の間を抜けて、高月先輩の前に立った。

「初めまして、俺は美国進って言います」

目を細めて、笑いかける美国通。高月先輩は俯いたまま向き合おうとしなかった。見かねた滝川先輩が声をかける。それでも高月先輩は反応しなかった。慌てて滝川先輩が説明した。

更新は1～2時間後。
ドラゴンズがとうとう……フィーバー！

１０／６　２：１０

今回のコメント

・お風呂に入ってたよ！（ホント、要らない情報）

夜中、シャンプーをしていると背後か気になって仕方ないです。

でも、シャンプー時の背後の気配について、松本人志が言った「リンスです。リンスが順番を待ってます」を思い出すと、なんか安心できるね。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「初めまして、俺は美国進って言います」

目を細めて、笑いかける美国通。高月先輩は俯いたまま向き合おうとしなかった。見かねた滝川先輩が声をかける。それでも高月先輩は反応しない。慌てて滝川先輩が説明した。

「彼女は高月亜也、三年生だ。」

滝川先輩と高月先輩を交互に見て、美国通はこめかみに人差し指を当てた。

「なんだかよく分かりませんが……」

美国通はしゃがみこんで、椅子に座っている高月先輩に視線を合わせた。

「元気出してくださいね」

瞬間、高月先輩の肩が揺れた。僕は考える暇もなく、足が動いていた。すかさず、高月先輩と美国通の間に割ってはいる。

「ごめん、今日はちょっと先輩、調子悪いんだ」

「え？　そうなんだ。ごめんなさい」

あっさりと美国通は身を引いた。高月先輩と出会う前なのだから仕方ないと言えばそうなのだが……

「ごめん。大丈夫だから……」

僕の背中越しに声が聞こえる。横から盗み見ると呟いた口元が震えていた。僕はなんだか悔しくて奥歯をかみ締めた。

「あら？　なんで部外者がいるのかしら？」

甲高い声が室内に響く。声へと顔を向けると、ウチの高校の制服を着ている女性が立っていた。美国通は再び僕と滝川先輩の間を通って女性へ近づく。

「御堂先輩、遅いですよ」

「美国が早すぎるんでしょうが、エスコートする気ゼロね」

黒髪で長髪、前髪はきちんと揃えられている。手には真っ赤な羽

扇子を持っている。やや長めのスカートを小さくひるがえらせて、ツカツカと歩いてきた。

僕は以前の小テストで、一年前の高月先輩が言っていた、人物を思い出した。美国通の想い人、御堂真理だ。

御堂真理は平光先生の前まで来ると大袈裟に机を叩いた。

「どういうことですか？　平光先生、この日記部の部室に関係者以外を連れ込んで」

「真理ちゃん、紹介するね。この人たち、今回生徒会長選に立候補する人たち」

片手で器用に羽扇子を広げると口元を隠す。扇子越しに切れ長の瞳が僕達を見つめる。

「……なるほど。冴えない面子ね」

初対面でこれかよ！　御堂真理、相当の毒舌である。

今日はこれぐらいで。

10／6　23：17

今回のコメント

・今日の夕食！

もらい物のさしみ。
から揚げ。
ゆで卵。
ごはん。

以上。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「真理ちゃん、紹介するね。この人たち、今回生徒会長選に立候補する人たち」

片手で器用に羽扇子を広げると口元を隠す。扇子越しに切れ長の瞳が僕達を見つめた。

「……なるほど。冴えない面子ね」

初対面でこれかよ！　御堂真理、相当の毒舌である。

「どうせ落選するんだから、無駄な時間を過ごすだけ。今すぐ辞退

しなさいな」

羽扇子をひらりと裏返して、一瞬不敵な笑みが僕等から見えた。こ、コイツ……

黙っていられなかったのは滝川先輩だった。ずいっと御堂真理の前に立ちはだかる。

「やってみなければわからないだろう」

「あら、アナタが立候補者？」

御堂真理は小さくだけど優雅に羽扇子を仰ぐ。僕等を覗く瞳は値踏みしているようだ。

滝川先輩は僕の奥襟を掴むと、猫を差し出すように御堂真理の前につきだした。

「残念ながら、コイツが立候補者だ」

「ど、どうも～」

残念ながらはないでしょう！　とはいえ僕だって軽々しい挨拶しかできなかった。御堂真理が僕を見つめる切れ長だけど大きな瞳が見つめる。

「アナタ、学年と名前は？」

「一年二組の草弥甲斐斗です」

「一年？　ふうん。ウチの美国と同じなの……」

羽扇子越しから上から下へと僕に視線を動かす。少ししてふんっと鼻を鳴らした。

「美国、どう？　勝てそう？」

いつの間にか御堂真理の隣にいた美国進は目を細めニコニコと微笑んだ。

「う〜ん。まだ分かりませんが、負けるつもりはないですよ」

カチンっときたね。御堂真理の子分みたいな、立ち位置で答えやがって。これが本当に高月先輩が追いかけた人だっていうのか？僕は御堂真理、美国進の前に進んだ。

「あら？　坊やにも何か言い分があるみたいよ」

御堂真理は羽扇子をパタンと閉じて、僕へと扇子を指さすように向ける。

「いいなさい。全部反論してやるから」

自然と僕と御堂真理がにらみ合う形になった。高月先輩とは別の意味で視線を外せない。今、逃げたら捕食されそうだ。

「どうしたの？　さぁ、言いなさい」

「ふう……」

僕はとりあえず、一歩下がった。

「何も言わないのかっ！」

滝川先輩のツッコミももっともだ。でも、反論できるほど、自分に主張できる材料が無いのも事実だった。

更新は毎度毎度の1～2時間後の予定ですよ。
とうとうドラゴンズが！
キタ――――ッ！

10／7　1：57

今回のコメント

・ちょっと前の美国日記編がシリアスすぎたので、今回の前半はコメディ要素がはいってます。

バランスを取る意味でもいいかなと。

今の日記部の三人では落ち込んだままなので。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「どうしたの？　さぁ、言いなさい」

「ふう……」

僕はとりあえず、一歩下がった。

「何も言わないのかっ！」

滝川先輩のツッコミももっともだ。でも、反論できるほど、自分に主張できる材料が無いのも事実だった。

御堂真理は口をぽかんと開けたまま数秒動かないでいた。美国進に肩を叩かれ、ようやく我に返り、羽扇子を広げた。

「まさか何も言われないとは思わなかった……意外と策士ね」

「違うと思いますよ御堂先輩」
「し、知ってるわ。美国はいちいち言わなくてよろしい！」

御堂真理は黙っていたら、勝手に色々解釈してくれそうなタイプらしい。しかし、冷静に突っ込みを入れる美国進がいるためにバランスが取れている。

「立候補者がこれなら、推薦人は高が知れてるわね。で、誰なの？美国の推薦人である私、御堂真理が見定めてあげる」

御堂真理は再び滝川先輩を見つめる。しかし、滝川先輩は視線を避けるように道をあける。
「後ろに控えるのが、推薦人だ」

滝川先輩が体をどけると、未だに座ったまま俯いている高月先輩がいた。御堂真理は再び口元を羽扇子で隠し、見定めるように上から下へと高月先輩を見つめた。

「へえ……覇気のない子ね」
「今日は元気ないって言ってましたよ。たしかに顔色が優れないですし」

美国進が少しかがんで高月先輩の顔を覗き込もうとしたので、僕は視線の間に立って視界を塞いだ。同時に御堂真理も美国進の顔を隠すように羽扇子を被せる。

「止めなさい。紳士のたしなみとしては、みっともないわよ」
「あっ、すいません。以後気をつけます」

こんなデリカシーのない奴が美国進だというのか？　僕は高月先

輩の好みが分からなくなった。ワイルドなのが好きなのかな？
それに御堂真理の言うことはちゃんと聞くんだよな。この二人の関係も不思議なものに思えた。なんて僕が考えていると、御堂真理は再び滝川先輩へと向きなおしていた。

「で？　結局アンタはなんなの？」
「私は二人の応援者だ」
「立候補者でも推薦人でもないの？」
「当事者なくて悪かったな」

滝川先輩が横を向いて、バツが悪そうに言い返す。御堂真理は「ふうん」と言いながら、優雅に羽扇子をあおぎながら一言言った。

「雑魚ね」
「ざ、雑魚……だと？」

僕からみても滝川先輩の口が歪んでいた。よくみると拳が握られ震えている。これはいかん。僕はすかさず、御堂真理、滝川先輩の間に入った。

「滝川先輩落ち着いてください」
「どけ。亜也と自分が馬鹿にされて、黙っていられるか！」

次からでいいので僕も入れてください。とか思いながら滝川先輩の肩を必死で抑えた。

今回はこれまで。（少な目）

１０／７　２２：２３

今回のコメント

・夕食、今日の。

炒め物、豚肉と野菜の。

煮物、ナスとミンチの。

はんご。

以上。

と言うことで少し早いスタート！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「滝川先輩落ち着いてください」

「どけ。亜也と自分が馬鹿にされて、黙っていられるか！」

次からでいいので僕も入れてください。とか思いながら滝川先輩の肩を必死で抑えた。

一食触発な雰囲気。僕は滝川先輩を抑えるので精一杯だった。そこへ平光先生の暢気な声がしゃしゃり出てきた。

「まあまま、真理ちゃん。そんなに警戒しなくても～、ライバルは他にもいるんだし～」

「――なっ、誰が警戒してるって？　ふざけないで！」

「ムキになるところが、可愛い～♪」

御堂真理は羽扇子で顔を隠して、なにかわめいている。平光先生は彼女の反応を楽しんでいるようだった。滝川先輩も平光先生の言葉で気勢がそがれたようだ。肩に入る力も次第に小さくなる。御堂真理と平光先生がやりあっている（御堂真理が一方的に怒鳴っている）姿のを見て、僕もホッとした。

しかしすぐに緊張は訪れた。今度は美国進が僕に近づき、顔をまじまじと見つめてくる。遠慮のない眼鏡越しの鋭い視線が突き刺さった。

「なんだよ」

「いや、別に……ライバルの顔をちゃんと拝んでおかないとなと思って」

美国進は僕から顔を離して、頬を指でかきながら答えた。

「それに……」

今度は視線を高月先輩へ移し、目を細める。高月先輩はまだ俯いたままだった。もしかしたら美国の視線に気づいたのかもしれない。

やはり僕は気に食わなくなって、視線を遮るように立ちふさがった。すると美国進は顎に手を当てて何度か頷いた。

「君は良い後輩だ。僕も負けるつもりはないけどね。御堂先輩は僕が幸せにするんだから。じゃあ、また校内で会うこともあるだろうけど、その時はヨロシク」

言いながら僕へと手が差し出される。笑った口から白い歯が覗く。

「キラリンッ」とか効果音がつきそうだ。

なに恥ずかしい台詞をあっさり言ってるんだコイツはとも思ったが、なんとなく気持ちが分かるので、僕は「はあ……」とか言いながら手を出して握手をしてしまった。

更新は1~2時間後です！

10／7　23：54

今回のコメント

V6の岡田君が出てる、CMが好きだなぁ。
あの人生のサイコロってやつ。
流れる曲も演技もいいよね。なんかぼちぼち頑張ろうって気がする。
ただ、コーヒーのCMだということはすっかり忘れる。

ということで～

が　ん　ば　り　ま　す　っ　！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　言いながら僕へと手が差し出される。笑った口から白い歯が覗く。
「キラリンッ」とか効果音がつきそうだ。
　なに恥ずかしい台詞をあっさり言ってるんだコイツはとも思ったが、なんとなく気持ちが分かるので、僕は「はあ……」とか言いながら手を出して握手をしてしまった。
「君もあの先輩のことが好きなんだね」
「え！？　僕は……」

なんて答えればいいんだろう。僕は言葉に詰まってしまった。気障な言葉が出ないわけではない。むしろ美国進に対抗心だってある。だけど、胸の中で即答できないモヤモヤが立ち込めた。

「なに敵と握手してんだお前は」

滝川先輩に頭をチョップされ、僕は「ぶっ！」と噴出し、前のめりになった。隣では未だに御堂真理と平光先生がやりあっていた。高月先輩はやっぱり黙ったままだった。

「ふん。今日の部活動がないのであれば、私達は選挙活動に行きます」

「いいよ～、今日はもう部活動しないから」

「わかりました。無駄な時間を過ごしている暇はないわ。それでは皆さん、ごきげんよう。せいぜい思い出作りの選挙を楽しんでくださいな」

御堂真理が平光先生との言い合いに終止符を打つと、美国進を連れて部室を出て行った。

その後は平光先生に選挙の説明を受け、ポスター等の選挙活動のための道具を渡された。ちなみに僕達の立場はあくまでも転校生らしい。

平光先生は「自分の日記だからどうにでもなるよ」と、僕達を不安にさせる言葉を言った。それを見越してか、続けて「大丈夫、試験結果を捏造する事はしないよ。試験環境を整える事はするけどね」などと先生らしい言葉をいったので、僕は安心しつつ同時に言葉に裏がないが疑ってしまった。

言葉少ない高月先輩となんだかムッとした表情の滝川先輩を連れて、部室の扉を開けて、外に出ると、また日記部部室が広がっていた。どうやら、元の世界に返ったらしい。

「おかえり～♪　どう～。昔の私も美人だった？」

平光先生はクルクル回りながら、僕たちを迎えてくれた。しかし、さっきまで会っていたせいでまるで感動がない。むしろ暢気な態度に腹が立ってきた。

「なんなんだ！　なんなんだアイツは！　御堂真理ムカつくっ！」

滝川先輩は机を叩いて、苛立ちを発散していた。気持ちは分からなくもない。まったく、これならまだ熊に襲われたり、火事にあったりしたほうがましだ。

「亜也、いつまで思い出に浸ってるつもりだ」

高月先輩は元の世界に戻ってからも椅子に座って黙っていた。滝川先輩の言葉に高月先輩は顔を上げた。

更新は1～2時間後ですよ。

10／8　1：20

今回のコメント

今さっき探偵ナイトスクープの犬の脱走ネタみた爆笑してしまった。なんであんなに首輪を抜けようとする犬って必死で情けない顔してるんだろうね。
そしてその後、自由になった時の軽い足取り。

面白いぞ！　尾も白いぞ！（白くないし）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「今回のテストは勝たないと意味ないんだぞ。わかるな？」
「でしょうね……」

高月先輩は生返事をして、再び俯いた。高月先輩の元気がないのは美国進のせいだとしても、今回の試験について僕は結構楽観的だった。

「滝川先輩。大丈夫ですよ。輪転の誓いを使えば」

以前、銀行強盗を説得した、第五十七期生、大沢ユミ「仲裁女王」のチョーカーを付けて、高月先輩が推薦人のスピーチをすれば、楽勝のはずだ。

でも、滝川先輩の表情は晴れない。晴れないどころが、一層に険しくなった。

「馬鹿かお前は。御堂真理も同じ手を使ってくるだろう」

忘れてた！　御堂真理は日記部部長。美国進がいれば、輪転の誓いなんてわけがない。ということは、今回ばかりは輪転の誓いの力は、対美国を考えると無意味なのか。

「つまりだ、チョーカーを付けた者のスピーチ内容が問題となる。いかに有権者へ訴えかけられるか、言い換えれば、推薦人が立候補者の事をどれだけよく知ってるかが勝負の分かれ目となる」

僕は急に梯子をはずされたような不安感に襲われた。足元がおぼつかない感じ。今回重要なのは高月先輩がいかに僕の事を知って、良さをアピールできるかにかかっているのだ。

現在の冷めた関係では勝てるわけもない。元々信頼関係だって結べているのか、僕には分からない。

「このままじゃあ負けるぞ」

僕が考え事をしている間に滝川先輩は高月先輩に詰め寄っていた。高月先輩は視線を逸らし、黙っている。少しして滝川先輩は小さくため息をついて、背筋を伸ばした。

「合宿だ」
「はい？」

僕は思わず聞き返した。上手く聞き取れなかったのかもしれない。

滝川先輩は腰に手をあて、さらに胸を張って叫んだ。

「今日から私の家で日記部合宿だ！」

滝川先輩宅で合宿？　先輩たちと寝食を共にするの？

僕はおおっぴらに喜んでいいのか分からず、口を歪ませて「あはは」と笑った。

更新は1～2時間後ですよ。

１０／８　２：５７

今回のコメント

＜昨日ショックだったこと＞

あ…ありのまま　昨日　起こった事を話すぜ！
『ドラゴンズが四点差で勝ってると思い、サッカー見たら、もう一度見たときには同点になってた』
な…　何を言ってるのか　わからねーと思うが
おれも何をされたのかわからなかった

頭がどうにかなりそうだった…

催眠術だとか超スピードだとか
そんなチャチなもんじゃあ　断じてねぇ

もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…

ところがどっこい夢じゃありません！
これが現実！
マジかよ……

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊

冗談かと思っていたら、滝川先輩は本気だった。急に本棚へ近づき、日記を読み始めたと思ったら、三分で止め、僕らの前で演説を始めた。

『御堂・美国とお前等の違いはなんだと考えてた。やはり時間が圧倒的に足りないと結論づいた。あの二人は御堂真理の日記を確認したら、四月から御堂真理が美国に目を付けて一緒に部活動を行っていた。

ところがだ。お前等ときたら九月からだろ。まだ三ヶ月も経っていないじゃないか。そこでだ。付け焼刃かもしれないが、せめて生徒会長選挙までの間、学校内外問わず、授業中以外は行動を共にしてもらう。あの二人に勝つ方法はこれしかないんだ。絶対に勝つ！

あいつらは、私を完全に怒らせた！』

僕と高月先輩は口を開けたまま固まり、「なに言ってるの？」という雰囲気をかもし出したけど、滝川先輩は全く意に介さない。どんどん段取りを決めていった。

『一旦家に帰って着替えを用意した後、二十時に校門の前に集合』

という指示のもと、現在僕は校門の前に立っている。

さすがに十一月の夜ともなれば、正直寒いし、風もそれなりに強い。携帯電話を手にとって意味のないメールチェック等、時間を潰すが一向に誰も来ない。まさか、騙された？

そんな疑惑が持ち上がった頃、数十メートル向こうから人影が見えた。シルエットから想像するにきっと高月先輩のはずだ。風にあおられて黒髪が妖しげに舞っている。服装は制服のままだった。顔が分かるぐらいまで近づくと高月先輩は視線を逸らす。

「高月先輩、こんばんわ」

すると高月先輩は黙って頷いて、僕の隣で立ち止まった。

部室から校門に場所が変わっても会話が全くない。時折木枯らしの音や遠くで車の音が聞こえるぐらいだ。

さすがに先輩の前で携帯電話をいじるのは悪い気がしたし、時間の無駄だと思った。秋の夜、二人並んで時間を過ごすなんて機会を逃してはいけない。

とはいえ、なにもできない僕は先輩を横目で見ることぐらい。高月先輩も所作なさげに僕とは反対方向を眺めていたが、やがて空を見上げた。「あ……」と小さく声をあげたまま、動かない。僕もつられて空を見上げた。冬に負けじと秋の夜も空気が澄んで星が綺麗だ。

「空、綺麗だね」

高月先輩は独り言のように呟いた。

僕も独り言のように「綺麗ですね」と返事をした。

更新は1～2時間後ですよ。

１０／８　４：０１

今回のコメント

だいぶラブコメらしくなってきたなぁ。
別に能力ものでも良かったのだけれど、この形が一番しっくりくるなぁ。
ずっとだらだら続けたいぐらい。（駄目だろ）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「空、綺麗だね」
高月先輩は独り言のように呟いた。
僕も独り言のように「綺麗ですね」と返事をした。
　街の明かりで真っ黒とはいえないものの、深く青い空。月は細く、自らの存在を控えめにして、星に主役を譲ったようだ。数え切れないほどの星が各々の輝きを競っている。
　それは楽しい時間を過ごそうと頑張っている人々のように見えた。
僕はきっとほとんど明かりを発しない暗い星だろうけど。
「私、空なんか見上げないから、気づかなかった」
「先輩はいつも下を向いて日記ばかり見てるからですよ」

思わず口をついて出てしまった。今の状況では嫌味にしか聞こえないかもしれない。

案の定、高月先輩は黙ったまま答えない。僕は心の中で頭を抱えた。

「……そうかも。下向いてばかりだったね」

驚いて、空から高月先輩へ視線を移す。先輩は空を見上げたままだけど、少し笑っていた。僕は先輩へ訊かずにはいられなくなった。

「先輩」

「ん？」

「元気でしたか？」

数時間前まで一緒だったはず。でも、気分的には美国進の日記以来、会っていない様な気持ちだった。先輩は一瞬、横目で僕を見たけど、すぐに空を見上げた。

「ちょっと元気なかったかも。今も少しね……でも大丈夫。負けてられないから」

久しぶりに先輩とまともな会話をした気がする。それだけで嬉しくて、合宿を企画した滝川先輩に感謝した。

「それにしても、滝川先輩遅いですね」

「もうすぐ来るはずだけど……ほら、来たよ」

僕が携帯電話で時間を確認しようとした時、車のエンジン音が近づいてくるのが分かった。ライトが僕らを照らし、ゆっくりとスピードを落として横付けされる。黒塗りのリムジンが。

車の窓がゆっくりと開くと、滝川先輩が足を組んで座っていた。

「さぁ、乗れよ。とっとと行くぞ」

葉巻くわえてワイングラスを持ってても変じゃない雰囲気をかもし出していた。僕は小声で高月先輩に尋ねた。

「滝川先輩の家って金持ちなんですか？」

「ええ。油断しないでね」

高月先輩、意味が分かりません。

僕が突然の出来事に右往左往していると、車から燕尾服を着た初老の男性が降りてきて、車のドアを開いた。

「さぁ、どうぞ」

低音ボイスが心地良い。執事って本当にいるんですね。僕は男性にぺこぺこ頭を下げながら、車に乗り込んだ。

今日はここまで！

１０／９　０：４４

今回のコメント

今日（正確には昨日）の夕飯

カルボナーラ

焼豚

以上。

これ食べたら急に眠くなってね……
今まで寝てた！
正確にはドラゴンズが負けたから不貞寝さ！（という言い訳）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　黒塗りのリムジン。燕尾服を着た執事。この二つを考えれば、でかい洋館を想像しても変じゃない。だけど、到着した家……もとい屋敷は純和風の作りだった。平屋だが料亭か高級宿を思わせる建屋だ。

　テレビやお寺でしか見たことないような木造の大きな門が開き、僕たちは招き入れられた。我慢しててもついきょろきょろしてしまう。高月先輩は僕を一瞥して「みっともない」と一言呟いた。

修学旅行生を受け入れられそうな大きな玄関に辿り着くと、数人のお手伝いさんらしき地味目の着物を着た女性達と、中央にお手伝いさんを仕切っている赤を基調とした着物の女性が立っていた。

「夕実さん。お帰りなさい」

中央にいた女性が笑顔で迎える。滝川先輩は「ただいま帰りました、お母様」と、わりと丁寧な言葉遣いで答えた。

……っていうかお母様？　中央の女性は、滝川先輩の母親と言うことか。顔は確かに滝川先輩とそっくりだ。というか滝川先輩がそっくりなのか。

ただ、滝川先輩と違って、表情が柔らかく、笑顔で癒されるタイプの人に見えた。

「あら、亜也さん。お久しぶり。夏休み以来でしょうか」

「ご無沙汰しております、真琴先輩。またご厄介になります」

「先輩はやめてちょうだい。歳も離れていることだし」

高月先輩はすでに何度か来ている様で、顔なじみのようだ。美国日記で滝川先輩から聞いた話では、この人が日記部ＯＢで部長も務めた人物だと言うことらしい。

滝川先輩の母親は次に僕の顔を見て、目を丸くした。僕が挨拶しようと一歩前に出ると、滝川先輩の母親は口元に手を当て、一段声を大きくさせた。

「あら、アナタが草弥君？」

「は、はい。草弥甲斐斗と言います。いつも滝川先輩にはお世話にな――」

と言いかけたところで、滝川先輩の母親は僕に近づいて腕を掴んだ。

「いらっしゃい！　本当に夕実の言った通りね。あの子ったらもう、アナタの話ばっかりして。特に――」

「お、お母様！　止めてください！」

「ああ、そうそう、あれは――」

「わーっ、わーっ、わーっ！」

滝川先輩は滝川先輩の母親に……ってややこしい。これからは真琴さんと呼ぼう。滝川先輩は真琴さんの袖を掴んで、声を遮る。

親子の会話として僕の名前が出てくるのは構わないけど、一抹の不安を覚える。どんな内容なのだろうか。

更新は1～2時間後。

10／9　2：00

今回のコメント

多少の暢気さも必要だよね。

「なんとかなる」って無責任さも必要。

繊細もいいけど、鈍感もいいよね。

迷った時はあえて知らないフリして突っ込んでいく無謀さも必要。

考えすぎて動けなくなるのが一番辛い。

気楽に行こうよ。

なんのことでしょう？

もちろん、エクレアかシュークリームか、どっち買うか迷ってるんですよ！

（普段はエクレア派）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

滝川先輩は滝川先輩の母親に……ってややこしい。これからは真琴さんと呼ぼう。滝川先輩は真琴さんの袖を掴んで、声を遮る。

親子の会話として僕の名前が出てくるのは構わないけど、一抹の不安を覚える。どんな内容なのだろうか。

「コホン。親子の団欒はそれぐらいで良いですか？」

高月先輩の咳払いで、騒ぎが収まる。真琴さんはニコニコしながら、僕へ挨拶をした。

「夕実の母です。こちらこそいつも娘の横暴を許してくれてありがとうね」

真琴さん、わかってる！　僕が虐げられているのを分かってる！　滝川先輩はムッとした表情をしたまま、なにも突っ込まなかった。

その後、僕等は屋敷内を案内された。最初は覚えようと思っていたものの、あまりの広さと部屋の多さに、覚え切れなくなり、とりあえずトイレの場所だけは確保することにした。

一人一部屋与えられ、しかも自分の家の部屋の倍はある。正直、持て余し気味でそわそわするけど、畳の香りが心を落ち着かせてくれた。

合宿ということもあり、部屋に荷物を置いたら、すぐにミーティングが始まった。もちろん選挙をどう戦うかについてである。

二十畳ぐらいの部屋にぽつんと三人。すごくムダ使いのような気がする。臨時に用意されたホワイトボートを前に滝川先輩が仁王立ちしている。

高月先輩は畳の上に座り、机に頬杖の体勢で聞いている。ちなみに僕は正座。滝川先輩は指し棒でホワイトボードを叩きながら力説する。

「今から我軍の作戦会議を始める！」

部長の高月先輩をさしおいて、もはや完全に滝川先輩が仕切っていた。

「輪転の誓いでの優位性は無いということは、学校で説明したな。だが、視点を変えれば事実は変わる」

おおっ、なかなか引き込まれる力説だ。僕は正座をしながら太股の上に置いた拳を強く握った。

「我軍は優勢なのだ。なぜだと思う？」

指し棒で僕をあてる。僕は背筋を伸ばして考えた。

「立候補者が優秀だか――」

「違う」

言い切る前に遮られた！　冗談だったのに！

滝川先輩は完全に上から目線で僕を哀れみ、そして答えた。

「過去の日記があるからだ。奴等がどのように選挙に当選したかわかる。つまり傾向と対策が立てやすいのだ！」

「た、滝川先輩、意外と考えてるんですね！」

次の瞬間、僕の頭に滝川先輩の拳が落ちた。目から火花が飛び出る。僕はうずくまり悶えた。褒めたつもりだったのに……

更新は1～2時間後だったら良いなぁ……
ドライブに行きます。

１０／９　２：４７　車パンク編？

久しぶりにドライブ中、
車のタイヤがパンクした！
今、タイヤ交換してます！（自力で）

タイヤ交換は今回で通算四回目。
交換は慣れているので、心配しないでね。（誰も心配してない）
発生したのも、田舎道なので、誰にも迷惑かけてないし。

ただね……
暗い！

次回更新はタイヤ交換後！以下文字かせぎ。

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※
※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※
※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※
※※※※※※

10／9　4：39　車パンク編？

ただ今到着！

なんとかスペアタイヤに交換を終了。
みんな、車の点検はちゃんとしよう！
いやいやいや。
パンクしたタイヤみたら、溝は減ってないし。
なんか踏んだかな？

それにしても久しぶりだったらちょっと手間どったよ。
ジャッキの使い方ってこれでよかったんだっけ？とか。（溝に当ててあげるんだよね？）
あれ？　タイヤのネジって対角線上に付けるんだっけ？とか。
スペアタイヤはどっち向き？（基本的なことだろ）

とか携帯カメラの明かりを頼りに何とか作業をする。
懐中電灯ぐらい用意しとくべきだった。

まぁ、通勤途中に起こるよりましか。
真夜中のドライブで発生してラッキー！（変なポジティブ。略して変ポジ）
だけどその後、ドライブを再開し、スーパーに行ったよ。（暢気なものだ）
なんにしても無事トラブルなく終わりました。
（パンク自体はトラブルだろ）

なんかあれだね。
久しぶりにリアルタイム更新の意味があったってかんじ！
（執筆関係ないし！）

１０／９　６：１７

今回のコメント
ここ数日、「今日はここまで」と書けるまでなんとか続けているね。良い傾向だなぁ。
寝オチ神の汚名は返上か？
（いや、今日の始まりは寝てて遅れただろ）
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「過去の日記があるからだ。奴等がどのように選挙に当選したかわかる。つまり傾向と対策が立てやすいのだ！」
「た、滝川先輩、意外と考えてるんですね！」
次の瞬間、僕の頭に滝川先輩の拳が落ちた。目から火花が飛び出る。僕はうずくまり悶えた。褒めたつもりだったのに……
「早速だが、諸君等を待っている間に私は御堂真理の日記をあらかた読んだ」
滝川先輩が日記を手に持って、軽く叩いている。僕の対面にいた高月先輩はため息混じりに答えた。
「もちろん私は全て頭に入っているけど。日記部なら常識ね」

先輩二人の視線が僕に向けられる。僕は日本人お得意の愛想笑いをした。

「高月先輩、常識は疑うためにあるっていう言葉を知っていますか？」

「君の場合、疑うための常識も正しく知らないのに意味ないでしょ」

久しぶりに話したと思ったら、尖った発言過ぎて、僕の胸は傷だらけですよ。僕が何も言えず口の端を歪ませていると、室内にぐう～っという音が響く。僕のお腹の音が鳴ったのだ。

滝川先輩が指し棒をしならせて、振り下ろす。さらにはフルスイングを始めた。

「お前なぁ。緊張感ってものが……」

「でも、中途半端な時間に集まれって言ったのは滝川先輩じゃないですか！　腹が減っては戦はできぬって言うでしょ！」

とにかくなんとしても弁解しなければ。命が危ない！

僕の言葉に滝川先輩は納得したのか、フルスイングを止めた。

「確かに呼び出したのはこっちだしな。よし、何か食べさせてあげるんだ、亜也」

「――へ？　……えええええぇぇっ！！」

今初めて高月先輩の間抜けな声を聞いた気がする。滝川先輩は全く表情を変えずに高月先輩へ指し棒を向ける。

「これは合宿だ。家の者に食事は作らせないよう命じてある。なんでも皆が作るんだ」

「だったら、なんで私を指名したの！」

「初日ぐらいいいだろ。推薦人だし。夜も遅いから、おにぎり程度でいい」
「でも、でも、でも！」

さっきから、高月先輩が動揺している。これはもしかして……料理下手なのか？

とりあえず、二人に向かって「はい」と手を上げた。滝川先輩の指し棒が僕に向けられる。
「あの、おにぎりぐらい僕が作りま――」
「却下」

また途中で遮られた！　滝川先輩は僕の前に手に持っていた日記を置いた。

「とりあえずお前は日記読め。情報共有が作戦遂行への必須条件だ」

滝川先輩は高月先輩へ近づき、肩に手をかける。

「私も一緒に行ってやるから。さぁ、行くぞ」
「駄目だって。絶対駄目だって。私、おにぎりで家族を……」

高月先輩はなにやらわめいていたが、滝川先輩が口を塞ぎ、むりやり部屋の外へ連れて行った。

……高月先輩。さっきの言葉を最後まで聞かせ欲しいわけで。僕はたまらなく不安なわけで。残されたのは目の前にある日記なわけで……

「よし。日記読むか」

静になった渡された日記を手にとってみる。とりあえず今は現実を忘れよう。なんかいつもより集中できそうだぞ。自然に目から涙がこぼれそうになった。

今日はこれぐらいで。
疲れた……

１０／９　１９：３４

今回のコメント

寝すぎた！
結局、九時前まで起きていたのが原因なのだけれど。
（これと言って何もしていない。ちょっと野暮用があっただけ）
昨日のパンクで思いついた短編があるんだけど、ちょっと書いてみようかなと考えている。

ということで、いつものように今日も、のんびりスタート！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　日記を読むと、御堂真琴が分析する当選した理由は「新制服」論争だったようだ。立候補した生徒数は美国含めて三人。うち二人は例年通りのごくありふれた選挙活動だったらしい。
　一方美国進は制服を現状のトレンドにあった制服にすると公約した。生徒達は目新しさに惹かれ、教師は相談なしの公約に混乱し、選挙は美国進が生徒会長の当落に注目が集まったと書かれてあった。
　以上を踏まえるとと、僕達も制服に関してなんらかの態度を示さ

なければいけないことになる。高校生活をしていて、制服の良し悪しなんて考えてことがなかった僕は首を捻った。そんなに重要なの？　オシャレさんじゃないからわからないや。

「おまたせ～」

滝川先輩の声が聞こえ、襖が開かれると、先輩二人が戻ってきた。もってきたお皿には山盛りのおにぎりが見えた。あれを全部食べるの？

お皿を持って軽快に歩く滝川先輩と、俯き加減でトボトボとある く高月先輩の姿が対照的だった。これは覚悟を決めなければ。

「さぁ、召し上がれ」

重量感のある音を立てて、お皿におかれた大量のおにぎりが僕の前に差し出される。

「一つ聞いていいですか？　これはお二人で作ったんですか？」
「そうだぞ。日記部の美人二人に夜食を作ってもらえるなんて幸せ者だな。さぁ遠慮なく食べろ」

美人と言う言葉はおいて置いて。とりあえず見た目でなるべくまともなおにぎりを選ぶことにしよう。僕はざっとお皿のおにぎりを見る。見た瞬間、僕は先輩に質問をしていた。

「滝川先輩、なんでここまで形が違うんでしょうか」
「そりゃ、作った人が違うからだろう。さぁ、食べろ」

綺麗に三角に握られたおにぎりと、限りなく球体に近い三角形を

目指しましたっていう感じのするおにぎりの二種類が混ざっている。

「滝川先輩、先輩は料理の経験はあるんですか？」

「当たり前だ。お手伝いさんがいるらって、何もできない子女なんて最悪だからな。さぁ、食べろ」

ということは、綺麗な三角形は滝川先輩。球体に近い三角形をめざしてるおにぎりは高月先輩ということになる。さっきから高月先輩が俯きながらも僕をうかがっているのが、視界の端からチラチラ見えた。

もしかしてこれは「先輩のどちらを選ぶか」にも関係してくるのではないかと邪推する。笑顔の滝川先輩と不安顔の高月先輩。正解を取って体の安全を守るか、あえて不正解をとって高月先輩の気持を優先させるか……大問題である。

「滝川先輩、ちなみに――」

「さっきから警戒しすぎなんだよ！　さっさと食べろよ！」

とうとう怒られてしまった。僕は早急に選ばなくてはならない。どっちだ？　どっちなんだ？　ええいっ、悩んでしょうがない！　僕はおにぎりに手を伸ばした。

更新はどうだろう……1～2時間後にできたらいいけど。

１０／９　２１：４０

今回のコメント

リープです……（ヒロシですのノリで↑古い）

咳ばかりしてたら、くしゃみが止まらなくなりました。
体がもう咳だかくしゃみかを判断できません。

リープです……

太股の筋肉痛が今頃発症してきました。
太股への負荷をかけたのは三日前です。

リープです……
リープです……

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「さっきから警戒しすぎなんだよ！　さっさと食べろよ！」

とうとう怒られてしまった。僕は早急に選ばなくてはならない。
どっちだ？　どっちなんだ？　ええいっ、悩んでしょうがない！
僕はおにぎりに手を伸ばした。

もちろん掴んだのは形の悪いおにぎりだった。滝川先輩の「おっ」

と言う声と高月先輩の「――っ」という息が詰まるような音が聞こえる。間違いなく高月先輩のものらしい。

真剣におにぎりを見つめる。ゴクリと生唾を飲み込み覚悟完了した僕はおにぎりにかぶりついた。

「どうだ？　美味いか？」

「……あの」

僕は言葉にすることがなかなかできなかった。高月先輩が睨みつけるようにこちらを見ている。そんなに睨まなくても……

「美味しい」

ぽんと出てきた一言だった。素直に美味しいと思えた。滝川家のお米や調味料が素晴らしいのか、本人が素晴らしいのか。元々おにぎりなのだから大差ないのか。

「だろ？　だから言ったんだよ。コイツなら食べられるって」

「草弥君、無理しなくてもいいんだよ」

心配そうに見つめる高月先輩。僕はあっというまに一つ目を食べてしまった。なんだ、取り越し苦労だった、安心した僕は次に形のよいおにぎりに手を出して食べる。

「どうだ？　美味しいか？」

口に入れた瞬間、広がるこのライムのような爽快感は何だ。これはおにぎりなのか？

「不味い」
「え？」
「爽やかに不味い。不味い、不味い、不味い、不味い、不味い、不味い、不味い、不味い！！」

僕がありったけの不味さを表現した瞬間、頭上に滝川先輩の拳が落下した。失神級の衝撃とともに僕は畳みの上に沈んだ。

「不味いって言いすぎだ！」
「すみません……」
「だいだい、不味いのは当たり前だ。お互い、普通に作ったんじゃあ面白くないから、自分が美味しくないと思うおにぎりを作ろうって提案したんだから」

衝撃の告白を聞いて、僕は高月先輩を見る。高月先輩はガックリとうな垂れていた。普通に作ったら一体どうなっていたことか……

その後、無理やり全部食べさせられたのは言うまでもない。食べきった後、僕は満腹感と強烈な胸焼けで動けなくなり、その日は終わってしまった。

次の日。僕は人の気配がして眼を覚ます。目を明けると、大きな瞳が僕を覗きこんでいた。あれ、ここどこ？　わずかな混乱が僕の頭の中を駆け巡る。

「起こす前に起きちゃった」

目をカッと開くと、寝ている僕を上から見下ろしているのは高月先輩だった。なにこの夢みたいな展開。同時に寝起きを見られた恥

ずかしさで、僕は布団に潜った。恥ずかしい、お婿にいけないっ！

「おらっ、いつまで寝てるんだ！　さっさと学校行くぞ！」

布団がめくられ、冷たい空気が僕の体をつつむ。布団の向こうから滝川先輩の姿が見えた。二人とも朝から元気ですね……

更新はどうだろう……1～2時間後にできたらいいけど。

10／10　0：34

今回のコメント

中日サヨナラ勝ちっ！

これで明日からの（正確には今日）ヤクルト四連戦が楽しみになってきた！

もう勝つしかないのだ。
やるしかねえ！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　三人で朝食を作った。朝なのでご飯に焼き魚、味噌汁程度のものだ。さすがに昨日のおにぎりがあったので、真琴さんの監修の元、間違いがないように作った。高月先輩が自分が作ったものだと驚くほどの味噌汁の出来に、もし昨日好きなように作っていたらどうなっていたか、あらためて身震いした。

　さらに三人で登校することになった。もしかしてリムジンに乗って登校？　なんて期待したけど、徒歩での登校となった。歩いていくと二十分ほどかかってしまう。高月先輩、滝川先輩と並んで歩く。なんだかそれだけで少し誇らしい気持になった。

　日記部に入るまでは独りだった。そりゃ家族はいるが、朝食だっ

て各々が食べて勝手に家を出て行く。沙和は部活があるので大抵は一人で登下校だ。家に帰っても一人自分の部屋でゲームなんかしている。

もちろん日記部にいたって合宿をしなければ、一人は変わらないのだけれど、日記部にいなければこんな瞬間にも会えなかったはずだ。

僕はなんだか、意味なくワクワクして高月先輩を横目で盗み見た。もう何度目だろう、こうやって見つめるのは。別に特別な表情をしているわけじゃない。だけど、普通の表情をこうやって横から眺めることの幸せを感じていた。だけどあまりにもじっと見ていたので、高月先輩に気づかれてしまった。

「なに？」

鋭い視線が僕に向けられる。この目つきにも最初は戸惑ったが、今は少しなれた。僕は正面を向いて返答をした。

「いや、別に。ところで最近寒くなりましたね」

「そうね。今日も布団を出るのをためらったもの。夕実の家って広いから、余計身にしみるのね」

「分かります！　僕も寒くてなかなか起きられなかったんです」

他愛も無い会話。どれだけ憧れたことか。普段の高月先輩の雰囲気だと必要な話をしないと怒られそうだからなぁ。僕の話いに高月先輩は片目を瞑って、少し笑いかけてくれた。

「それが私達が十五分も見つめていたのに寝続けた理由？」

「ええっ？　十五分も見つめていたんですか？」

「よその家に寝泊りしてても、リラックスしてるのね、君は」

「ははは。草弥、ウチがリラックスできるなら、住み込みで働くか？　こき使ってやるぞ」
「……遠慮しておきます」

どうしても僕が貶められて終わってしまう。でも、いいか。それで皆が楽しいのなら構わない。テストのことなんて忘れてしまえばいいんだ。そんな風に思う。

学校に到着すると、滝川先輩が昼休みは部室で昼食を取るから集まるようにと告げて去っていく。僕は教室に入ると自分の席に座った。途端に人影が僕の前にあらわれる。

「甲斐斗、今日高月先輩と一緒に登校してたでしょ！」

沙和が僕の席の前で仁王立ちである。尋問する気満々だ。

「いや、滝川先輩もいただろう」
「え？　いたっけ？　そんなことより、なんで一緒に登校してるのさ。今日、久しぶりに一緒に登校しようと思って家まで行ったのに」
「タイミング悪かったな。昨日から滝川先輩の家で日記部の合宿が始まったんだ」
「合宿！？　日記部が？　なんで？」

さすがに期末テストのことは言えない。だが、日記部には常に大義名分がある。

「決まってるだろ。日記書けるような、楽しい高校生活をするためさ」

更新は1~2時間後という大義名分で進めています！

１０／１０　１：５８

今回のコメント

いかん！
ついつい、ごぶごぶを見てしまう！
（東野、浜ちゃんの番組。月一で放送されてます）
夜中だから余計にボーッと見てしまう！
ストップ・ザ・何となくすごす時間！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　さすがに期末テストのことは言えない。だが、日記部には常に大義名分がある。

「決まってるだろ。日記書けるような、楽しい高校生活をするためさ」

「――うっ」

　沙和は僕のドヤ顔に言葉を詰まらせたようだ。両手を机について僕へずいっと顔を寄せる。僕は寄せられた顔と同じぐらい後ろに顔を避けた。

「甲斐斗、私の目を見て」

「なんだよ」

僕がちらりと沙和の顔を覗くと、睨みつけるように「じーっ」とか言いながら視線を向けてくる。

「今、楽しい？」
「なんだそれは」
「いいからちゃんと答えて」

心配してくれてるのかな、コイツ。確かに中間テストの時には世話になったし、沙和なりに確認したいのだろう。僕は沙和の瞳をじっと見つめた。

「楽しいぞ。悪いかこのやロー」

すると沙和は一瞬怯んで、顔を後退させる。両手を机から離して、沙和は少し俯いた。

「そうなんだ……」

あれ？　なんか悪いことしたかな。僕が覗き込むように沙和を見ると、口だけがブツブツ動いていた。

「お風呂でドッキリ。『きゃっ、草弥君、エッチ』『せ、先輩、違います誤解ですよ～（先輩意外と着やせするタイプなんだなぁ）』」
「沙和、なに言ってるんだ？」

「料理で褒め殺し。『先輩、これ美味しいですよ。いいお嫁さんになれますね！』『やだ、草弥君たら……（お嫁さんだなんて。ポッ）』」

「おーい、沙和さーん」

「寝ぼけて添い寝。『うーんむにゃむにゃ』『せ、先輩。部屋間違ってますよ！』『もう、お腹一杯、むにゃむにゃ』『しょうがない先輩だなぁ（髪をなでなで）』」

「沙和、妄想しすぎだぞ～。ちなみにこの先輩は全部高月先輩なんだろうな」

その後も数々のシチュエーションを呟いた。妄想力半端ないなコイツ。

数分後、ネタが尽きたのか、沙和は黙り込んでしまった。ようやく黙ったかと僕はホッとした。すると、沙和は僕へ呟くようにぽつりと話しかける。

「ねぇ。甲斐斗は高月先輩のことをどう思ってるの？」

今度は僕が言葉に詰まる番だった。朝から何を聞いてるんだと思ったが、正直即答できなかった。だから自然に僕はテンプレートな返答しか出来なかった。

「先輩として尊敬してる」

「……ふうん」

それっきり沙和は何も答えず、自分の席へ戻っていった。人がせっかく楽しい日常を過ごそうとしているのに核心を突くようなこと言って、どういうつもりだ。

……にしても僕は何で即答できなかったのだろう。恥ずかしかったからなのか？　確かにそれもある。だけどそれ以上に何かが僕の

言葉を遮ったのだ。

更新は1～2時間後という大義名分で進めています！

１０／１０　３：２７

今回のコメント

現在、『トロフィー』の文章量は２１０ＫＢ（１ＫＢ＝５００文字）を超えてしまっています。
原稿用紙で言えば、２７０枚オーバーなのです。

文章量的には投稿するのに問題ない。
だけどお話的には問題あり。（全然終わっていない）

納得行くまで今回は書こうと思っているので、そろそろ投稿する賞をもう一回定めようと思う。

ちょっと投稿小説というよりＷＥＢ連載小説っぽくなっているのが気になるけど、それは後からいくらでも修正できるからね。

なので、これからもよろしくお願いします！
（変なまとめ方）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

お昼休み。僕は日記部の部室へ向かった。

「遅くなりました、授業がちょっと押しちゃって」

扉を開け、目に飛び込んだのは、座りながら机にうつ伏せになった二人の先輩の姿だった。
「遅いっ、購買での昼食争奪戦に出遅れたじゃないか！」
「えーっ、弁当とかないんですか？」
「お前、私達と一緒に登校してきたくせに、良くそのセリフを言えるな」

てっきり滝川家の人が用意した弁当があるのかと思ってた。滝川先輩はどこまでも僕達でやることにこだわっているらしい。合宿の目的が共同作業なんだから当たり前か。

「よし、出陣だ！」

滝川先輩の掛け声と共に購買部へ向かう。僕達が到着する頃には購買部ではすでに人だかりができていた。もちろん僕が先輩達の注文を聞いて人垣へ突入するのかと思いきや、全員で手分けして当たることになった。僕が不思議に思っていると、滝川先輩が当たり前と言わんばかりに答えた。

「みんなでやることに意味があるんだ」
「滝川先輩……後輩をこき使うだけじゃないんですね！」
後頭部を軽く叩かれる衝撃をうけて僕はこけそうになった。

と言うことで、僕達は昼食争奪戦に参加することになった。おにぎりで言えば鮭マヨ、パンで言えばカツサンドが人気商品である。僕は拳に力を入れ、人だかりに飛び込んだ。なるべく先輩達の負担を軽くするんだ、と意気込んだつもりだった。

しかし、数秒後人の流れが急に激しくなり、僕は横に押し出される。再び飛び込むべく振り返ると、あれだけ多かった人だかりが二

つに分かれていた。僕が後ろから様子をうかがうと、原因は一目で分かった。

「あわわわ……殲滅の日記姫」

男子生徒の声が聞こえたところで納得。高月先輩を男子生徒が必要以上に恐れ、モーゼのように割れた人だかりの間を先輩は歩いていたのだ。難なく購買でパンとおにぎりを買った。滝川先輩はちゃっかり便乗して一緒に買っていた。

結局僕は高月先輩の波には乗れず、残り物の菓子パンしか買えなかった。

とぼとぼと部室へ戻ると二人は楽しそうに昼食を取っている。僕はなんとなく疎外感を感じた。自分の席に座るとふてくされながら、菓子パンの袋を開ける。

「なんだ、草弥。遅かったじゃないか」

「先輩達と違って僕は正々堂々立ち向かい、敗北してきた次第ですよ」

僕がぷいと横を向くと、高月先輩から何かが差し出された。横目で見るとそれは鮭マヨとカツサンドだった。

「みんなで買うって言ったのに、君は強情だね」

「先輩……」

「草弥、言っただろうが。共同作業だって」

差し出された昼食を見て、僕は胸が熱くなった。先輩達は初めから僕の分を考えて買ってくれていたんだ。それなのに僕は自分の分だけ買ってきて……最悪だ。

僕が反省して俯いたところに、高月先輩が頬杖をつきながら話しかけた。

「あっ、それアップルパイ風の菓子パンじゃない。ちょっといただけるかな？」

「どうぞ、どうぞ！　こんなものしか取れませんでしたけど！」

「亜也。気を遣わなくていいぞ、こんな奴」

いいなぁ。みんなで食べるっていいなぁ。僕は合宿に感謝した。

それにしても恐るべきは購買部の人だかり。食欲に対する人の奪い合いは相当なものだ。さらには食欲をも凌駕する高月先輩の威圧感にはもっと驚いたけど。

とりあえず今日はここまで！

１０／１０　２２：３１

今回のコメント

ドラゴンズ勝利っ！
いいなぁ、平田。馬鹿すぎて。
思わず奴のヒーローインタビューで、恥ずかしすぎてチャンネル変えちゃったよ！
でもなんにしても一勝。まだ三連戦あるし、その後もジャイアンツ戦が控えてる。

ということで今日もスタート！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

放課後、沙和のじとっとした視線を感じつつ、急いで教室を出た。いつものように旧校舎の四階へ向かう。今日から早速、選挙活動だ。

部室にはすでに滝川・高月両先輩が待っていた。滝川先輩はいつも最期に来るのに珍しいなぁ。とりあえず、平光先生が来るまで昨日の作戦会議の復習を行った。

「早速だが、草弥。日記は昨日の内に読んだよな」

滝川先輩がおなじみの指し棒を僕へと向ける。大丈夫、今日はちゃんと答えられる。

「はい。選挙の争点は新制服をどうするかにあります」
「昨日の復習はできているようね」

隣に座っている高月先輩が僕に微笑みかけてくれた。なんか癒されるなぁ。それにしても今日は隣に座ってるから、身体から発せられる圧が違う。肩にかかった髪を払うだけで良い匂いが漂ってくる。しかも、ちょっともたれれば触れられる……

「草弥。じゃあウチが取る作戦を答えろ」

僕が顔の力を抜いて、だらしなくなったところへ、滝川先輩の容赦ない指し棒が僕の鼻先へと突き刺さる。

「痛っ！」
「目が覚めたか？　さぁ、答えろ」

睨みつける滝川先輩が鬼軍曹に見える。僕は鼻を摩りながら答えた。

「えっと……こちらは制服存続を訴えて保守派の票を勝ち取ることです」
「そうだ。日記によれば、制服のことに触れたのは美国陣営だけだ。ほかの立候補は触れることもなかった。リスクを取れなかったからだ」

たしかに御堂真理の日記にもこのあたりの雑感が書かれてあった。五十年以上の歴史のある制服について触れる事は、自分達だけでなく、教師側をも巻き込むことになる。

ただ、生徒会長をやってみたいとか、推薦で無理やりとかいう立候補者には制服議論をする気持ちがなかったといえる。

「だが、我々は違うっ！　勝利をもぎ取るためにあえてリスクをとるのだ！」

「でも、僕達反対側ですよね。それで生徒の票が取れるんですか？」

「わからん。だが、美国と同じ主張をしたのでは違いがでないのだから、知名度がないウチは圧倒的に不利だ」

後で聞いた話なのだが、御堂真理はそれなりに有名人だったらしい。元々制服を新しくしたいと言い出したのは彼女だし、羽扇子を学校に持ち込んでいるだけでも、教師から目を付けられるのには十分だった。

教師に逆らう勢力は生徒にわりりと好意と畏怖を持って迎えられる。上手く利用すればカリスマ性だって発揮できるのだ。

「とにかくだ。御堂真理に対抗したいのだ、私は！」

滝川先輩は指し棒の両端を持ち、折らんばかりにしならせる。僕は高月先輩の顔をうかがった。すると、頬杖をついてホワイトボードに書かれた美国進と言う文字を眺めているように見えたのは、僕の被害妄想だろうか？

「はい、お待たせ～今日も楽しい期末テストの時間だよ～♪」

僕たちの作戦会議の終了を待つように平光先生が扉から顔を見せた。

更新は1～2時間後だったら良いなと思いながらも、実はやる気ないんじゃないか風な感じを出しつつ、更新できる日を信じて頑張ります！（長っ）

１０／１１　２２：２３　久しぶり「『寝オチ』やらせ疑惑についての記者会見

【司会者】
「『寝オチ』やらせ疑惑についての会見を始めます」

【リープ】
「えー、皆様お忙しい中、お集まりいただきありがとうございました。まずは昨日は寝オチしてしまい、申し訳ございませんでした」

頭をさげるリープ。

【リープ】
「２２時半に更新し、１時間だけ仮眠を取るつもりでした。携帯の目覚ましも万全だったんです。でも、睡魔が目覚まし音を聞こえなくしたんです。くっそ～睡魔めぇ……」

【報道陣】
「責任転嫁ですか！」

【司会者】
「プライベートな質問はＮＧでお願いします！」

【報道陣】
「アナタ、活動報告のコメントでそろそろ寝オチするみたいなこと書いたでしょ」

【リープ】
「いや、アレは冗談ですよ」

【報道陣】
「実際、眠くなったとき『これはネタになる』って、思ったでしょ」

【リープ】
「お、思ってないですよ……」

【報道陣】
「やらせじゃないですか。計画的寝オチですよ！」

【リープ】
「違います！　断じて否っ！　自然に寝オチですよ！」

【報道陣】
「今回寝オチはあっさり認めるんですね……」

【リープ】
「はい。こうなった原因はですね、日ごろの激務が祟ったと良いますか……」

【報道陣】
「関係者の話によると昨日は休日出勤したけど、ほとんどの時間椅子でクルクル回っていたそうじゃないですか！」

【リープ】
「椅子クルクルを馬鹿にするな！　回りすぎて目が回ったら危険なんだぞ！　しかも、回っている間に人が来たら取り返しがつかないんだぞ！」

【報道陣】
「しなきゃ良いだけの話でしょ！」

【司会者】
「プライベートな質問はやめてくださーい」

【リープ】
「確かにクルクル回るタイミングは計っていました。でも、まさか、昔お世話になった部長が様子を見に来るなんて思わないじゃないですか」

【リープ】
「在任中だって全然話をしたことないんですよ。それなのに三十分以上も居座って……じゃなくて、三十分以上もお話になられられれれ……」

【報道陣】
「舌噛んでますよ」

【リープ】
「とにかく、ムダに気を遣ったんです」

【報道陣】
「これも関係者に聞いたんですが、それ以外にも中国女性と国際電話で談笑していたとか。すごく笑い声が聞こえたらしいですよ」

【リープ】
「違います。あれは電話越しに一方的に笑われていただけです。いいですか？　もう一度言います、笑われていただけです！」

【報道陣】
「日本の恥さらし！　非国民！」

【報道陣】
「リープさん、さらに関係者によると、休憩中、職場にあった日本のお菓子を食べたらしいじゃないですか」

【リープ】
「お菓子を食べちゃいけないんですか！」

【報道陣】
「中国土産のお菓子が残ってたでしょ！」

【リープ】
「お、お前たちは中国お菓子の爆発力を知らないからそんなことといえるんだ！　土産くれた人に向かって素直に『不味っ！』って言えるレベルですよ。日本のおいしいお菓子を食べて何が悪いんですか！」

【報道陣】
「ちゃんと責任もって食べろよ！　中国お菓子に謝れ！」

【司会者】
「プライベートな質問はやめてくださいっ！」

【報道陣】
「じゃあ、質問を変えます。前日、調子に乗って6時前まで起きていたから、寝オチしたんだろっていう証言がありますが？」

【リープ】
「あれは……『Ｏｈａ！４』と『めざましテレビ』が悪いんです。」

【報道陣】
「はぁ？」

【リープ】
「だって、朝の情報番組ってつい見ちゃうでしょ。この秋お勧めのアイテム紹介とかあったら見るでしょ」

【報道陣】
「でも、朝の情報番組ってほとんど同じ芸能・スポーツの話題映像ばかりでしょ？　続けてみる意味が分かりませんが」

【リープ】
「あれは見たくなくてもつい見ちゃうんです。ドラゴンズがサヨナラ勝ちしたでしょ？　勝った日って同じ映像でも番組をハシゴしちゃうでしょ。ね？　ね？」

【報道陣】
「『したでしょ？』って言われてもねぇ。私、ジャイアンツファンなんで不快映像でした」

【リープ】
「へ～そうですか～（ニヤニヤ）」

【報道陣】
「（ムカッ）アナタ、最初に仮眠って言ったでしょ。でもガッツリ布団に寝転びましたよね？」

【リープ】
「また、関係者の証言か！　誰だよ関係者って。出て来いよ！」

【関係者】
「関係者は私だ」

【リープ】
「お、お前だったのか」

【関係者】
「ふっふっふっ、意外だったろ。驚いたろ」

【リープ】
「ショック！　……でも、負けないぜ。うりゃ～っ！」

【関係者】
「さあ来い、わはははははっ！」

突然あらわれた関係者。
しかし、リープは戦いを諦めない！
俺たちの戦いはこれからだ！

『寝オチ』記者会見　完

ご愛読ありがとうございました。
リープ先生の次回記者会見にご期待ください。

・　・　・　・　・　・　・

・・・・・・・・・・・・・

【報道陣】
「勝手に終わらせるなよ」

【リープ】
「もういいじゃん。勘弁してよ」

【報道陣】
「とにかく謝ってください」

【リープ】
「誰に？」

【報道陣】
「連載待ってた人に」

【リープ】
「いないよ。僕の事なんて誰も気になんてしてないんだ。くそっ！

うわあああああん！」

走り去ろうとするリープ。
すかさず足をかける報道陣。
大げさに転ぶリープ

【リープ】
「痛～いっ！　なにするんだよ！」

【報道陣】
「させないよ！　小芝居なんてさせないよ！」

【リープ】
「（うわっ、バレてる！　絶体絶命だ……）」

倒れているリープに近寄る足。
ゆっくりと顔を上げるリープ。
驚いて目を開くリープ。

【アイツ】
「久しぶりに言い訳会見開いたと思えばこれかよ」

【リープ】
「お前は！　助けに来てくれたのか？」

【アイツ】
「勘違いするなよ。お前を倒すのは俺だからな」

突然あらわれたアイツ。
これで百人力だぜ！
そしてリープは戦いは続く。
俺たちの戦いはこれからだ！

『寝オチ』記――

【報道陣】
「させねえよ！　同じネタなんてさせねえよ！」

【リープ】
「もういいじゃん。そのツッコミもパクリだし」

よし。これから仮眠とろうとした時は、ちゃんと文末にかこう。
（仮眠をやめる気はないのか……）

寝オチ絶滅に向けて努力する所存でございますので、
今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

１０／１１　２３：１８

今回のコメント

いつもどおりの夕食

・豚肉のソテー（サラダ菜付き）
・キムチ
・ご飯

以上

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　昨日と同じように部室の扉開けたら、そこは日記の世界になっていた。最初っからそうしてくれれば良いのに。僕たちはとりあえず、旧校舎から新校舎に移動することにした。

　日記世界の平光先生には選挙活動の説明は受けていた。でも不安になったので、滝川先輩に確認することにした。

「確か、選挙活動して良いのは朝のＨＲとお昼休みと放課後でしったけ？」

「そうだな。平光の話では選挙活動が終わった後に部室に出入りすれば、お昼休み・放課後と時間が飛ぶらしいぞ」

「さすが平光先生の日記世界。なんでもありですね」

「選挙結果が捏造されなきゃ良いけどな」

「それはしないよ多分。先生だからね」

僕は中間テストの時に言った平光先生の言葉を思い出した。

『先生は答えを教えてたりしない』

あくまでもヒントを出したり、環境は整えるけど、答えを変更しない。平光先生なりのルールがあるのだろう。

校舎内の空気がひんやりしていることから、今は朝らしい。と言うことは登校してくる生徒に対して選挙活動を行っている時間だ。

僕たちは早速校門へ向かった。

「ほら、これを使えよ」と言われて、僕の肩に何かがかけられた。

『生徒会長候補　草弥甲斐斗』と書かれたたすきだった。今までまったく意識していなかったのだが、たすきをかけられた瞬間、顔がどんどん真っ赤になっていった。

「草弥、どうした。たすきかけられたら、意識したか？」

ニヤニヤと見つめてくる滝川先輩に僕は黙ってコクコクと頷いた。

やばい。手の先まで力が入り、ロボットダンスのような動きで歩き始めた。

「お、おい。さすがにこれは大丈夫なのか？」

さっきまでニヤニヤ顔だった滝川先輩が心配そうに見つめだした。

高月先輩は口元に指を当てながら考え事をしているように見える。

完全に今頭が真っ白だ。真っ白。真っ白。真っ白クマ。だあああっ、なに考えてるんだ。

やがて、校舎の玄関が見えてくる。たくさんの生徒が下駄箱にい

る。本当に僕は立候補しなくちゃならないのか。平凡人生ど真ん中と歩んできた僕にとって完全に日常から逸脱した非日常がそこには広がっていた。

「おい、草弥。外を見ろ。早速、美国が活動してるぞ」

焦点が定まらないなか、何度も目を凝らす。すると御堂真理が先頭に立ち、何かを叫んでいた。さすがに昨日大口叩いていただけあって、雄弁に何かを訴えている姿が見えた。

「よし、私達も行くぞ」
「行くってどこへですか？」
「決まってるだろ、奴等の真ん前にだ」

滝川先輩、それ本気で言ってますか？　僕は顔を引きつらせたまま、ははは と笑った。冗談であって欲しい。だけど、運命とは避けられないのか滝川先輩が僕の手を取って歩き出した。たたたた助けて〜っ！

更新は1〜2時間後（寝なければね！）

１０／１２　１：３２

今回のコメント

まぁ、今日も我ドラゴンズは勝利したわけだ。
くそっ、スポーツ番組のはしごが止められないっ！（書けよ）

＊＊＊

滝川先輩に手を引かれるままに僕は校舎の玄関を出た。一直線に向かっていた。登校する生徒と逆方向に進むため、御堂真理がこちらに気づいたようだ。お得意の羽扇子を片手で勢い良く広げ、口元を隠すようにして、僕達を迎える。

「あら？　誰かと思えば、昨日の愚者どもじゃないの」
「趣味の悪い扇子持ちやがって。三下がなに吠えてやがる」

距離にして一メートル。御堂真理と滝川先輩は向かい合っている。お互いに腰に手をあて、にらみ合っている。まさに竜虎相打つ状態。先手を打ったのは御堂真理だった。

「来るのが遅いんじゃない？　やる気が感じられないわね」
「バーカ。真打は遅れて登場するものなんだよ」
「真打？　そうね。アナタ達はトリだわ。授業が始まってからが出番よ。帰りなさいな」
「そっちこそ、真打が登場したんだ。場所を空けな」

言葉を発するごとに二人の距離が縮まってくる。もう二人が触れ合うばかりに近づいていた。慌てて僕は滝川先輩の手を引っ張る。

「離せ草弥、アイツをすぐ黙らせてやるから」

「そんなことしたら選挙どころじゃないですよ！　自重してください！」

なんとか数メートル離れたとこまで連れて来る。よく見ると御堂真理も美国進に引っ張られていた。後退しながらも御堂真理の喋りは止まらない。

「立候補者でもないアナタがしゃしゃり出てくるなんて、馬鹿じゃないの！」

叫ぶ御堂真理に滝川先輩が反応して前に出ようとするから、僕は必死に抑えた。いつの間にか僕達を中心にして人だかりが出来ていた。駄目な意味で注目が集まっている！

「はぁ？　お前だって前に出てるだろうが！」

「私は特別よ！」

なにその理屈。美国進はなんでこんな先輩が好きなんだろう。

「私は美国進の推薦人なのよ。美国進を男にするのは私の役目なの」

すげえ。面と向かってそれ言うか。でもちょっと言って欲しいかも。

「で？　アナタはなんなの？」

御堂真理に言われ、滝川先輩の勢いが急になくなった。少し下を向きながら口を尖がらせて答える。

「ただの応援者だよ……」

先輩の言葉に落ち着きを取り戻したのか、御堂真理は美国の腕を離した。

「だったら退きなさい。ここは立候補者と推薦人の戦場なのよ！」

「そうだな。勝負は選挙でつける。吠えずらかくなよ。お前達に対抗できるのは私達だけだと思え」

「へぇ。それは楽しみだわ」

御堂真理は自信たっぷりに羽扇子をゆっくりあおぎはじめた。今って秋も終わりごろなのにすごいな、などと無意味な関心をした。

更新は1～2時間後だったら良いなと思いつつも、寝そうな気配だけど頑張ります！

１０／１２　３：０７

今回のコメント

お話をずっと書き続けていると、思ってもいなかったエピソード郡が一気に繋がることがある。
それが物語の大事な部分を解決するアイデアだったりする。
つまりはそういうことですよ。

今日、なぜかふとした思い付きから、一気に繋がったんです。
それこそ「トロフィー」を終わらせるアイデアがね。

っていうか、逆に今まで考えてなかったし、思いついてもいなかった。
終わりどうしよっかなぁ～って、思いながら書いてました。

今回はそういう書き方をしているので。
ただ、これは現時点でのアイデアってだけで、書いている間にもっといいアイデアが浮かぶ場合がある。
ただ、物語が繋がった瞬間の快感は執筆する上でのご褒美となるなぁ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「楽しみしておけ。正々堂々、公約勝負だ」

滝川先輩の言葉に御堂真理は羽扇子を仰ぐのを止めた。鋭い視線が僕達を貫く。やはり日記部長、威圧感が半端ない。

「まさか、公約が新制服に反対なんて言わないわよね」

見抜かれてた。あっさりと。滝川先輩は言葉に詰まってしまい反撃できない。さらに御堂真理は一瞬目を瞑ったあと、大きく瞳を開いて、声を上げた。

「私達の公約に異を唱えるだけなんて、フリーライダーもいいところだわ！」

「くっ……」

滝川先輩は歯を食いしばり、御堂真理を睨み返すしか出来なかった。

確かに反対の公約を掲げるだけっていうのは浅はかだった。日記部部長にまでなる人物が、自分達の考えに反対する勢力がでてくるなんて考えないはずがない。

御堂真理は滝川先輩から目を伏せた。

「図星なの？　公約のタダ乗り。楽でいいわね。正直、失望したわ」

滝川先輩の拳が硬く握られる。負けん気は強いが、今の状態ではないも言い返せないはず。しかし、先輩は歯を食いしばりながら、搾り出すように応戦した。

「馬鹿野郎、こっちだってな。ちゃんと腹案はあるんだよ」

思わず僕は滝川先輩を覗き込んだ。なんだちゃんと二段構えだったのか。安心した。

先輩の言葉に御堂真理は再び滝川先輩を見つめる。瞳を細め、笑っているようにも見えた。

「へぇ……じゃあ見せてもらおうじゃない」

完全に上から目線だ。さぁ、滝川先輩、御堂真理をぎゃふんと言わせてやってください！

滝川先輩は前を向いたまま、口を開いた。

「おい、草弥」

「はい？」

「演説しろ」

ぎゃふん！

なにいってるんですか、先輩？

先輩は口を歪ませながら、僕を見ずに話を続けた。

「我々の方針を御堂真理に知らしめるのだ」

「いやっ、無茶言わないでくださいよ！」

「いいから早く！」

滝川先輩に背中を押され、僕は無理やり先頭に立たされた。目の前には睨みつける御堂真理。周りには興味津々で状況を見守る生徒達。絶体絶命とはこのことだ。

初めての演説。話す内容はすでにバレて、話した時点で負けとなる。

僕の頭の中は真っ白でなにも考えられない。口の中はからからで、

唇は震えている。肩にかかるたすきに違和感だけを感じている。なんとか声だけでも出さないと。

「はう……はう……」

駄目だ。まったく声が出ない。緊張、緊張、緊張。僕は今までの人生で華やかな場面なんて一切ない。ましてや自分からみんなの前に出て、話をするなんてなかったんだ。できるわけないだろ。

歪む視界から無数の人間が見えた。皆、僕を見ている。こ、怖い……足が自制できないぐらい震えてきた。僕は目を瞑って、震えを止めようとした。

「あら？　肝心の立候補者からは何も出てこないようね。貴方達ポリシーも無いのに選挙を戦おうっていうの？　とんだクズね」

今は何も言えずにじっと耐えるだけだった。やがて、肩まで震えてきた。もう誰の目にも僕は怯えて話すこともできない臆病な人間にしか映ってない。最悪だ。最あ――

「大丈夫」

誰かが僕の肩にふれる。『誰かが』だって？　違うだろ、分かってるはずだ。僕に対して「大丈夫」と声をかけてピンチを救ってくれる人物なんて一人しかいない。

長くて艶のある黒髪が僕の視界の端から見えてくる。長い睫毛、大きな瞳、整った鼻筋にやや厚い唇。

「推薦人である私が話していい？」

もう一人の日記部部長、高月亜也、その人だ。

今日はこれまで！

１０／１２　２２：４６

今回のコメント

今日という日の夕食

・ごはん
・豚バラと里芋の煮たもの
・ナスとベーコンの炒め物
・自分で買ってきた、ケーキ！

以上

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

高月先輩は僕の前に立つと、御堂真理と対峙した。羽扇子を再び揺らめかすと、顎をやや上げ、高月先輩を見下ろすような目線で話を始めた。

「あら？　アナタは昨日ずっと机で寝てた人じゃないの」
「その節はどうも。ウチの後輩がお世話になりました」

軽く頭を下げる高月先輩。御堂真理が羽扇子の動きを止めた、扇子越しの瞳は大きく開いている。なんだ拍子抜けしている様に見えた。

「別にお世話せいたわけじゃないけど……で？　この二人に代わって、アナタ方陣営の方針を発表してくれるのかしら？」
「いえ。最終的な意見のすり合わせができていないので、ここでは発表できません」

高月先輩は「なに当たり前の事を聞いているの？」と言わんばかりの態度だ。見方によっては開き直りにも見える。しかし、御堂真理の低くて鋭い声が逃げる事を許さない。

「なに？　負けを認めるの？」
「勝ち負けではないでしょう。それとも公衆の面前で他の候補を貶めるのが貴方達のやり方ですか？」

御堂真理の反撃にも全くひるむ様子がない。昨日あれほど俯いていた人物とは思えないほどだ。
僕よりも少し小さいけど、頼りがいのある背中をみて、すっかり安心してしまう。御堂真理も扇子越しの瞳を鋭く細め、せわしなく羽扇子を動かす。

「――っ。そ、そっちが仕掛けてきたんでしょうが」
「それについては謝罪します」

また高月先輩は軽く頭を下げた。外見上は責める御堂、素直に謝る高月に見える。だけど、実際は高月先輩の言動って結構攻めてる気がする。御堂真理も分かっているのか、滝川先輩のように力押しできない。

「ちょ、ちょっと簡単に頭を下げないでよ。アナタにプライドはないの？」
「自分が間違っていても認めないというプライドですか？」

すると御堂真理は完全に黙り込んでしまった。羽扇子も動きを止め、じっと高月先輩を睨みつけている。数秒後、御堂真理はようやく言葉をかけた。

「あなた。名前は？」

「高月亜也と言います」

「……ふうん。まあ、他の立候補の推薦人でもあるし、名前ぐらいは覚えてあげる」

「結構ですよ。そのうち嫌でも覚えると思いますから」

高月先輩はここで初めて、冷笑とも言うべき、歪んだ笑みを浮かべた。それを見た御堂真理の眉間に力が入る。

「言ってくれるじゃない。それじゃあ――」

御堂真理が話を続けようとした瞬間、校舎から予鈴が鳴り響いた。

「時間切れね。まあ良いわ。選挙期間中は毎日顔をあわせるでしょうから。美国、いくわよ」

「了解です」

まず第一ラウンドは、なんとか引き分けに持ち込んだと思う。高月先輩のお陰で。

とりあえず今日はここまで！

１０／１３　２２：３２

今回のコメント

今日という日の夕食

・焼きそば

以上（少なっ）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

予鈴が鳴り、皆が校舎に戻る中、僕たちは日記部の部室に戻った。室内に入り、扉を再び開けると、日記時間が移動する仕組みだ。次、扉を出て行くと昼休み、その次は放課後、これを五日間繰り返す。

だけど僕達はすぐに扉を開ける事はなかった。理由はもちろん作戦を練るため。色々考える前に滝川先輩が、僕と高月先輩に頭を下げた。

「亜也、草弥、すまん。完全に私の暴走だ」

「止められなかった私たちも悪かった。それよりも今は次の事を考えましょう」

正直、僕自身、言いたい事はあったものの、助けられたこともあり、高月先輩に従うことにした。僕にアイデアがあった。

「あの、どうせ日記世界なんだから、大袈裟で良いんじゃないでしょうか？　たとえば、旧校舎建替えとか、全教室にエアコン完備とか。どうせ僕らはいなくなるんだし」

案外名案だともうけど。しかし、先輩二人の反応は芳しくなかった。

「君ねえ……」

「馬鹿。そんなできそうにない案に誰が票を入れるんだ」

確かに。なんでも発想できそうで、票を入れてもらうという点に関しては不自由だった。それにしても、美国陣営に対抗できるようなアイデアがまるで浮かばない。三人ともに黙り込んでしまった。

考えてみれば問題は公約だけじゃない。僕達は転校生という立場なので知名度がない。なるべく多くの教室を回らないと。時間を無駄にはできない。椅子に座り、各々頭を抱えていると、扉が開いた。

「ずるはいけないよね～♪　時間の自由が利くと思ったら大間違いだよ。扉を開けて室内に入った瞬間にお昼休みになっているから、気をつけて～！」

「『気をつけて』って平光先生の調整次第じゃないですか！」

僕の抗議も虚しく、平光先生は我関せずの涼しい顔。いちいち構っていられない、急いで部室を飛び出した。

「なんにも考えていないけどどうする？」

滝川先輩は心配そうに高月先輩を見つめる。僕も一緒に見つめて

しまう。

「そうね……とりあえず今日は名前を覚えてもらうことに専念しよう」

僕と滝川先輩は頷く。高月先輩は僕たちに微笑みかけた。先輩の表情に僕はすっかり安心しきっていた。

「高月先輩、人通りが多いところってどこですかね？」

「どこだろうね。お昼休みで、人が集まるところ……」

数秒後、僕達三人は同時に思いついたらしく、各々の顔を見合わせた。タイミングを合わせるように声を出さずに「せーの」で同時に言葉にした。

「「購買部！」」「グラ……購買部！」

今誰かがが「グラウンド」って言わなかったか？　よく見ると滝川先輩がそっぽ向いて早足で進んでいく。そういうことか……

ちゃんと今日は1～2時間後の更新目指してます！

10／14　7：48

今回のコメント

新規作成までしてたのに……
久しぶりに大口開けて椅子で寝てた！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　部室に篭っていたせいもあってか、購買ではすでにたくさんの人がごった返していた。少し前に直接体験しただけあって、閉塞感や蒸し暑さを思いだして身震いした。

「別にあの中に突っ込むわけじゃないんだから気にするなよ」
「滝川先輩は楽したから分からないでしょうが、大変なんですよ」

　要領の良い先輩には不器用な人間の気持ちなんてわからないんだ……と僻んでいてもしかたがない。今は選挙活動中なのだ。僕達は購買部の人だかりから少し離れた場所へ移動する。

　さすがに、購買部の目の前では、殺気立った人しかいない。買い物を終えてリラックスした人達に向けて自分の名前を宣伝するんだ。よ、よし。やるぞ。

「……本当にするんですよね」
「なに言ってんだ。さっさと始めろよ」

いつの間にか高月・滝川両先輩は僕の後ろに立っている。滝川先輩は僕の背中をやたらつつく。催促されているのは分かるけど……こころの準備が。

「どうした、早くしろ」

こ、ここまで通行する人へ声をかけるのに勇気が必要か知らなかった。口の中がカラカラで何度も唇を拭う。声を出そうと力を入れるけど、かすれた音しか出ない。

「しっかりしろ！」

滝川先輩が背中を叩く。僕は前に倒れそうになって、つんのめる。先輩の大声と僕のよろめきに通行している生徒の注目が集まった。僕は廊下の真ん中辺りで立ち尽くした。

なにか言わなきゃ、なにか……僕は喉に渾身の力を込めて言葉にした。小さいがハッキリした言葉が口から漏れる。

「ま、毎度お騒がせしております……」

「ちり紙交換か、お前は！」

間違ったっ！　初めてなのに毎度ってお騒がせしますって！　滝川先輩のツッコミが入ると、周りの生徒から苦笑が漏れた。

そして僕は完全に舞い上がってしまい、顔が熱くなった。絶対これ顔真っ赤だよ。耳たぶ辺りがジンジンするよ。これは朝の二の舞じゃないか。やっぱり凡人の僕じゃあ、駄目なんだ！

逃げたいという一心が僕の意識を支配し、ふらふらと後退しそうになった時、そっと背中に触れる手があった。

「焦らないで。最初は誰だってそうよ」

じんわりと背中に温かい感触を感じる。僕の肩越しに高月先輩が寄り添っていてくれた。耳に少しだけ先輩の髪が触れた。

高月先輩は僕の両肩をぽんと叩くと、廊下にいる通行人に声をかけた。

「この子の掴み、どうだった？　ちょっとスベっちゃったね」

よく通る声が、廊下に響く。さらに高月先輩の美貌のせいか、皆が一瞬立ち止まる。

「私たちこの学校に来てから間がないので勘弁してね。今日は生徒会長選挙に立候補するこの、草弥甲斐斗君のご挨拶周りにやってきました」

肩を掴む手に力が入る。するとどうだろう、どんどん勇気が沸いてきた。全身に力がみなぎるのを感じる。「頑張って」先輩が小さく僕へ声をかける。僕は一歩前に出た。

憑き物が落ちたかのように僕は自己紹介を始めていた。自分の名前、クラス、転校して間もないこと、だけどこの学校を変えたくて立候補したなんて言葉も出てきた。高月先輩は僕が話している間、黙って後ろで立ってくれていた。でも、それだけで心強かった。

人数は少ないものの、最後まで立ち止まってくれる人がいた。きっと高月先輩がいてくれたお陰だろうけどね。

最後の会釈をして僕の挨拶は終わった。とはいえ、選挙活動なので、数をこなさなきゃいけないんだろうけど。

こうして昼休みは終わった。

また夜に。

１０／１４　２２：３６　コトダマ執筆編？

今回のコメント

・今日の夕飯

カレー！

以上。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

以下の文章は想さんは読まないでください。

ああぁっ、読まないで！

さて。

いつもなら『トロフィー』が始まる時間ですが、ちょっと違います。

連載を読み続けてくださっている人、勘のいい人なら、もうお分かりですね。

実は１５日中が締め切りなんです。

今日何日でしたっけ……１４日？

え？　あと一時間半で１４日も終るだろって？

知ってるつーの！　知ってるつーの！
ということで先日のプロットを小説についていきます。
果たして締め切りに間に合うのか？（今、またかよっていう声が聞こえた）

いつもどおり追い込まれてきましたっ！

えーと。
想さん、ごめんなさい。
締め切りには間に合わせる所存です。
一万字だし、前回の3分の1以下だし。
プロットもあるし。
大丈夫だよ。寝なければ。

ということで……久しぶり、コトダマ執筆編スタートっ！
更新は1時間後。

10／15　0：06　コトダマ執筆編？

今回のコメント

・この書き方でいいのだろうか……思案中。
（締め切り今日なのに）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　ここは某テレビ局の収録スタジオ。料理番組を収録していた。二人の料理人がお互いの得意料理を競い合い、食通の評論家が優劣を判定する番組。司会者である男は手を挙げ、判断を仰ぐ。

「それでは審査員の方々判定を！」

　巨大ディスプレイ上に各審査員が選んだ料理人の名前が表示される。三人のうち二人は別々の料理人を上げた。そして三人目、本島（もとじ）真人（まこと）に勝利者の判断は委ねられた。息を呑む料理人たち、司会者、観客。

　しかし、一向にディスプレイが表示されない。真人に注目が集まる中、彼は腕を上げて交差させ、大きくバッテンを見せた。番組ではおなじみの両者失格の印である。

　ふたりとも認めない、本物の料理人ではないという意味があった。

「やはり今日もでました、本島印！　両者失格です」

司会者が叫ぶ中、うな垂れる料理人たち、肩をすくめて困り顔の審査員、拍手をする観客がそれぞれカメラで映され番組は終了した。

本島は拍手で見送られ、スタジオを出ようとしたところ、審査を受けていた料理人が彼に駆け寄った。彼の手には包丁。観客や番組スタッフは悲鳴を上げる。料理人は一気に詰め寄った。

しかし、本島は寸前で気づき、包丁をかわして、手を蹴り上げる。包丁は飛んでいった。囲む番組スタッフ。料理人は取り押さえられた。料理人を見下ろして、本島は叫んだ。

「本物とは常に正義であり、絶対的価値観である！」

収録スタジオ中に響き渡った声。番組観覧者は彼に喝采を送った。

ぐぬぬぬ……1～2時間後更新

１０／１５　１：５４　コトダマ執筆編？

今回のコメント

・このレストランにはモデルがあります。

老舗のレストランで、出前もやってました。

本社勤務だったとき、２２時以降まで残業した場合は、このレストランの出前メニューを渡されて頼んだものでした。

量も多くて、味も会社で食べたせいなのか、美味しかったですね。

なんか非日常みたいで。

残業ばかりして、ここの出前ばかり食べて１０キロ太ったたなんて話を聞いたことがあります。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

本島真人は料理評論家ではない。本業はカメラマンである。

最初は料理番組にゲスト審査員で登場した時の毒舌が評判よく、そのままレギュラー審査員の座につき、番組を代表する人物にまで成長した。

彼が人気を博した理由は分かりやすさだった。『本物かどうか』それが彼の価値基準だった。カメラマンの仕事で常に自分が『本物』だと思う被写体だけを取り続け、二十年が経つ。長年の仕事が評価

を受けた実績があったため、審美眼には定評があった。

今や本業をしのぐ量で料理関係の仕事を行っている。年内のスケジュールは埋まっていた。本島をテレビで見ない日はないと言われ、雑誌・新聞各メディアにも彼の記事が載っている。

本人も忙しいことによる充実感と『本物』という自分の考えが世間に受けたことに満足感を覚えている。人生の充実期と言えた。

そんな忙しいはずの彼がテレビ局を出てタクシーに乗り込み向かった場所は、とあるレストランだった。目的地に着くと、入り口付近で女性が立っていた。真人はタクシーを降りると女性に近づきハグした。

女性は彼の妻である本島さなえである。二人はレストランに入ると予約した席に座った。

決して一流店の雰囲気はない。広くはない店内。テーブル席が四つほど。少し古めの椅子。刺しゅうが入ったややくすんだ白いテーブルクロスの机。昔ながらの洋食店だった。

メニューを見ずに真人はハンバーグステーキセット、さなえはミックスフライセットを頼んだ。背広姿だった真人はネクタイを緩めて一息ついた。それをみてさなえは微笑んだ。

「お疲れ様。忙しい中、覚えていてくれて嬉しい」

真人はさなえの言葉を聞いて、胸の中がじんわりと暖かくなるような感覚を覚えた。

ぐぬぬぬぬぬ……1～2時間後更新

10／15　2：57　コトダマ執筆編？

今回のコメント

・モデルになったレストランでハンバーグステーキセットは食べたことがあります。
上司に連れ行って貰って美味しかったなぁ。
なんか、そのレストランの思い出って、仕事と直結してる。
そういえばプライベートで言ったことないや。
出前のハンバーグ弁当も弁当の域を超えた量だった記憶もあります。後、ヒレカツサンドのヒレがちゃんとしヒレ肉で……（思い出に浸っています）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「お疲れ様。忙しい中、覚えていてくれて嬉しい」

真人はさなえの言葉を聞いて、胸の中がじんわりと暖かくなるような感覚を覚えた。

今日は十八回目の結婚記念日だった。

「今年は忙しいから忘れられたかと思ったけどね。でも、駆け出し

のカメラマンだったアナタが、いまや料理のコメンテーターって変なの」

毎年結婚記念日には、このレストランで結婚当初と同じメニューを食べて祝うのが、二人の決まりごとだった。結婚当初、貧しかった真人にはお金を気にしながら気合を入れて入店していた。しかし、今は愛する妻を目の前にして何も気にすることなく入店している。

結婚記念日の食事は、妻と過ごす意味もあるが、自分の成長を確認する意味でも重要な行事となっていた。

色々と過去を振り返っていると料理が運ばれてきた。真人の前に運ばれてきたのは、ゆらゆらと湯気を放つ皿に乗ったハンバーグだった。やや黒いデミグラスソースがかかって、上には目玉焼きが乗っている。ナイフとフォークはなく、箸が置かれていた。これは真人が毎年頼んでいることだった。さらにライスとコーンスープが置かれる。

さなえは真人に手を差し出し、「お先にどうぞ」と進める。本当ならば、お互いが注文した料理を待って乾杯といったところだ。しかし、若い頃の真人は待つことができず、よく先に食べてしまったものだ。その度にさなえと喧嘩した。だが、今はさなえが折れて、先に進めるほどになっていた。さすがにこの歳になって、勧められると照れ笑いしかできない。

二人の料理が揃うと、頼んだワインを片手に乾杯をした。

「今年一年ありがとう。また来年もお願いね」

少しだけ首を傾けて、ややはにかみながら、さなえはワインに口をつける。昔からの照れた時の姿。確かに若い頃と外見は変わったが、仕草の愛おしさにはなんの変化もなかった。

ワインを置くと、真人はハンバーグに手をつけた。パンバーグに箸を付け切り分ける。ほとんど力を入れることなく、切り分かれていく。真人は粗引きのハンバーグにはない繊細さが好きだった。

さらに口に入れると濃厚なデミグラスソースに加えて、コショウが利いている肉が食欲を高めた。とても濃い味で自分が若ければ、いくらでも食べられただろう。若い頃の真人とさなえが好んでいた味だった。

半分ほど食べて目玉焼きと食べれば、まろやかさが増し、さらに食がすすむ二段構えだった。

ハンバーグに夢中になっていた真人がふと前を見ると、じっと自分を見つめているさなえの姿があった。夢中になりすぎたせいで、毎年行なうおかず交換を忘れていたことに気づいた。慌ててハンバーグの一片をさなえへ渡すと「えへへ、おたがいい歳なのにね」と言って嬉しそうにハンバーグを食べていた。

料理の美味しさだけではなく、さなえの喜ぶ姿も楽しみの一つだったと改めて確認した。幸せな感覚が前進に駆け巡り、真人は自然に微笑んでいた。

ぐぬぬぬぬぬぬぬぬぬ……1～2時間後更新

１０／１５　４：１４　コトダマ執筆編？

今回のコメント

・紙の料理は実在します。（どこかで書いた気がするけど）
実際は本当の料理を瞬間冷凍させ、粉末状にして、インクと混ぜるらしいので、食糧難は解消されません。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　料理の美味しさだけではなく、さなえの喜ぶ姿も楽しみの一つだったと改めて確認した。幸せな感覚が前進に駆け巡り、真人は自然に微笑んでいた。
　料理の審査員をしているものの、この庶民的な洋食屋が好きだ。人に厳しい目は向けるものの、妻に対しては笑顔でいたい。真人は記念日に気持を新たにした。
　笑顔の真人に対して、さなえは心配げな表情を浮かべて、上目遣いで問いかける。
「ねえ、もう写真は撮らないの？」
　真人は言葉に詰まってしまった。実際、他の仕事のせいで、写真の仕事は控えている。さなえは、しばらくこちらの顔を見つめてい

た。なんとなく責められているような気がした。だが、真人は今の生活に満足しており、写真はまた時間が出来たらすればいいと思っていた。結局その場は、さなえが話題を変えた事で、事なきを得た。

再び日常にもどると、真人は多忙な日々を送った。家にも一週間に二、三度帰ることができるかどうかという、スケジュールで動いていた。ますます彼の認知度、人気も上昇し、時代の寵児となるかの勢いだった。

ある日、いつものように真人は料理番組の審査員をするために、テレビ局の楽屋で待機していた。ドアがノックする音が聞こえたので、返事をして招きいれた。ドアが開くとお辞儀をしたまま背広姿の男が入室してきた。男はオールバックの髪に細い目に薄笑いを浮かべながら顔を上げる。

「失礼いたします。本島真人様ですね。私、こういうものでございます」

男は名刺を取り出し、真人に差し出した。名刺には『食料研究家　小翼　満男（こよくみつお）』と書かれてあった。食料研究家。なんとも怪しい名前だと真人は警戒した。

「今日はですね。本島様にお願いがあってきました。申し訳ないです」

すると、満男は持ってきていた鞄から、数枚の紙片をとりだした。三センチ四方のの紙にはピザの写真が印刷されている。満男は一枚を真人に手渡した。

「ただの紙ではございません。なんと食べられるのです！」

満男は口を歪ませてニヤリとする。ハッキリと真人は嫌悪感を覚えた。と同時に番組台本を確認する。すると今回の対決は変り種料理対決として「紙　ＶＳ　秘境の料理人」と記載されていた。真人が台本から視線を満男に移すと、彼は揉み手をしながら話し始めた。

「食料の未来を考えるのであれば、申し訳ございませんが、是非、私どもの紙の料理に一票をいただきたいと。これが普及すれば、食糧難が解消されるんです！　世界平和のためにも！」

満男の話によれば、紙自体は食べられる素材で出来ていて、さらに野菜や肉から作った企業秘密のインクと混ぜ、紙に印刷したものらしい。確かに香りや味は写真にあるピザと同じだった。栄養についても問題ないということだった。

確かに商品としては魅力的だった。これが普及すれば食料難が解消されるかもしれない。だが、料理としては明らかに「偽者」だった。真人の表情は曇った。

極めつけに真人の機嫌を損ねたのは満男とった行動だった。腰をやや曲げたまま、満男は近づき、耳元で囁いた。

「ご協力いただいた際には賞金の数パーセントを本島様へと考えております」

番組で対決を行い十週勝ち抜くと賞金一千万円が手に入るのだった。食糧難解消などと偉そうなことを言っているが、満男の本性を見た気がした。

次の瞬間、真人は大声で怒鳴り、満男を楽屋から追い出していた。

番組収録も紙の料理とゲテモノ料理の対決で、どちらもひどいかったので、両者引き分けになった。

ぐぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ……1～2時間後更

１０／１５　５：２９　コトダマ執筆編？

今回のコメント

・このシーンを書くために、病気で食事を取れなくなった人のことをネットで色々調べました。
・食事ってやっぱり大切だなとしみじみ思いましたね。

いつもネタとして夕飯を書いてますが、ちゃんと食事は取ろう。
あと、健康って大切。
体調崩してから後悔しても遅い。
それが自分じゃなくて、大切な人だったら、やるせない気持になる。
自分の事だったらまだ開き直れる余地があるのに。
いかん。湿っぽくなってしまった。

ちなみにこの回から承に入ってます。
そして今回で合計約５０００字です……

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

満男に金で買収できるような「偽者」に自分が映ったことに真人は腹が立った。同時にあまりにもひどい番組構成も手伝ってスタッフを怒鳴り散らした。

真人はその後の仕事をキャンセルして、タクシーで家に帰ること

にした。久しぶりに妻の顔でも見て、心を静めようと思ったからである。

タクシーを降りて自宅の玄関のドアを開けると、廊下で倒れているさなえを目撃した。妻は小刻みに震え、下腹部を押さえていた。初めて見たさなえの姿に動揺しながらも、救急車を呼び、病院へ搬送された。

検査の結果、癌である事が判明。すぐに手術することになり、十二指腸と胃の殆どを摘出することになった。

手術後、直人はベッドで眠るさなえを見て、安堵すると同時に、もしいなくなったらと考えると、胸騒ぎがして涙が零れた。

なんとしてもさなえを守りたい。かけがえのないものを守りたい。そのためならどんな方法でも厭わないと誓った。

手術後のさなえは内臓摘出と抗がん剤の副作用でまったく食事が取れない状態が続いた。見舞いに来るごとに痩せていく妻を真人は見ているのも辛い。頬骨が目立ち始め、愛らしかった瞳も窪んでいく。綺麗だった指や手の甲も筋がハッキリと確認できた。腕にいたっては細い枝のように簡単に折れそうになっていた。二の腕を気にして恥ずかしそうにしていた妻を思い出して真人はもう戻ってこない過去に、先細りの未来に絶望した。

入院費や手術代を稼ぐために真人はがむしゃらに働いた。同時に働いている間は妻のことを忘れられる気がした。さらに毒舌に磨きがかかり、人気がどんどん上がっていた。少しずつ、病院に行く回数が減っていくのを感じた。

数ヶ月が経過。さなえの入院が長引き、いつのまにか結婚記念日が近づいていた。たまに病室へ行くと、さなえは乾ききった唇で笑みを浮かべ喜んだ。

「もうすぐ結婚記念日だね」

カレンダーを見つめるさなえの横顔は、首が極端に細くて、頭が大きく見えた。真人はすっかり変わった妻を見続けることができない。そんな真人の態度を察してか、さなえも彼と反対方向を向いた。

「はぁ……今年はレストラン無理だね」

今年どころではない。来年、結婚記念日を迎えられるかどうかわからなかった。先日、癌が転移したことを告げられたばかりだった。真人が答えられずにいると、さなえが彼へと振り向き、涙声で言った。

「最後にわがまま言わせてください……貴方とハンバーグを食べたいよ」

さなえは病気になってから、弱音を吐くことなく闘病生活を送っていた。病気後、初めて見せる涙だった。若い頃、彼女の泣き顔を沢山見た。本当は泣き虫だったのに、我慢してたのか。それとも自分には見せずに泣いていたのか。最近は殆ど病室に来ることがなかった真人には分からなかった。

だが、ハッキリした事があった。それはさなえの願いを叶えてあげたい。初めて病院に運ばれた時に誓った気持を思い出した。

ぐぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ……1～2時間後更新

10／15　6：26　コトダマ執筆編？

今回のコメント

・やばい、このシーンかいてて、二回ほど気絶してしまった。幸い一分ぐらいしか過ぎてなかったけど。

せめてミッドポイントまで書きたかったけど……無念。

****
****

次の日。真人は人生で初めての土下座をしていた。固い床の感触を脛に感じる。さらに震えながら頭を下げた。自分の鼻息が床に跳ね返ってくる。

「で？　『紙の料理』でそのレストランのミックスフライとハンバーグを作れと？　あんなに俺を罵倒したのにか？　偽物だと断じた『紙の料理』にか？」

鼻をほじくりながら、真人の話を聞いていたのは小翼満男だった。さなえでも料理を味わえる方法として「紙の料理」を思い出したのだ。味は再現できて、紙は唾液で解けてしまう。温感や触感は目を瞑るとして、さなえにとっては限りなく本物に近い偽物だった。

「本島さん。アナタ、真剣に土下座したことないでしょう。おでこ

は床につけるものですよ」
　真人は歯を食いしばった。目を固く瞑り、おでこを床につけた。冷たくて固い感触。頭の中では必死に妻の姿を思い出していた。今、真人の誇りを支えているのは妻の笑顔だった。
　満男は片目を閉じながら、真人を見下ろす。頭の中ではどのような算段で真人を利用するかを考えていた。
「いいでしょう。奥さんのために作りましょう」
　真人が顔を上げると、満男が鼻で笑い「ただし」と言って指を差した。
「条件がある。まず、あの料理番組で十週勝ち抜けで一千万円取らせもらう。後は各メディアから出演オファーが来た時はかならず『紙の料理』の宣伝をすること。これを破った時は、奥さん用の紙の料理は作らないし、すべて暴露する」
　満男は顎をなでながら、無機質な視線を向け捕食動物のように舌なめずりをした。
ぐぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ……ね、寝る……

１０／１５　１６：０３　コトダマ執筆編？

今回のコメント

・さて、再開したわけだけど。
確実に削る作業が待っている気がする。
そうすると書いている間も「これって無駄になそうだから」書かないほうがいいか。
と思っちゃう場合がある。

それだけは避けようと思う。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　真人はすぐに料理番組のスタッフに連絡をして、『紙の料理』の再挑戦を頼んだ。スタッフは不思議がったが、満男が言う世界の食糧難を救うための有効手段を宣伝したいと説明することでなんとか、約束を取り付けた。

「本島さんがこんな頼みごとをするのって初めてですよね。だからきっと素晴らしい『本物』が紙の料理にはあるんだろうな」

　番組スタッフの言葉に本島は笑うしかない。番組は本島の頼みに全面協力してくれた。
『紙の料理』は番組の猛プッシュを受けて再登場し、有名料理人を打ち破った。中でも真人が「本物」と認めたことで、放送後、問い

合わせや抗議の電話が殺到した。

別の仕事中だった真人は番組スタッフからの反響の大きさに驚く電話を聞く。電話中終始興奮気味だったスタッフと相反して真人は冷めて気持ちで聞いていた、連絡後、急いで病院に向かった。今日が結婚記念日だったのだ。

病室を開けると、さなえが痩せた笑顔を向けてくれた。真人が花束をもって近づくと笑顔から少しずつ申し訳なさそうな表情に変わっていった。

「結婚記念日になっちゃった……ごめんね」

すると真人は黙って病人用の机をベッドに備え付ける。鞄から刺しゅうのついた白いテーブルクロスを被せた。状況が飲み込めず、何度も机と真人を交互に見つめるさなえ。最後に数枚の紙を机の上に並べる。紙にはあのレストランのハンバーグとミックスフライの写真が印刷されていた。

料理番組を見ていたさなえはすぐに察し、真人は黙って頷いた。

さなえは震える手を机に伸ばした。ハンバーグの紙をつまむと、ゆっくり口の中に含む。病気のせいで一度に食べられないのか、味わっているのか、直人には分からなかった。しばらくさなえは口を動かして、懸命に咀嚼する。紙はきっとすぐに溶けてしまうので、咀嚼する動きはきっと想像なのだろう。やがて口の動きを止め、さなえは俯いた。わずかに見える唇が震えている。

初め震えをこらえていたさなえは、やがて耐え切れなくなったのか、両手で顔を覆った。小さく華奢になった肩も震わせて、搾り出

すような声を出す。

「ありがとう……」

顔を上げたさなえは無理に笑おうとするが、涙が溢れて上手くいかない。何も言わずに真人はハンカチを差し出した。涙を拭いながら、さなえは途切れ途切れに言葉を紡ぐ。

「美味しいよ……今までのどの料理よりも」

さなえの姿を見て真人は間違っていなかったと確信した。

ぐぬう……更新は1～2時間後

１０／１５　１７：１９　コトダマ執筆編？

今回のコメント

・すでにミッドポイント（中間地点）を過ぎ、後半戦なのです。
ここから結構、プロットを外れていくかもです。
書いていくうちに色々繋がってきた。
どれだけ外れていくかお楽しみに！（勝手にしろ）

とりあえず書ききるのみ！

７０００文字超えた！　やばい！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

番組内における『紙の料理』の快進撃は続いた。真人が本物認定したことにより、他の審査員も流されるように、『紙の料理』を評価した。料理対決は二週、三週目と勝ち抜いた。反響の大きさから、番組も本腰で『紙の料理』を宣伝した。

いつしか直人の楽屋に満男が入り浸るようになっていた。

「さすがは本島先生。あっという間に評判になりましたよ。今じゃ問い合わせ殺到です。お陰で賞金以上のお金が入りそうですよ」

薄気味悪い笑みを浮かべる満男。嫌悪感だけはどうしてもなくならない。

直人の提案から始まった『紙の料理』。献身的に動くスタッフを見て、罪悪感を覚えた。だが、同時に自分の影響力の大きさを実感できた。スタジオを眺め、真人は自然に笑みがこぼれる。初めは誤魔化しの笑いだったが、少しだけ満足感の笑いが混ざるようになった。

仕事は相変らず忙しかったが、真人は時間の許す限り、病室へ向う。今までの罪滅ぼしをするように。彼が顔を見せるだけでさなえは喜んだ。なかでもとりわけ喜んでくれるのは差し入れに持っていく『紙の料理』だった。普段、食事をまともに取れないさなえにとってはまさにご馳走なんだろうと真人は考えた。そしてもっと喜んでもらおうとさまざまな『紙の料理』を彼女へご馳走した。

さなえの姿をみて、満男の言う食糧難だけではなく、食事を取れない人に、食べることの喜びを取り戻すきっかけになるんじゃないかと考えた。

たしかに満男という人間は、性格は最悪だが、決して悪いことをしているわけじゃない。むしろ困った人を助ける結果になるじゃないか。紙だから、実在しないから、それは『本物』じゃないなんてのは偏見に過ぎないのでは?

写真の仕事では常に生の現実を求めて『本物』を探していた。だが、それの考えさえも偏狭な『偽物』だったのだ。今の自分は新しいステージに立とうとしているのであって、間違った選択をしていない。『本物』だ。『紙の料理』は自分が認めた『本物』なんだ、と真人を理論武装した。

ぐぬう……更新は1～2時間後

10／15　18：12　コトダマ執筆編？

今回のコメント

・今の予想だと13000〜15000の間ぐらいになりそうな雰囲気。

削る作業が大変だけど、重複した文章や、前半の文章を削れば、エピソード丸ごと消すことはない気がする。

多分……

8000文字超えた！　やばい！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

番組内では『紙の料理』は有名料理人をことごとく倒し、既に五周勝ちぬけしていた。

さらに『紙の料理』は番組内だけでなく、新聞・雑誌媒体にまで影響を及ぼすようになった。特集記事には『隠れたブーム』と銘うたれ、必ず真人の推薦コメントが添えられた。

真人の周りにはいつの間にか取り巻きが付くようになっていた。自分から真人のマネージメントをかってでる者、スタイリストを名乗る者、ただ有名人の近くにいたい者、さまざまだった。テレビ局内を歩いていてもすれ違う人が真人の集団を避けて通る。

最初は息苦しさを感じ戸惑った真人だったが、次第にそれが当たり前になってきた。

こうなると当然の流れとして、反『紙の料理』『本島直人』を掲げる評論家や有名人が現れて、『紙の料理も本島直人も偽物』というバッシング記事も出回るようになった。

面白がったメディアでは「アナログ対デジタル料理編」と題して話題に上げ面白がった。

この流れを料理番組スタッフが見逃すわけがなかった。第七週目の対戦に反『紙の料理』側の先頭に立つ、料理人を呼ぶことに成功したのだ。審査員も反『紙の料理』側から三人招聘した。世紀の対戦ともてはやされ、テレビCMがどんどん流される。世間の注目も俄然高まった。

対戦前、真人は取り巻を外に待たせて妻の待つ、病室へと向った。病室に入り、ベッドに近づくと、すがりつくようにさなえが真人に抱きついた。しがみつく腕が震えている。輝きを失ったさなえの髪を撫でるて落ち着かせる。ゆっくりと顔を上げたさなえは、すっかり骨と皮だけで構成されているような、表情のない顔になっていた。

「ねえ、紙の料理持ってきた?」

真人は安心させようと微笑みながら、『紙の料理』を取り出すと、毟り取るように奪うと、口の中に押し込むように含む。

「ごめんなさい。寂しくてつい。思い出に浸りたくて……」

確かに忙しくて最近、見舞いがサボりがちだった。唯一すがれるものが、真人と結婚記念日の思い出が蘇る『紙の料理』だけなのだ。やはり『紙の料理』を守らなければと心に誓った。

ぐぬう……更新は1～2時間後

１０／１５　１９：０９　コトダマ執筆編？

今回のコメント

【速報】１０００文字超えた！

そして中日が負けてる！（これは割りとどうでもいい）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　そして料理番組収録当日。テーマは魚料理だった。

　さすが反『紙の料理』派が用意した料理人だった。料理の内容は申し分なかった。焼き魚は皮がパリパリとした音をたてて少しだけ歯ごたえのある食感。白身はホクホクとして柔らかい。口の中入れても生臭さはなく、程よい塩味に鼻から抜ける香りは潮の雰囲気を呼び起こす表現力だった。当然のごとく食器類も気を配ってあり、審査も忘れて五感を全て使い堪能した。審査員は各々に料理を絶賛した。真人も褒めたいところだったが、何とか堪えた。

　次に『紙の料理』の登場。確かに一流料亭の魚料理をコピーしただけあって、香りもそれなりで、口に含むと焼き魚の味はした。だが、それだけだった。すぐに紙が溶けて食感も無い。しかも後味はやや薬品のような味がした。健康そのものな真人には正直苦痛だった。

今回は判定前に簡単な討論が行なわれた。反『紙の料理』派の主張から始まった。

「五感で感じられない料理に何の意味があるんですか？　私達は感覚を通じて食と向かい合うのではありませんか？　自分の感覚だけが唯一のリアルとして」

彼らの主張は真人が写真を撮っていた時から信じている『本物』だった。その通りだと思いながらも何も答えられない。すると別の審査員が反論した。

「『自分の感覚だけが信じられるですか』。小さい。ホントに世界が小さいですね」

反論したのはいつも一緒に仕事している審査員だった。彼は真人をちらりと見ると、一瞬口を歪ませた。きっと笑いかけたつもりだろう。

「『紙の料理』はね、既存料理に対するアンチテーゼという存在なんですよ。触感も温感もないですが、それが逆に余計な感覚を抜きにして味覚だけで勝負しろというメッセージを感じます！　ムキになるあなた方より、高みでから感覚だ、感覚だというアナタ方を見下しているんですよ。逆にすごいじゃないですか！」

話しながら、何度も真人の機嫌を伺う。真人は何も言わずに、タイミングを合わせて頷いた。すると褒められた犬のごとく、大喜びで声を張り上げた。

「それにアナタの料理は食糧難を救えますか？　豪勢で希少な材料

をただいたずらに消費し、美味しいものをただ調理して美味しいと言っているだけじゃないですか。消費だけに特化した浪費料理と一緒にして欲しくないなぁ」

鼻息荒く言い切ると、審査員の一人は席についた。反『紙の料理』派は黙ってしまい答えれらなかった。反論の方法はいくらでもあるだろう。だが、食糧難、浪費するだけの無駄遣いの料理を開き直って肯定するほどの勇気はなかった。

「あの、ちょっといいですか？」

調理を担当した料理人が手を挙げた。

「浪費するだけの料理は存在してはいけないのでしょうか？　元々料理は消費するためにあるのです。いかに消費するかが、その人の生き方に反映するんじゃないですか？　私が『紙の料理』に反対するのは、安易に味や栄養をとればいいと考えて、どんどん簡素化する態度が気に入らないだけなのです。私達が苦労して手にした料理は簡素化なんてすぐにはできないですよ。やれるものならやってみろ！」

真人には痛いほどわかった。カメラにしても自分でピントや光量を調整した写真と、オートフォーカス写真を一緒にして欲しくはない。だが世間の目は違いが分からない。だからせめて自分が信じる『本物』を撮り続けたいと思い、少しずつ理解者を増やしていったのだ。

わずかに真人は「引き分け」にしたほうがいいのではないかという気持になった。息を吸い込み、そのことを伝えようと席から立ち上がろうとしたとき、先ほどの審査員がすぐに立ち上がり、怒鳴り

声を上げた。

「時代は変わってるんです！　『紙の料理』は未来志向の料理なんですよ！　アナログな料理だけがはびこる時代は終わったんですよ。選択肢を広げましょうよ。これも逆に『本物』なんですよ」

真人は話を挟むタイミングを見失った。そのまま判定に持ち込まれた。きっと反対賛成が同数の審査員なので、自分に判断が任せられるだろうと思っていた。

しかし、結果は『紙の料理』が勝利した。反対していた審査員が、評決の場面で『紙の料理』派に寝返ったのだ。

『紙の料理』側の勝利が決まった瞬間、観客からは拍手が起きて、天井からは紙ふぶきが舞い降りた。真人は回りに促されて立ち上がる。隣にいた審査員は真人の腕をとり高々と上に上げて、彼に代わり宣言をした。

「本物とは常に正義であり、絶対的価値観である！」

この瞬間、真人の手から『紙の料理』は離れて行った。

楽屋に帰ると、満男が高級料理店のお土産をもりもり食べていた。

「先生、駄目ですよ。アナタ引き分けにしようとしたでしょ。俺が買収しておかなければ大変なことになりましたよ」

ぐぬぬぬぬう……更新は1～2時間後

１０／１５　２０：２０　コトダマ執筆編？

今回のコメント

あぁ、なぜ一日早く始めなかったのだろうか。
と、夏休みの学生におくれること一ヵ月半、後悔の淵にたたされいる大人がいる！

でも、わりとこの緊張感がすき！（開き直り）
もう少しだ……と思う。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

楽屋に帰ると、満男が高級料理店のお土産をもりもり食べていた。

「先生、駄目ですよ。アナタ引き分けにしようとしたでしょ。俺が買収しておかなければ大変なことになりましたよ」

醜悪な笑みを浮かべる満男に真人は吐き気がした。口元を押さえ、楽屋を出るとタイミングよく携帯電話が鳴る。電話に出ると病院からであった。

急いで真人は病院に駆けつけた。病室を開けると看護師数人がさなえを押さえつけていた。しかし、それを振りほどこうと、手足をばたつかせている。やせ細った妻のどこにそんな力が……真人は訳

が分からないまま近づく。

「さなえさん、旦那さんが来ましたよ！」

さなえは動きを止め、ゆっくりと看護師越しに真人を覗き込む。目の周りは窪んでいるが、眼球は血走って充血していた。口からは暴れていたせいか涎が零れていたが、本人は気にしていない。唇は乾燥しているのに動いたために切れて血が滲んでいた。真人はさなえの姿に声がでず、言葉に詰まった。すると先にさなえから真人に言葉をかけた。

「持ってきた？」

意味が分からないので答えられないでいると、さなえは血走った目を飛び出さんばかりにひん剥かせて、叫んだ。

「なんで今日は持ってこないだよ！　あああっ、頭がおかしくなりそうだ！」

ようやく『紙の料理』のことだと気づく。ポケットを探ったが、残念ながら見当たらなかった。真人が紙を持っていないことに気づくと、再び暴れだした。

看護師達が懸命に抑える中、鎮静剤が打たれ、次第に落ち着いていった。

疲れた体を引きずり、真人は満男に電話をかけ、妻の様子を伝えた。満男は黙って聞いていたが、話が終わると、鼻で笑うような音が聞こえた。

「ただの紙の料理だと物珍しさで飽きるだろうと、思ったから中毒性を持ってもらえるようなインクを混ぜておいたんだよ」

大したことではない、折込済みだ、と言わんばかりの言い方だった。真人はあらんばかりの声をあげて、満男を非難した。しかし、満男には何も届いていなかった。

「今、本島先生がこの秘密をバラしてもらっても一向に構いませんよ。だけど、奥さんはどうなるんですか？　先生の地位も転落して、収入ゼロになって。それが先生の望むことなんですか？」

真人は言い返すことができなかった。しばらく黙っていると電話は一方的に切られてしまった。

ぐぬぬぬぬぬう……更新は1～2時間後

１０／１５　２１：１３　コトダマ執筆編？

今回のコメント

中日負けた！　明日は勝って！

そしてお話も終盤！

１２０００文字超え！

よ、予想通り……だぜ？

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　その後、真人は事実を忘れるように淡々と仕事をこなした。『紙の料理』も番組内で九週勝ち抜けを達成した。後一周勝ち抜けで優勝だった。そうすれば番組内での関わりはなくなる。

　中毒性がある事実は考えないことにした。考えてみればどんなものでも摂りすぎれば、体に不調はおきるものだ。常に節度をもった使用を心がければいいのだ。問題は商品ではない。使う人なのだという結論に達した。

　今日も仕事を淡々とこなすと病室に向かった。無論、『紙の料理』を持っていくためである。病院側も既に転移が進み末期がんである

さなえに『紙の料理』を断つようにとは指示できなかった。それどころか、今月中に退院して欲しいと真人へ伝えていた。

病室のドアを少しだけ開ける。さなえはまだ真人に気づいていなかった。ただ正面だけを見つめ、薄ら笑いを浮かべている。時折涎が垂れるが、気にしていない。真人はゆっくりとドアを閉めた。看護師に『紙の料理』を手渡すと、足早に病院を後にした。

真人は歩きながら、思う。
自分は何のために働いているのだろうと。
カメラマン時代は自分の信じる『本物』を追い求めていた。
いや、それは今でも変わらない。
自分にとっての『本物』が変わって言っただけなのだ。

昔はファインダー越しの被写体に。少し前は五感を満足させてくれる料理に。
最近は妻の笑顔が彼にとっての『本物』だった。
カメラも料理の前に捨ててしまい、料理も妻のために捨ててしまい、その笑顔も今では虚空になってしまった。

なにが残ったのだろう。
空っぽの自分だけではないのか。
疲労感だけが真人を覆っていた。

毎週のようにテレビ局の楽屋にいる真人。室内には満男も居座り、当然のようにテレビ局が出してくれた弁当を食べていた。満男と言うとことは最初から『紙の料理』を食べ続けると中毒になると知っていてたからなのか、決して自分では『紙の料理』を食べようとしなかった。

しかし、『紙の料理』の人気があがり、いい金づるが見つかったとして、大量生産する工場も建設中だった。

さらに食糧難を救いたいと言っていたのだが、調べてみると、発展途上国に輸出した実績はなく、嗜好品として先進国へ輸出しているだけだった。

「先生、今日も頼みますよ。一千万なんて、もうはした金ですが、番組唯一の十週勝ち抜けの名誉は欲しいですからね」

真人は返事もしなかった。どうせ他の審査員に金を渡しているんだから、真人が決定しなくても結果は見えているからである。買収の事実が分かってから真人は番組への情熱を失い、台本もろくに読まなくなっていた。今日、十週勝ちぬけが決まったら、番組を降板しようと考えていた。

スタッフに呼ばれ、いつものようにスタジオに向う。対戦相手の料理人が真人に駆け寄り挨拶をする。いつもの風景だったが、今回は事情が違った。挨拶した顔に見覚えがあったからである。

それは結婚記念日に必ず予約していたレストランのコックだった。

ぐぬぬぬぬぬぬう……更新は1〜2時間後

10／15　22：14　コトダマ執筆編？

今回のコメント

1400文字超え！
どれを削ったらいいのだ……
（最後まで書いてないのに心配する人）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「さぁ、今日が番組初の十週勝ちぬけという記念日となるのか？　最後の挑戦者は自ら番組に挑戦状を叩き付けた老舗洋食屋の店主です！」

番組的には完全にかませ犬だった。しかし、真人にとっては別の意味を持っていた。最後に引き返すことの出来るチャンスである。
番組収録が始まってからも、店主は真人を真っ直ぐ見つめていた。彼だけが本島夫婦の歴史を記念日ごとに知っている人間だった。その人間までも欺くのか。真人の頭の中は真っ白だった。

挑戦者の料理が運ばれてくる。ハンバーグステーキセットだった。ゆらゆらと湯気を放つ皿に乗ったハンバーグ。やや黒いデミグラスソースがかかって、上には目玉焼きが乗っていた。箸が置かれているのもそのままだ。
ハンバーグへ箸を入れるとあの繊細な感触が手に伝わってきた。

口に入れるとコショウの利いた濃い味が広がる。いつしか夢中になって真人は口に運んでいた。

味が、香りが、感触が、真人の感覚という感覚が記憶を呼び起こした。

はたと気づき前を見ると、少し呆れながらも微笑むさなえの姿が見えた。

真人はハンバーグの一片をさなえに差し出した。すると満面の笑顔になるさなえ。自分にはこれだけの幸せな時間があったのだ。戻ろう。あの時信じた自分に。自然に目に涙が溢れ、零れ落ちた。

同時に差し出されてハンバーグは床に落ちていき、さなえの姿は消えいた。

「おおっと、本島さんが不味いとばかりにハンバーグを床へ放り投げたぞ！」

司会者の声に真人は我に返った。慌てて涙を拭う。

「涙まで流している！　これは『紙の料理』の勝利を確信しての感涙か！　確かに長かった。この十週色々な困難がありました！」

声をはって盛り上げる司会者。観客もハンカチをだいて目頭を押さえている人もいた。隣の審査員は「やりましたね」と言って、真人の肩を掴んだ。

真人はすぐに店主へと顔を向けた。店主はうな垂れたまま、こちらを見ることはなかった。

否定したい気持が抑えきれなかったが、司会者が次へと進行したので、タイミングを失ってしまった。まだ間に合うと真人は考えて

いた。

数分後、判定の時間になった。早々に審査員二人が『紙の料理』を上げた。このままいけば『紙の料理』の勝利が決まってしまう。

最後に残された逆転の方法は真人の「本島印」を出すことだった。両者引き分けに持ち込むのだ。真人は生唾を飲み込んだ。手が震え、足も震えだした。手を交差させれば済む話だ。ゆっくりと手を挙げた。

「さぁ、食に新しい一歩を踏み出しましょう！」

隣にいた審査員が真人の腕をつかんだ。そして導くように『紙の料理』というボタンを押した。

同時に天井につけられたくす玉が割れ、紙吹雪が舞い散った。

歓喜の中、皆が真人に握手を求めた。ただ漫然と握手を受ける。放心状態が余計に周りの人間にはリアルな感情として伝わり、涙ぐむものまでいた。

ついに超えてはいけない一線を越えてしまった。喪失感が真人を襲う。大切な思い出まで捨ててしまった。もう、戻れない。

真人は拍手で見送られ、一歩また一歩、たどたどしい足取りで前に出る。もうどこに向っているかもわからない。スタジオを出ようとしたところ、挑戦者である店主が真人に近づいた。彼の手には包丁。観客や番組スタッフは悲鳴を上げた。店主は一気に詰め寄った。

おぼろげに見つめる真人。包丁を見た瞬間、我に返った。反射的によろよろと逃げようとした。動かした足はもつれ、その場に倒れ

てしまった。しかし、倒れたことが効して包丁をかわしてしまった。
次の瞬間、囲む番組スタッフ。店主は床に取り押さえられた。押さえつけられながら店主は叫んだ。

「なにが本物だ！　お前と紙の料理のせいでウチの料理が偽物扱いになったんだぞ！」

妻のために作った『紙の料理』、レストランの味そのままだった。
『紙の料理』が影響で彼の料理が全否定されたのだ。
泣きながら喚く店主を見ながら、真人はなにも言えなかった。

ぐぬぬぬぬぬぬぬぬう……更新は1〜2時間後

１０／１５　２３：１１　コトダマ執筆編？

今回のコメント

さて、書ききったわけですが、１５０００文字超えてる！
三分の一削る～っ！
なんてこったい。
今から削る作業が始まります……

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

楽屋に戻ると満男が満面の笑みで迎えてくれた。
「いや～、冷や冷やしましたよ。他の審査員を買収してなければ、アナタがご破算にするところでしたね」
だが、真人にはなにも聞こえていなかった。フラフラと荷物を持つと出て行った。
「せっかく一緒にお祝いしようと思ったけど、まあいいか」
締められた楽屋のドアを眺めながら満男は口を歪ませた。

タクシーに乗り、真人は病院へ向う。収録が押して夜中になっていたが、守衛所を掻い潜り、病棟へ侵入した。足早に病室の前に到着すると、扉を少しだけ開けた。病室にはさなえが寝息を立てていた。

収録前に病院から電話があり、今日も暴れたと連絡があった。そんな事があったとは思えないぐらい、さなえは静かな表情をしていた。

しばらく、真人は彼女の寝顔を見つめた。

どこで躓いたんだろう。それだけが彼の頭を駆け巡っていた。

きっと……ここなんだ。

真人はゆっくり手を伸ばす。やせ細って筋がはっきりと見えた首に手をかけた。少しだけ手に力をいれ、喉元に親指を押し付けた。

「んぐっ」という息の詰まる音が聞こえたが気にせず、力を込めていく。真人は歯を食いしばり、目を瞑った。

なにが本物だ。なにが妻のためだ。

ハンバーグステーキセットを食べて思い出したんだろう。

なのに……

なぜ、審査員が自分の腕を掴んだ時に振り払わなかったんだ。

なぜ、店主が襲ってきた時に逃げようとしたんだ。

結局、なに一つ守れなかった。

プライドも大切な人も。

だからいっそ、この手で……壊す。

決心した真人は目を開いた。すると、すみれも目を開けていた。

苦しいのか、瞳一杯に涙をため、こちらをじっと見つめている。

抵抗は一切なかった。体力がないのかもしれない。

やがて口を開いて、なにかを真人に語りかけている。

「ごめんね」確かにそう告げていた。

真人は驚き、手の力を緩めた。そのまま後退して、床にへたり込む。目の奥からじわり暖かい感覚が押し寄せた。涙だった。目の淵で堪えきれなくなった涙は、零れて頬を伝う。

ようやく声を上げて泣けた。

結局全てが中途半端だった。

勇気を出して自分の意見を通すこともできない。

妻を救うこともできない。

壊すこともできない。

なにも解決できない、なにも前進しない。

それなのに生きていた。

今日だって何食わぬ顔して、テレビ局を歩いている。番組は降板せず、相変らず威張り散らしている。さすが『紙の料理』ブームも沈静化したら取り巻きの数は減った。

どうせ楽屋へ行けば今日も満男がたむろしているのだろう。十週勝ち抜けしてからも、我が物顔で楽屋に居座っている。ふてぶてしい人間だ。軽蔑に値する人間だ。

しかし、自分だって変わらない。軽蔑に値する人間だ。

だから、自分もふてぶてしく生きていくことにしたのだ。

楽屋の前に取り巻を待たせて、真人は室内に入った。

ドアを閉めた瞬間、後頭部に強烈な衝撃を受けた。一瞬にして目の前が暗くなった。

再び目を覚ますと、数人の人間に囲まれていた。
焦点の合わない窪んだ瞳にだらしなく口を開け涎をたらしている。
「出せ……早くだせよ……」
どこかで聞いたことのある言葉だった。病室で聞いた妻の言葉だった。ようやく真人は理解した。『紙の料理』の被害者だ。
「まってくれ、俺だって被害者なんだ」心で叫ぶが、彼らには届かない。
『紙の料理』が楽屋にないことがわかると、彼等はポケットから刃物を取り出す
空ろな瞳、だるそうに足を引きずりながら近づいてくる。
懇願も祈りも届かない。
彼等は本物の中毒者だった。

壁に貼ってある番組ポスターに血しぶきが飛び散る。
ポスターには真人が精悍な顔立ちで映っていた。
キャッチコピーはこれだ。
「本物とは常に正義であり、絶対的価値観である」

ぐぬぬぬぬぬぬぬぬぬう……ちょっと休憩。

10／16　4：41　コトダマ執筆編？

今回のコメント

終わったぜぃ！

じゃすと1000字！

言いたいことはたくさんがあるけど、とりあず今日はここまでじゃ！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

『生存者は今日も吠える』

1

ここは某テレビ局の収録スタジオ。二人の料理人がお互いの得意料理を競い合い、食通の評論家が優劣を判定する料理番組を収録していた。

「それでは審査員の方々判定を！」

巨大ディスプレイ上に各審査員が選んだ料理人の名前が表示される。三人のうち二人は別々の料理人を上げた。そして三人目、本島（もとじ）真人（まこと）に勝利者の判断は委ねられた。息を呑む料理人たち、司会者、観客。真人に注目が集まる中、彼は腕を上げて交差させ、大きくバッテンを見せた。

「やはり今日もでました、本島印！　両者失格です」

司会者が叫ぶ中、うな垂れる料理人たち、肩をすくめて困り顔の審査員、拍手をする観客がそれぞれカメラで映され番組収録は終了した。

真人は拍手で見送られ、スタジオを出ようとした。すると、審査を受けていた料理人が真人に駆け寄った。彼の手には包丁。観客や番組スタッフは悲鳴を上げる。しかし、真人は寸前で気づき、包丁をかわした。囲む番組スタッフ。料理人は取り押さえられた。料理人を見下ろして、真人は叫んだ。

「本物とは常に正義であり、絶対的価値観である！」

一部始終を見ていた番組観覧者は彼に喝采を送った。

本島真人は料理評論家ではない。本業はカメラマンである。最初は料理番組にゲスト審査員で登場した時の毒舌が評判よく、そのままレギュラー審査員の座につき、番組を代表する人物にまで成長した。

彼が人気を博した理由は分かりやすさだった。本物かどうかそれが彼の価値基準だった。カメラマンの仕事で常に自分が本物だと思う被写体だけを取り続け、二十年が経つ。

今や本業をしのぐ量で料理関係の仕事を行っている。年内のスケジュールは埋まっていた。本人も忙しいことによる充実感と本物という自分の考えが世間に受けたことに満足感を覚えていた。

そんな忙しいはずの彼がテレビ局を出てタクシーに乗り込み向かった場所は、とあるレストランだった。目的地に着くと、入り口付近で女性が立っていた。彼の妻である本島さなえである。二人はレストランに入ると予約した席に座る。

決して一流店の雰囲気はない。昔ながらの洋食店だった。メニューを見ずに真人はハンバーグステーキセット、さなえはミックスフライセットを頼んだ。背広姿だった真人はネクタイを緩めて一息ついた。それをみてさなえは微笑んだ。

「お疲れ様。忙しい中、覚えていてくれて嬉しい」

今日は十八回目の結婚記念日だった。

毎年結婚記念日には、このレストランで結婚当初と同じメニューを食べて祝うのが、二人の決まりごとだった。

色々と過去を振り返っていると料理が運ばれてきた。真人の前に運ばれてきたのは、ゆらゆらと湯気を放つ皿に乗ったハンバーグだった。やや黒いデミグラスソースがかかって、上には目玉焼きが乗っている。ナイフとフォークはなく、箸が置かれていた。これは真人が毎年頼んでいることだった。

二人の料理が揃うと、頼んだワインを片手に乾杯をする。

「今年一年ありがとう。また来年もお願いね」

少しだけ首を傾けて、ややはにかみながら、さなえはワインに口をつける。昔からの照れた時の姿。確かに若い頃と外見は変わったが、仕草の愛おしさにはなんの変化もなかった。

ワインを置くと、真人はハンバーグに手をつけた。パンバーグに箸を付け切り分ける。ほとんど力を入れることなく、切り分かれていく。真人は粗引きのハンバーグにはない繊細さが好きだった。さらに口に入れると濃厚なデミグラスソースに加えて、コショウが利いている肉が食欲を高めた。とても濃い味で自分が若ければ、いくらでも食べられただろう。

真人がふと前を見ると、じっと自分を見つめているさなえの姿があった。夢中になりすぎたせいで、毎年行なうおかず交換を忘れていたことに気づいた。慌ててハンバーグの一片をさなえへ渡す嬉しそうにハンバーグを食べていた。幸せな感覚が前進に駆け巡り、真人は自然に微笑んでいた。

料理の審査員をしているものの、この庶民的な洋食屋が真人は好きだった。人に厳しい目は向けるものの、妻に対しては笑顔でいたい。真人は記念日に気持を新たにした。

再び日常にもどると、真人は多忙な日々を送った。家にも一週間にニ、三度帰ることができるかどうかという、スケジュールで動いていた。ますます彼の認知度、人気も上昇していった。

2

ある日、いつものように真人は料理番組の審査員をするため、テレビ局の楽屋で待機していた。ドアがノックする音が聞こえたので、返事をして招きいれた。ドアが開くとお辞儀をしたまま背広姿の男が入室してきた。男はオールバックの髪に細い目に薄笑いを浮かべながら顔を上げる。

「失礼いたします。本島真人様ですね。私、こういうものでござい

ます」

男は名刺を取り出し、真人に差し出した。名刺には食料研究家小翼満男（こよくみつお）と書かれてあった。

「今日はですね。本島様にお願いがあってきました」

すると、満男は持ってきていた鞄から、数枚の紙片をとりだした。三センチ四方のの紙にはピザの写真が印刷されている。満男は一枚を真人に手渡した。

「ただの紙ではございません。なんと食べられるのです！」

満男は口を歪ませてニヤリとする。ハッキリと真人は嫌悪感を覚えた。と同時に番組台本を確認する。

「是非、私どもの紙の料理に一票をいただきたいと。これが普及すれば、食糧難が解消されるんです！」

満男の話によれば、紙自体は食べられる素材で出来ていて、さらに野菜や肉から作った企業秘密のインクと混ぜ、紙に印刷したものらしい。香りや味は写真にあるピザと同じだった。栄養についても問題ないということだった。

確かに商品としては魅力的だった。だが、料理としては明らかに「偽者」だった。真人の表情は曇った。

極めつけに真人の機嫌を損ねたのは満男とった行動だった。腰をやや曲げたまま、満男は近づき、耳元で囁いた。

「ご協力いただいた際には賞金の数パーセントを本島様へと考えております」

番組で対決を行い十週勝ち抜くと賞金一千万円が手に入るのだった。食糧難解消などと偉そうなことを言っているが、満男の本性を見た気がした。

次の瞬間、真人は大声で怒鳴り、満男を楽屋から追い出していた。番組収録も紙の料理とゲテモノ料理の対決で、どちらもひどく、両者引き分けになった。

満男に金で買収できるような「偽者」に自分が映ったことに真人は腹が立った。真人はその後の仕事をキャンセルして、タクシーで家に帰ることにした。久しぶりに妻の顔でも見て、心を静めようと思ったからである。

タクシーを降りて自宅の玄関のドアを開けると、廊下で倒れているさなえを目撃した。初めて見たさなえの姿に動揺しながらも、救急車を呼び、病院へ搬送された。

検査の結果、癌である事が判明。すぐに手術することになった。手術後、真人はベッドで眠るさなえを見て、なんとしてもさなえを守りたい、かけがえのないものを守りたい、そのためならどんな方法でも厭わないと誓った。

3

手術後のさなえは内臓摘出と抗がん剤の副作用でまったく食事が取れない状態が続いた。見舞いに来るごとに痩せていく妻を真人は見ているのも辛い。頬骨が目立ち始め、愛らしかった瞳も窪んでい

く。綺麗だった指や手の甲も筋がハッキリと確認できた。真人はもう戻ってこない過去に、先細りの未来に、絶望した。

その後、真人は事実を忘れようとするかのように、がむしゃらに働いた。すると人気がどんどん上がっていた。忙しさにかまけて。少しずつ病院に行く回数が減っていった。

数ヶ月が経過。さなえの入院が長引き、いつのまにか結婚記念日が近づいていた。たまに病室へ行くと、さなえは乾ききった唇で笑みを浮かべ喜んだ。

「はぁ……今年はレストラン無理だね」

来年、結婚記念日を迎えられるかどうかわからなかった。先日、癌が転移したことを告げられたばかりだった。真人が答えられずにいると、さなえが彼へと振り向き、涙声で言った。

「もう一度ハンバーグを食べたいよ」

さなえは病気になってから、弱音を吐くことなく闘病生活を送っていた。病気後、初めて見せる涙だった。

さなえの願いを叶えてあげたいとハッキリと思った。

次の日。真人は人生で初めての土下座をしていた。固い床の感触を脛に感じる。さらに震えながら頭を下げた。自分の鼻息が床に跳ね返ってくる。

「で？　紙の料理でそのレストランのミックスフライとハンバーグを作れと？　偽物だと断じた俺にか？」

鼻をほじくりながら、話を聞いていたのは小翼満男だった。真人はさなえでも料理を味わえる方法として「紙の料理」を思い出したのだ。さなえにとっては限りなく本物に近い偽物だった。

「本島さん。おでこは床につけるものですよ」

真人は歯を食いしばった。目を固く瞑り、おでこを床につけた。冷たくて固い感触。頭の中では必死に妻の姿を思い出していた。今、真人の誇りを支えているのは妻の笑顔だった。

満男は片目を閉じながら、真人を見下ろす。

「いいでしょう。奥さんのために作りましょう」

真人が顔を上げると、満男が鼻で笑い「ただし」と言って指を差した。

「条件がある。まず、あの料理番組の十週勝ち抜けで一千万円取らせもらう。後は各メディアから出演オファーが来た時はかならず紙の料理の宣伝をすること。これを破った時は、奥さん用の紙の料理は作らないし、すべて暴露する」

満男は顎をなでながら、無機質な視線を向け舌なめずりをした。

真人はすぐに料理番組のスタッフに連絡をして、紙の料理の再挑戦を頼んだ。スタッフは不思議がったが、彼の番組への影響力もあって、紙の料理は番組の猛プッシュを受けて再登場し、有名料理人を打ち破った。中でも真人が「本物」と認めたことで、放送後、問い合わせや抗議の電話が殺到した。番組収録後、病院に向かった。今日が結婚記念日だったのだ。

真人が花束をもって病室に入ると、さなえは笑顔から少しずつ申し訳なさそうな表情に変わっていった。

「結婚記念日になっちゃった……ごめんね」

すると真人は黙って病人用の机をベッドに備え付ける。白いテーブルクロスを被せた。状況が飲み込めず、何度も机と真人を交互に見つめるさなえ。最後に数枚の紙を机の上に並べる。紙にはあのレストランのハンバーグとミックスフライの写真が印刷されていた。料理番組を見ていたさなえはすぐに察し、真人は黙って頷いた。

さなえは震える手を机に伸ばした。ハンバーグの紙をつまむと、ゆっくり口の中に含む。しばらくして口の動きを止め、さなえは俯いた。やがて耐え切れなくなったのか、両手で顔を覆った。

「美味しいよ……今までのどの料理よりも」

さなえの姿を見て真人は間違っていなかったと確信した。

4

番組内における紙の料理の快進撃は続いた。真人が本物認定したことにより、他の審査員も流されるように、紙の料理を評価した。料理対決は二週、三週目と勝ち抜いた。反響の大きさから、番組も本腰で紙の料理を宣伝した。

真人の楽屋に満男が入り浸るようになっていた。

「さすがは本島先生。お陰で賞金以上のお金が入りそうですよ」

薄気味悪い笑みを浮かべる満男。嫌悪感だけはどうしてもなくならない。

仕事は相変らず忙しかったが、真人は時間の許す限り、病室へ向った。彼が顔を見せるだけでさなえは喜んだ。なかでもとりわけ喜んでくれるのは差し入れに持っていく紙の料理だった。普段、食事をまともに取れないさなえにとってはまさにご馳走なんだろうと真人は考えた。

番組内で紙の料理は有名料理人をことごとく倒し、既に五週勝ちぬけしていた。

さらに番組内だけでなく、新聞・雑誌媒体にまで影響を及ぼすようになった。特集記事には隠れたブームと銘うたれ、必ず真人の推薦コメントが添えられた。

こうなると当然の流れとして、反紙の料理本島真人を掲げる評論家や有名人が現れて、紙の料理も本島真人も偽物というバッシング記事も出回るようになった。

この流れを料理番組スタッフが見逃すわけがなかった。第七週目の対戦に反紙の料理側の先頭に立つ、料理人を呼ぶことに成功したのだ。世間の注目も俄然高まった。

対戦前、真人は妻の待つ病室に入りる。ベッドに近づくと、すがりつくようにさなえが真人に抱きついた。しがみつく腕が震えている。さなえの髪を撫でるて落ち着かせる。

「ねえ、紙の料理持ってきた?」

真人は安心させようと微笑みながら、紙の料理を取り出すと、毟り取るように奪うと、口の中に押し込むように含んだ。

「ごめんなさい。寂しくてつい……」

確かに忙しくて最近、見舞いがサボりがちだった。唯一すがれるものが、真人と結婚記念日の思い出が蘇る紙の料理だけなのだ。やはり紙の料理を守らなければと心に誓った。

そして料理番組収録当日。テーマは魚料理だった。

さすが反紙の料理派が用意した料理だった。焼き魚は皮がパリパリとした音をたてて少しだけ歯ごたえのある食感。白身はホクホクとして柔らかい。程よい塩味に鼻から抜ける香りは潮の雰囲気を呼び起こす表現力だった。

次に紙の料理の登場。確かに一流料亭の魚料理をコピーしただけあって、香りもそれなりで、口に含むと焼き魚の味はした。だが、それだけだった。すぐに紙が溶けて食感も無い。しかも後味はやや薬品のような味がした。

今回は判定前に簡単な討論が行なわれた。まず反紙の料理派の主張から始まった。

「五感で感じられない料理に何の意味があるんですか？　私達は感覚を通じて食と向かい合うのではありませんか？　自分の感覚だけが唯一のリアルとして」

彼らの主張は真人が写真を撮っていた時から信じている本物だった。その通りだと思いながらも何も答えられない。すると別の審査員が反論した。

「小さい。ホントに考える世界が小さいですね」

反論したのはいつも一緒に仕事している審査員だった。彼は真人をちらりと見ると、一瞬口を歪ませた。きっと笑いかけたつもりだろう。

「紙の料理はね、既存料理に対するアンチテーゼという存在なんですよ。触感も温感もないですが、それが逆に余計な感覚を抜きにして味覚だけで勝負しろというメッセージを感じます！」

話しながら、何度も真人の機嫌を伺う。真人は何も言わずに、タイミングを合わせて頷いた。すると褒められた犬のごとく、大喜びで声を張り上げた。

「消費だけに特化した浪費料理と一緒にして欲しくないなぁ！」

反紙の料理派は黙ってしまい答えれらなかった。反論の方法はいくらでもあるだろう。だが、浪費するだけの無駄遣いの料理を開き直って肯定するほどの勇気はなかった。

しかし、調理を担当した料理人が手を挙げた。

「元々料理は消費するためにあるのです。いかに消費するかが、その人の生き方に反映するんじゃないですか？　私が紙の料理に反対するのは、安易に味や栄養をとればいいと考えて、どんどん簡素化する態度が気に入らないだけなのです」

真人には痛いほどわかった。満男に肩入れしてなければ、大賛成していただろう。

すると先ほどの審査員が怒鳴り声を上げた。

「時代は変わってるんです！　紙の料理は未来志向の料理なんですよ！　選択肢を広げましょうよ。これも逆に本物なんですよ」

本物の論議になると話すことはない。我慢できなくなるからだ。結局すぐに判定に持ち込まれた。

そして、結果は紙の料理が勝利した。反対していた審査員が紙の料理派に寝返ったのだ。紙の料理側の勝利が決まった瞬間、観客からは拍手が起きて、天井からは紙ふぶきが舞い降りた。真人は回りに促されて立ち上がる。隣にいた審査員は真人の腕をとり高々と上に上げて、彼に代わり宣言をした。

「本物とは常に正義であり、絶対的価値観である！」

楽屋に帰ると、満男が高級料理店のお土産をもりもり食べていた。

「先生、駄目ですよ。俺が買収しておかなければ大変なことになりましたよ」

醜悪な笑みを浮かべる満男に真人は吐き気がした。口元を押さえ楽屋を出ると、タイミングよく携帯電話が鳴る。電話に出ると病院からであった。

5

急いで真人は病院に駆けつけた。病室に入ると看護師数人がさなえを押さえつけていた。しかし、それを振りほどこうと、手足をばたつかせている。やせ細った妻のどこにそんな力が……真人は訳が

分からないまま近づく。

「さなえさん、旦那さんが来ましたよ！」

さなえは動きを止め、ゆっくりと看護師越しに真人を覗き込む。目の週りは窪んでいるが、眼球は血走って充血していた。口からは暴れていたせいか涎が零れていたが、本人は気にしていない。さなえは真人に言葉をかけた。

「持ってきた？」

意味が分からないので答えられないでいると、さなえは血走った目を飛び出さんばかりにひん剥かせて、叫んだ。

「なんで今日は持ってこないんだよ！」

ようやく紙の料理のことだと気づく。ポケットを探ったが、残念ながら見当たらなかった。真人が紙を持っていないことに気づくと、再び暴れだした。看護師達が懸命に抑える中、鎮静剤が打たれ、次第に落ち着いていった。

疲れた体を引きずり、真人は満男に電話をかけ、妻の様子を伝えた。満男は黙って聞いていたが、話が終わると、鼻で笑うような音が聞こえた。

「ただの紙の料理だと物珍しさだけですぐに飽きられるだろうと思ったから、中毒性を持ってもらえるようなインクを混ぜておいたんだよ」

大したことではない、折込済みだ、と言わんばかりの言い方だっ

た。真人はあらんばかりの声をあげて、満男を非難した。しかし、満男には何も届いていなかった。

「今、本島先生がこの秘密をバラしてもらっても一向に構いませんよ。だけど、奥さんはどうなるんですか？　それが先生の望むことなんですか？」

真人は言い返すことができなかった。

その後、真人は事実を忘れるように淡々と仕事をこなした。紙の料理も番組内で九週勝ち抜けを達成した。

中毒性がある事実は考えないことにした。考えてみればどんなものでも摂りすぎれば、体に不調はおきるものだ。常に節度をもった使用を心がければいいのだ。問題は商品ではない。使う人なのだという結論に達した。

今日も仕事を淡々とこなすと病室に向った。無論、紙の料理を持っていくためである。　病室のドアを少しだけ開ける。さなえはまだ真人に気づいていなかった。ただ正面だけを見つめ、薄ら笑いを浮かべている。時折涎が垂れるが、気にしていない。真人はゆっくりとドアを閉めた。看護師に紙の料理を手渡すと、足早に病院を後にした。

真人は歩きながら、思う。

カメラマン時代は自分の信じる本物を追い求めていた。

いや、それは今でも変わらない。

自分にとっての本物が変わって言っただけなのだ。

昔はファインダー越しの被写体に。少し前は五感を満足させてくれる料理に。

最近は妻の笑顔が彼にとっての本物だった。

カメラも料理の前に捨ててしまい、料理も妻のために捨ててしまい、その笑顔も今では虚空になってしまった。

なにが残ったのだろう。

疲労感だけが真人を覆っていた。

いつものようにテレビ局の楽屋にいる真人。室内には満男も当然のように、テレビ局が出してくれた弁当を食べていた。満男は決して自分では紙の料理を食べようとしなかった。

「先生、今日も頼みますよ。番組唯一の十週勝ち抜けの名誉は欲しいですからね」

真人は返事もしなかった。審査員の買収の事実が分かってから番組への情熱を失い、台本もろくに読まなくなっていた。今日、十週勝ちぬけが決まったら、番組を降板しようと考えていた。

スタッフに呼ばれ、いつものようにスタジオに向う。対戦相手の料理人が真人に駆け寄り挨拶をする。いつもの風景だったが、今回は事情が違った。挨拶した顔に見覚えがあったからである。それは結婚記念日に必ず予約していたレストランの店主だった。

6

「さぁ、今日が番組初の十週勝ちぬけという記念日となるのか？最後の挑戦者は自ら番組に挑戦状を叩き付けた老舗洋食屋の店主です！」

番組収録が始まってからも、店主は真人を真っ直ぐ見つめていた。彼だけが本島夫婦の歴史を記念日ごとに知っている人間だった。そ

の人間までも欺くのか。

挑戦者の料理が運ばれてくる。ハンバーグステーキセットだった。ゆらゆらと湯気を放つ皿に乗ったハンバーグ。やや黒いデミグラスソースがかかって、上には目玉焼きが乗っていた。箸が置かれているのもそのままだ。

ハンバーグへ箸を入れるとあの繊細な感触が手に伝わってきた。口に入れるとコショウの利いた濃い味が広がる。いつしか夢中になって真人は口に運んでいた。

味が、香りが、感触が、真人の感覚という感覚が記憶を呼び起こした。

はたと気づき前を見ると、少し呆れながらも微笑むさなえの姿が見えた。真人はハンバーグの一片をさなえに差し出した。すると満面の笑顔になるさなえ。自分にはこれだけの幸せな時間があったのだ。戻ろう。あの時信じた自分に。自然に目に涙が溢れ、零れ落ちた。

同時に差し出されてハンバーグは床に落ちていき、さなえの姿は消えいた。

「おおっと、本島さんが不味いとばかりにハンバーグを床へ放り投げたぞ！」

司会者の声に真人は我に返った。慌てて涙を拭う。

「涙まで流している！　これは紙の料理の勝利を確信しての感涙か！　確かに長かった。この十週色々な困難がありました！」

声をはって盛り上げる司会者。観客もハンカチをだして目頭を押さえている人もいた。隣の審査員は「やりましたね」と言って、真人の肩を掴んだ。

数分後、判定の時間になった。早々に審査員二人が紙の料理を上げた。このままいけば紙の料理の勝利が決まってしまう。最後に残された逆転の方法は真人の「本島印」を出すことだった。両者引き分けに持ち込むのだ。真人は生唾を飲み込んだ。手が震え、足も震えだした。手を交差させれば済む話だ。ゆっくりと手を挙げた。

「さぁ、食の新しい一歩を踏み出しましょう！」

急に隣にいた審査員が真人の腕をつかんだ。そして導くように紙の料理というボタンを押した。

同時に天井につけられたくす玉が割れ、紙吹雪が舞い散った。

歓喜の中、皆が真人に握手を求めた。ただ漫然と握手を受ける。喪失感が真人を襲う。大切な思い出まで捨ててしまった。

真人は拍手で見送られ、たどたどしい足取りでスタジオを出ようとしたところ、挑戦者である店主が真人に近づいた。彼の手には包丁。観客や番組スタッフは悲鳴を上げた。店主は一気に詰め寄った。

おぼろげに見つめる真人。包丁を見た瞬間、我に返った。動かした足はもつれ、その場に倒れてしまう。しかし、倒れたことが効して包丁をかわしてしまった。次の瞬間、囲む番組スタッフ。店主は床に取り押さえられた。

「なにが本物だ！　お前と紙の料理のせいでウチの料理が偽物扱いになったんだぞ！」

妻のために作った紙の料理、レストランの味そのままだった。紙の料理が影響で彼の料理が全否定されたのだ。

泣きながら喚く店主を見ながら、真人はなにも言えなかった。楽屋に戻ると満男が満面の笑みで迎えてくれた。

「いや～、冷や冷やしましたよ。他の審査員を買収してなければ、アナタがご破算にするところでしたね」

だが、真人にはなにも聞こえていなかった。フラフラと荷物を持つと出て行った。

「せっかく一緒にお祝いしようと思ったけど、まあいいか」

締められた楽屋のドアを眺めながら満男は口を歪ませた。

7

タクシーに乗り、真人は病院へ向う。足早に病室の前に到着すると、扉を少しだけ開けた。病室にはさなえが寝息を立てていた。

しばらく、真人は彼女の寝顔を見つめる。

どこで躓いたんだろう。それだけが彼の頭を駆け巡っていた。

真人はゆっくり手を伸ばす。やせ細って筋がはっきりと見えた首に手をかけた。少しだけ手に力をいれ、喉元に親指を押し付けた。

「んぐっ」という息の詰まる音が聞こえたが気にせず、力を込めていく。真人は歯を食いしばり、目を瞑った。

なぜ、審査員が自分の腕を掴んだ時に振り払わなかったんだ。

なぜ、店主が襲ってきた時に逃げようとしたんだ。
結局、なに一つ守れなかった。
プライドも大切な人も。
だからいっそ、この手で……壊す。

決心した真人は目を開いた。
すると、すみれも目を開けていた。

苦しいのか、瞳一杯に涙をため、こちらをじっと見つめている。
抵抗は一切なかった。体力がないのかもしれない。
やがて口を開いて、なにかを真人に語りかけている。

「ごめんね」確かにそう告げていた。

真人は驚き、手の力を緩めた。そのまま後退して、床にへたり込む。目の奥からじわり暖かい感覚が押し寄せた。涙だった。目の淵で堪えきれなくなった涙は、零れて頬を伝う。
ようやく声を上げて泣けた。

なにも解決できない、なにも前進しない。
それなのに生きていた。
偽物の生き方を晒して。

壁に貼ってあるポスターには真人が精悍な顔立ちでキャッチコピーと共に写っていた。
「本物とは常に正義であり、絶対的価値観である」

了

ぐぬぬぬぬぬぬぬぬう……閉店ガラガラ（パクリ）

１０／１６　１４：１３　関西コミティアにて

甘くみてた〜。名古屋、京都の実績を考えると、増刷しなくていいやって、思ってた。
コトダマ創刊号、二号ともに、あと一冊しかない！
嬉しい誤算。
（とはいえ、片手で余るぐらいしか用意してなかった）

見本誌ばかり読んでます。
引っ込み思案を押して数冊買ったよ。（威張るほどではない）

以外文字稼ぎ。
※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※
※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※
※※※※※※※※※※※※

１０／１８　０：５４

今回のコメント

きょうのごは～ん

ごはん
しょうがやき
きゃべつ
いりたまご。

いじょう！

今日からまた『トロフィー』をしれっと再開！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

日記世界ではあっという間に放課後。僕達は下校する生徒に対して、活動すべく校庭に向かった。すると、予想通り、美国陣営もすでに選挙活動を行なっていた。僕は思わず滝川先輩を見てしまった。先輩も僕の視線に気づいたようで、視線が会った瞬間、口を歪ませた。

「心配するな。無茶はしない。亜也まで困らせたくないからな」

なるほど。僕だけ困るのは問題ないわけだな。了解。断固滝川先輩を見張ることにする……なんて余裕はなさそうだ。美国陣営とは離れた場所で活動することにした。

「皆さん、初めまして。私達は……」

まず、高月先輩が声を上げて、皆の注目を集める。よく通る人を集める声って言うのは本当にあるようで、少しずつだけと足を止める人が増えていく。いつの間にか二十人ぐらいになった。

「あれ？　あんな子いたっけ？」

「な、なあ。ちょっと目の保よ……じゃなくて、演説を聞こうぜ」

集まった人たちの視線は高月先輩に向けられていた。

さすがだ。「殲滅の日記姫」以前の高月先輩は五十人の入部希望者を集めたぐらいだからな。自分の話で人を集められないのは癪だけど、ちゃんと利用して名前を売らないと。きっと高月先輩が、客寄せパンダみたいな状況を一番嫌だろうから。

横から見つめた先輩の表情が少し固い。僕は自分に気合を入れなおした。

先輩の紹介を受け、僕は昼休みと同じように自己紹介を始める。何とか終わりまで漕ぎ着けた。幸い、演説が短いのもあって、人はほとんど減っていなかった。僕がほっとしたのも束の間。立ち止まった人の中から声が上がった。

「で、さぁ、立候補するのは分かったけど、何してくれるの？」

「えっと……」
「まさか、『考えてない』じゃないよね？」

僕は言葉に詰まり答えられない。高月先輩が助けに入ろうとしたその時、甲高い声が人垣の外から聞こえる。すぐに人垣は二つに割れ、羽扇子が目に入った。

「このノンポリ軍団、証拠にも無くまだこの問いに答えられないの？」

羽扇子をゆらゆらと動かし、御堂真理は登場した。人が簡単に退いてしまうほどの存在感はさすがだ。高月先輩とも充分張り合える。

「仮にも生徒会長を目指すのなら、そろそろ教えてくださらないかしら？」

御堂真理は高月先輩を目の前にして、鋭い視線を向ける。僕と滝川先輩は眼中に無いようだ。高月先輩も迎え撃つように視線を動かさない。

「御堂さんの言うとおりね。ポリシーのない立候補者はちょっとね……」
「早く教えてくれよ～」

人垣から非難の声が聞こえる。僕は声の方角を見ると、朝、美国陣営の応援団として立っていた男女が見えた。まさか、こいつ等僕達の妨害をしようって言うのか？　ということはこれは御堂真理の罠。しかも高月先輩を潰しにかかっている。たしかにウチの陣営は高月先輩がつぶれたらおしまいだ。

この状況をただみつめるしかないのか……なにか助けるいい案はないのか。僕は頭をフル回転して考えた。なんだか最近、頭をフル回転させる場面が多いように思える。それも全部高月先輩がらみ。なんだか苦笑したくなった。だけど、今はそれよりも先輩を助けないといけない。

更新はいつものように1～2時間後。

１０／１８　２：５８

今回のコメント

くそっ「とらドラ」をテレビでついつい見てしまった！
あっという間に時間が過ぎる。

ＢＤ－ＢＯＸを買うべきなのか……
（ちゃんと書けよ）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

高月先輩は御堂真理を見つめたまま一歩後退した。御堂真理は一歩踏み出す。もう見ていられない！　僕はとりあえず一歩踏み出した。

「ちょっと待ってください。高月先輩は関係ないでしょう。立候補したのはこの僕だ」
「雑魚は黙ってなさい。朝のことは忘れたの？」

御堂真理は僕を見ずにすぐに言い返す。まるで相手にされていない。だけどなんとか向かせないと。

「公約はちゃんとある。それを発表するのが推薦人では変でしょう」

僕の言葉に御堂真理はゆっくりとこちらを向いた。いつもどおり

羽扇子で顔半分を隠す。細くて鋭い視線が僕に容赦なく突き刺さった。僕は倒れそうになる感覚を何とか抑えた。

「聞かせなさい。本気でつぶしてやらないと駄目なようね」

「草弥君」

「高月亜也、アナタは黙ってなさい！」

御堂真理に一喝されて、高月先輩は歩みを止めた。同時に僕は高月先輩を見つめ、頷いた。すると先輩は一瞬眉間にシワを寄せた。怒ってるだろうな。でも、お説教は後で受けます。

あらためて御堂真理と対峙する。さすがに一対一は辛い。今の僕を支えているのは。昼休み緊張した僕の背中に触れてくれた高月先輩の手の暖かさだった。期待されている。いや、されていないのかもしれない。だけど、ここは僕が食い止める。

……ん？　食い止める？　お昼の出来事……あっ、繋がった！

僕はさらに一歩踏み出した。息を吸い込み、一気に言葉と共に吐き出した。

「僕達の公約は購買部の改革です！」

言った瞬間、周りが黙ってしまった。僕は焦って言葉を付け足した。

「理想を言えば食堂を作って欲しいんですけど無理なら、昼食の前日注文なんかを携帯やパソコンから予約できたりすれば、殺伐とした争奪戦も無くなるんじゃないですかね」

と、言ったものの反応はあまりないじゃないか。御堂真理も羽扇

子で表情は読み取れないけど、言葉を発しない。滝川先輩や高月先輩も少しだけ口を開けて固まっている。あれ？　失敗したかな？　名案だと思ったけど。

「君ねえ……」

数秒後、高月先輩が僕へツカツカと歩み寄ってくる。先輩は手を伸ばし、僕の鼻をつまんだ。痛いっ！

「そういう案は、もっと早く出しなさい」

「へ？」

「良いじゃない。購買部改革」

高月先輩の行動を合図に人垣が一気にざわめきだす。「昼の争奪戦は確かにひどいもんな」「予約できるのなら、安心して女子でも買いにいけるよね」なんて声が聞こえた。滝川先輩も「遅いんだよ、お前は」と言って頭を叩いた。一瞬のひらめきで答えたんだけど、なかなか感触は良くて安心した。

しかし、ここに面白くない人間がいた。御堂真理は「ふんっ」と一言いって羽扇子をせわしなく動かした。

「そんないい加減な公約でいいわけないでしょう」

「制服の変更と大して変わらんだろう」

滝川先輩の反論に御堂真理は言葉を失った。

今日はとりあえずここまで！。

10／18　23：35

今回のコメント

中　日　優　勝　！！

フォ――――――！！

落合監督のインタビューで泣きそうになった！

くそ、あんなに目を潤ませながら、インタビュー答えるなよ。

何度も下唇噛みながら、涙を堪えるなよ。

そして、最後に自分が辞めちゃうのに

「これからも応援してくださいね。お願いしますね」

なんて言うなよ！

バカバカバカ！

落合、最高だよ馬鹿野郎っ！

いや、まだＣＳも日本シリーズも終わってない。

もう少しだけ落合野球が楽しめる。

うむ。じっくり見る！

でも、胴上げの後、ドアラとも握手してて和んだ～

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

気まずい雰囲気が流れる。御堂真理は表情を強張らせたまま退散する様子もないし、こちら側も退く気はない。いつまで続くんだろう。気が遠くなるような気がした。

それを払拭したのは、暢気な声だった。

「御堂先輩、探しましたよ」

眼鏡を人差し指で上げながら、人垣を分けて入ってきたのは、美国進だった。さっきまで苦々しい表情をしていた御堂真理は美国進の姿を見つけた瞬間、表情がぱっと明るくなった。羽扇子の動きも滑らかになった。

「美国、遅い！　だが、それも許そう。今からこいつ等を論破し——」

「帰りましょう」

美国進は御堂真理に話す機会を与えなかった。御堂真理は見る見るうちに表情が険しいものに変わっていく。

「私にたてつく様になるなんて、偉くなったものね」

「いえいえ。今は帰ったほうが得ですよ」

御堂真理の言葉にも全く動じない。ニコニコした笑顔のままで言葉を交わす。ただ、頭に血が上っている人に対しては逆効果じゃないかなとも思う。

「ふざけないで！　美国のくせに私に指図するの？」
「わがまま言わないでください御堂先輩」
すると御堂真理は羽扇子をたたみ、両手でへし折らんばかりに折り曲げた。
「『わがまま？』アナタ、わかってるの？　これは負けられない戦――」
「御堂先輩」
「うるさい！」
御堂真理は怒りに身を任せて、羽扇子を振り上げた。美国進はタイミングを合わせるように、近づき、羽扇子を持った手首を掴んだ。さらに顔を近づけると、少し低めの声で御堂真理に話しかけた。
「……落ち着いてください」
掴んだ手首が震えている。きっと御堂真理はものすごい力で振りほどこうとしているのだろう。
「真理さん。大丈夫です。僕は負けませんから」
この一言で御堂真理は落ち着いていった。「ごめん……」と美国進に謝っている姿をみて僕達は何もいえなかった。
美国進は眼鏡の位置を直すと、僕らの前に歩いてきた。

更新は多分1～2時間後！

１０／１９　１：４４

今回のコメント

中日ドラゴンズビールかけメモ

谷繁　自腹でビール百本用意。全部自分が他の選手にかけるために購入。
誰かが使おうとすると「俺のビールを使うなよ！」と叫ぶ。
「明日試合あるのになぁ……」とコメント。
明日本当に大丈夫なんだろうか。

チェン、ハゲヅラ被って登場。
いや、日本語になってないから……

落合監督。
ＣＢＣの若狭アナウンサーに対して「お前等の番組（サンデードラゴンズ）、最後までヤクルト優勝って言ってたろ！　嘘でも中日優勝って言えよ！」
でも若狭アナは一人だけ中日優勝って言い続けてたんだけどね。
だから落合監督と抱き合ってた。なんかいい感じ。

ネルソンに日本語で話しかけるアナウンサー
でもノリでこたえるネルソン・ブランコ面白い！

岩瀬、酒飲めないのに大丈夫なの？
平田、バカだなぁ～、本当に受け応え馬鹿だな～

最後に。
峰竜太！　お前ははしゃぎ過ぎなんだよ！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「真理さん。大丈夫です。僕は負けませんから」
　この一言で御堂真理は落ち着いていった。「ごめん……」と美国進に謝っている姿をみて僕達は何もいえなかった。
　美国進は眼鏡の位置を直すと、僕らの前に歩いてきた。
「ウチの御堂先輩が失礼しました」
　深々と頭を下げて謝罪した。頭を下げれられる状況はすっかり朝の反対になっていた。顔を上げた美国進は笑顔だった。なんか怒る気が失せていく。
　これで騒ぎが収束すると安心した時、美国進は高月先輩の前に立った。
「良かったですね元気になって」
「え？」
「昨日元気なかったから。心配してたんですよ」
　美国進の言葉に高月先輩は瞬間的に下を向いた。どうして良いか

分からないようだ。

「あ、あの……私……」

外見上は三年生と一年生なのだが、まるっきり立場は反対になっている。自分が頼りにしている人のこんな姿は見たくなかった。僕は二人が並んでいる姿が居たたまれなくなって、二人の間に割って入った。

「もう良いだろう。さぁ、帰ってくれ」

最初、僕の顔と高月先輩を交互に見ていた美国だったが、急に何度か頷いた。

「そうですね、僕らはこれで退散します。お邪魔しました草弥君」

「僕の名前を」

「ライバルの顔と名前ぐらいは覚えてますよ」

美国進に認識されてる。そう思っただけで僕は背筋が伸びる思いがした。

「帰りましょうか、御堂先輩」

「うん……」

御堂真理は美国進の腕に手を絡ませる。美国は当然のごとくそのまま歩きだした。御堂真理を見てしおらしい一面もあるんだなぁと意外に思った。それを見た高月先輩の肩が一瞬揺れる。美国進に付き添われて、御堂真理はふたたび選挙活動している場所へ戻っていった。

ふと高月先輩を横目で見ると、じっと二人が帰るのを見つめていた。僕はそんな先輩を見て「胸が痛んだ」と言いたいところだけど、なんだか違う感覚だ。ただ、残念な思いは確かにあった。

とりあえず今日はここまで！

１０／１９　２３：２１

今回のコメント

今日のご飯

チャーハン

ラーメン

ギョーザ

手抜き！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

何度か場所を変えながら選挙活動を終え、僕らは元の世界へ戻った。

「ねー、ねー、楽しかった？」と嫌味にも聞こえる平光先生の話を適当にかわし。合宿なのでそのまま滝川邸へ歩いて下校する。

十一月ともなれば、十八時にはもう辺りは暗い。住宅街を歩いていたので、周りの家から明かりが漏れていた。

三人共に無言で歩く。なれない選挙活動に疲れたと言うのが第一の理由だろう。僕は生まれてこんなにも人前で話したことがなかった。しかも、御堂真理相手に公約を宣言したりして……

本当に日記部に入ってから、生まれて初めての体験が目白押しだ。

日記に書けるような楽しい学生生活を送るのが目的なので、目的は達しているのだろう。二人の先輩がいるから安心ってのもあるし。

横目で滝川先輩を見つめる。滝川先輩は真っ直ぐ前を見て歩いていた。僕と高月先輩が話している間、周りの人に声をかけていたのを何度か見た。立候補を僕に押し付けたものの、自分の仕事はサボらない。勢い任せの所があるけど、良い先輩だ。

すると僕の視線に気づいたらしく、こっちを向いて「なんだよ」と声をかけてくる。僕が「今日はお疲れさまです」と答えたら、顔を真っ赤にして「全然疲れてないから。お前と一緒にするな！」と言って早足で少し先に進んだ。

今度は反対側にいる高月先輩を横目で盗み見た。今日は何度も助けられた。いや、本当は毎日のように助けれらている。あの時、前に出てかばってくれなかったら、後ろにいて見守ってもらわなかったら、緊張して何もしゃべれずに終わっただろう、

高月先輩は少し視線を空に向けて、ぼんやり歩いているように見えた。きっと美国進のことを考えているんだろう。常に頭の上のたんこぶである美国進。先輩は一年生の美国進に話しかけられただけで、動揺したようにみえた。今回は敵とはいえ、やっぱり先輩は本当は話をしたいんじゃないかと思う。

でも……僕は嫌だ。だから今日も二人の間に入って遮ってしまった。カッコ悪い……僕は情けなくなってため息をついてしまった。

「ため息をついたら、幸せが逃げるよ」

上を向いたまま高月先輩が答えた。僕は慌てて口を閉じる。なん

だか心を見透かされた気がしたからである。するとタイミングよく前を歩く滝川先輩の声が聞こえた。

「おらっ、早く歩け。帰ったら晩飯作らなきゃいけないんだぞ！」

忘れてた。合宿してたんだ。真琴さんは今回も監修として、台所に立っていてくれるのだろか。……心配だ。体調的な意味で。

更新は1～2時間後です。

１０／２０　０：５９

今回のコメント

あっ、麦茶のパックがない！
買ってくると、すでに父親が買ってた。しかも５０パックも入ってる！

わわっ、卵がない！
買ってくると、すでに父親が買ってた。しかも近所の自動販売機で２０個ぐらい！

くそっ、考えていることは同じか！
ちなみに、かつお節は僕の勝ちでした。（勝負してたの）

っていうか執筆まるで関係ない。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

滝川邸に到着すると早速料理に取り組むことにした。僕が真琴さんを呼びに行こうとしたところ、滝川先輩に引き止められたが、僕は身の安全の確保を第一として、真琴さんを監修役として呼んだ。
滝川先輩はガッカリしたようだけど、高月先輩はホッとしていた。

食事の後はミーティングを行った。僕の言ったでまかせの公約の

内容を煮詰めるためである。それにしても滝川先輩はいつになく真剣だ。それだけ御堂真理に負けたくないのだろう。高月先輩もこの頃にはすっかりいつもの調子に戻っていた。

「草弥、よそ見するな。亜也なんていつも見慣れてるだろ！」
「ち、違――」
「君ねえ。はぁ……」

なぜ、僕の場合だけ良いように解釈してもらえないのだろうか。
こうして二時間ほど今後の方針について話し合った。

その後、自由時間となり、僕は自室へと戻った。携帯電話を確認すると、沙和からメールが十件以上届いていた。とりあえず内容を抜粋。

『いまどこ？　なにしてるの？』
合宿っていってあるだろうが。

『まさか、高月先輩と懇ろな仲になってる？』
懇ろって……むしろ呆れられていたし。

『パジャマ姿とかみて、鼻の穴伸ばしてないでしょうね！』
鼻の穴は伸ばせないぞ。鼻の下だろう。

『私も止まりにいって井伊？』
漢字の誤変換が激しくなってきたぞ……

『要返信！　馬鹿！　阿呆！　要返信！』
言葉が端的になってきな。

『あす……いや……みや……』
なに言ってるのかわからねえ！
僕はすぐに電話をかけた。すると一コールで沙和に繋がる。
「十四件だよ。電話かけてくるまで！　遅い！」
とりあえず僕は通話をきった。
するとすぐに電話がかかってきた。電話に出た瞬間、僕は先手を打った。
「心配させるようなメールしてきたのはどこのどいつだ」
僕の言葉に、沙和落ち込んだ声が聞こえる。
「……ここのドイツ人です」
分かってるならそれでよし。沙和だったらこんなこと平気でいえるのに。
更新は1～2時間後です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4834v/

リープの「お願いです、教えてください！」（投稿編）

2011年10月20日02時12分発行